

久宝寺遺跡・瓜生堂遺跡・讃良郡条里遺跡

— 寝屋川北部・南部流域下水道整備事業に伴う発掘調査報告書 —

久宝寺遺跡・瓜生堂遺跡・讃良郡条里遺跡

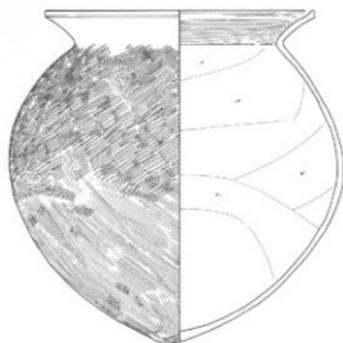
大阪府埋蔵文化財調査報告二〇三十四

大阪府教育委員会

大阪府教育委員会

久宝寺遺跡・瓜生堂遺跡・讃良郡条里遺跡

— 寝屋川北部・南部流域下水道整備事業に伴う発掘調査報告書 —



大阪府教育委員会



a. 第8～10面 出土遺物（古墳時代前期）



b. 第3～5面 出土遺物（奈良時代末）



1・3 加工屑 (貯木施設 059)、2 槽 (貯木施設 059)、4 作業台 (溝 054b)、5 棒状木製品 (溝 063)、
6 割竹形木棺 (堤 050)

序 文

久宝寺遺跡は八尾市の北西部に位置し、南北 1.6 km、東西 1.8 km で約 3km² の大規模な広がりをもつ遺跡です。過去に実施された発掘調査では古墳時代前期頃の墳墓群や準構造船が出土するなど、規模や内容は古墳時代前期における府内でも有数のものです。南には、完形の銅鐸が遺構から出土したことで知られる跡部遺跡が接しています。西は、弥生時代の大型方形周溝墓や古墳時代前期の墳墓群で知られている大阪市所在の加美遺跡と接しています。これら 3 遺跡が分布する地域は、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺構・遺物で特筆すべきものが数多く発見されており、同時代の河内平野の中でも注目されている地域と言えます。

今回の調査は、平成 12 年度から平成 16 年度にかけて（財）大阪府文化財センターが実施した竜華水みらいセンター水処理施設建設の事前調査に続く、附帯施設の建設及び周辺整備に伴う事前調査として平成 20 年度から平成 23 年度にかけて実施したものです。調査の結果、古墳時代初頭の冨、古墳時代前期の貯木施設、墳墓や祭祀跡、奈良時代から平安時代にかけての建物跡や区画溝を検出する等の調査成果を得ています。

また、瓜生堂遺跡では弥生時代中期の方形周溝墓、讃良郡条里遺跡では平安時代後期の条里遺構が検出されています。

最後になりましたが、調査の実施に当たり、大阪府都市整備部下水道室、同東部流域下水道事務所、八尾市教育委員会の方々および関係各位に多大なご協力をいただきましたことに深く感謝いたしますとともに、今後とも大阪府文化財保護行政の発展のためより一層のご理解とご協力をお願いいたします。

平成 26 年 3 月

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長 荒井 大作

例 言

1. 本書は、大阪府教育委員会が大阪府都市整備部の依頼を受けて実施した竜華水みらいセンター整備工事に伴う事前調査として実施した八尾市龍華二丁目所在「久宝寺遺跡」、東部流域下水道事務所が実施している柏原八尾増補幹線外整備工事に伴う事前調査として実施した東大阪市若江西新町1丁目所在「瓜生堂遺跡」、萱島工区管内下水道整備事業に伴う事前調査として実施した寝屋川市中木田町～讃良西町所在「讃良郡条里遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 久宝寺遺跡の調査は、文化財保護課調査第一グループ課長補佐瀬川 健（平成20年度）、同課長補佐渡邊昌宏（平成21年度）、同課長補佐山本 彰（平成22～23年度）の指導の下、同主査松岡良憲（平成20～21年度）、同主査宮崎泰史（平成22～23年度）が担当した。瓜生堂遺跡（平成22年度）及び讃良郡条里遺跡（平成23年度）の調査は、同主査岩瀬 透が担当した。遺物整理作業は文化財保護課調査管理グループ主査三宅正浩、同副主査藤田道子が担当し、現地調査と並行して平成25年度まで実施した。
3. 調査に要した経費は、大阪府都市整備部が負担した。
4. 調査の実施にあたっては、大阪府都市整備部、大阪府東部流域下水道事務所、八尾市教育委員会、財団法人八尾市文化財調査研究会をはじめとする諸機関、諸氏の協力を得た。
5. 人骨および動物遺存体については安部みき子氏（大阪市立大学医学部）に同定と原稿執筆の労をとっていただいた。
6. 本書の執筆は調査担当者が行い、第4章は依頼・分析原稿で、目次に示すとおりである。
7. 本書に掲載した遺構写真の撮影は各調査担当者が行い、遺物写真の撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
8. 本書の編集は、松岡、岩瀬の協力のもと宮崎が担当した。
9. 航空写真測量については、以下の業者に委託して実施し、撮影フィルムは各受託業者が保管している。
株式会社G.I.S 関西（平成20年度）、株式会社ジオテクノ関西（平成22年度）、
株式会社アコード（平成23年度）
10. 調査の際に出土した木製品、人骨等の保存処理、並びに各種分析を以下の業者に委託して実施した。
パリオ・サーヴェイ株式会社（平成20～21年度「久宝寺遺跡出土樹種同定委託」）、
株式会社スタジオ三十三（平成21年度「久宝寺遺跡出土人骨処理」）、
株式会社吉田生物研究所（平成21年度「久宝寺遺跡出土木製品保存処理委託（その1）」）、
財団法人元興寺文化財研究所（平成21年度「久宝寺遺跡出土木製品保存処理委託（その2）」）、

株式会社吉田生物研究所（平成 22 年度「久宝寺遺跡出土木製品保存処理委託（その 3）」）、
パリオ・サーヴェイ株式会社（平成 24 年度「久宝寺遺跡自然科学分析委託」）

11. 調査にあたっては、以下の方々より御指導・後教示・御協力いただきました。

別所秀高、大庭重信、高萩千秋、坪田真一、成海佳子、樋口 薫、安部みき子、藤井信之、富田卓見、
西山昌孝、上妻敦子、田伏美智代、駒田佳子、幸前音伸、福原孝哉（順不同、敬称略）

12. 本書の作成にあたっては、上記の方々の他に、岡林孝之、西村雅美、森村健一、西村 歩、
原田昌則、大野 薫、宮野淳一、山田隆一、森屋美佐子の協力を得た。（順不同、敬称略）

13. 本報告書は、300 部を作成し、一部あたりの単価は 2331 円である。

凡 例

1. 本書で使用した座標値は、久宝寺遺跡については、既往の調査（水みらいセンター本体部）の継続性から日本測地系（平面直角座標第 VI 系）を採用している。また、讃良郡条里遺跡については世界測地系座標値で表示している。標高は T.P. 値（東京湾平均海面値）を用い、挿図中では T.P. ± 0 m と表記し、本文中では、+ の場合は + を省略しているところもある。X・Y 座標値の単位は m で表示している。
2. 調査区の基本層序の土層名は、第〇層と表記し、遺構埋土の土層名は「第」を省略して〇層と呼称している。
3. 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』第 5 版に準拠しているが、一部使用していない調査区もある。
4. 遺構番号は、久宝寺遺跡及び瓜生堂遺跡については調査区ごとに検出順に三桁で 001 から付けているが、10 区については 11-A 区と調査区が重複しているので、二桁で 01 から付している。讃良郡条里遺跡については、遺構面ごとに四桁で、第 1 遺構面の 1 は「0101」と表示している。
5. 本書における遺物番号は挿図ごと、図版ごとに 1 から付けている。
図版中で括弧の中に斜体で表示した数字は挿図の遺物番号である。たとえば、(124-1) は挿図の第 124 図 1 を示している。また、木製品の左下の山括弧の中の数字は樹種同定の資料番号である。
6. 遺物実測図の縮尺は、土器、石器、埴輪、瓦については 1/4、木製品については 1/2、1/4、1/8、1/10、金属製品については 1/2 である。
7. 土器実測図の断面については、須恵器は黒塗り、それ以外は白抜きとした。
8. 須恵器の型式編年は、『陶邑 III』（大阪府教育委員会 1977）、『陶邑古窯址群 I』（田辺昭三 1966・1981）に拠っている。

久宝寺遺跡・瓜生堂遺跡・讃良郡糸里遺跡

Kyuuhouji site, Uryuudou site, Saragunzyouri site

—寝屋川北部・南部流域下水道整備事業に伴う発掘調査報告書—

序文
例言
凡例
目次

第1章 久宝寺遺跡の調査

第1節	はじめに	松岡良憲・宮崎泰史	1
第2節	調査経過と調査の方法	松岡・宮崎	1
第1項	調査経過		
第2項	調査の方法		
第3節	1区の調査	松岡	6
第1項	層序		
第2項	調査成果		
1)	第8面(弥生時代前期)	4) 第5面(古墳時代～古代)	
2)	第7面(弥生時代?)	5) 第4面(古代)	
3)	第6面(古墳時代前期～中期)	6) 第3面(中世初頭～中頃)	
	第6面b	7) 第2面(中世後半・近世)	
	第6面a	8) 第1面(中世後半・近世・近代)	
第3項	小結		
第4節	2区の調査	松岡	25
第1項	層序		
第2項	調査成果		
1)	第13面(弥生時代前期)	8) 第6面(古墳時代中期～古代)	
2)	第12面(弥生時代後期初頭)	9) 第5面(奈良時代後半)	
3)	第11面(弥生時代後期)	10) 第4面(奈良時代末～平安時代中期)	
4)	第10面(古墳時代前期)	11) 第3面(平安時代)	
5)	第9面(古墳時代前期)	12) 第2面(中世後半～近世前半)	
6)	第8面(古墳時代前期)	13) 第1面(近世中～近代)	
7)	第7面(古墳時代前期～中期)		
第3項	小結		
第5節	3区の調査	宮崎	52
(1)	3-A区		
第1項	層序		
第2項	調査成果		
(2)	3-B区		
第1項	層序		

2) 第22層上面 (縄文時代)	8) 第5層上面 (古墳時代後期)
3) 第20層上面 (弥生時代前期)	9) 第4層上面 (奈良時代～平安時代)
4) 第18c層上面 (弥生時代中期)	10) 第3層上面 (平安時代)
5) 第16層上面 (弥生時代後期)	11) 第2層上面 (平安時代～近世)
6) 第11層上面 (古墳時代初頭)	12) 第1層上面 (近世)
第3項 小結	
第10節 11区の調査	宮崎119
(1) 11-A区	
第1項 層序	
第2項 調査成果	
1) 第8層上面 (古墳時代前期)	7) 第3層上面 (中世)
2) 第7層上面 (古墳時代前期)	8) 第3層 (新) 上面～第2層下面 (近世)
3) 第6a層上面 (古墳時代中期～後期)	9) 第2層上面 (中世～近世)
4) 第5層上面 (古墳時代後期)	10) 第1層上面 (近世)
5) 第4層上面 (奈良時代)	11) 第0層上面 (近代～現代)
6) 第3層下面 (中世)	
(2) 11-B区	
第1項 概要	
第2項 調査成果	
1) 第4層上面 (奈良時代)	3) 第1層上面 (中世～近世)
2) 第2b層上面 (中世)	4) 第0層下面 (近現代)
第3項 小結	
第2章 瓜生堂遺跡の調査	岩瀬 透171
第1節 調査に至る経過と調査の方法	
第2節 調査の方法	
第1項 層序	
第2項 遺構と遺物	
第3項 まとめ	
第3章 讃良郡糸里遺跡の調査	岩瀬173
第1節 調査に至る経過と調査の方法	
第2節 第1工区	
第1項 層序	
第2項 遺構と遺物	
1) 第1遺構面	2) 第6遺構面
第3項 まとめ	
第3節 第2工区	
第1項 層序	
第2項 遺構と遺物	
1) 第2遺構面	3) 第6遺構面
2) 第4遺構面	
第3項 まとめ	
第4章 分析編	
第1節 久宝寺遺跡2区出土の人骨および動物遺存体	安部みき子181
第2節 久宝寺遺跡1・2区出土樹種同定	バリノ・サーヴェイ株式会社183
第3節 久宝寺遺跡10区の自然科学分析	バリノ・サーヴェイ株式会社200

挿図目次

第1図	久宝寺遺跡 位置図 (1/40000)	2
第2図	久宝寺遺跡 調査区配置図 (1/1500) *既往の調査区含む	4
第3図	調査区 拡大図 (1/600)	5
第4図	1区 北壁断面図 (1/50)	6
第5図	1区 第8面 遺構平面図 (1/200)	7
第6図	1区 第7面 遺構平面図 (1/200)	8
第7図	1区 第6面 b 遺構平面図 (1/200)	8
第8図	1区 東壁断面図 (1/80)	10
第9図	1区 第6面 b 堤 062 北岸敷き粗朶 平面・断面図 (1/40)	11
第10図	1区 第6面 溝 054 出土土器・石器 (1/4)	12
第11図	1区 第6面 a 遺構平面図 (1/200)	13
第12図	1区 第5面 遺構平面図 (1/200)	13
第13図	1区 第6面 a 貯木施設 059 木材出土状況 (1/50)	14
第14図	1区 第6面 貯木施設 059、溝 054 出土木製品 (1/4、1/8)	15
第15図	1区 第6面 b、第6面 a、第5面 出土木製品 (1/4、1/8)	17
第16図	1区 第4面 遺構平面図 (1/200)	20
第17図	1区 第3面 遺構平面図 (1/200)	20
第18図	1区 第3面 ビット・土坑 断面図 (1/50)	21
第19図	1区 第3面 土坑 018 出土土器 (1/4)	22
第20図	1区 第2面 遺構平面図 (1/200)	23
第21図	1区 第1面 遺構平面図 (1/200)	23
第22図	1区 第2面 溝 009・011・013 断面図 (1/50)	23
第23図	1区 第1面 溝 006・008 断面図 (1/50)	24
第24図	2区 北壁、西壁断面図 (1/50)	26
第25図	2区 第13面 遺構平面図 (1/100)、断面図 (1/50)	28
第26図	2区 第13面 溝 085 断面図 (1/50)	28
第27図	2区 第12面 遺構平面図 (1/200)	29
第28図	2区 第11面 遺構平面図 (1/200)	29
第29図	2区 第12面 出土土器 (1/4)	30
第30図	2区 第10面 遺構平面図 (1/100)、断面図 (1/50)	32
第31図	2区 第10面 土坑 073、土坑 074 平面図 (1/40)	33
第32図	2区 第10面 出土土器・石器 (1/4)	34
第33図	2区 第10面 土坑 060 出土木材 (1/4)	36
第34図	2区 第8面 遺構平面図 (1/100)	38
第35図	2区 第10～8面 出土土器 (1/4)	39
第36図	2区 第8面 堅穴建物 051 出土砥石 (1/4)	40
第37図	2区 第7面 遺構平面図 (1/200)	41
第38図	2区 第6面 遺構平面図 (1/200)、断面図 (1/80)	41
第39図	2区 第5面 遺構平面図 (1/200)、断面図 (1/50)	42
第40図	2区 第5～4面 出土土器・埴輪・瓦・石器 (1/4)	44
第41図	2区 第4面 遺構平面図 (1/100)、断面図 (1/50)	45
第42図	2区 第4面 出土土器・砥石 (1/4)	46
第43図	2区 第3面 遺構平面図 (1/200)、断面図 (1/50)	48
第44図	2区 第3面 出土土器・移動式カマド (1/4)	49

第45図	2区 第2面 遺構平面図 (1/200).....	50
第46図	2区 第1面 遺構平面図 (1/200).....	50
第47図	2区 第2面 中央 南北断面 (1/60)	50
第48図	3-A区、6区 平面図 (1/100)、3-A区 南壁断面図 (1/50).....	53
第49図	3区 包含層、溝、排土 出土土器・砥石・石棒 (1/4)	54
第50図	3-B区 南壁、東壁断面図 (1/50).....	55
第51図	3-B区 遺構平面図 (1/100)、断面図 (1/40).....	56
第52図	3-C区 北壁、東壁断面図 (1/50)、第4層上面 遺構平面図 (1/100).....	57
第53図	3-D区 北壁断面図 (1/50)、第3層～第4層上面 遺構平面図 (1/100).....	58
第54図	3-E区 土層断面図 (1/50).....	60
第55図	3-E区 遺構平面図 (1/100).....	61
第56図	44号墳 (本体部)と調査区(2区、3-A区、6区、7区) (1/400).....	62
第57図	6区 南壁断面図 (1/50).....	63
第58図	7-A、7-B区 遺構平面図 (1/100)、断面図 (1/80).....	65
第59図	7-A区 遺構平面図 (1/100).....	66
第60図	7-C区、7-D区 断面図 (1/50).....	68
第61図	7-D区 第6層上面 遺構平面図 (1/100).....	71
第62図	7-D区 第5層上面 遺構平面図 (1/100).....	71
第63図	7-C・D区 第4層上面 遺構平面図 (1/100)	72
第64図	7-C・D区 第3層上面 遺構平面図 (1/100)、断面図 (1/50).....	74
第65図	7-D区 ビット038 平面・断面図 (1/20).....	75
第66図	7-D区 ビット063 平面・断面図 (1/20).....	75
第67図	7区 第3層上面 溝、ビット 出土土器 (1/4)	76
第68図	7-C・D区 第2層上面 遺構平面図 (1/100)、断面図 (1/50).....	77
第69図	7-D区 土坑005 平面、断面図 (1/20).....	78
第70図	7区 第2層上面 土坑、ビット 出土土器 (1/4)	80
第71図	7区 第2層上面 ビット、土坑、包含層 出土土器 (1/4)	82
第72図	7-C・D区 第0層及び第1層上面 遺構平面図 (1/100).....	84
第73図	8区 調査区 区割図 (1/500)	85
第74図	8区 北壁断面図 (1/100・1/40)	86
第75図	8区 東壁断面図 (1/60・1/40)	88
第76図	8区 第10層上面 遺構平面図 (1/200)、断面図 (1/50).....	90
第77図	8区 第9層上面 遺構平面図 (1/200)、断面図 (1/50).....	92
第78図	8区 土器群103 遺物出土状況図 (1/20).....	93
第79図	8区 第10層上面、第9層中 土器群、溝 出土土器 (1/4)	94
第80図	8区 第10層上面 溝、包含層 出土土器 (1/4)	95
第81図	8区 第9層 出土土器 (1/4)	96
第82図	8区 第8b層上面 遺構平面図 (1/200).....	97
第83図	8区 第6b層上面 遺構平面図 (1/300).....	98
第84図	8区 第5層上面 遺構平面図 (1/300).....	99
第85図	8区 第4層上面 遺構平面図 (1/300)、断面図 (1/60)	100
第86図	8区 第4層上面 掘立柱建物 平面・断面図 (1/80)	101
第87図	8区 第4層上面 井戸039 遺物出土状況図 (1/20).....	101
第88図	8区 第4層上面 井戸039 断面図 (1/40)	102
第89図	8区 第4層上面 井戸、土坑、ビット、包含層 出土土器 (1/4)	103
第90図	8区 第4層上面 井戸039 出土木製品 (1/2)	103
第91図	8区 第3b層上面 遺構平面図 (1/300)、断面図 (1/60)	104
第92図	8区 第2層上面・下面 遺構平面図 (1/300)、断面図 (1/60)	105
第93図	8区 第2層下面～第1層上面 溝、井戸、包含層 出土土器 (1/4)	106
第94図	8区 第1層上面 遺構平面図 (1/300)、断面図 (1/60)	107

第95図	8区 第0層下面	遺構平面図 (1/300)	108	
第96図	8区 包含層 (第6層?)	出土土器 (1/4)	108	
第97図	8区 包含層 (第1層上面)	出土銭貨 (1/2)	108	
第98図	10区 西半部	南壁断面図 (1/80・1/50)	110	
第99図	10区 西半部	第24・22・20・18c・16・10層上面	遺構平面図 (1/200)	114
第100図	10区	大溝、溝、第18b層上面、包含層	出土土器 (1/4)	115
第101図	11-A区	区割図 (1/500)	119	
第102図	11-A区	断面位置図 (1/500)	120	
第103図	11-A区	西壁断面図 (1/40)	121	
第104図	11-A区	北壁断面図 (1/100・1/40)	122～123	
第105図	11-A区	南壁断面図 (1/100・1/40)	124～125	
第106図	11-A区	05ライン沿い断面図 (1/80・1/40)	126	
第107図	11-A区	06ライン沿い断面図 (1/80・1/40)	127	
第108図	11-A区	07ライン沿い断面図 (1/60・1/40)	128	
第109図	11-A区	第7層～第8層上面	平面図 (1/300)	131
第110図	11-A区	第8層上面	流路270 断面図 (1/40)	132
第111図	11-A区	第6a層上面	平面図 (1/300)	133
第112図	10区・11-A区	第5層上面	平面図 (1/300)	135
第113図	11-A区	第5層上面	流路253 断面図 (1/30)	136
第114図	11-A区	包含層、第5層上面	流路253 出土土器 (1/4)	136
第115図	10区・11-A区	第3層下面～第4層上面	平面図 (1/300)	138
第116図	11-A区	第4層上面	遺構拡大図1 (1/80)	139
第117図	11-A区	第4層上面	柱列1～3 断面図 (1/80)	139
第118図	10区・11-A区	第4層上面	遺構拡大図2 (1/100)	140
第119図	11-A区	第4層上面	溝175 遺物出土状況図 (1/30)	141
第120図	11-A区	第4層上面	溝175 断面図 (1/40)	141
第121図	11-A区	第4層上面	土坑244 平面・断面図 (1/20)	142
第122図	11-A区	第4層上面	土坑 断面図 (1/50)	143
第123図	11-A区	第4層上面	ビット 断面図 (1/50)	145
第124図	11-A区	第4層上面	土坑、溝、包含層 出土土器 (1/4)	146
第125図	11-A区	井戸168 平面・断面図 (1/30)	148	
第126図	11-A区	第3層下面	井戸209 断面図 (1/30)	149
第127図	11-A区	第3層下面	井戸209 出土土器 (1/4)	149
第128図	11-A区	第3層下面	遺構断面図 (1/50)	150
第129図	10区・11-A区	第2層下面～第3層上面	平面図 (1/300)	152
第130図	10区・11-A区	第2層下面～第3層上面	遺構拡大図 (1/150)	153
第131図	11-A区	第2b層上面～第3層上面	遺構断面図 (1/50)	154
第132図	11-A区	第2層～第3層上面	ビット、包含層 出土土器・砥石 (1/4)	155
第133図	10区・11-A区	第2層上面	平面図 (1/300)	158
第134図	11-A区	D02区 南北断面図 (1/40)	159	
第135図	11-A区	落込023・024 断面図 (1/40)	160	
第136図	10区・11-A区	第0層～第1層上面	平面図 (1/300)	162
第137図	11-B区	北壁断面図 (1/50・1/40)	164	
第138図	11-B区	西壁断面図 (1/50・1/40)	165	
第139図	11-B区	東西トレンチ断面図 (1/60・1/40)	165	
第140図	11-B区	第4層上面	平面図 (1/200)	166
第141図	11-B区	第2b層上面	平面図 (1/200)	167
第142図	11-B区	第0層～第1層上面	平面図 (1/200)	167
第143図	11-B区	包含層、第1層上面	溝 出土土器 (1/4)	168
第144図		瓜生堂遺跡 調査区位置図 (1/5000)	171	

第145図	瓜生堂遺跡 土層柱状図 (1/40)	172
第146図	瓜生堂遺跡弥生時代遺構面 平面図 (1/40)	172
第147図	讃良郡糸里遺跡 調査区位置図 (1/5000)	173
第148図	第1工区 土層柱状図 (1/40)	174
第149図	第1工区第1遺構面 平面図 (1/80)	174
第150図	第1工区第6遺構面 平面図 (1/80)	174
第151図	第2工区 土層柱状図 (1/40)	176
第152図	第2工区第2遺構面 平面図 (1/100)	177
第153図	第2工区第4遺構面 平面図 (1/100)	177
第154図	第2工区第6遺構面 平面図 (1/100)	177
第155図	瓜生堂遺跡・讃良郡糸里遺跡 出土土器 (1/4)	178

図版目次

原色図版1 久宝寺遺跡2区 土器

- a. 第8～10面 出土遺物 (古墳時代前期)
- b. 第3～5面 出土遺物 (奈良時代末)

原色図版2 久宝寺遺跡1区 木製品

図版1 久宝寺遺跡1区 弥生時代前期～古墳時代前期 遺構

- a. 第8面 溝群 (北から)
- b. 第6面 溝064、畦畔065 (南から)
- c. 第7面 全景 (北から)
- d. 第6面b 溝054 東側断面 (西から)
- e. 第6面b 溝054 木製品 出土状況 (北から)
- f. 第6面b 堤062 敷き粗朶工法 完掘 (南西から)
- g. 第6面b 堤062 敷き粗朶工法 検出状況 (南西から)

図版2 久宝寺遺跡1区 古墳時代前期～後期 遺構

- a. 第6面b 堤062 敷き粗朶工法 断面 (南東から)
- b. 第6面b 堤062 完掘 全景 (西から)
- c. 第6面a 溝054、貯木施設059 全景 (西から)
- d. 第6面a 貯木施設059 木材出土状況 (南西から)
- e. 第6面a 貯木施設059 槽 出土状況 (北から)
- f. 第6面a 貯木施設059 丸木材出土状況 (南西から)
- g. 第6面a 貯木施設059 断面 (西から)
- h. 第6面a 溝051、小溝群 (北から)

図版3 久宝寺遺跡1区 古墳時代～古代 遺構

- a. 第5面 全景 (北から)
- b. 第5面 溝049、堤050 全景 (北西から)
- c. 第5面 堤050 割竹形木棺 出土状況 (北東から)
- d. 第4面 全景 (北から)
- e. 第4面 南半部 水田域 (東から)
- f. 第4面 中央部 水田域 (西から)

図版4 久宝寺遺跡1区 中世～近代 遺構

- a. 第3面 全景 (北から)
- b. 第3面 南半部 遺構検出状況 (南から)
- c. 第2面 全景 (北から)
- d. 第2面 中央部 小溝群 検出状況 (西から)
- e. 第1面 全景 (北から)
- f. 第1面 南半部 小溝群 検出状況 (南から)

図版5 久宝寺遺跡2区 弥生時代前期～後期 遺構

- a. 第13面 全景 (北から)

- b. 第13面 溝085 (北から)
- c. 第13面 土坑090、溝089 (北から)
- d. 第13面 溝093、土坑090 (東から)
- e. 第12面 全景 (西から)
- f. 第12面 水口083 (南西から)
- g. 第12面 堰状施設084 (西から)
- h. 第12面 北西部 畦畔 (南東から)

図版6 久宝寺遺跡2区 弥生時代後期～古墳時代前期 遺構

- a. 第11面 全景 (東から)
- b. 第10面 全景 (北から)
- c. 第10面 高まり059 土坑検出前 (南から)
- d. 第10面 高まり059 肩部 遺物出土状況 (西から)
- e. 第10面 高まり059 肩部 遺物出土状況 (西から)
- f. 第10面 土坑073・074 全景 (南西から)
- g. 第10面 土坑073 全景 (南から)
- h. 第10面 土坑074 全景 (南から)

図版7 久宝寺遺跡2区 古墳時代前期 遺構、調査区断面

- a. 第10面 西側周溝部 土坑075 (南から)
- b. 第10面 溝078、土坑060 (南から)
- c. 第10面 土器集積063、立木根076 (西から)
- d. 第10面 エノキ属立木根076 (西から)
- e. 北壁断面 西側
- f. 北壁断面 中央
- g. 北壁断面 東側
- h. 第10面 完掘 (南東から)

図版8 久宝寺遺跡2区 古墳時代前期 遺構

- a. 第9面 全景 (南東から)
- b. 第8面 全景 (南から)
- c. 第8面 竪穴建物051 壁溝 検出状況 (南西から)
- d. 第8面 竪穴建物051 (南から)
- e. 第8面 竪穴建物051 壁溝内 遺物出土状況 (北西から)
- f. 第8面 竪穴建物051 壁溝内 遺物出土状況 (南から)
- g. 第8面 竪穴建物051、土坑057 (西から)
- h. 第8面 土坑077 (南東から)

図版9 久宝寺遺跡2区 古墳時代前期～古代 遺構

- a. 第8面 竪穴建物052 全景 (南東から)
- b. 第8面 土坑056、溝055 全景 (南から)

- c. 第7面 全景 (北から)
 d. 第7面 久宝寺44号墳 外堀・周溝 (南から)
 e. 第6面 全景 (南西から)
 f. 第6面 畦畔・溝049 (南西から)
 g. 第5面 全景 (南西から)
 h. 第5面 溝039 遺物出土状況 (南西から)
- 図版10 久宝寺遺跡2区 古代～中世 遺構
 a. 第4面 全景 (北から)
 b. 第4面 溝016 (南西から)
 c. 第4面 溝026、掘立柱建物1・2 (北から)
 d. 第4面 ビット032 (南西から)
 e. 第4面 土坑017 (北から)
 f. 第4面 土坑030 (東から)
 g. 第3面 全景 (南西から)
 h. 第3面 溝008 (北東から)
- 図版11 久宝寺遺跡2区 中世～近代 遺構
 a. 第3面 溝014 (北西から)
 b. 第3面 溝014 遺物出土状況 (南から)
 c. 第3面 土坑012 (南東から)
 d. 第3面 ビット009・010 (東から)
 e. 第2面 全景 (東から)
 f. 第2面 落込016 (南から)
 g. 第1面 全景 (東から)
 h. 第1面 溝002、杭列003 (西から)
- 図版12 久宝寺遺跡3-A区 古墳時代前期 遺構、調査区断面
 a. 南壁断面 (北から)
 b. 第7層 (44号墳マウンド内) 壺形土器出土状況 (東から)
 c. 第7層 (44号墳マウンド内) 壺形土器出土状況 (北から)
- 図版13 久宝寺遺跡3区 遺構、調査区断面
 a. 3-B区 南壁断面 (北から)
 b. 3-B区 北壁断面 (西から)
 c. 3-C区 最終面 (南西から)
 d. 3-C区 北壁断面 (南から)
 e. 3-D区 最終面 (南西から)
 f. 3-D区 北壁断面 (南から)
 g. 3-E区 南壁断面 (北西から)
- 図版14 久宝寺遺跡3-E区 遺構
 a. 第11層上面 (南東から)
 b. 第9層上面 (南東から)
 c. 第8層上面 (南東から)
 d. 第7層上面 (南東から)
 e. 第5層上面 (西から)
 f. 第3層上面 (南から)
 g. 第2層上面 (南から)
 h. 第1層上面 (南東から)
- 図版15 久宝寺遺跡6区・7区 遺構、調査区断面
 a. 6区 南壁断面 (北から)
 b. 7-A区 第2b層上面 (西から)
 c. 7-A区 第1c層上面 (西から)
 d. 7-B区 第1c層上面 (西から)
 e. 7-A区 東壁断面 (西から)
- 図版16 久宝寺遺跡7-C区 古墳時代後期～中世 遺構、調査区断面
 a. 北壁断面 (南から)
 b. 第4層上面 (東から)
 c. 第3層上面 (東から)
 d. 第2層上面 (南から)
 e. 第1c層上面 (東から)
- 図版17 久宝寺遺跡7-D区 調査区断面
 a. 西壁断面 南半部 (東から)
- b. 西壁断面 中央部 (東から)
 c. 西壁断面 北半部 (東から)
- 図版18 久宝寺遺跡7-D区 古墳時代 遺構
 a. 第6層上面 (東から)
 b. 第5層上面 (東から)
 c. 第4層上面 (東から)
- 図版19 久宝寺遺跡7-D区 古代 遺構
 a. 第3層上面 (北から)
 b. 第3層上面 ビット030 断面 (北から)
 c. 第3層上面 ビット063 (南から)
 d. 第3層上面 ビット029 断面 (東から)
 e. 第3層上面 ビット043 断面 (南から)
- 図版20 久宝寺遺跡7-D区 古代 遺構
 a. 第3層上面 ビット038 (西から)
 b. 第3層上面 ビット038 断面 (南から)
 c. 第3層上面 溝042 (南東から)
 d. 第3層上面 溝042 遺物出土状況 (南東から)
 e. 7-D区南拡張区 第3層上面 (東から)
 f. 7-D区南拡張区 第3層上面 ビット061 断面 (北から)
 g. 7-D区南拡張区 第3層上面 ビット062 断面 (南から)
 h. 7-D区南拡張区 第3層上面 ビット060 断面 (南から)
- 図版21 久宝寺遺跡7-D区 中世 遺構
 a. 第2層上面 (東から)
 b. 第2層上面 (南から)
 c. 第2層上面 土坑005 遺物出土状況 (西から)
- 図版22 久宝寺遺跡7-D区 中世 遺構
 a. 第2層上面 ビット017 (南西から)
 b. 第2層上面 ビット011、028 (北から)
 c. 第2層上面 ビット017 断面 (南から)
 d. 第2層上面 ビット020 断面 (東から)
 e. 第2層上面 ビット034 断面 (南から)
 f. 第2層上面 ビット035 断面 (南から)
 g. 第2層上面 ビット037 断面 (南から)
 h. 第2層上面 ビット036 断面 (南から)
- 図版23 久宝寺遺跡7-D区南拡張区 中世 遺構
 a. 第2層上面 (南から)
 b. 第2層上面 土坑044 遺物出土状況 (南から)
 c. 第2層上面 ビット045 断面 (北から)
 d. 第2層上面 ビット049 断面 (南から)
 e. 第2層上面 ビット047 断面 (西から)
 f. 第2層上面 ビット055 断面 (北東から)
 g. 第2層上面 ビット050 断面 (南西から)
 h. 第2層上面 ビット051 断面 (北から)
- 図版24 久宝寺遺跡8区 古墳時代初頭 遺構
 a. 第10層上面 (北東から)
 b. 第10層上面 小溝129 遺物出土状況 (西から)
 c. 第10層上面 小溝137 遺物出土状況 (西から)
- 図版25 久宝寺遺跡8区 古墳時代初頭 遺構
 a. 第9層上面 (東から)
 b. 第9層 土器群103 (東から)
 c. 第9層 遺物出土状況 (北から)
- 図版26 久宝寺遺跡8区 古墳時代前期～後期 遺構
 a. 第8b層上面 (東から)
 b. 第6b層上面 (東から)
 c. 第5層上面 (東から)
- 図版27 久宝寺遺跡8区 古代 遺構
 a. 第4層上面 (北から)
 b. 第4層上面 掘立柱建物 ビット047 断面 (東から)
 c. 第4層上面 掘立柱建物 ビット044 断面 (西から)
 d. 第4層上面 掘立柱建物 ビット051、溝050 断面 (北東から)
- e. 第4層上面 溝050 断面 (南から)
- 図版28 久宝寺遺跡8区 古代～中世 遺構

- a. 第4層上面 井戸039 最下層遺物出土状況 (西から)
 b. 第4層上面 井戸039 断面 (西から)
 c. 西半部 第3層上面 (北から)
- 図版29 久宝寺遺跡8区 中世以降 遺構
 a. 第2層上面～下面 (東から)
 b. 第2層上面 井戸012 断面 (南から)
 c. 第1層上面 (東から)
 d. 西半部 第1層上面 (北から)
 e. 第0層下面 (東から)
- 図版30 久宝寺遺跡8区 調査区断面
 a. 東壁断面 北半部 (西から)
 b. 東壁断面 中央部 (西から)
 c. 東壁断面 南半部 (西から)
- 図版31 久宝寺遺跡10区 東半部 弥生時代前期～後期 遺構
 a. 第24層上面 (東から)
 b. 第20層上面 (西から)
 c. 第20層上面 大溝35 断面 (北から)
 d. 第18c層上面 (東から)
 e. 第18b層上面 (東から)
 f. 第18b層上面 土器出土状況 (南から)
 g. 第18b層上面 土器出土状況 (南から)
- 図版32 久宝寺遺跡10区 古墳時代初頭～近世 遺構
 a. 西半部 第10層上面 (東から)
 b. 西半部 第4層上面 (西から)
 c. 東半部 第4層上面 (東から)
 d. 東半部 第4層上面 溝20 遺物出土状況 (西から)
 e. 西半部 第3層上面 (西から)
 f. 東半部 第3層上面 (東から)
 g. 東半部 第2層上面 (東から)
- 図版33 久宝寺遺跡11-A区 古墳時代前期～後期 遺構、調査区断面
 a. 西半部 第7層上面 (西から)
 b. 第7層上面 (北東から)
 c. 西壁断面 (東から)
 d. 西半部 第6層上面 (西から)
 e. 西半部 第5層上面 (西から)
 f. 東半部 第5層上面 (東から)
 g. 西半部 第5層上面 (東から)
 h. 第5層上面 流路253 須恵器出土状況 (東から)
- 図版34 久宝寺遺跡11-A区 古代 遺構
 a. 西半部 第4層上面 (西から)
 b. 第4層上面 土坑122 (北から)
 c. 第4層上面 土坑130 (北から)
 d. 第4層上面 溝175 断面 (西から)
 e. 第4層上面 溝175 (西から)
- 図版35 久宝寺遺跡11-A区 古代 遺構
 a. 第4層上面 土坑244 (北から)
 b. 第4層上面 土坑244 断面 (北から)
 c. 第4層上面 土坑244 断面 (北から)
 d. 第4層上面 土坑212 断面 (南から)
 e. 第4層上面 土坑173 断面 (西から)
- 図版36 久宝寺遺跡11-A区 古代 遺構
 a. 第4層上面 (北北東から)
 b. 第4層上面 柱列1～3 (北東から)
 c. 第4層上面 (北から)
- 図版37 久宝寺遺跡11-A区 古代 遺構
 a. 第4層上面 ビット177 断面 (南から)
 b. 第4層上面 ビット182 断面 (西から)
 c. 第4層上面 ビット183 断面 (西から)
 d. 第4層上面 ビット184 断面 (西から)
 e. 第4層上面 ビット184 断面 (西から)
 f. 第4層上面 ビット214 断面 (南から)
- g. 第4層上面 ビット202 断面 (南から)
 h. 第4層上面 ビット204 断面 (南から)
- 図版38 久宝寺遺跡11-A区 古代～中世 遺構
 a. 第4層上面 ビット197 断面 (北から)
 b. 第4層上面 ビット255 断面 (西から)
 c. 第4層上面 ビット201 断面 (西から)
 d. 第4層上面 ビット203 断面 (西から)
 e. 第3層下面 井戸209 断面 (西から)
 f. 第3層下面 井戸209 4-2層遺物出土状況 (西から)
 g. 第3層下面 井戸209 (西から)
 h. 第3層下面 井戸168 (西から)
- 図版39 久宝寺遺跡11-A区 中世以降 遺構
 a. 西半部 第2～3層上面 (東から)
 b. 東半部 第2～3層上面 (東から)
 c. 東半部 第2層上面 (東から)
- 図版40 久宝寺遺跡11-A区 中世以降 遺構
 a. 西半部 第2層上面 (東から)
 b. 東半部 第0層～第1層上面 (東から)
 c. 西半部 第0層～第1層上面 (東から)
- 図版41 久宝寺遺跡11-B区 古代～近世以降 遺構
 a. 第3、4層上面 (南西から)
 b. 第2b層上面 (南西から)
 c. 第1層上面 (南西から)
- 図版42 久宝寺遺跡1区 縄文時代晩期～古墳時代前期 遺物 土器
 図版43 久宝寺遺跡1区 古墳時代前期 遺物 土器・石錐
 図版44 久宝寺遺跡1区 古墳時代前期 遺物 木製品
 図版45 久宝寺遺跡1・2・8区 古墳時代前期～奈良時代 遺物 木製品
 図版46 久宝寺遺跡1区 古墳時代前期 遺物 木材 (1)
 図版47 久宝寺遺跡1区 古墳時代前期 遺物 木材 (2)
 図版48 久宝寺遺跡1区 古墳時代前期 遺物 木材 (3)
 図版49 久宝寺遺跡1・2区 古墳時代前期 遺物 木材 (4)
 図版50 久宝寺遺跡2区 古墳時代前期～後期 遺物 土器・埴輪・木材・石皿・磨石
 図版51 久宝寺遺跡2区 古墳時代前期 遺物 土器
 図版52 久宝寺遺跡2区 古墳時代前期 遺物 土器・砥石
 図版53 久宝寺遺跡2区 古墳時代後期～奈良時代 遺物 土器・台石
 図版54 久宝寺遺跡2区 弥生時代後期～平安時代 遺物 土器
 図版55 久宝寺遺跡2区 奈良時代～平安時代 遺物 土器・瓦
 図版56 久宝寺遺跡1・2区 中世 遺物 土器・青磁・凝灰岩
 図版57 久宝寺遺跡2区 奈良時代～平安時代 遺物 瓦・被熱土器
 図版58 久宝寺遺跡2区 奈良時代～平安時代 遺物 被熱土器
 図版59 久宝寺遺跡2区 奈良時代～平安時代 遺物 土器・移動式カマド
 図版60 久宝寺遺跡2区 古墳時代前期 遺物 人骨・動物遺存体
 図版61 久宝寺遺跡3区 古墳時代初頭～後期 遺物 土器・砥石・結晶片岩
 図版62 久宝寺遺跡7-D区 古代 遺物 土器・砥石
 図版63 久宝寺遺跡7-D区 中世 遺物 土器
 図版64 久宝寺遺跡7-C・D区 中世 遺物 土器
 図版65 久宝寺遺跡7-D区 中世 遺物 土器
 図版66 久宝寺遺跡8区 古墳時代初頭 遺物 土器
 図版67 久宝寺遺跡8区 古墳時代初頭 遺物 土器
 図版68 久宝寺遺跡8区 古墳時代初頭 遺物 土器

- 図版 69 久宝寺遺跡 8 区 古墳時代初頭 遺物 土器
 図版 70 久宝寺遺跡 8 区 古墳時代初頭～古代 遺物
 土器・埴輪
- 図版 71 久宝寺遺跡 8 区 奈良時代 遺物 土器
 図版 72 久宝寺遺跡 10 区 縄文時代～中世 遺物 土器・
 動物遺存体
- 図版 73 久宝寺遺跡 11-A 区 古墳時代前期 遺物 土器
 図版 74 久宝寺遺跡 11-A 区 古墳時代前期～古代 遺物
 土器
- 図版 75 久宝寺遺跡 11-A 区 奈良時代 遺物 土器
 図版 76 久宝寺遺跡 11-A 区 奈良時代 遺物 土器
 図版 77 久宝寺遺跡 11-A 区 奈良時代 遺物 土器・白石
 図版 78 久宝寺遺跡 11-A 区 古代～中世 遺物 土器
 図版 79 久宝寺遺跡 11-A 区 中世 井戸 遺物 土器
 図版 80 久宝寺遺跡 11-A 区 中世 遺物 土器
- 図版 81 久宝寺遺跡 11-A・B 区 中世～近世 遺物
 土器・陶磁器
- 図版 82 久宝寺遺跡 8 区・11-A 区 古墳時代～近世 遺物
 紙石・土製品・金属製品・銭貨
- 図版 83 瓜生堂遺跡 弥生時代中期 遺構
 a. 第 16 層上面 方形周溝墓 (東から)
 b. 第 16 層上面 方形周溝墓 (南西から)
 c. 方形周溝墓 溝 001 断面 (東から)
- 図版 84 讃良郡条里遺跡第 1・2 工区 平安時代～近世
 遺構
 a. 第 1 工区 第 1 遺構面 (東から)
 b. 第 2 工区 第 4 遺構面 畦畔 (南西から)
- 図版 85 讃良郡条里遺跡第 2 工区 古墳時代～後期 遺構
 a. 第 2 工区 第 6 遺構面 全景 (西から)
 b. 第 2 工区 第 17 層 土器出土状況

第1章 久宝寺遺跡の調査

第1節 はじめに

久宝寺遺跡は、八尾市南久宝寺一丁目を中心として東西1.6km、南北1.8kmの範囲に広がる縄文時代晩期から近世にかけての府城を代表する大規模な複合遺跡である(第1図)。とくに、古墳時代では広範囲にわたって遺構が検出されている。久宝寺遺跡の既往の調査及び周辺の歴史環境については『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書VII』(財団法人大阪府文化財センター2007)で詳細に触れられているので、そちらを参照されたい。

今回の調査は竜華水みらいセンター敷地内において、水処理施設本体部の付帯工事(電気、下水管設置など)及び整備工事に伴う事前調査及び立会調査である。工事に合わせて調査地点をそれぞれ1～11区と呼称している(第2・3図)。1・2区は2008年度、4・5区は2009年度、3・6～10区は2010年度、11区は2011年度に調査を実施している。

第2節 調査経過と調査の方法

第1項 調査経過

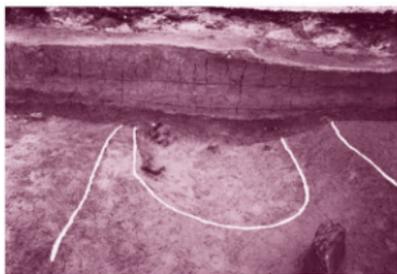
1区は水処理施設本体部の東側に接する共同溝築造、2区は水処理施設本体部南辺の西側に接する受変電設備築造、3区は管渠築造(送水管450mm)、4区はNTT埋設管設置、5区は水道管設置、6区は管渠築造(送水管300mm)、7区は高圧電線設置、8区は管渠築造(放流管900mm×2)、9区は遠隔監視制御電線設置、10区は管渠築造(送水管450mm)、11区は処理場周辺整備に伴う調査である。なお、4区、5区、9区は立会調査である。

調査は、水処理施設本体部の東側に接する共同溝築造部分を1区、本体部南辺の西側に接する受変電設備築造部分を2区とし開始した。

1区は幅約5m、延長32mの調査区(調査番号08011)で、工事深度(T.P.4.9m)まで調査を実施した。調査面積は約170㎡である。

2区は本体部の南側にあたり、東西13.5m、南北10.7mの調査区(調査番号08011)でT.P.5.45mまで調査を実施し、1区同様に弥生時代から近世に至るまでの遺構面を検出している。調査面積は約145㎡である。

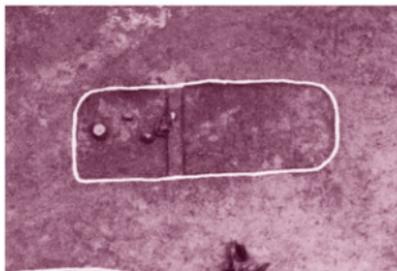
3区は、1区から2区付近までの埋設管(径450mm)設置工事に伴う延長250m、幅1.0mの調査区(調査番号10002)である。当初はT.P.5.7m(弥生時代)までの掘削予定であったが、協議の結果、既存の下水管と交叉する部分(A～E)以外については、中世の遺構面に達しないレベル(T.P.7.2mまで)に変更し、立会調査とした。A～E地点は機械掘削と人力掘削を併用して、T.P.5.12～6.16mまで調査を実施し、3-A区では本体部の「44号墳(前方後方墳)」の墳丘の一



a. 第10面 西側周溝部 土坑075 (南から)



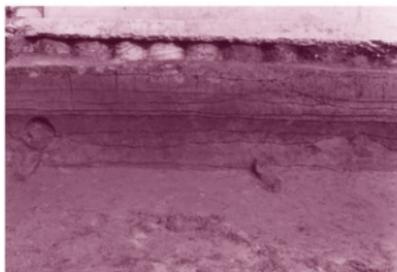
b. 第10面 周溝078、土坑060 (南から)



c. 第10面 土器集積063、立木根076 (西から)



d. 第10面 エノキ属立木根076 (西から)



e. 北壁断面 西側



f. 北壁断面 中央



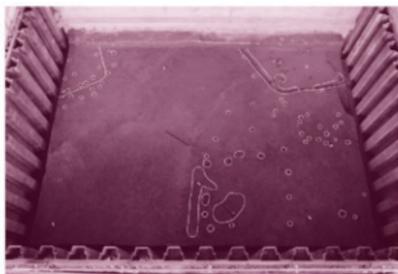
g. 北壁断面 東側



h. 第10面 完掘 (南東から)



a. 第9面 全景 (南東から)



b. 第8面 全景 (南から)



c. 第8面 堅穴建物 051 壁溝 検出状況 (南西から)



d. 第8面 堅穴建物 051 (南から)



e. 第8面 堅穴建物 051 壁溝内
遺物出土状況 (北西から)



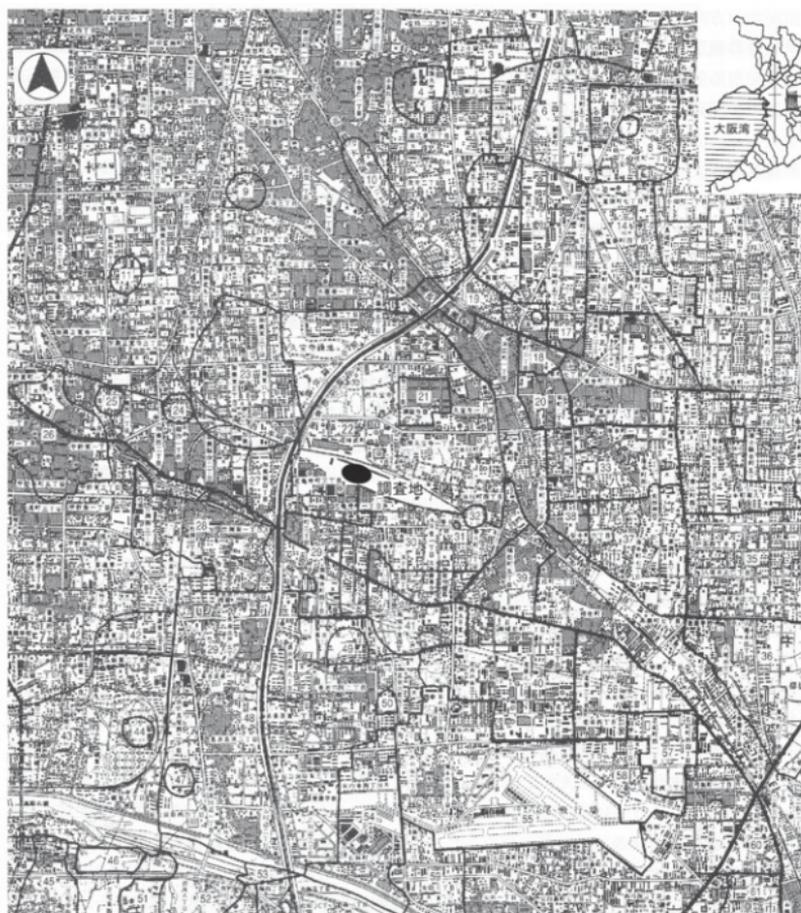
f. 第8面 堅穴建物 051 壁溝内
遺物出土状況 (南から)



g. 第8面 堅穴建物 051、土坑 057 (西から)



h. 第8面 土坑 077 (南東から)



- | | | | | |
|----------|-------------|--------------|-----------|----------|
| 1 若江遺跡 | 14 壺衝遺跡 | 27 亀井北遺跡 | 40 槇松南遺跡 | |
| 2 若江北遺跡 | 15 東郷遺跡 | 28 竹園遺跡 | 41 太子堂遺跡 | |
| 3 上小阪遺跡 | 16 東郷庵寺 | 29 亀井遺跡 | 42 香蓮東遺跡 | 53 大堀遺跡 |
| 4 小若江遺跡 | 17 穴太庵寺 | 30 跡部遺跡 | 43 瓜破遺跡 | 54 八尾南遺跡 |
| 5 西郷遺跡 | 18 宮町遺跡 | 31 跡部遺跡銅鐸出土地 | 44 瓜破庵寺 | 55 木の本遺跡 |
| 6 山賀遺跡 | 19 佐伝遺跡 | 32 流川庵寺 | 45 三宅遺跡 | 56 老原遺跡 |
| 7 香都庵寺 | 20 八尾寺内町遺跡 | 33 成法寺遺跡 | 46 三宅東遺跡 | 57 志紀遺跡 |
| 8 西郷慶寺遺跡 | 21 久宝寺寺内町遺跡 | 34 小阪合遺跡 | 47 養吉野山遺跡 | 58 田井中遺跡 |
| 9 衣保遺跡 | 22 久宝寺遺跡 | 35 中田遺跡 | 48 長原遺跡 | 59 大田遺跡 |
| 10 弥刀遺跡 | 23 加美遺跡 | 36 東門前遺跡 | 49 城山古墳跡 | 60 弓削遺跡 |
| 11 加美北遺跡 | 24 長家庵寺 | 37 矢作遺跡 | 50 六反古墳跡 | 61 本郷遺跡 |
| 12 文井東遺跡 | 25 平野寺前遺跡 | 38 電華寺跡 | 51 麻重遺跡 | |
| 13 奥園遺跡 | 26 平野遺跡都市 | 39 槇松遺跡 | 52 別所遺跡 | |

0 10m

第1図 久宝寺遺跡 位置図(1/40000) (原田2006)の第1図を転載、加筆

部を検出している。

4区は、敷地の南西部のNTT埋設管設置工事に伴う調査区で、幅0.8m、延長85mをT.P.7.0～7.45mまで掘削する計画であるため、T.P.7.3mより深くなる部分については工事立会を実施した。

5区は、敷地の北西部の水道管設置工事に伴う調査区で、幅1.0m、延長30mをT.P.7.2～7.8mまで掘削する計画であるため、T.P.7.3mより深くなる部分について工事立会を実施した。

6区は、埋設管（径300mm）設置工事に伴う幅1m、延長164mの調査区（調査番号10017）で、当初はT.P.5.8～6.8mまでの掘削予定であったが、協議の結果、中世の遺構面に達しないレベル（T.P.7.2mまで）に変更し、立会調査とした。ただし、東端で処理場本体部との接合部分（南北6m、東西2.75m）については一部、調査を行う予定であったが、処理場本体部を築造時にT.P.5.6mまで掘削されていたため、調査は、掘削面の精査と土層断面（南壁）の記録保存にとどまっている。土層断面で、本体部の「44号墳（前方後方墳）」の周溝を確認している。

7区は、敷地外から高压電線を本体部へ引き込むための設置工事に伴う延長125m、幅1～3.7mの調査区（調査番号10003）で、調査面積は200㎡である。高压電線布設部分（7区1～7、幅1m）については立会調査とし、四ヶ所のハンドホール（A～D）部分についてはT.P.5.98～6.73mまで調査を実施した。7-D区の調査中に、北側及び南側で、構造物の設置が当初設計よりも下位にさがることがわかり、追加調査することになる。北側を北拡張区、南側を南拡張区とし、北拡張区をT.P.7.1mまで、南拡張区を第3層上面（T.P.6.98m）まで調査を行った。

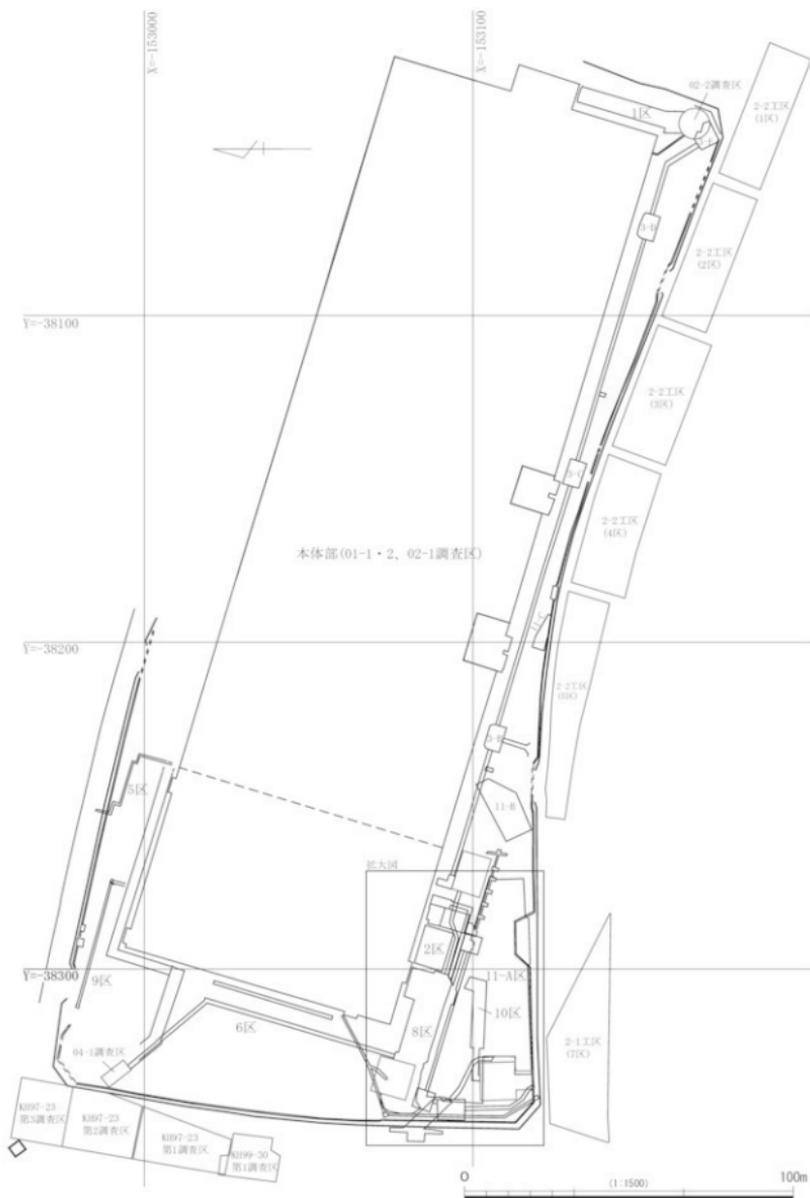
8区は、本体部と01-4調査区を結ぶ埋設管（径900mm）設置工事に伴う調査区（調査番号10016）で、面積は400㎡である。当初は幅1.5m、延長30mと51mの2ルートであったが、協議の結果、2つの埋設管を1つの掘方内に設置することに変更とし、T.P.5.8mまで調査を実施した。

9区は、遠隔監視制御電線設置に伴う幅1m、延長45mの調査区（調査番号10025）で、工事深度（T.P.7.5mまで）が中世包含層に達しないことから立会調査とした。

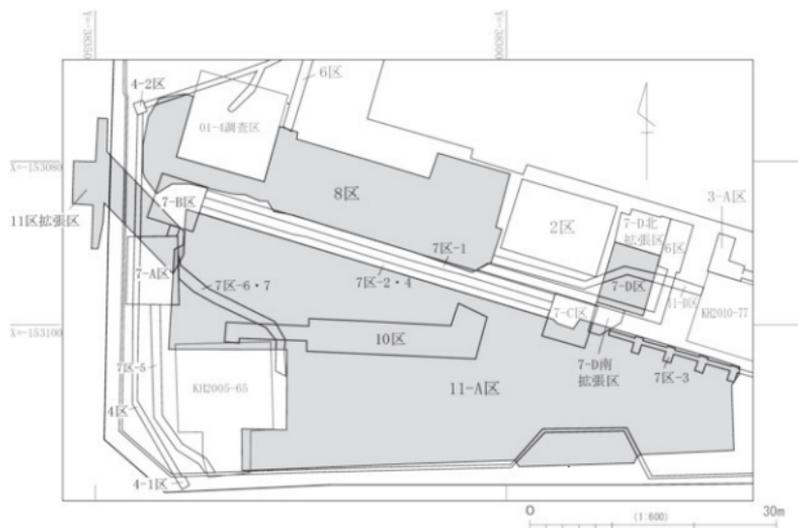
10区は、8区の南側にあたり、埋設管設置工事（送水管450mm）に伴う調査区（調査番号10075）で、東西で埋設管の設置深度がことなり、東半部はT.P.6.62mまで、西半部は鋼矢板を打設して、T.P.3.46mまで調査（67㎡）を実施した。

11区は本体部及び8区の南側にあたり、せせらぎ広場等の周辺整備事業に伴う調査区（調査番号11010）で、調査面積は1400㎡である。調査地点は四ヶ所（A～D）で、掘削深度が中世の包含層に達しない11-C区、11-D区については立会調査とした。11-A区は10区を取り囲む形で、T.P.6.5mまで、11-B区はT.P.7.2mまで調査を実施した。その後、11-A区の西側で放流管設置の工事が追加され、11区拡張区としてT.P.6.75m（第3層上面）まで調査を実施している。

以上、各調査地点は掘削深度に不揃いがあるものの、結果として南西部に纏まった調査範囲となっている。



第2図 久宝寺遺跡 調査区配置図 (1/1500) ※既往の調査区含む



第3図 調査区拡大図 (1/600)

第2項 調査の方法

調査は、盛土、整地土を機械掘削によって除去後、調査区内に排水を兼ねた先行トレンチを入れ、堆積状況を確認したうえで、掘削単位を設定し、1層ごとに人力掘削を実施した。地区割りについては、2010年度から実施し、10m四方の区画を設定した(第73・101図)。この区画は南北方向のアルファベットと東西方向のアラビア数字で表現し、南北に北から南へA、B、・・・、東西に西から東へ01、02、・・・で、表示する場合は南北を優先する。なお、この10m区画は遺物取り上げの最小単位としている。

また、調査の迅速化と省力化を図るために、遺構の集中する面については、測量委託によりクレーン使用の航空写真測量を行い、10m単位のメッシュを基準として1/50の平面図を作成した。その他の面については適宜1/50、1/100で平板測量を行った。土層断面図、遺物出土状況図については1/20を基調とし、適宜1/10を併用している。

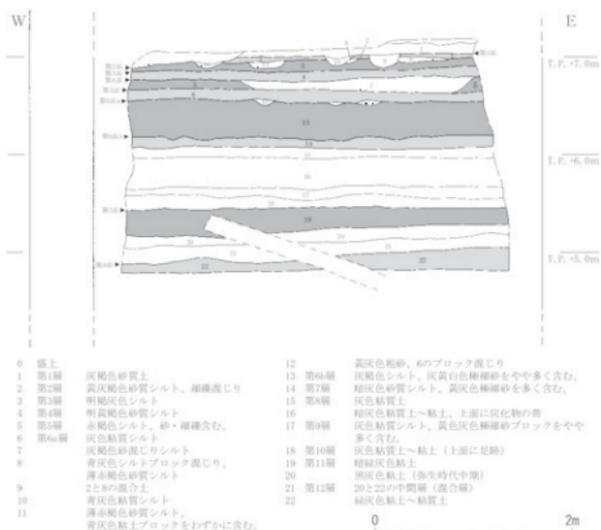
今回の調査区は、竜華水みらいセンター敷地内とはいえ、1区から11区まで都合11ヶ所(16地点)で、隣接する場合も地点によって対応する同時期のベース層が異なることも十分に想定された。したがって、今回本報告書作成にあたっては、あえて土層の統一を図らずに調査区毎の層序を詳細に記し、そのうえで調査区間、そして竜華水みらいセンター処理施設の調査区(財団法人大阪府文化財センター2007)等、隣接する既往の調査地区との対応関係について可能な限り触れるよう心がけ、本文中において、竜華水みらいセンター処理施設の調査区を「本体部」、久宝寺遺跡第65次調査区(荒川2006)を「KH2005-65」、竜華東西線(2-1・2工区)の調査区(財団法人大阪府文化財センター2004)を「東西線」と略称・表記している。

また、8区と一部重複し、かつ層序の堆積状況が近似した大阪府文化財センターが実施した01-4調査区を採り上げている。01-4調査区の層序は、(財団法人大阪府文化財センター2007)の本文28～29頁の図11参照。

第3節 1区の調査

第1項 層序

1区では、8面の遺構面を検出している。調査した最下層(第4図22緑灰色粘土～粘質土)上面で検出した第8面は本体部の弥生時代前期面に対応している。この面上に第12・11層が堆積後、比較的短期間ではあるが耕作地として安定した弥生時代後期頃と考えられる第11層上面で、第7面を検出している。この面上に第10・9・8層が堆積後、第8層上面で古墳時代前期の第6面を検出している。この面は調査区中央部で検出した溝054が改修工事がされており古墳時代前期の第6面aと古墳時代前期の第6面bに分けている。この面上に第7・6b・6a層が堆積後、第6a層上面で古墳時代後期から古代と考えられる第5面を検出し、この面上に第5層が堆積後、上面で古代と考えられる第4面を検出している。さらに、この面上に第4層が堆積後、上面で中世初頭から中頃と考えられる第3面を検出している。この面上に第3層が堆積後、上面で中世後半・近世と考



第4図 1区 北壁断面図 (1/50)

える第2面を検出し、この面上に第2層が堆積後、上面で中世後半・近世から近代と考える第1面を検出している。

第2項 調査成果

1) 第8面 (弥生時代前期)

第12層とした黒灰色粘土と緑灰色粘土の混じった堆積層を除去して、T.P. 4.9～5.05m付近で検出した遺構面である(第5図、図版1a)。遺構は第7面同様に調査区南側の微高地部のみで検出している。遺構は等高線に沿う形で4条の溝とピット1ヶ所で復元した微地形から推測して南に広がる遺構群の北端部と考えている。遺物は遺構面直上から突帯文系の土器片が少量出土しているのみで遺構内からは出土していない。本体部で「第8面」としている遺構面に対応すると考えている。

溝066

この面の遺構群の最も北側で検出した幅0.3m、深さ5cm程で等高線に沿うように緩やかに蛇行して東西に延びる溝である。溝内は暗灰色粘土が堆積していた。

溝067、068、069

前述した溝066の南側で等高線に沿うように直線的に東西に延びる溝である。北から順に記述する。溝067は幅1.3～1.7m、深さ数cm程の浅いもので暗灰色粗砂が堆積していた。溝とするよりはむしろ溝状窪地とするほうが適当なものである。

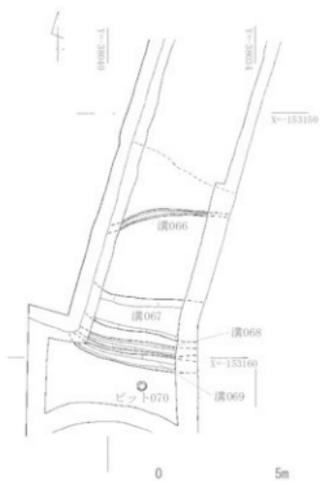
溝068は幅0.4m、深さ5cm程で暗灰色粘土が堆積していた。溝069は幅0.4～0.6m、深さ10cm程で粗砂が混じる暗灰色粘土が堆積していた。溝068と溝069の2条の溝は調査区の西側では合流して一本の溝となるのではないかと思われる。

ピット070

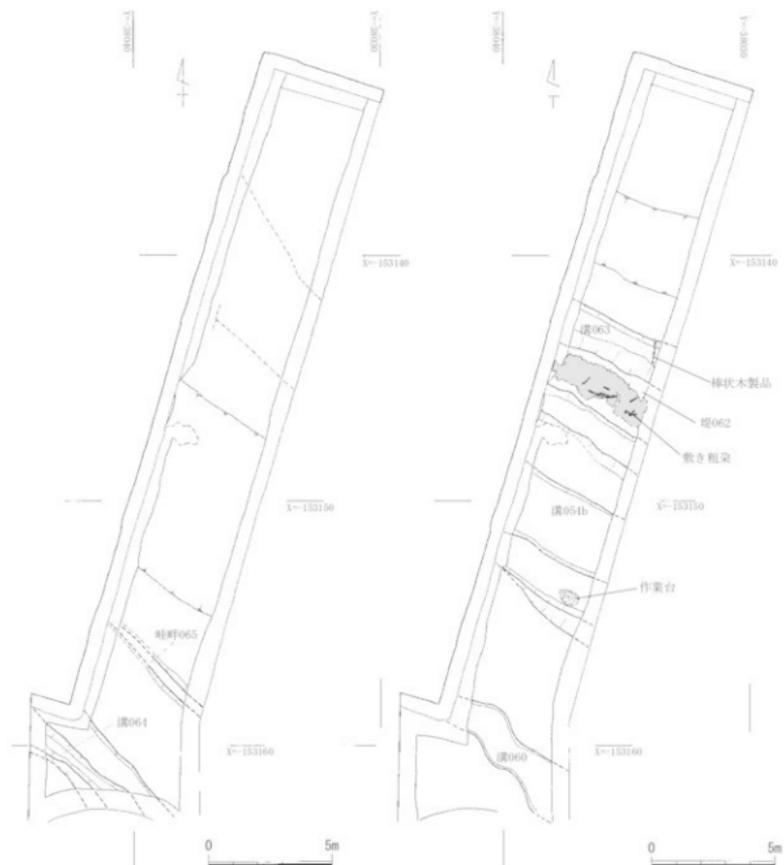
前述した4条の溝の南側で一ヶ所だけ検出したものである。径0.4m、深さ25cm程で暗灰色粘土と緑灰色粘土の混合土で埋まっており、遺構としては明瞭であるが、検出が1ヶ所だけであり、柱跡と考えられるのか、性格等は不明である。

<出土遺物> (図版42-1～7)

遺構に伴って出土したものは無かったが、遺構面に接して土器片が7点(図版42)出土している。いずれも小片で、土器表面は劣化しているが、条痕が観察でき、口縁端部直下に突帯を施したものが1点ある。縄文時代晩期の船橋式と考えられる。



第5図 1区 第8面 遺構平面図 (1/200)



第6図 1区 第7面 遺構平面図 (1/200)

第7図 1区 第6面b 遺構平面図 (1/200)

2) 第7面 (弥生時代?)

第10層としている青灰色粘質シルト層を除去してT.P. 5.4～5.45m付近で検出した遺構面である(第6図、図版1b・c)。遺構は調査区南側の微高地部でのみ検出しており、それ以外の部分については低湿地状の環境で荒地の状態であったと考えている。本体部で「第6面」としている遺構面に対応すると考えている。

溝064

調査区南端で検出した幅約3m、深さ約20cmの北西から南東方向の溝である。この溝は幅約3m、深さ約10cmの浅い皿状に掘り下げ、その中央部を更に幅約1m、深さ約10cm掘り下げており、

浅い二段掘りの形状を呈している。溝内は河川の氾濫によると思われる細砂で一気に埋没しており、中央の一段低くなった溝底部には溝の方向に沿って人の足跡が遺存していた。

このことから用・排水のための溝と言うよりは、道として機能した溝状遺構と考えたほうが適切かもしれない。

畦畔 065

前述した溝064から北東に3m程の距離で、この溝に平行する形で検出した畦畔状の遺構である。幅は0.5m～0.8m、高さ5cm程で遺存状態はあまり良好とは言えない。この畦畔状遺構の北側は大部分が上層遺構により本来の遺構面が失われていたため水田跡の痕跡を検出していないが、水田が営まれていた可能性が高いと考えている。

この遺構面に伴う遺物は出土していない。

3) 第6面（古墳時代前期～中期）

第6層としている灰色粘質シルト層を除去してT.P. 6.6m付近で検出した遺構面である。調査区南側は微高地で、北側に行くにつれ低くなる地形である。この微高地は東西方向に延びており、その等高線に並行して比較的大きな溝を2条検出している。この溝の南側の微高地部及び北側の低地部は共に耕作地として利用されていたようである。

また、北側低地部と南側微高地部は比高差が1m以上有り、その境を面するよう溝054bを開削し、溝北側の低地部側に堤を築いて水を管理していたようである。この低地部は幾度か水害に見舞われ、その都度堤を修復・補強している。北側の微高地部と異なり溝を含む低地部は、溝054b開削時の遺構面と溝としての機能がほぼ失われた溝054aの段階の遺構面とは、約0.6mのレベル差で上下2面に区別できた。このため溝開削時の遺構面及び初期の堤を「第6面b」、溝としての本来の機能がほぼ失われた浅い流路と考えられる遺構面及び最終形状の堤を「第6面a」として区別している。

もう一条の溝051は第6面aの段階の遺構と考えられ、北側に広がる小溝群の一部を切って開削されている。第6面aは本体部で「第5-1(1)面」としている遺構面に、第6面bは「第5-1(2)面」としている遺構面にそれぞれ対応すると考えている。

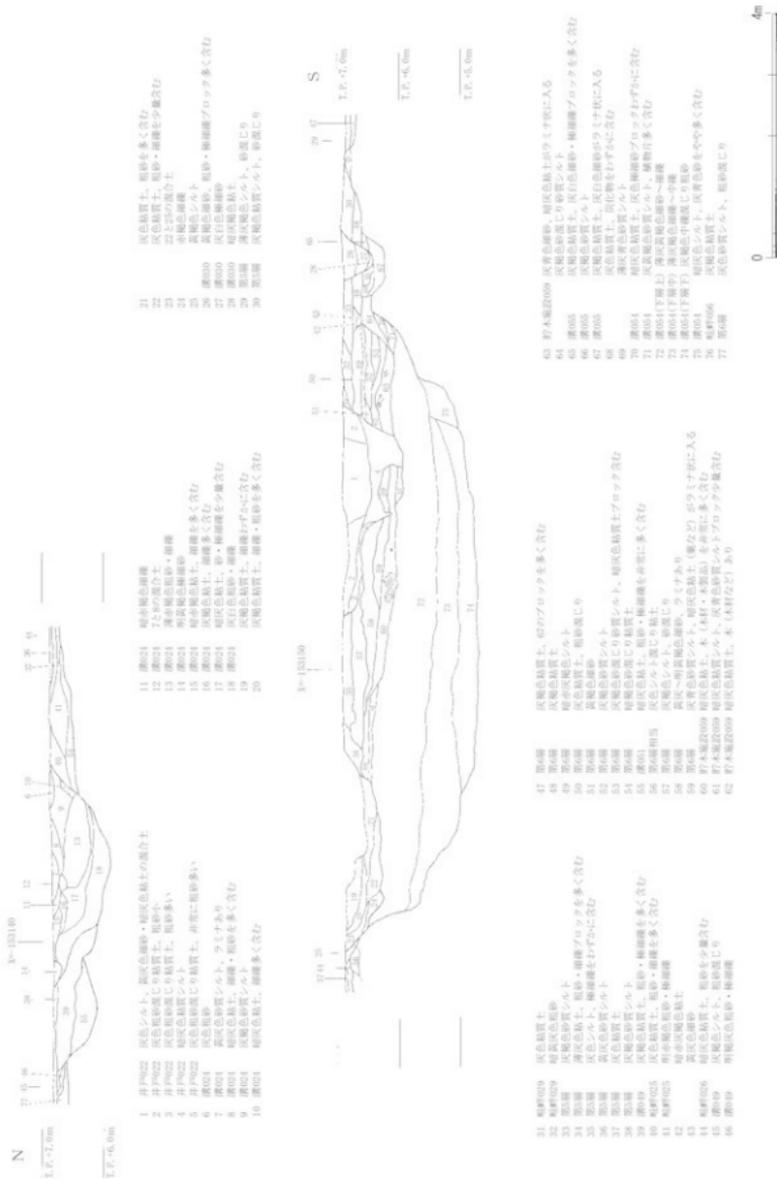
第6面b（第7図、図版1-d～g・2a・b）

溝060

調査区南端部で検出した幅1.3m、深さ10cm程の北西から南東方向の浅い溝である。氾濫等によるものか検出状況は蛇行状の砂で埋没したものであったが、本来は用水路としての機能を持つ小規模な溝と推測している。

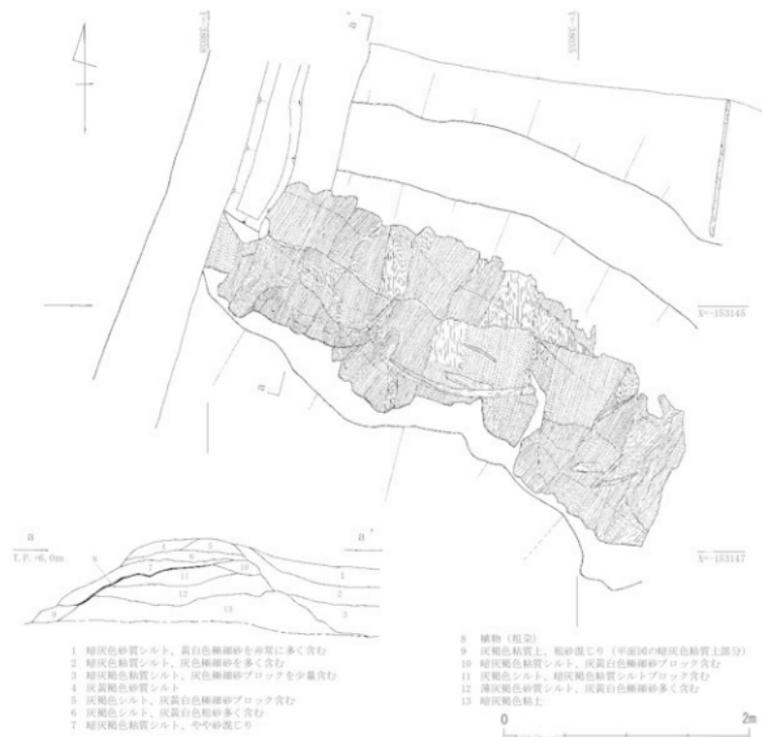
溝054b

上面で検出したよりは幅が狭く約7m程で、深さ1.3～2.0m程の直線的に北西から南東に掘ら

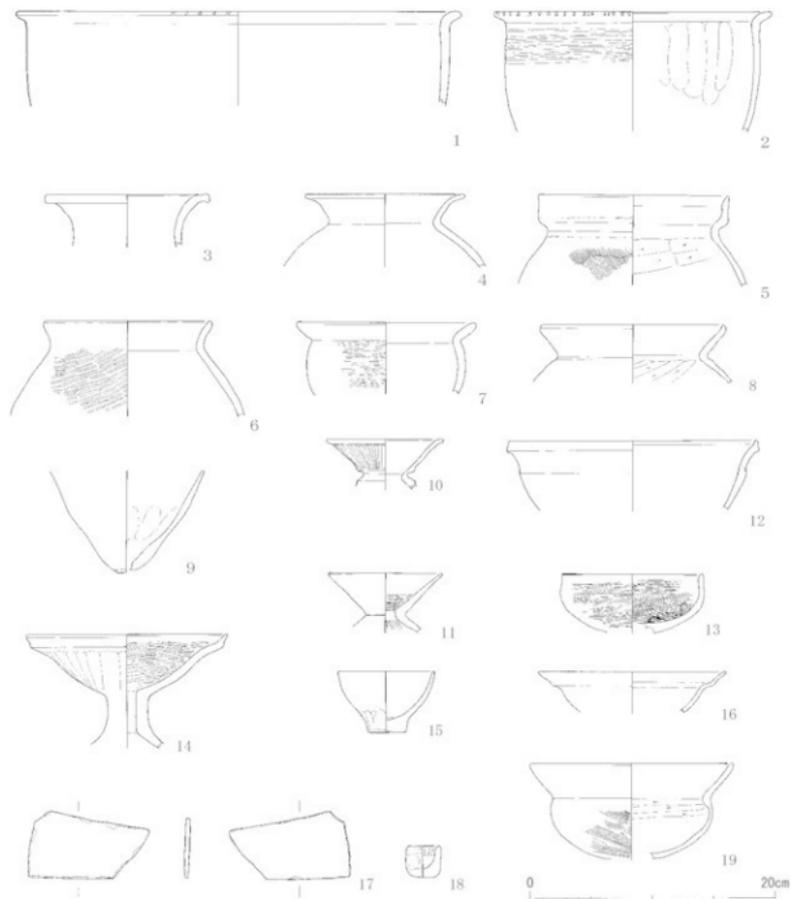


第8図 1区 東壁断面図 (1/80)

れた溝であったと推定される。溝の南肩は南側が微高地になっている為か、堤跡は検出されず、築かれてはいなかったようである。掘り方は深さ約0.7m程を緩やかな傾斜で掘り下げてから、深さ0.5m程を急傾斜で掘り下げ、更に緩やかな傾斜で0.5m程を掘り下げた二段掘りとなっている。溝底部は更に幅4.5～5m程を、深さ0.1m程一段低く平坦に掘削し、この段も加えると三段掘りとなっている（第8図）。低地部側となる北肩は、掘削前の南肩との比高差が1m程有り、ここに高さ約0.7mの堤062を築いている。この堤を含めると南肩は1.8m程の高さと考えられる。南肩は北肩同様に段掘りされているが、最初が急斜面で掘られて、後は比較的緩やかな傾斜で底付近まで掘られ、20cm程を一段低く掘り下げて、底部となっている。この底部は前述したように平坦であり、流水に浸食された跡が認められず、人の足跡らしきものも認められた。また、南肩の下段付近で植物の根跡と考えられる無数の径数ミリメートルの穴が観察された。これらのことから溝は普段は浅く湛水している状態であり、植物が底付近の水辺に茂っていたものと考えている。しかし意外にも検出状況は底まで砂が堆積していたため、この溝は東側に水が流れる構造



第9図 1区 第6面b 堤062 北岸敷き粗雑 平面・断面図 (1/40)



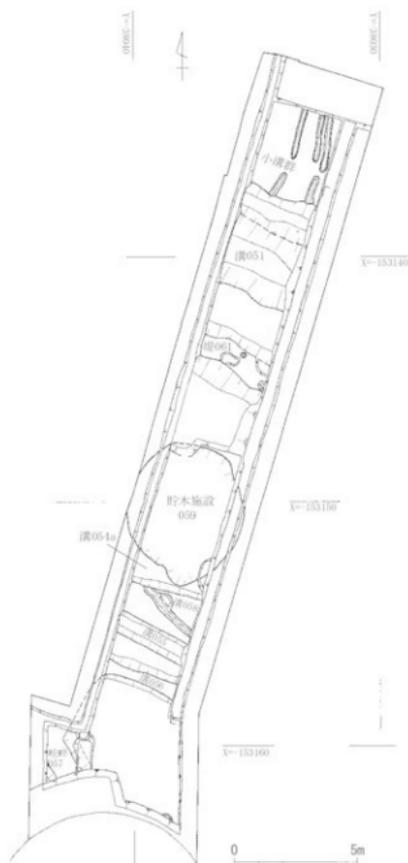
第10図 1区 第6面 溝054 出土土器・石器 (1/4)

であるが、普段は西側の上部に水量を調整する堰のようなものが築かれていた可能性が推測される。

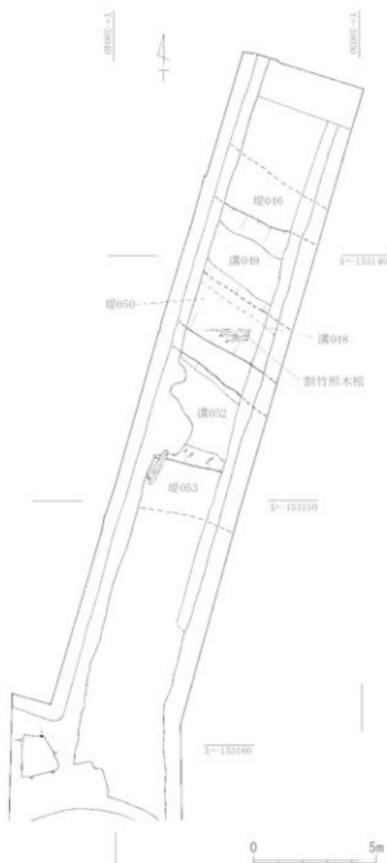
遺物は下層の砂層（下層上・中・下）から古墳時代前期の土器等が出土している。鼓形器台や小型丸底壺の遺存状況から比較的近距离からの流れ堆積と判断される。特筆すべきものとしては、南側底付近で木製作業台と下層下から玉作の作業で石鋸として用いられる紅廉石片岩が土器に混じって出土している。

堤 062、溝 063

ここで報告する堤 062 は、第 6 面 a で検出した堤 061 の築造当初のもので、溝 054 b 開削時に



第11図 1区 第6面a 遺構平面図 (1/200)



第12図 1区 第5面 遺構平面図 (1/200)

築かれたものである。基部の幅約3m、上端部の幅約1m、高さ約0.7mで横断面が台形を呈する。堤盛土は一層の厚さ10～20cm程を積み重ねるように築かれており、盛土の初期過程で堤中央から溝法面にかけて幅1.5m程の範囲に「敷き粗朶工法」を用いている（第9図）。この堤の検出過程で堤の北側に接して溝063を検出している。溝としているが窪んでいる形状から溝とただけで機能的には不明である。堤062は前述した規模だけではなく、この盛土の北側に更に基部の幅が3～4m程の盛土があったと考えられる。この盛土は厚さ10～20cm程で層状に盛られているが、前述の盛土に対して「敷き均した」と表現したほうが適当かと思われる形状のものである。これを含めると基底で幅約5m、上端部で幅約3mの堤と考えられ、その築造の終盤に幅約1.5mの溝状窪地063が出来たものと理解せざるを得ない。この溝状窪地に伴う遺物としては檜材を



第13図 1区 第6面a 貯木施設059 木材出土状況 (1/50)

棒状に削り出した木製品 (第15図20) が1点のみで、土器等は出土していない。

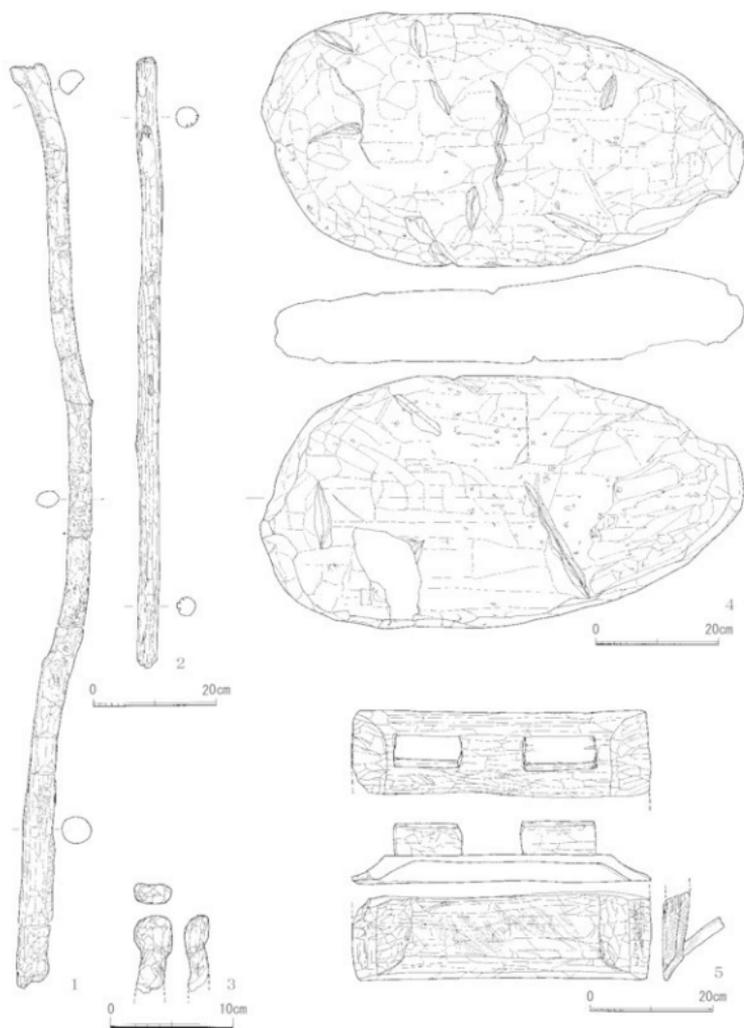
<出土遺物> (第10図1~19、第14図2・4、第15図20、図版42・44・45)

溝054bから比較的良好な状態の土器が出土した。弥生時代前期の土器片が2点、古墳時代前期の土器片 (第10図3~16・18・19) 16点で、他は小片であった。第10図1・2は第I様式新段階の甕の口縁から体部にかけての破片で、磨耗状況から周辺地からの流

入と考えられる。古墳時代前期の土器も磨耗状況から周辺地からの流入と考えられる。時期的には布留式初期のものである。第10図5・10・14等の様に他地域の特徴を示すものがある。土器と共に下層下から紅簾石片岩の板状片 (第10図17) が出土している。砂層からの出土であるため砂による磨耗も認められるが、図上部を刃部とする石鋸である。

第14図2 (樹種同定10) は、溝054b北岸の敷き粗朶付近から出土したモミ属の芯持丸木材である。敷き粗朶工法の残材と思われる棒材で、枝の痕跡は認められない。第14図4は、溝054bから出土したケヤキの柁目材の木製作業台である。大きさは、幅50cm、長さ80cm、厚さ20cmで、この大きさの柁目板材を取るには直径が1m以上は必要と考えられるので、直径がかなり大きなケヤキ原木と考えられる。板材の平坦な面には様々な傷跡が見られ、凸面状の面には余り見られないので、平坦な面が作業面 (表面) と考え、凸面状の面を裏面と考える。形が小判形になっているのは転がす等、移動しやすくする工夫と考えている。

第15図20は、溝063から出土したヒノキ材の棒状木製品である。芯持ちの細い丸木材を使用せず、大きなヒノキ材からわざわざ削り出したものである。図右端は左端よりも細く削り上げられており、先端は丁寧に刃物で削り仕上げている。左端は先端が右端同様の仕上げであったと思われるが、磨耗痕が残る。



1・3・5 (貯木施設059) 、2・4 (溝054b)

*1・3・5は第6面、2・4は第6a面

第14図 1区 第6面 貯木施設059、溝054 出土木製品 (1/4、1/8)

第6面a (第11図、図版2-c～h)

溝054 a、貯木施設059

溝054 aは、調査区中央部で検出した幅約10m、深さ約60cmの溝状遺構である。第6面bで検出した溝054 bに、厚さ1.8m程の砂が短期間で堆積して開削時の溝としての機能は殆ど失われ、第6面aでは、浅い溝状の窪地状態で検出したと推測している。この砂堆積の上層部を径約5～6m、深さ約40cm程度の浅い皿状に掘り窪めて貯木施設059として使用していたと推察される。遺構は東側の一部が調査区外に拡がるものの、今回の調査でほぼ全容を検出している。やや南北に長い楕円形の平面形を呈し、土坑底部中央やや南寄りに東西方向に行き来した足跡を検出している。この足跡群を境に北側と南側で、遺存していた木材に差異が認められた。北側は主に径5～10cm、長さ2～3m程の丸木材や分割材、径50cm長さ2m程の原木材などが足跡に対して垂直に敷並べるように置かれた状況で遺存していた。足跡の南側は主に槽のような製品や板材等が遺存していた。土層断面の観察から当初は径3m程の貯木施設であったのを南西側に拡張して径6m程にしていることが分かる。貯木施設内の堆積は葉や小枝等を含むシルトであり、水が溜まった状態での堆積と考えている。木材等を避けるように足跡を検出しており、貯木状況を良好に残して埋没したものと考えている。若干の土器片が木材に混じって出土しており、他に塊状の炭化米や種子類も出土している。

溝051

幅6m、深さ50cm程の浅い溝状の遺構である。前述の溝054 aの北側に堤061を挟んで並行しており、人為的に掘削されたと推察し、溝とした。流心と考えられる最深部がかなり北寄りに検出し、最下層は粘土と砂礫が混じって堆積して、木片等も多く含まれていたことから、北側に拡がる耕作地の用水路と考えている。遺物は流れ堆積と判断される古墳時代前期のものが少量出土している。

北側小溝群

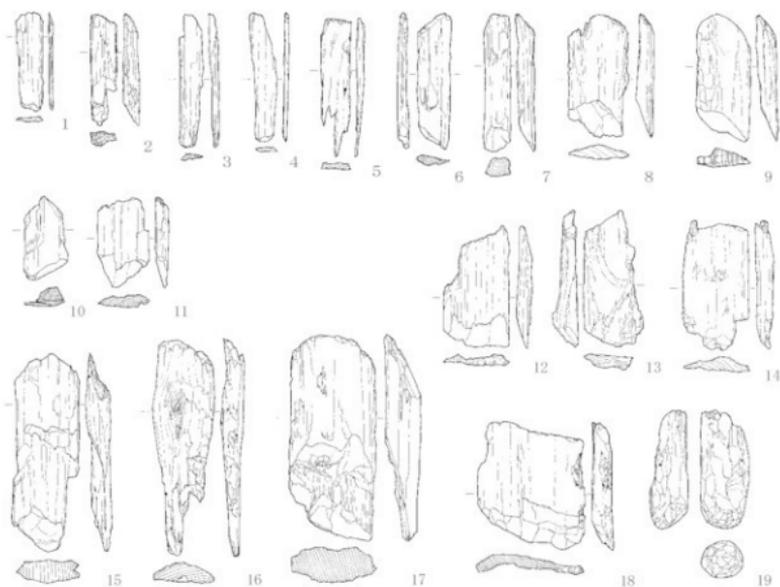
畝が後世に削平され、畝間が溝状に残ったものである。この畝を用いた耕作地の南端は前調査区北端部で幅20cm、深さ5cm程の南北方向の小溝を5条検出している。幅0.6～1m程の前述の溝051に切られており、若干の時期差があったようである。

堤061

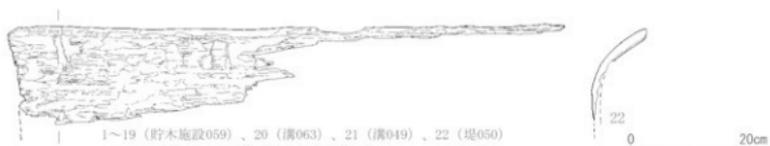
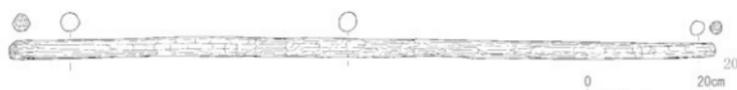
溝054 aと溝051の間に両溝を隔てるように築かれている。検出状況では幅1m程であったが、本来、溝051側に築かれた幅3m程の堤が、氾濫等により幅1m程に細くなったものと考えている。

溝055、058

溝054の南側でこの溝に並行するように検出した幅0.9m、深さ50cm程で断面逆台形を呈する比較的丁寧に掘削された溝である。溝055の南側では畦畔を検出しており、水田に伴う用水路としての機能を考えている。溝058は幅0.3m、深さ10cm程の浅い溝で、溝055の支流と考えている。



0 10cm



1~19 (貯木施設059)、20 (溝063)、21 (溝049)、22 (堤050)
 *1~19は第6面a、20は第6面b、21・22は第5面

第15図 1区 第6面b、第6面a、第5面 出土木製品 (1/4、1/8)

この溝も北側小溝群と同様に溝 054 に切られており、若干の時期差があったようである。

畦畔 056、057

共に幅約 1m の中型畦畔である。この畦畔は水田を区画するものと考えており、畦畔 056 は溝 055 と平行して東西に延びており、調査区南側の微高地に水田が拡がっていたことを窺わせている。

<出土遺物> (第 14 図 1・3・5、第 15 図 1～19、図版 44・46～49)

第 6 面 a で土器が出土した遺構は、溝 051・054 と貯木施設 059 だけで、しかも殆どが小片で、古墳時代前期の土器片と判断できる程度である。

貯木施設 059 とした土坑から木製品等が出土している。その中の主要遺物について、図化したものを第 14・15 図に報告している。第 14 図 1 は土坑北側で出土した丸木材で、全体を確認できた遺物である。1 (樹種同定 15) は、エノキ属の芯持丸木材で、図上方面は、枝が二股に分かれる部位で切断されている。下端の遺存状況は良好ではないが、丸木材としての切断部位と判断できる。この丸木材は枝を刃物で切断している。

第 14 図 3 は剣込みのある材の端部。第 14 図 5 は、土坑南側で出土した破損したヒノキ材の槽である。内傾する脚状の削り出し突起が 2ヶ所に遺存している。半切した破損状況が推定されることから、4 枚脚の槽である。内面底部には刃物の傷が認められる。第 15 図 1～19 は貯木施設 059 から出土した加工屑である。

4) 第 5 面 (古墳時代～古代)

第 5 層を除去して T.P. 6.7m 付近で検出した遺構面である (第 12 図、図版 3a～c)。調査区南端付近は後世の削平により遺構等は検出されなかったが、それ以外の範囲では東西方向の溝 2 条と溝に伴うと考えられる堤の跡を 3 条検出した。これらの遺構は後世の攪乱が激しく、遺存状況は不良であった。特に盛土で造られている堤は辛うじてそれと判断できる状態であった。本体部で「第 4-2 面」としている遺構面に比定出来ると考えている。

溝 047～049、堤 046、050

この 3 条の溝で主たる遺構は、幅約 3.5m、深さ約 50cm で、幅の割には浅い形状の溝 049 である。溝の両岸は約 45 度の勾配を呈し、その南北両岸に高さは後世の削平により不明であるが、共に幅 2m 程の堤 046、050 を築いている。北岸は肩の内側に溝状遺構の溝 047 を、南岸は肩の外側に溝状遺構の溝 048 を検出している。溝 047 は、堤 050 の護岸施設の跡と考えている。南岸では、肩に沿って幅約 1.5m、深さ約 15cm が浅く溝状に段掘になっており、そこに堤 050 が築かれている。この溝 049 は、底部の形状及び砂の堆積状況から水路としての機能を考えている。

なお、堤 050 の盛土最下部から割竹形木棺の一部と思われる幅約 0.5m、長さ約 1.85m、厚さ現存約 4cm の、半裁して中を削り抜いたコウヤマキ木材が出土している (図版 3c)。氾濫等により墳墓等から流失したものが、盛土下に埋没したと考えている。遺物は氾濫堆積である土砂から流

れ堆積と判断される古墳時代前期の土器片が出土している。

溝 052、堤 053

前述した堤 050 の南側に約 1m の間隔をおいて、北西～南東方向の溝 052 を検出している。幅が約 2.5m～4m で、深さが 20～30cm 程の浅い皿状である。前述の溝 049 と同規模の幅の平行してある溝である。溝 049 と深さや堆積物が異なり常時水が流れていたか不明である。次に堤 053 を考えると、前述の堤 046、050 とは異なり、必ずしも溝に伴う堤とは限定せず、この溝群の南に拡がる水田域の北側を画する畦畔の可能性も考えている。

<出土遺物> (第 15 図 21・22、図版 45・44)

土器は溝 049 から若干量出土したが、流水による磨耗が顕著な小片ばかりである。21 は溝 049 出土のヒノキ材容器底板と考えられるが、容器側面部と組み合わせるための加工は段を削り出している以外、釘穴等の痕跡が認められない。この木製品出土位置の東側約 50m のところで「久宝寺 1 号墳」が検出されている。その主体部の割竹形木棺の小口材の大きさに近いことから、そのような用途も考えられる。22 は堤 050 の基部で検出したコウヤマキ材の大型木製品で、形状から割竹形木棺の一部と考えられる。内外面共に劣化が進行しているが、内面の 2 箇所溝の柄らしき痕跡が観察されることから、小口の内側に更に仕切りが設けられた副室構造であった可能性も考えられる。

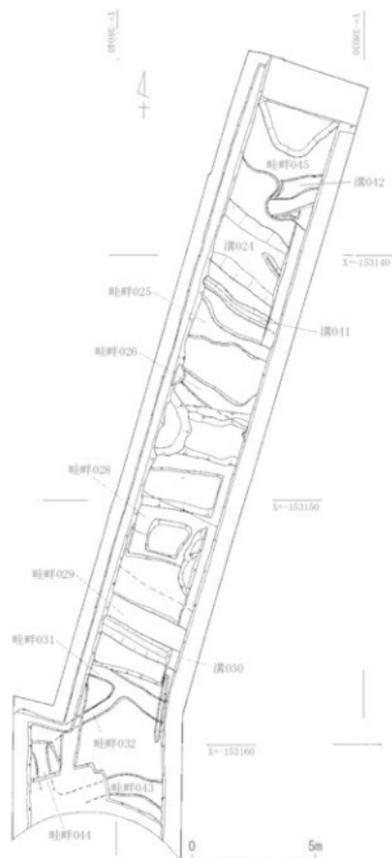
5) 第 4 面 (古代)

第 4 層を除去して T.P. 6.8～6.9m 付近で検出した遺構面である (第 16 図、図版 3d～f)。東西方向の溝と水田跡を検出している。これらの遺構上面には洪水痕跡である砂層が堆積していた。調査区北側でより明確に砂の堆積が認められ、ここで検出した溝 024 から北側に畦畔の流失等洪水痕跡が顕著である。調査区中央部は後世の攪乱により遺構の遺存状態が極めて不良であったが、中・小畦畔の痕跡を辛うじて検出できた。南側部分は東西方向の溝 030 より南では、中央部や北側のような砂の堆積は認められず、遺構上面はシルト・微砂の堆積であった。本体部で「第 4-1 面」としている遺構面に対応すると考えている。

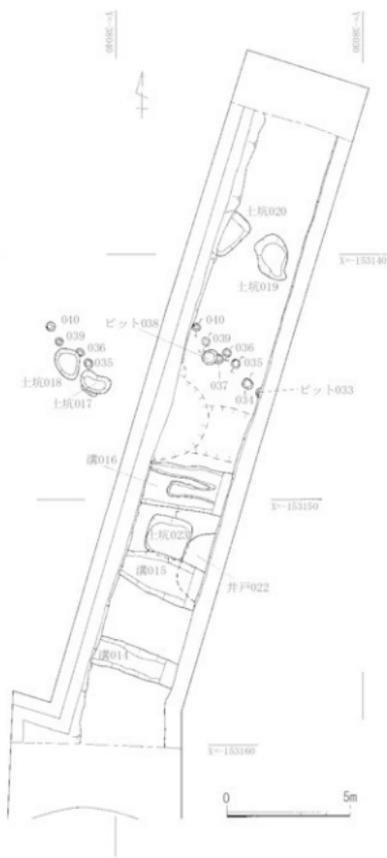
溝 024、溝 041

調査区北側で検出した幅約 5～6m の東西方向の不定形な遺構である。溝の南北両肩は共に水田畦畔を侵食しており、そのため検出形状が不定形の自然流路状になったものと考えられる。溝の横断面を観察すると幅約 2～3m の東西方向溝 2 条が切り合っており、その両肩が幅 1～3m 程氾濫により侵食されていることが分かる。先行する溝は、北岸の状況が復元出来、溝北側で検出している中型畦畔 045 で画されていたと思われる。南肩は、やや南寄りに再掘削された時に壊されたようである。共に洪水砂で埋没して廃絶したものと思われる。

溝 041 は、再掘削された溝 024 の南岸の護岸施設の跡と考えている。今回の調査では氾濫等により流路状に検出したが、前述したように本来は護岸施設の一部として掘削されたものであり、



第16図 1区 第4面 遺構平面図 (1/200)



第17図 1区 第3面 遺構平面図 (1/200)

溝 024 の一部と考えている。遺物は氾濫堆積である土砂からこの遺構面としては比較的多い量が出土しているが、古墳時代前期のものであり上流からの流れ堆積でこの遺構の時期を判断できるものではない。

溝 030

調査区南側で検出した幅約 0.8m、深さ約 0.5m の V 字溝である。溝の大部分は淘汰された細かい砂が堆積しており、底部にのみ若干の粘土堆積が認められる。本体部の「04062 溝」に該当するものと考えられ、ほぼ直線的に北西から南東方向に水を引くように検出しており、前述した溝 024 との間に広がる水田等の灌漑用に掘削されたものと考えている。

遺物は出土していない。

水田跡：畦畔 025・026・028・029・031・031・043～045、溝 042

前述した溝 024 と溝 030 により調査区が、北・中・南に3分割されている。地形的には南→中→北と低くなるのが指摘出来る。水路として比較的規模の大きい溝 024 の北側にも畦畔 045 や水口と考えられる溝 042 を検出しており、この溝から水を引く水田が広がっていたと考えている。この溝 024 と南側の溝 030 に挟まれた部分でも畦畔 025・026 を検出しており、小區画水田が営まれていたと考えられ、微地形から溝 030 より取水し、溝 024 に落としていたと推定している。溝 030 の南側の微地形的に最も高い部分でも比較的遺存状態の良い畦畔 031・031・043～045 を検出しており、小區画水田が営まれていたと考えている。

<出土遺物>

溝 024・041 から土器片が出土しているが、時期を判別できるものは、古墳時代前期のものばかりで、第4面の時期を示すものは出土していない。

6) 第3面(中世初頭～中頃)

第2面の基盤層である第3層を除去して T.P. 6.9m 付近で検出した遺構面である(第17図、図版 4a・b)。調査区北半分で不定形土坑群を、南半分で、東西方向の溝を検出している。本体部で「第2面」としているものと遺構の検出状況が類似する。

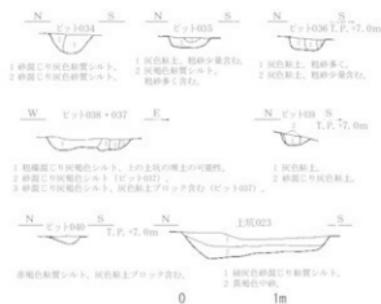
溝 014～016

調査区中央やや南寄りで検出した、幅 1.2～2m、深さ約 20cm の東西方向に延びる3条の平行した溝である。北側の溝 016 が幅約 2.0m と最も大きく、中央の溝 015 は幅約 1.9m、南側の溝 014 は幅 1.2m と規模が小さくなっている。これら3条の溝は 2m 程の間隔で並ぶが、細かく見ると溝 016 と他の2条はやや向きが異なっており、時期差による可能性も指摘できる。

溝からの出土遺物は軒丸瓦片を含む少量の土器片が出土しているだけの現状では、出土遺物と遺構面の層位から中世初頭～中頃と推定しておく。

土坑 017～020

径 1.2～2m 程の不定形な平面形を呈する土坑群である。それぞれ深さは約 20cm で浅い皿状の土坑である。北側の2基(土坑 019・020)に対して、南側の2基(土坑 017・018)は、約半分の大きさである。土坑の性格等を示す遺物等は検出していないが、樹木等を植えた痕跡に類似したものである。遺物は、土坑 018 から青磁碗片が出土している他は若干の土器小片が出土しただけである。



第18図 1区 第3面 ビット・土坑 断面図 (1/50)

井戸 022、土坑 023

井戸 022 は遺構上面が第2面の遺構群が営まれた時に丁寧に埋め戻されていたようで第3面の遺構検出時には明瞭ではなく、第3面の遺構群の検出を進める過程で検出している。そのため第3面で検出した一連の遺構の中では、やや古い段階のものと推察している。土坑 023 はこの井戸に伴う貯水施設のようなものと推察している。遺物は井戸の埋土から須恵器・土師器の小片が出土しているだけである。

ピット 033～040

前述した土坑群の南側に幅約1mの範囲で北西・南東方向に不規則に並んでいる。南側の2条の溝 014・016 と平行しているようであるが、調査範囲が狭く、水処理施設の調査では報告されていないため、確定は出来ない。時期は前述の土坑 017・018 に切られているため第3面の遺構群の中ではやや古いものと推察している。

<出土遺物> (第19図、図版56-5)

溝 016 や土坑 018 等から土器や陶磁器が破片で出土している。

第19図は、土坑 018 から龍泉窯系の青磁碗である。他に溝 016 から瓦片などが出土している。



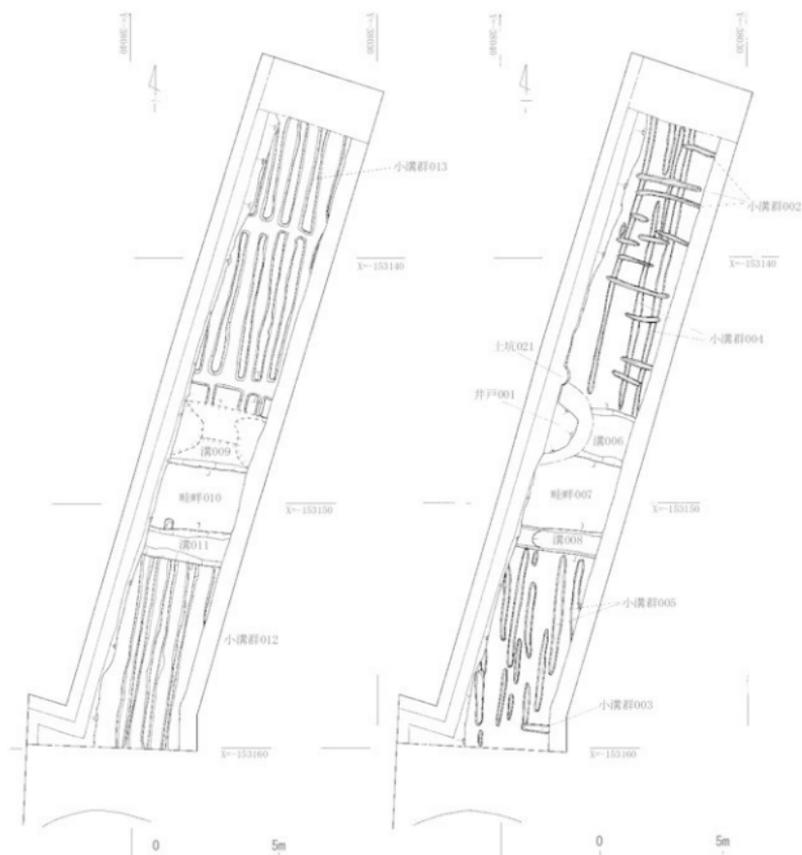
7) 第2面 (中世後半・近世)

第1面の基盤層である第2層を除去し、T.P. 6.95m 付近で検出した遺構面である (第20・22図、図版4c～d)。調査区内では、北から南にやや傾斜した地形を呈している。第1面同様に中央付近で東西方向の溝と畦畔を検出し、北及び南側では、耕作痕としての小溝群を検出している。本体部でこの面に相当するものは不明である。

畦畔 010、溝 009・011

調査区中央やや南寄りで検出した東西方向の遺構群である。北から幅約1.2m・深さ約20cmの溝 009 を検出した。その次に幅約2.5mの畦畔 010 としたものは、後世の削平により盛土の大半は失われたと思われる本来の高さは不明である。検出時、ブロック状の塊となった粗砂・シルト・粘土が斑模様を呈しており、この土砂を除去すると溝状に窪んだ遺構となったが、本来このブロック状土砂による盛土がされていたと推定している。その次に幅約1.2m・深さ約20cmの溝 011 が平行しており、大型畦畔の両側に溝をもつものと考えている。溝と畦畔で幅5m程の、東西方向に延びる遺構群である。後述の第1面に先行する条里型地割の東西方向坪境の可能性を考えている。

遺物は溝の埋土等から土器や陶磁器の小片が出土しているが何れも耕作に伴い小片化したと考えられるもので、唯一溝 009 から、残存状態の良い9世紀後半～10世紀前半の土師器高台付坏の破片が出土しているが、状況等からこの遺構面の時期を示すものとは考えにくく、下層からの混入と推察している。



第20図 1区 第2面 遺構平面図 (1/200)

第21図 1区 第1面 遺構平面図 (1/200)

小溝群 012 ~ 013

前述の畦畔・溝を挟んで、北と南側に幾分形状の異なる耕作痕として検出した。北側の小溝群013は、畝間と推察する溝と、畝跡と推察する畦状高まりの幅が0.3～0.4mで南北方向に広がる。間に東西方向の小溝を設けて、畝が短く途切れる構造である。

南側の小溝群012は、畝間と推察する溝幅が0.5～0.7mと北側のものよりやや広く、畝状高



第22図 1区 第2面 溝009・011・013 断面図 (1/50)

まりも途切れずに長く延びており、栽培作物の相違によるものと考えている。遺物は溝の埋土等からは土器や陶磁器の小片が出土しているが、何れも耕作に伴い小片化したと考えられるもので、時期判断の資料としては不適であり、他の遺構の時期から中世後半から近世の遺構と推察している。遺構に伴う時期の遺物は出土していない。

8) 第1面（中世後半・近世・近代）

竜華操車場造成時の盛土を除去し、さらに操車場以前の旧耕作土及び床土を除去して、T.P. 7.00m 付近で検出した比較的平坦な遺構面である（第21・23図、図版4e・f）。

主要なものには耕作に伴う遺構で、調査区中央付近で井戸・土坑・東西方向の溝・畦畔を検出した。これら遺構の北及び南側では、耕作痕としての小溝群を検出している。本体部で「第1面」とされているものと検出状況が似る。

井戸 001、土坑 021

調査区中央部で井戸遺構 001 の東側半分を検出した。西側半分は水処理施設躯体部の連続壁が建設されている。井戸内埋土は、最上部のみ操車場造成時の盛土が認められ、操車場建設時（昭和13年完成）には既に廃絶して窪地状であったものが、造成時に埋め立てられたと推察できる。深さ約2mの井戸埋土の大半は、近世末～近代の瓦等を含む土砂であった。井戸の北側に近接して径1m、深さ50cmの土坑021を検出している。井戸に伴う水溜めのような施設の痕跡と考えている。遺物は出土しなかった。

畦畔 007、溝 006・008

前述の井戸の掘り方に切られる状況で畦畔と溝を検出した。2条の並行する溝006・008に挟まれて畦畔007がほぼ東西方向であり、本体部分の調査結果をあわせると、条里型地割りでの坪境と推察している。つまり、大型畦畔の両側に溝をもつ東西方向区画線の一部を検出したと考えている。遺物は溝006から小片が出土しているだけである。

小溝群 002～005

前述の畦畔007・溝006・008を挟んで、北及び南側で検出した幅約0.2～0.3mの浅く細長い溝群である。北側に分布する小溝群は、南北方向小溝群004と東西方向小溝群002に分類でき、遺構の切り合いから南北方向が古く、東西方向が新しいと判断できる。南側に分布する小溝群も南北方向小溝群005・東西方向小溝群003に分類できるが、東西方向で検出したものは一条だけである。同様に南北方向が古く、東西方向が新しいと判断できる。

溝の埋土からは土器や陶磁器の小片が出土しているが何れも耕作に伴い小片化したと考えられるもので、中世以降近代までの色々な時期のものが混在する状態である。出土遺物は小片で、図化できる遺物は出土していない。



第23図 1区 第1面 溝006・008 断面図 (1/50)

第3項 小結

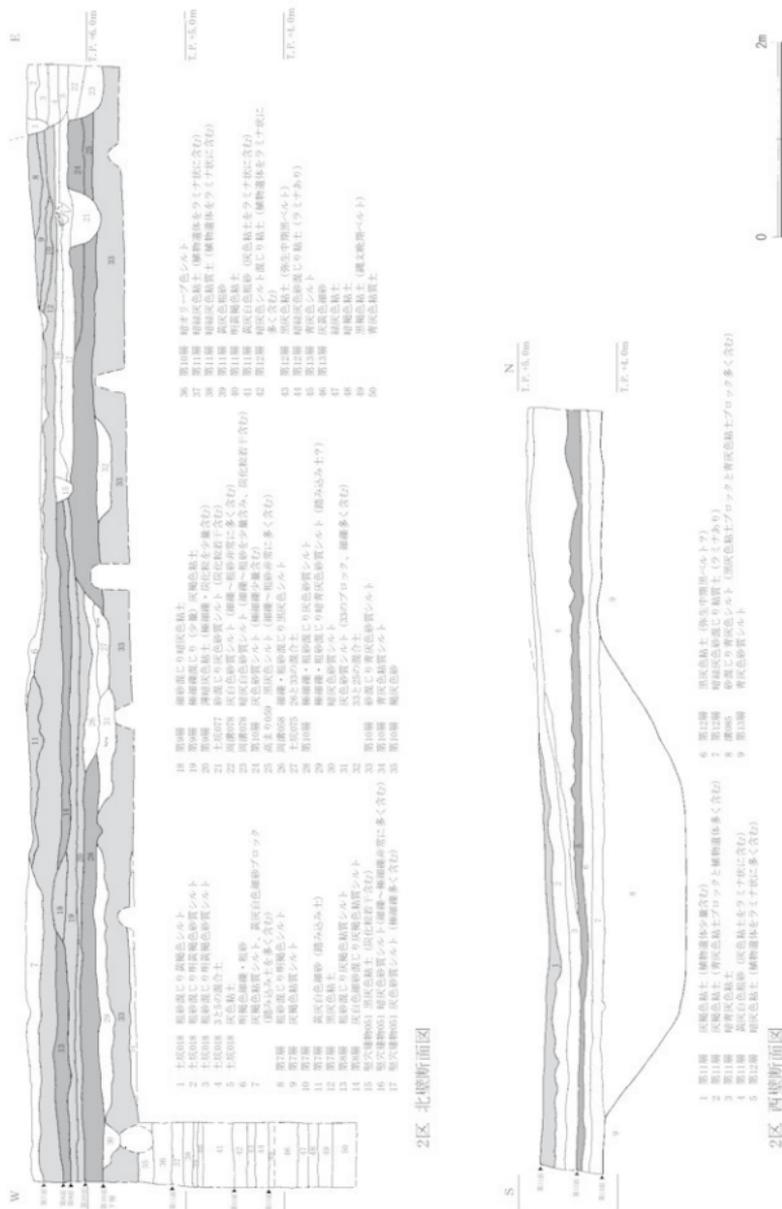
1区は水処理施設本体部の東南端部の調査区であることから、本体部で検出した各遺構の南東方向への拡がりを推定する資料である。第8面とした弥生時代前期の遺構は、本体部から続く遺構群ではなく、微地形から南東に拡がる可能性が指摘出来る。第6面bで検出した溝054b北岸堤062の敷き粗朶工法は、本体部で敷集工法を用いて築かれたとされる堤と一連のもので延長20m以上の規模と確認出来た。また、溝054bの底部から出土したケヤキ製の作業台は古墳時代としては類例の少ないものである。第6面aで検出した貯木施設059は建築材、器材、木屑、製品が共に出土し、木製品が付近で加工されていたことが分かる。木屑と共に出土した炭化米は、塊で出土したためおにぎりのような形状であったと思われる。第5面で出土した木棺は、土壌の堆積状況から古墳時代にも頻繁に洪水被害に見舞われる土地柄であったと思われるため、一部の墳墓群で埋葬主体が流されるような洪水があったと考えられる。第4面～第1面は耕作地遺構を検出しており、古墳時代後半以降は水田や畠として利用されていた場所である。

第4節 2区の調査

第1項 層序

2区では、13面の遺構面を検出している(第24図、図版7e～g)。最下層で検出した第13面は、1区及び本体部の弥生時代前期面に対応している。第13面の上に厚さ35cm程の第12層が堆積し、第12層を構成する43(黒灰色粘土)層は弥生時代中期の鍵層と考えられる。この第12層最上部の42(暗灰色シルト混じり粘土)層は、植物遺体をラミナー状に含むことから陸地として不安定な状況が推察されるが、この堆積層を基盤として第12面を検出している。第12面の上に厚さ60cm程の第11層が堆積している。下部は氾濫堆積(39～41)で、上部は第12面の基盤層同様に不安定な堆積層(37・38)であるが、この堆積層を基盤とする第11面を検出している。第12面及び第11面共に弥生時代後期と考えている。第11面の上に厚さ70cm程の第10層が堆積している。この堆積層はシルトと砂の互層であるが、比較的安定した土地状況であったと思われる。この堆積層を基盤とする古墳時代前期の第10面を検出している。第10面の上に厚さ15cm程の砂や礫混じりの粘土層である第9層が堆積し、この堆積層を基盤とする古墳時代前期の第9面を検出しているが、安定した土地条件ではなかったようである。第9面の上にも厚さ10cm程の砂や粗砂混じりのシルト層である第8層が堆積している。この堆積層を基盤とする古墳時代前期の第8面を検出している。第8面の上に厚さ20cm程の粘土層である第7層が堆積し、この堆積層を基盤とする古墳時代前期の久宝寺墳墓群が造営された第7面を検出している。

第7面の上に厚さ25cm程の粗砂とシルトが堆積し第6層を形成し、この堆積層を基盤とする古墳時代中期から古代の第6面を検出している。第6面の上に厚さ15cm程の洪水堆積の砂とシ



第24図 2区 北壁、西壁断面図 (1/50)

ルトが堆積し、第5層を形成し、この堆積層を基盤とする奈良時代の第5面を検出している。

第5面の上に厚さ20cm程の粗砂と砂雜じりシルトが堆積し第4層を形成し、この堆積層を基盤とする奈良時代の第4面を検出している。第4面の上に厚さ20cm程の砂混じりシルトが堆積し第3層を形成し、この堆積層を基盤とする平安時代の第3面を検出している。

第3面の上に厚さ20cm程のシルトが堆積し、この堆積層を基盤とする中世後半から近世の第2面を検出している。第2面の上に厚さ30cm程の粘質土や粘質シルトの盛土があり、この層を基盤とする近世中頃から近代の第1面を検出している。

第2項 調査成果

1) 第13面（弥生時代前期）

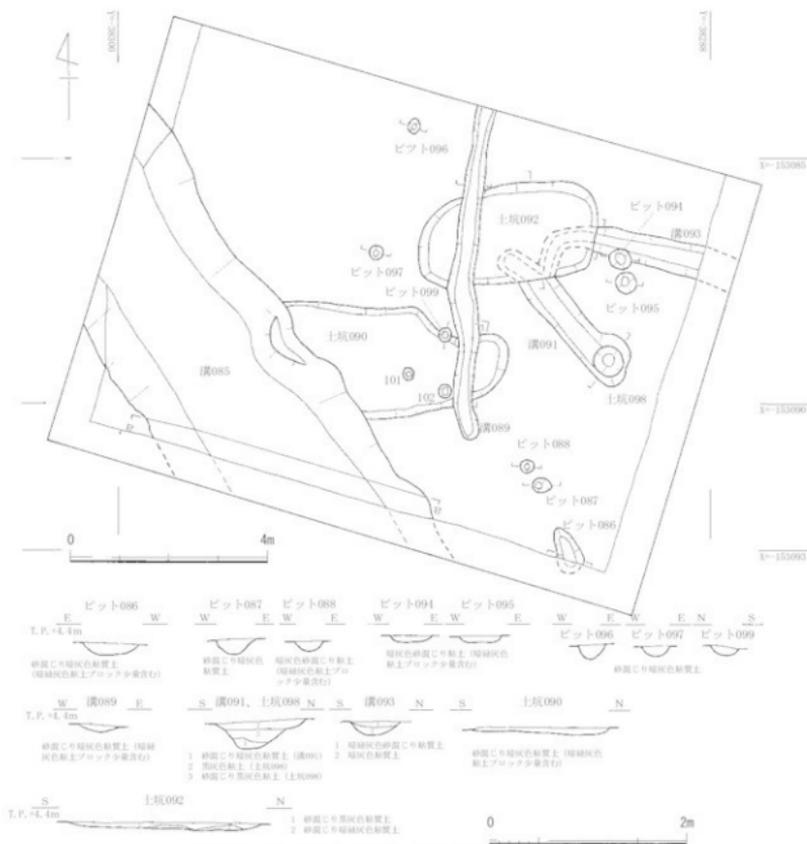
第12面の基盤層である暗灰色シルト混り粘土とその下の黒灰色粘土、第13面直上の暗緑灰色砂混り粘土を掘り下げてT.P.4.1～4.35m付近で検出した青灰色シルト層を基盤層とする遺構面である（第26図、図版5a～d）。微地形では調査区北東隅が最も高く、南西隅が最も低くなっており、「千分の18」程の傾斜である。検出した遺構で主要なものは、調査区南西部で等高線に沿うように大型溝がある。溝の南西側は調査区外で不明であるが、微高地にあたる北東側は溝・土坑・ピット等を検出したが、性格は不明である。本体部の「第8b面」に比定出来る。また、伴って出土した遺物は土器小片が少量であり、この遺構面の時期を弥生時代前期と明確にできる状況ではない。

大型溝 085

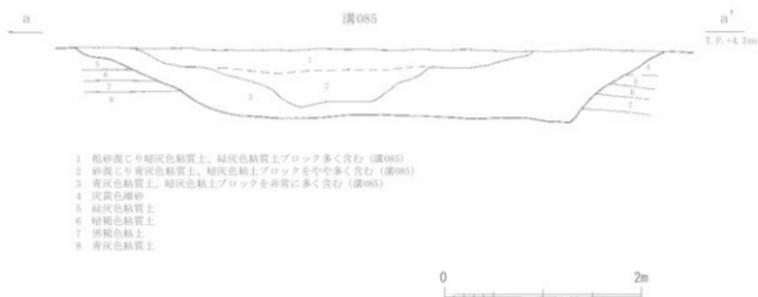
調査区南西部で検出した幅3.5～4.0m、深さ60～80cm、横断面逆台形の大型溝である（図版5b）。本体部で「第8b面 08087溝」としている遺構の更に南東側を検出したと判断している。溝の底面はほぼ平坦で水が常に流れていたような状況ではない。溝内の堆積は3層に分層でき、各層に共通してブロック状に粘土塊が認められ人為的に埋め戻されたと考えるのが適当な埋没状況である。このような状況に加え、溝肩があまり侵食されていないことや埋土の堆積状況などから、掘削後、比較的短期間で埋め戻された可能性が考えられる。本体部の成果と合わせると今回検出した部分を含めて直線的に北西-南東方向に掘削されており検出長30mで更に南東に延びる溝である。また、北東部分は120度ほどの角度をもって西方向に直線的に延びるようである。溝から時期を特定できるような遺物はほとんど出土しなかったが、本体部では弥生時代前期に比定しており、今回の調査でも中期以前と考えている。

溝 089

調査区中央部で検出した幅30～50cm、深さ5cm程の南北方向の溝である。本体部の「08087溝」から続くと考えられ、南側半分を検出したと思われる。溝は微地形から北から南に傾斜して掘られており、全長が15m程の遺構である。この溝の上側となる北端付近では若干のピットが検出されているだけである。そのため溝が掘られた目的等を推察することは困難である。後述する2基



第25図 2区 第13面 遺構平面図(1/100)、断面図(1/50)



第26図 2区 第13面 溝085 断面図(1/50)

- 1 粗砂混じり暗灰色粘質土、緑灰色粘質土ブロック多く含む(溝085)
- 2 砂混じり青灰色粘質土、暗灰色粘土ブロックをやや多く含む(溝085)
- 3 青灰色粘質土、暗灰色粘土ブロックを非常に多く含む(溝085)
- 4 灰黄色細砂
- 5 緑灰色粘質土
- 6 暗灰色粘質土
- 7 黒褐色粘土
- 8 青灰色粘質土

の土坑090、092が埋まった後に掘られていることは確認できた。遺物は出土していない。

溝091、093、土坑092、098

調査区北東部で検出したこの2条の溝091、093は共に幅60cm、深さ10cm程の規模である。どちらも等高線に沿っており溝底部の傾斜等から判断すると、溝093で東から西に流れた水は、両溝の接合部で溝091に入り、今度は東に流れて土坑098に溜まる構造である。土坑098は径1m、深さ0.3m程であるが、溝091の底部からすると径0.6m、深さ0.2m程で35ℓ程の水で満杯となる状況である。また、この溝の接合部は、長辺3.5m、短辺2m、深さ5～8cm程の浅い隅丸長方形の土坑と重複し土坑底部に遺存しており、検出状況から一連のものである可能性が高いと判断し、何等かの作業場ではなかったかと推察している。遺物は出土していない。

土坑090

調査区中央で検出した幅2m、長さ4m、深さ5～10cm程の浅く細長い東西方向の土坑である。土坑東側では溝089やピット099～101に切れ、東端は溝091の1m手前で終わっている。西端は大型溝085の肩で終わっており、この溝肩法面には土坑底部から続くように20cm程下がって長さ1m、最大幅20cm程の三日月形の段が掘り残されており、恰も大型溝085の底部への降り口のようなものである。遺物は出土していない。

ピット086～088、094～097、099～101

調査区全体で僅か10基の検出であり、建物跡のような纏まりは認められない。ただ、8基のピット086～088、096、097、099～101は弧状に分布しているようでもあり、柵等の施設の可能性は指摘出来る。遺物は出土していない。

出土遺物は土器小片が若干出土しているだけである。



第27図 2区 第12面 遺構平面図(1/200)



第28図 2区 第11面 遺構平面図(1/200)

2) 第12面(弥生時代後期初頭)

第11面の基盤層である暗緑灰色粘土層、その下層の粘土層や洪水堆積である砂層を掘り下げたT.P.4.3～4.6m付近で検出した遺構面である(第27図、図版5e～h)。基盤となる層は暗緑灰色粘土層で、検出した遺構は中型畦畔や小型畦畔等の水田遺構である。第12面直上から出土した第IV～V様式頃の甕(第29図、図版54-4)が上限と考えられ、他の出土土器から弥生時代中期後半から後期前半頃と推定し

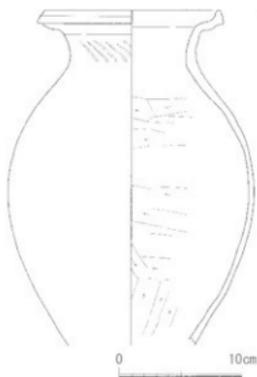
ている。水田面は厚さ20～30cm程の洪水砂で埋没しており、大部分の畦畔は流失したためか痕跡程度であったが、水口や堰状施設が遺存しており、水田の形状は復元出来る検出状況であった。本体部の「第7-1面」に比定出来る。この遺構面での遺物は、堰状施設の木材以外は全く出土しなかった。

中型畦畔 080、082、小型畦畔 081

調査区中央付近を北西-南東方向に幅2.5～3m程の中型畦畔080を検出した。この畦畔を境に北東側と南東側で15cm程の段差が形成されている。この畦畔から同じく中型畦畔082が直角に南西方向に延びており、この畦畔を境に北側と南側で5cm程の段差を形成している。畦畔は他に中型畦畔080から北東側に延びる小型畦畔081を検出している。今回の調査範囲で水田区画1枚分の全容を検出したものは無いが、中型畦畔080の南東端でこの畦畔の南東肩部が南に屈曲する様相を呈しており、この部分で少なくとも一辺が8mほどの小区画水田が復元できそうである。周辺で検出した水田も、同様の小区画水田と推定される。

水口 083、堰状施設 084、足跡群

中型畦畔080で砂により埋没した比較的明瞭に遺存する水口を検出した。畦畔の盛土は前述したようになりの部分が失われており、遺存する畦畔の上端は幅が1.5m程であった。この畦畔の高さは上段である北東側で数cm、下段である南西側で15cmであった。水口の形状は、この箇所の上段側、3分の2程の所に幅10cm、長さ80cm程で畦畔が途切れずに繋がっており、上段の水田の「落し口」にあたる部分と下段の水田の「引き込み口」に分かれている。上段の落し口部分は浅い窪みが辛うじて残る状態であり、下段の引き込み口部分は幅1.2m、深さ10cm程の馬蹄形の窪みとなっており、その中央部で幅0.4m程のブロック状の粘土が充填されたような状況が遺存していた。砂層で埋まった状況から水口が開いた状況で埋没したものと思われる。この水口上段部分で中型畦畔080から小型畦畔081に沿うように幅1～1.5m、深さ5cm程の溝状に窪む微地形を検出している。埋土はかなり淘汰された砂で埋まっており、底部には後述する足跡群が認められた。水が北西から南東に流れている状況で埋没しており、二つの畦畔080、081が接する付近で厚さ2cm、幅9cm、長さ1.5m程の割り材が横断する形で据えられており（図版5g）、前述の水口に水を引くため流れをせき止める補助施設的なものと思われる。足跡群はこの溝状部分に沿って検出しており、西側は中型畦畔080を越えてもう一方の中型畦畔082にも沿って更に西側に延び、東側は堰状施設084・小型畦畔081を越えて更に東に延びており、延長15m程を検出している。水田城内の頻繁に使用された移動経路の痕跡のようである。



第29図 2区 第12面 出土土器 (1/4)

＜出土遺物＞（第29図、図版54-4）

側溝掘り下げ時にこの面直上に相当するレベルから出土した壺（第29図、図版54-4）である。底部を欠くが、その他はほぼ復元できた。時期は弥生時代後期初頭頃が考えられ、所謂河内平野低地部の土器とは異なり、他地域からの搬入品と思われる。

木製品では、堰状施設084で置かれていた割り材（第27図）以外は出土していない。

3) 第11面（弥生時代後期）

第10面の基盤層である粗砂混じり灰色砂質シルト層やその下層にある砂混じり青灰色砂質シルト層、褐色砂層、暗オリーブ色シルト層等を掘り下げたT.P.4.7～5.0m付近で検出した遺構面である（第28図、図版6a）。基盤となる層は暗緑灰色粘土層で、層上面は北から南に傾斜して、調査区の中央部で高低さ15cm程の段が形成されて、南側は自然流路状になっている。北側はやや微高地となるが、堆積層から氾濫域と考えられ、遺構等は検出していない。

遺物はこの流路の埋土から弥生時代後期頃の土器片が若干出土しており、本体部の「第6-1面」に比定出来る。

流路跡079

調査区南側で東西方向に検出したものである。北岸は前述したように15cmほどの段があり明確であるが、南岸は調査区の更に南側であり確認できなかった。検出した範囲で流路底面の高さを見ると北岸から5m程でまた高くなる様子が見て取れるため流路幅は10m程度で深さ30～40cm程の浅いもので、東から西に傾斜していたことが推定できる。遺物は、弥生時代後期頃の甕底部片等の土器片が若干出土した。

＜出土遺物＞

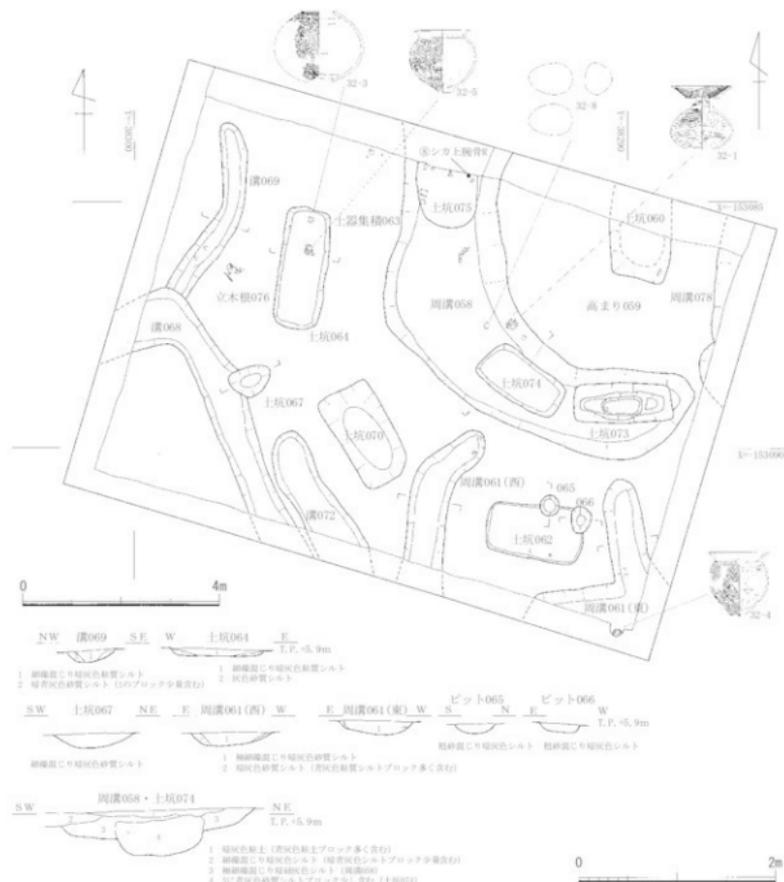
土器小片がいくらか出土しているが、図化できる遺物は出土していない。

4) 第10面（古墳時代前期）

第9面の基盤層である砂混じりの暗灰色粘土層を10～20cm程掘り下げて、T.P.6.0～6.1m付近で検出した遺構面である（第30図、図版6b～h・7a～d）。基盤となる層は砂混じりの灰褐色シルト層で、層上面は東から西に緩やかに傾斜して低くなっている。出土する土器は第8面で出土するものと型式差は認められないが、間に第9面とした水田痕跡を検出しており、明確に第8面と分離して検出した。この遺構面は検出当初、久宝寺古墳群に先行する古墳時代前期周溝墓群と考えていたが、①周溝部分が埋め戻されている。②マウンドにあたる部分に盛土が認められない。③主体部が確認できない等から、周溝墓以外の遺構と考えている。後述の第8・9面同様に「第5-2b(2)面」に比定できる。

周溝058、土坑073・074・075

この遺構面では北東隅部分がT.P.6.15mで周辺部より僅かに高く、周溝058とした溝状遺構は



第30図 2区 第10面 遺構平面図(1/100)、断面図(1/50)

T.P. 6.1mの等高線に沿うように掘られている。検出した溝は幅1.5m、延長8m程で、平面形は溝の外肩が一边4m程の隅丸形状なのに対して、内肩は円形に近い形状である。調査区東端で周溝058の東端部を検出している。この溝の南側部分で長方形の土坑を2基検出している(図版6f)。東側の土坑を埋葬跡a、その西に10~20cm離れてあるのを埋葬跡bとしている。

埋葬跡a(土坑073)は幅0.8m、長さ2m程の長方形で、溝の東端部の内側に寄った位置にほぼ東西方向に軸線を持ち、溝が埋まる過程で掘削されたと考えられ、溝の底部を更に段掘り状に20cm程掘り下げており、土坑底部は平坦ではなく中央部分がやや深く鉢状になっている。深さ50cm程の土坑内に頭を東方向にし、背中と膝をやや曲げ、北向き加減で横向きに埋葬された横



第31図 2区 第10面 土坑073、土坑074 平面図(1/40)

臥埋葬状の人骨(図版60)を検出している(第31図左、図版6g)。副葬品等は認められず若干の土器片が出土しているが、埋め戻し土に混入したものと思われる。安部みき子氏の鑑定によると壮年の男性と判定された(第4章第1節参照)。

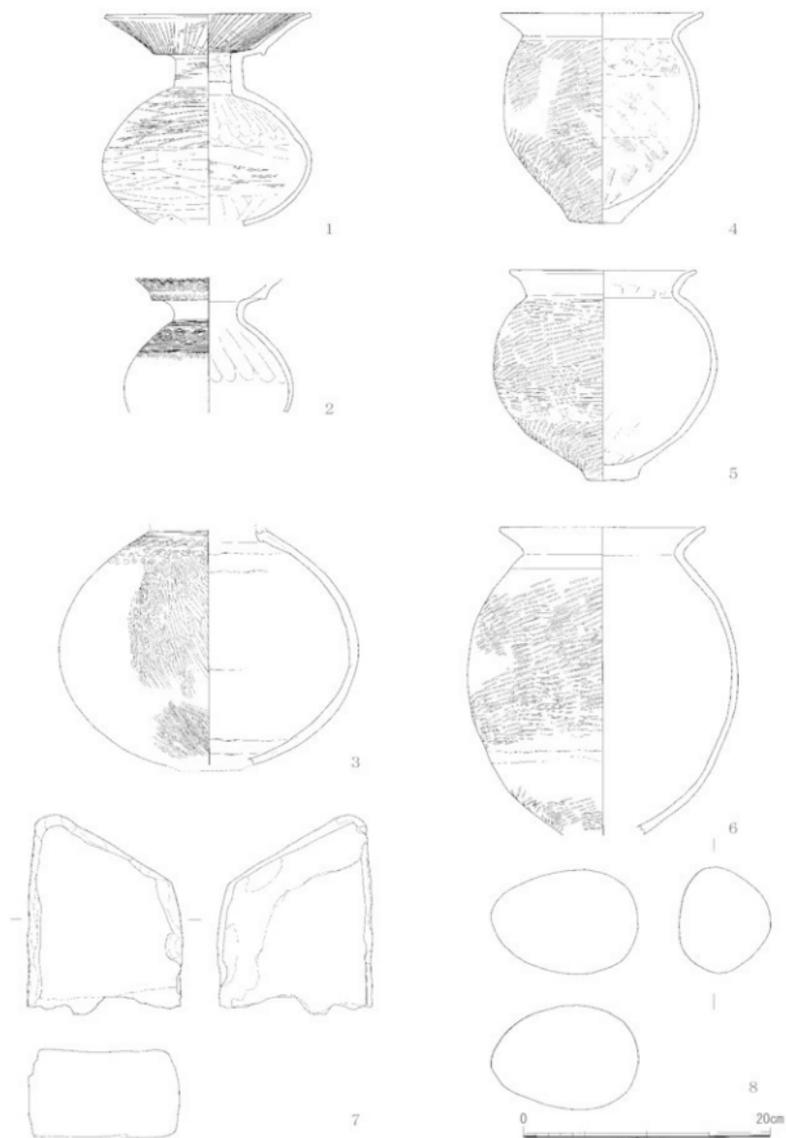
埋葬跡b(土坑074)は埋葬跡aの西側に近接して掘られており詳細については不明である(第31図右、図版6h)。土坑の規模から埋葬跡aに類似したものと思われる。土坑内から哺乳類の骨片が出土している。この溝の検出した北端部で前述の2基の埋葬跡に類似した土坑からシカの右上腕骨を検出しており、埋葬跡c(土坑075)としている。幅1m、長さ1.5m、深さ20cmを検出しているが、土坑南端は検出できたが北端は調査区外であった(図版7a)。埋葬跡a・bに類似した規模で、長軸は南北方向と考えられる。周溝058の東側で同様の周溝078を検出している。調査区の北東部分で僅かに検出できただけのため、仔細は不明であるが周溝058に類似したものか、或いは、周溝058と一連の可能性もあると考えている。

高まり059、土坑060

北に調査区北東部分で前述の周溝058に囲まれた部分が見かけ上、高く見えるので「高まり」と呼称し、遺構に準じて扱う。前述の周溝058、078の検出状況から東西幅は約4mである(図版6c)。南北幅は北側が調査区外で検出長約4mであり全長は不明であるが、平面形が南長軸を有する長方形になると考えられる。この高まり059は前述したように周囲の溝からすると高まりの形状であるが、調査区北側の土層断面で、周溝を含む東西横断面の観察を行い盛土は認められないと判断出来た。高まり中央部では土坑060を検出している(図版7b)。検出時は幅1.2m、検出長1.7mであり、南東隅部分で直立する木片を検出したため主体部の可能性を考えたが、土坑としての深さが1~5cm程しかなく、木片も土坑底部で下端を検出した。このため土坑060とした遺構は浅いことから埋葬跡とは考え難く、他の性格を推定せざるを得ないが不明である。また、前述の溝が埋め戻され、僅かな傾斜は残るが、ほぼ平坦地になったと考える。その後、埋葬跡a~cの遺骸が朽ちるに伴い陥没現象が起り、再度周溝状になり、同様に高まりの形状で埋没したと考えている。この段階で後述の二重口縁壺(第32図1)が出土している(図版6d・c)。

溝061、土坑062、ピット065、066

調査区南東隅で検出した遺構で、前述の溝状遺構の埋葬跡a・b部分に南接して溝061が北辺



1・6～8 (周溝058)、2 (包含層)、3 (周溝058・土器集積063)、4 (周溝061)、5 (土器集積063)

第32図 2区 第10面 出土土器・石器 (1/4)

の開いた「コ」字状に検出した。溝状遺構・高まり等同じく検出時は周溝墓の可能性を考えていた。溝幅は西・東辺は0.7m程、南辺は1.2～1.5m程である。全周は検出していないが同一の溝と考えている。ただし、南辺は直線的に伸びる状況で検出しておらず、南西隅で途切れる可能性もある。溝は堆積状況から埋め戻された形跡は認められない。この溝に囲まれた東西3m、南北2m程の中央部から東西方向に長軸を持つ1m×2m程の土坑062を検出したが、深さは前述の土坑060同様に5cm程で土坑底部は平坦でありやはり盛土がない状態では埋葬跡とは考えられない。この土坑の北東隅と50cm程西寄りの2ヶ所でピット065、066を検出している。この状況は土坑060における木片の出土状況との類似が指摘出来る。遺物は溝から完形甕が1点出土している他は、溝の端部や曲がり部分、土坑底部から土器小片が出土しただけである。

土器集積063、土坑064

調査区北西部で検出した遺構で、掘り下げ作業時から土器片が比較的集中する状況であった。完形の甕を検出した付近を中心に径1.5m程の範囲に土器片が纏まって出土したため土器集積063遺構とした(図版7c)。この土器集積を掘り進むと長さ2.4m、幅1m、深さ5cm程の長方形土坑064の北側半分程に該当する状況である。この遺構面では3基の埋葬跡以外にこの土坑064を含め4基の同様な浅い長方形土坑を検出しているが、その性格を推測する手掛かりとして注目できる。

溝068・069

調査区西側で検出した浅い2条の溝である。溝069の南部分が溝068により壊されている遺構の切り合いから溝069が先に掘られていたと判断できる。溝069は幅0.5m、深さ0.1m、検出長5mで等高線に対して直交する形で緩やかに蛇行しながら南北方向に延びている。この付近の微地形が北から南に下がる状況のため水は北から南に流れたと考えられる。溝068は幅0.7m、深さ0.1m、検出長6mで溝069を壊すところで直角に折れ曲がっており、方形区画の一部を思わせる検出状況である。遺物は溝069から古墳時代前期の土器片が若干出土しているが、溝068からは遺物は全く出土していない。

土坑067・070

調査区中央部南寄りで前述の土器集積063と土坑062の間で検出した土坑070は、1.1m×2.1m、深さ5mの浅い長方形土坑である。溝状遺構内の埋葬跡a～cの位置関係とこの3基の土坑の位置関係は共通点が考えられる。土坑067は、溝068を切って掘られた径0.6～0.8mの不定形土坑である。遺構の切り合い等からこの遺構面から検出した一連の遺構の中で最も後出のものと考えている。遺物はどちらの土坑からも古墳時代前期の土器片が少量出土しただけである。

立木根076

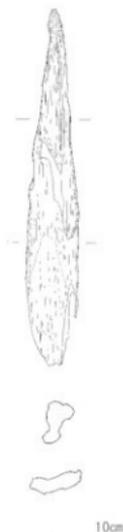
調査区西側、前述した土器集積063の西端部で検出した立木の株部分である。土器集積検出時は径6cm程の木片横断面を検出しただけで、木株との判断は出来なかったが、第10面の調査完了後掘り下げる中で、根を張った状況を確認できた(図版7d)。樹種は落葉広葉高木のエノキ属

のものであることが判明している。一里塚の目印に植えられるような成長すれば径3m、高さ20mにもなる木であるが、出土したのは樹齢が数年程と推定できる幼木（図版45-3）である。土器集積はこの立木の東に接する位置であったことが分かる。

〈出土遺物〉（第32図1～8、第33図、第35図1～6、図版50・51）

この遺構面の主要な遺物は、周溝058及び周辺からの出土であるが、周溝058開削時の遺物は出土していない。ほとんどが周溝058が埋まる過程で高まり059からの転落と考えられるものである。第32図1は前述の溝屑で検出した二重口縁壺である。底部は焼成後に穿孔されている。第32図2は高まり059直上の遺物包含層から出土した小型二重口縁壺である。第32図3は土器集積063及び周溝058の土坑075上部から出土した壺体部である。第32図4は周溝061（東）から出土したほぼ完形の甕である。第32図5は土器集積063から出土したほぼ完形の甕である。第32図6は周溝058の土坑075上部から出土した甕である。第35図1は土坑062から出土した壺口縁である。口縁端部及び端部内面に波状文・櫛描直線文が施された破片である。第35図2は高まり059及び周溝058から出土し、接合した壺口縁である。口縁端部には2個一対で竹管文、端部内面に波状文が施された破片である。第35図3・4は高まり059から出土した甕と小形埴である。第35図5は第8面直上である第9面下層から出土した絵画土器である。壺の胴部小片であり、何を描いたものか不明である。第35図6は小形壺か鉢の胴部下半部である。土坑062と土坑064の2ヶ所から出土している。これらの土器は庄内式の新しい段階のものと考えられる。

第32図7・8は共に埋葬跡b（土坑074）周辺から出土の石器である。7は断面長方形の砂岩製石皿である。左側平面図の面が浅い皿状に窪み使用面である。平面図下側が破断面になっておりここで割れたものであるが、破断面後も使用されている。右側平面図は表面が剝離して本来の使用面が失われており、剝離後、使用時の接地面としたと考える。平面図下部は破断面である。本来は現存長の倍ほどの長さを持つ、長方形の使用面を持つ石皿と考えられる。8は海岸で採集されるような比重の重い円礫製の卵形をした磨石である。図の左上段の右側端部と左下段図の下面の2ヶ所に磨耗の顕著なところが観察され、磨石としての主たる使用面と考えている。この石皿と磨石は、近接して出土しているが、石皿の状況からセット関係を考えにくいものである。第33図の木製品は、高まり059上の土坑060の南東隅で図のように直立した状態で検出した針葉樹の割り材である。底部はやや先端を尖らせるような加工が認められるが、上部は腐食が激しい状態である。



第33図 2区 第10面
土坑060 出土木材
(1/4)

5) 第9面(古墳時代前期)

第8面の基盤層である灰褐色粘質シルト層を5～10cm程掘り下げて、T.P.6.2m付近で検出した遺構面である(図版8a)。調査区北辺西よりから南東隅に延びる畦畔状の高まりを検出した。この高まりは本体部の「第5-2b(2)面」で報告されている遺構から続く可能性が考えられるため、調査対象としたが、性格等については畦畔の残欠の可能性を指摘すると共に、第8面で検出した遺構群に先行するものであることを確認したと考える。

畦畔

図版8aで報告するように、畦畔と考えられる痕跡を2ヶ所検出している。水田が営まれた後、このあたりが水没したことから、畦畔が痕跡を残す程度に流失したと考えられる。第10面及び第8面が古墳時代前期庄内期の遺構であることから、この第9面も古墳時代前期のものである。

この遺構面から遺物は出土していない。

6) 第8面(古墳時代前期)

第7面の基盤層である黒灰色粘土層を20～30cm程掘り下げたT.P.6.25～6.3m付近で検出した遺構面である(第34図、図版8・9)。基盤となる層は砂混じり灰褐色粘質シルト層で、層上面は東から西に緩やかに傾斜して低くなる地形である。調査区中央付近で東から西方向に延びる谷状の窪地を検出している。窪地の南北両側はほぼ平坦な地形である。この平坦面では径10cm程の杭跡状のピットが分布しており、他に堅穴建物状の遺構や溝、土坑などを検出している。第8面を覆う堆積は前述したように黒灰色粘土層を主体とするが、砂混じりのブロック土が散見され、比較的短期間に堆積したと推測できる。この遺構面は本体部の「第5-2b(2)面」に比定できる。

堅穴建物051、柱跡?053、054、土坑057、077

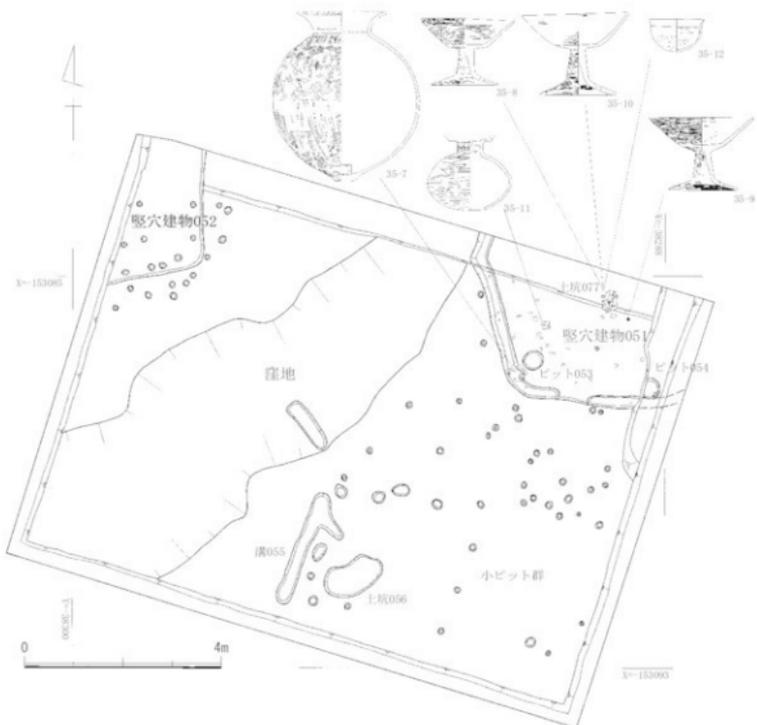
調査区北東隅で検出した遺構である。平面形が多角形を呈する堅穴建物の可能性が考えられる遺構である。長さ2.5m程の一边とその両側に続く二辺の一部を検出した。確認できた辺の接する角度が約120度であることから平面形は六角形を呈すると推測し、堅穴全体の3分の1程度を検出したと考えている。堅穴建物と考えた場合、柱跡の可能性のあるピットが各辺の接する付近の2ヶ所で検出しているが、検出できなかった所もあり、建物の構造を考えると疑問が残る。また、堅穴内の中央部に近い所で径60cm、深さ30cm程の土坑077を検出しているが、埋土に若干炭片が認められたが、炉跡とは考えにくく、検出範囲内で炉跡は未検出である。この土坑内から遺物は出土せず、埋まった後に土坑掘り方の範囲内に収めるように高坏・小型鉢等の土器が置かれ(図版8h)、そのままの状態ですべて埋まった様である。高坏が立ったままの状態で見出されているなど、この堅穴が短期間で埋まったと考えられる。堅穴内の施設として外壁に沿って幅25cm、深さ1～2cmの壁溝を検出している。堅穴の南面する辺で幅60cm程が入り口のように途切れている。この途切れ部直近の西側隅で広口壺(第35図7)が底部を壁溝内に置いた状態で

完形のまま出土している（図版8e）。また、途切れ部から堅穴外側に接して土坑057を検出している（図版8g）。堅穴調査時は遺構面に残る地層の染みのようなものと考えていたが、堅穴の調査後、下層に掘り下げる過程で土坑と確認した。形状は長辺1m、短辺0.8m程の隅丸の三角形状で、深さ数cm程の皿状であり、壁溝を掘る前に丁寧に埋め戻されていた様である。

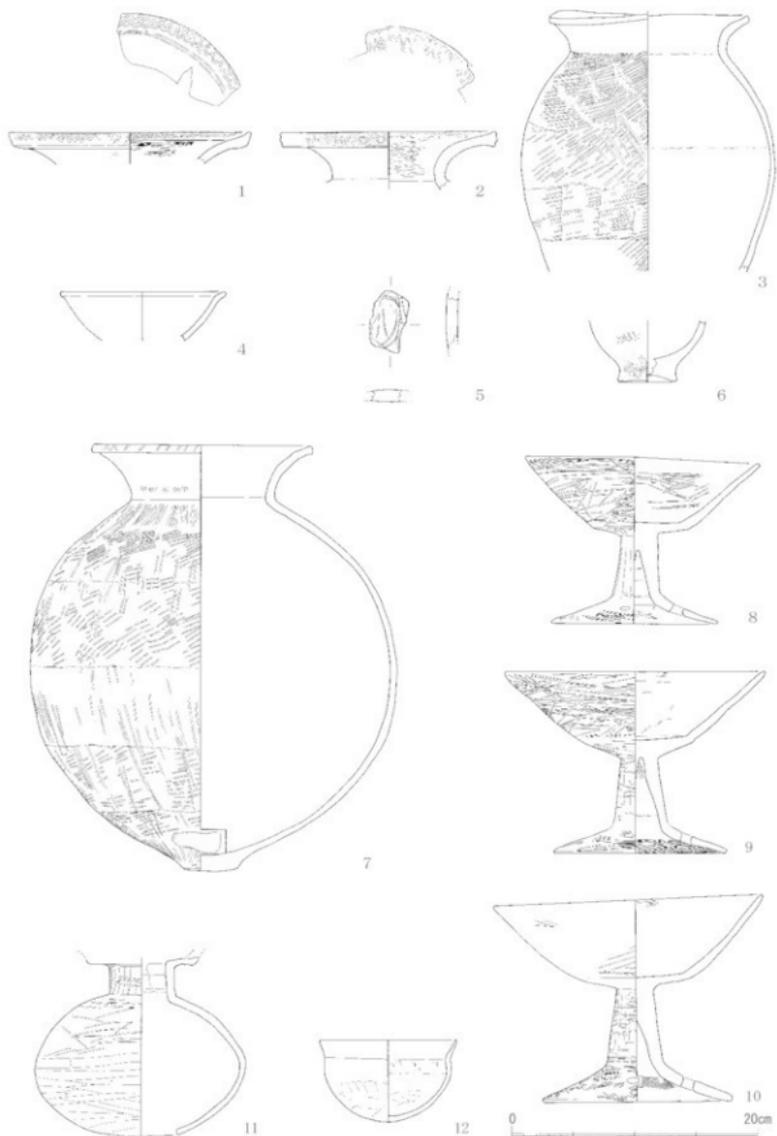
土坑内から土器の小片が出土しているが、土坑に伴う物が混入か不明である。堅穴はその中央付近に土器を放置して埋め戻された可能性があり、時期は出土した土器から庄内式末から布留式の古段階頃と考えている。

堅穴建物052

調査区の北西隅で前述の堅穴建物051と窪地を隔てて検出した遺構である（図版9a）。100度程の角度で接する2辺を長さ2.5m程検出しただけである。平面形が方形を呈すると考えているが、深さは1～2cm程で堅穴の内側や外側に接して径10cm、深さ数cm程のピット群を検出しているが、建物跡とするには判断材料が乏しく堅穴遺構と呼称し、その南東部分4分の1程度を検出したと考えている。



第34図 2区 第8面 遺構平面図(1/100)



1 (土坑062)、2 (高まり059・周溝058)、3・4 (高まり059)、5 (第9面下層)、
6 (土坑062・土坑064)、7・9・11 (竪穴建物051)、8・10・12 (土坑077)

*1~4・6は第10面、5は第9面、7~12は第8面

第35図 2区 第10~8面 出土土器 (1/4)

窪地

調査区西側部分で幅1.5～3.5m、深さ2～10cm程の溝状窪地を検出している。調査区北辺中央部から南西隅に向かって幅が大きくなり、僅かに傾斜して低くなっている。遺構とするよりは遺構面の自然微地形と考えられるが、



第8面で検出した竪穴遺構や溝等の配置にこの窪地が強く影響していると考えられるため遺構に準じて記述しておく。

第36図 2区 第8面 竪穴建物051 出土砥石 (1/4)

溝 055

調査区南側で窪地の東肩に沿って検出した全長2.5m程の小溝である。北端部は後述する土坑056に向かって60cm程杖状に小溝が延びている。横断面の形状は深さ2～3cm程の浅い底部が平坦な皿上を呈している。

土坑 056

調査区南側中央部で検出した平面形がやや曲がった楕円形を呈する遺構である(図版9b)。長径1.25m、短径0.65m、深さ1～2cm程の浅い土坑である。前述の溝055や後述するピット群の一部と一つのまとまりを持つと考えている。

小ピット群

径10～20cm、深さ2～数cm程のピットを多数検出している。性格は不明であるが、前述の遺構等との関連で理解できそうなものも幾つか指摘出来る。

<出土遺物> (第35図7～12、第36図、図版52)

第35図7は、口縁端部に刻み目を施した完形の広口壺である。頸部から口縁にかけてヨコナデ調整後、頸部下半から胴中央部にかけて放射状に黒い線が認められるが、描かれたものか、痕跡か不明である。底部やや上方が焼成後に穿孔されている。

8・10・12は土坑077が埋まった直後に完形で置かれた状態で出土している(図版8h)。8・10は高坏、12は小型埴で底部内面にベンガラと思われる赤色顔料が付着していた。9・11は竪穴遺構051の床面で出土しており、9の高坏、11の二重口縁壺共に床面に接した状態で検出した(図版8f)。二重口縁壺は焼成後に底部穿孔されており、口縁部は失われおり、周辺からも出土しなかった。第36図も竪穴遺構051の床面から出土した砂岩製の砥石である。図上段の平面図上下端共に破断面であるが、下端の破断面は肉眼観察で摩耗が認められ、破断後も使用されたと考えられる。上端は破断面の摩耗が観察されない。

7) 第7面(古墳時代前期～中期)

第6面を5cm程掘り下げたT.P.6.4～6.5m付近で検出した遺構面である(第37図、図版9c～d)。遺構の遺存状態は第6面での洪水痕跡がこの第7面にも大きく影響を及ぼしており、「久宝寺44

号墳」の一部と理解できたものの、遺存状態はあまり良好ではなかった。この遺構面は本体部の「第5-2面」に比定でき、久宝寺古墳群が築造されている時期のものと考えられる。

久宝寺44号墳(？)

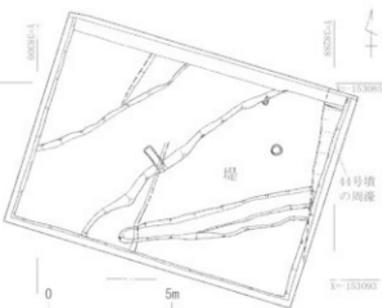
本体部では、「全長約33.5m(後方部長約19.5m、前方部長約14.0m)、周溝の平面形は幅4.5～5m、深さ40～50cmで墳丘に沿わない隅丸方形を呈する。」と報告されており、前方部と後方部の6割程を検出している。また、「北側周溝外側の地形的に低い所に周堤がある。時期は、庄内式末から布留式期最古段階頃と推測している。」としている。

今回の調査ではこの古墳の後方部西側周壕の外側法面と外堤痕跡の一部を検出したと考えているが、非常に僅かな部分のため断定はできない。周壕部は第4面で後述するように埋め戻して整地した状況を検出しており、奈良時代頃までは窪地状になっていたことが窺える。後方部西側周壕は延長5m程を検出しただけで、傾斜の変化点を底部と考えると深さは50cm程となる。外堤は幅6m、厚さ20cm程の盛土痕跡を検出したが洪水による流失が激しく、周壕との関係から外堤の跡と推定した。また、堤の外側には幅2m、深さ20cm程の溝状の窪みを検出している。周壕・外堤と思われる部分から遺物は出土しなかった。

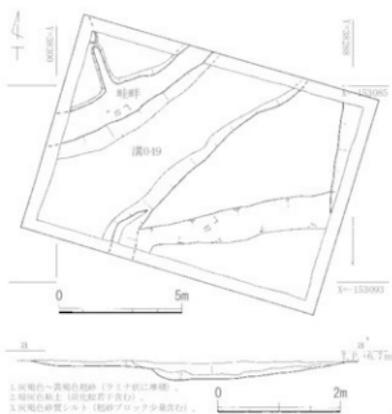
出土遺物は、第7面の精査時に土器の小片が若干出土しただけである。

8) 第6面(古墳時代中期～古代)

第5面を15cm程掘り下げたT.P6.85m付近で検出した遺構面である(第38図、図版9e・f)。第5面の基盤層であるシルト層の下に洪水によると考えられる砂層が調査区全面に堆積している。この砂層を除去していくと、調査区北側隅部分が微地形的にやや高くこの部分で水田跡を検出している。更に水田跡南側の砂層堆積を除去して、調査区中央部で溝049を検出している。溝の更に南側は低湿地状で遺構等は検出していない。耕作地遺構であり遺構に伴う遺物は殆ど出土していないが、前述の洪水堆積である砂層から古式土



第37図 2区 第7面 遺構平面図(1/200)



第38図 2区 第6面 遺構平面図(1/200)、断面図(1/80)

師器の破片と共に6世紀代の須恵器片が若干ではあるが出土しており、古墳時代後期の洪水で遺構面が埋没したと考えている。この遺構面は本体部の「第4-2面」に比定できる

水田跡

調査区の北側隅部分で東西方向の中型畦畔と南北方向の小型畦畔を検出した(図版9e・f)。中型畦畔は水田面から5cm程、小型畦畔も2～3cm程の高さが遺存していたが、洪水による畦畔盛土の流失が少なからずあると思われる。また、小型畦畔部分で水口と考えられる畦畔の途切れ部を検出している。

この水田跡の検出面積は、畦畔も含めて16㎡程と狭小であるが、本体部「第4-2面」で報告されている久宝寺墳墓群の墳丘以外の部分で小区画水田を検出しており、一連の水田区画を検出したと考えている。

溝 049

調査区の中央部分で東西方向に検出した幅3m、深さ10～20cm程の浅い溝である(図版9e・f)。底まで洪水砂が堆積しており、6面を覆う洪水により一気に埋没したと考えられる。また、溝の西側部分が幅5m程に拡張しており、この洪水の勢いの一端を窺うことができる。洪水砂は調査区内で観察すると南西から北東に移動、堆積したことがわかる。

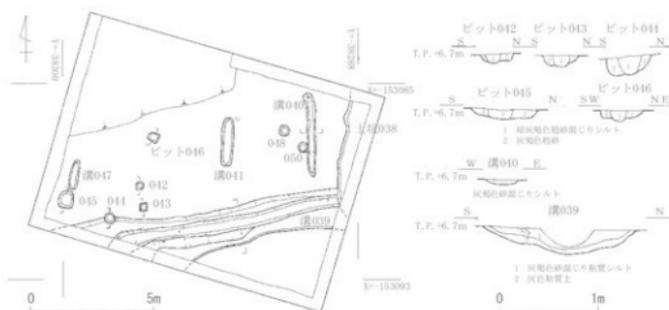
この溝の南側は洪水砂を除去した状態で水田面よりやや低く低湿地状を呈しており、遺構は検出されなかった。

<出土遺物> (第40図 10・14・16～18、図版53)

第6面を覆う洪水砂及び遺構面の精査時に土器(10・16～18)が出土している。16は須恵器広口壺口縁片、10・17は須恵器坏身片、18は土師器高坏脚部片で古墳時代後期の土器である。14は円筒埴輪片である。

9) 第5面(奈良時代後半)

第4面を20cm程掘り下げてT.P. 6.65m付近で検出した灰色砂混じりシルト層を基盤とする遺



第39図 2区 第5面 遺構平面図(1/200)、断面図(1/50)

構面である(第39図、図版9g・h)。洪水堆積と考えられる砂層で埋没しており、第4面と明確に分離できた。性格が不明の平行する小溝群やピット等を検出しており、本体部の「第3-1面」で報告されている集落関連遺構以外の遺構群との関連の中で理解している。

溝 039

第3面で検出した溝008や4面で検出した溝016とほぼ同じ位置で検出しており、これらの溝に先行する溝と考えている。幅が1.5mで深さが0.2m程の浅い皿状を呈しており、第3・4面の溝と比べるとかなり幅の割りに浅いことが指摘出来る。上層での区画性から類推して区画溝である可能性は残るが、現時点では不明としておく。溝内からは、比較的大きな土器片が出土している。

小溝 040・041・047、ピット 042～046・048・050

幅約30cm、深さ約5cmの南北方向溝を3条検出している。東側で検出した2条の溝040、041は、3.4m程の間隔で平行してある。西側で検出した溝047も溝041と6.3m程の間隔で平行している。一見すると中世以降顕著に検出されるようになる耕作地遺構の大畝の痕跡のようである。また、大小のピットをこの小溝と共に検出しているが、どれも浅く、建物の柱跡とは考え難いことから、堀具等の痕跡の可能性が考えられる。現状では共に耕作に伴う遺構の可能性を考えている。

<出土遺物> (第40図1～9・11・12・15)

第40図1～4は須恵器高台付坏、5は土師器坏、7は石皿、8・9は土師器甕、10は須恵器坏身、で溝039から出土している。ピット043から須恵器坏(11)、ピット048から須恵器甕(12)、13は包含層から出土した平瓦片で、10以外は8世紀後半頃のものである。他に包含層から形象埴輪の台部片と思われる15が出土している。

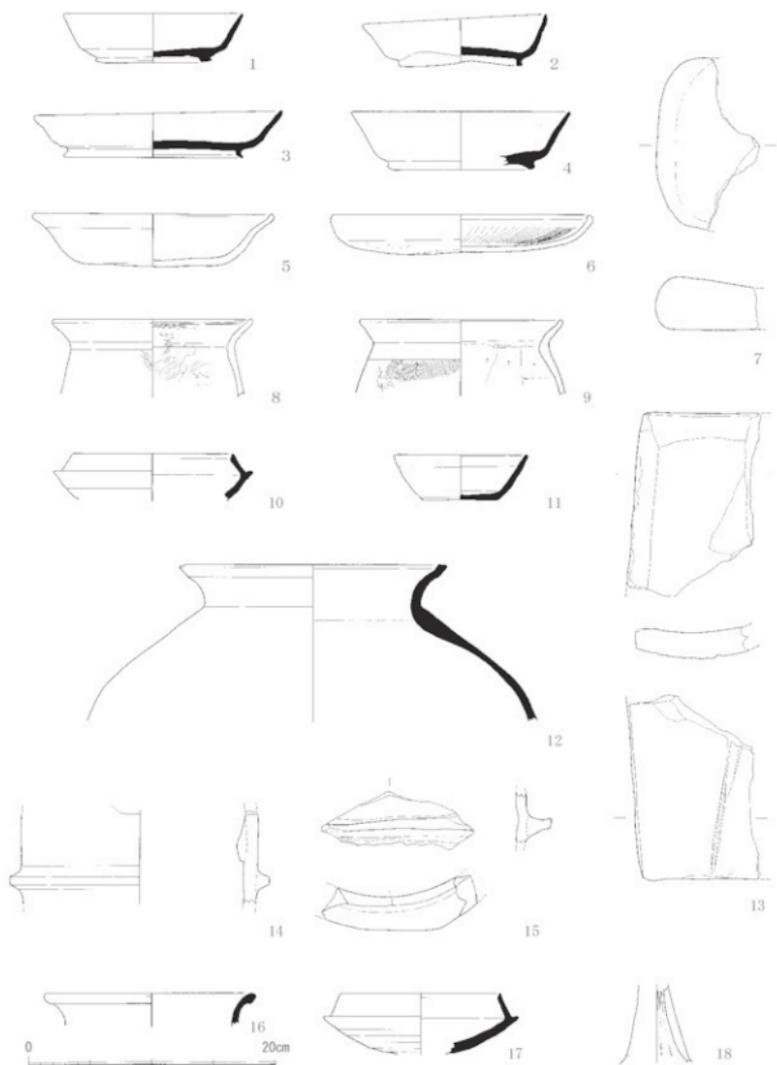
10) 第4面 (奈良時代末～平安時代中頃)

第3面を20cm程掘り下げてT.P. 6.85m付近で検出した、灰色～褐色の砂混じりシルト層を基盤とする遺構面である(第41図、図版10a～f)。方位に合わせて整然と配置された溝や建物跡を検出しており、北側の一部が後世の耕作等により失われているが、比較的遺存状態は良好である。本体部の「第3-1面」で報告されている遺構群の中の集落関連遺構の拡がりの中で理解出来る。

溝 016

第3面で検出した溝008とほぼ同じ位置で重複する状況で検出しており、この溝008に先行する区画溝と考えている。幅約0.7m、深さ約0.35mの断面逆台形を呈し、溝肩は素掘りであるにも係らず形状は比較的整った状態で検出しており、掘削から埋没までの期間があまり長くなかったとも考えられる。溝内には比較的大きく割れた土器片が散らばって埋没しており、人為的に埋め戻された可能性が指摘できる。

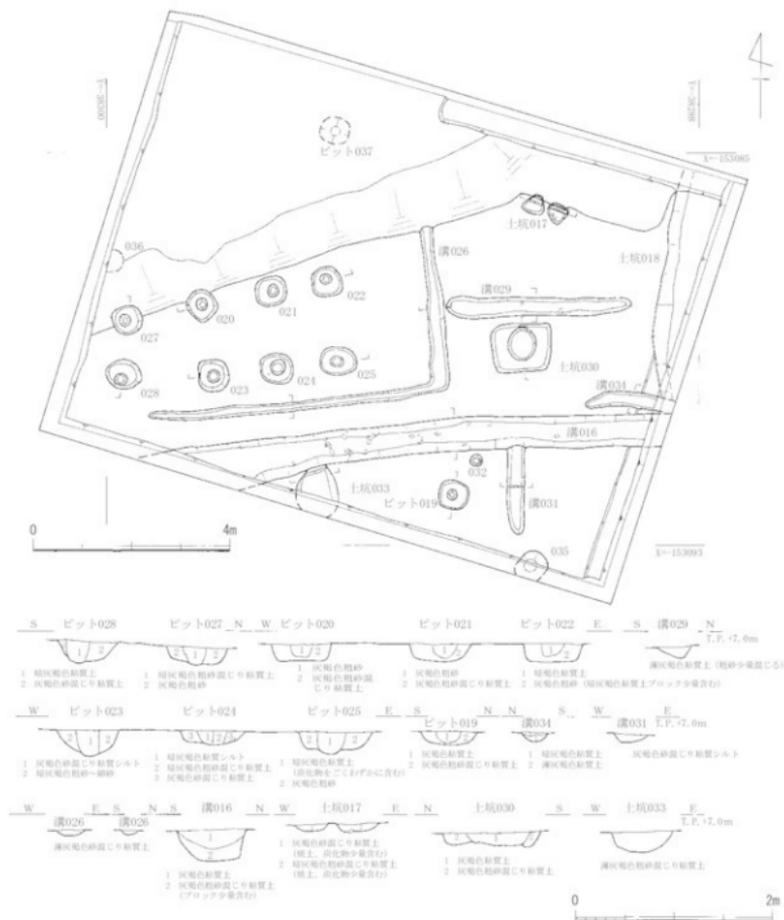
また、溝内下層から出土した土器片は多くのものが、後述する5面で検出した溝039で出土した土器に接合するものであり、埋め戻す時に下層の遺構を攪乱したものと推察している。他に溝南肩近くで検出したピット032から出土した須恵器坏片と接合するものもあり、第4面廃絶時の



1~5・7~9 (溝039)、6 (溝016下層)、13 (第5面)、11 (ビット043)、
12 (ビット048)、10・14・16~18 (第6面を覆う流水堆積層)、15 (第4面直下)

*1~9・11~13は第5面、6は第4面

第40図 2区 第5~4面 出土土器・埴輪・瓦・石器 (1/4)



第41図 2区 第4面 遺構平面図(1/100)、断面図(1/50)

状況を推察することができるかもしれない。

建物 1 (020～025)、溝 026

一辺 0.5～0.6m、深さ 15cm 程の比較的整然と配置された隅丸方形の掘り方の柱跡 6ヶ所を検出している。遺存していたのは 2間×1間分であるが、北側が削平されている状況や後述する溝 026の形状等を考慮して、2間四方程度の建物と考えている。東西方向の柱間 1間が 1.7～1.8m、南北方向の柱間 1間が 1.5～1.7m でありほぼ正方形に近い建物ではあるが、南北方向の柱間が狭いことから東西棟の総柱の掘立柱建物と推定している。検出した柱跡の掘り方からは初

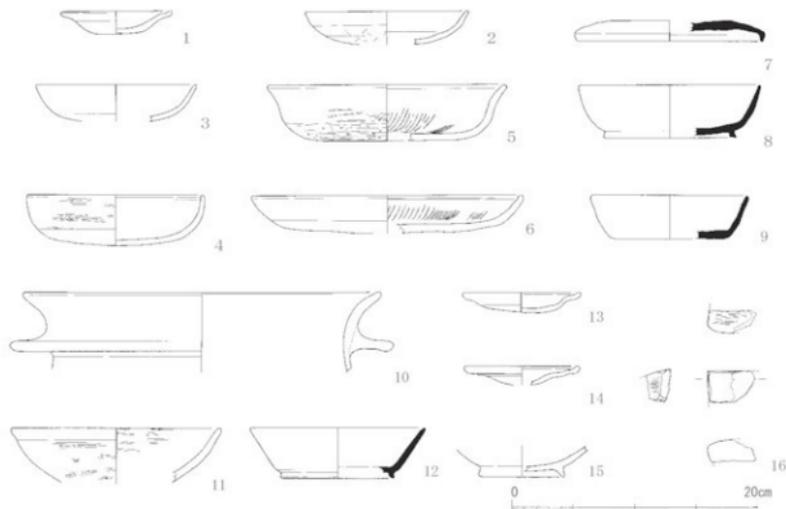
期の瓦器境片を含む土師器や須恵器の小片が出土している。この建物の南辺と東辺に沿うように柱並びから南辺で0.3m、東辺で1.5m程の間隔で、逆L字状に幅20～40cm、深さ15cm、延長9mの浅い溝が掘られていて、雨落ち溝の機能を推定している。溝からは凝灰岩片（図版56下）や砥石片や土器片が出土している。

建物2 (027・028・036)

建物1の西側で一边0.5～0.6m、深さ15cm程の比較的整然とした隅丸方形の掘り方の柱跡2ヶ所と、掘り肩の痕跡1ヶ所の3基の柱跡を検出している。比較的明瞭に遺存していた2基の柱跡だけで建物を復元すると、建物1との配置状況に規則性が低くなる。遺存状態は良くないが柱跡036も同一建物の柱とすると、大きさは2間×不明ではあるが、南北方向の建物の一边が復元でき、建物1の棟行とほぼ直角の配置となり、比較的規則的な配置となる。柱跡の掘り方からは土師器や須恵器の小片が出土しているだけである。

土坑017

調査区北東部、建物1東側で検出した径1m程の楕円形で、深さ10cm程の浅い皿状を呈する掘りこみである。北側半分が後世の耕作地造成に伴う削平でかなり失われているものの、比較的遺存状況は良好である。南北に比べて東西がやや幅があり、中央やや南寄りに一边40cm程の隅丸三角形と似た大きさの不定形土坑が東西に並んで検出された（図版10e）。西側の隅丸三角形を呈する土坑は、深さ約4cm、東側の不定形土坑は深さ約8cmで大きさ以外は平面形・深さ共に異



1・2・4～6・8・10（溝016）、3（溝016・溝039）、7（溝016・ピット024）、9（溝016・ピット032）、11・12（ピット020）、13～15（土坑017）、16（溝026）

第42図 2区 4面 出土土器・砥石（1/4）

なっていた。どちらの土坑も焼土や炭化物を含む砂混じり粘土で埋まっていた。西側の土坑は移動式竈の設置跡、東側の土坑は灰や燃えかす等を入れる灰土坑の用途を考えており、屋外炊事施設の跡ではないかと考えている。

遺物は土師器小皿の完形品や比較的大きな破片、初期の瓦器破片が出土した他は土師器や須恵器の小片がほとんどである。

溝 029・031・034

前述した溝 016、026 等で区画された区域内において、更に区画を細分するかのように掘られた小溝である。溝 029 は幅 30～40cm、全長 3.7m 程で土坑 017 と土坑 030 を分けるように掘られている。溝 034 は土坑 030 と溝 016 の間に掘られた幅 30cm、検出長 2m 程の小溝で更に東に延びている。この 2 条の溝は溝 016 の北側区画内を補助的に細分し、且つ一定の排水機能も果たしていたと考えている。溝 031 は幅 30cm、全長 1.8m 程の極めて短い小溝であるが、隅で後述するピット 032 のようなやや特殊な遺構があり、溝 016 の南側区画内で同様の機能をもつものと考えている。いずれの溝からも遺物は須恵器・土師器の小片が出土しただけである。

土坑 030

建物 1 東側、溝 029 の南側で検出した一辺約 1m、深さ約 10cm の隅丸方形の掘り肩をもつ浅い土坑である（図版 10f）。土坑内の堆積土から、土坑の中央部に径 65cm 程の浅い皿状の窪みを残して埋め戻され、浅い皿状の窪みは自然に埋まったことが分かる。このことから、この浅い窪みは丸底の大甕のようなものを据えていた跡ではないかと考えている土器片や二次被熱土器片等若干の遺物が出土しているが、遺構の時期を特定できるものではない。

ピット 032

前述の溝 016 と溝 031 が接するところに近接して検出した径 25cm、深さ 20cm 程の遺構である。性格は不明であるが、土器片がピット内を満たす状況であり（図版 10d）、出土した須恵器破片は前述したように溝 016 出土片と接合することを確認している。

土坑 033

前述の溝 016 の肩を一部壊して掘られており、一連の遺構の中では後出のものとして判断できる。土坑内からは若干の土器片や焼土塊片が出土しているが、遺構の時期を特定できるものではない。

土坑 018

調査区北東端で検出した南北方向に細長い溝状の土坑とした遺構で、ブロック状の土塊を含む土で埋め戻されていた。第 4 面を調査する時点では分からなかったが、第 7 面で検出した古墳時代墳墓（久宝寺 44 号墳）の周濠がこの時期まで土坑状に窪んだ状態で遺存していて、それを平坦地造成に伴い埋め立てたと推察している。周濠が遺存していたことから、墳丘も幾らか遺存していたことが考えられるが、この時点で整地レベルに削平されたものと思われる。

<出土遺物>（第 42 図 1～16、図版 54・55・59）

1・2・4～6・8・10 は溝 016 から、7 は溝 016・ピット 024 から、9 は溝 016・ピット 032 から、

11・12はビット020から、16は溝026から出土した。1～6は8世紀後半頃の土師器皿と坏である。5・6は内面に暗紋が施されている。3は第4面と第5面の溝から出土した破片が接合しており、第5面の遺物である。7～9は8世紀後半頃の須恵器坏と坏蓋である。10は長胴の土師器罎甕口縁部である。11は土師器高台付坏、12は須恵器高台付坏で共に9世紀頃のものである。13～15は土坑017から出土した土師器皿と黒色土器B類の底部片である。9世紀末～10世紀初頃のものである。16は長方形の砥石片である。第5面出土の遺物と年代的な差異はほぼ無いものと思われるが、年代的に新しい遺物が含まれている。

11) 第3面（平安時代）

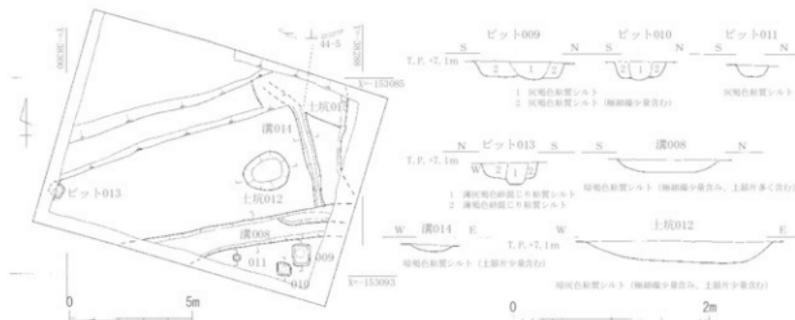
第2面で検出した大畝の盛土を除去して現れる灰色を呈する砂混じりシルト層を基盤とする遺構面で、T.P.7.05～7.10m付近で検出した（第43図、図版10g・h・11a～d）。第1・2面は耕作地遺構であったが、ここでは、北東～南西方向の直線的に掘られた溝を検出しており、他に掘立柱跡や土坑等、集落或いはもう少し特殊な施設を想定させる遺構群である。調査区北西部が上層遺構の大畝造成に伴う掘削により攪乱されていた他は、ほぼ当時の遺構面が比較的良好に遺存していた。本体部の「第2面」に比定できる。

溝008

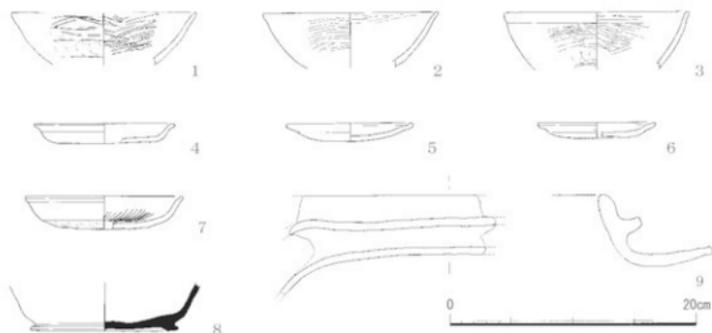
上幅約1～1.2m、深さ0.2mで断面が皿状を呈する素掘りの溝である。砂礫や土器を含む暗褐色粘質シルトで埋まっており、人為的に埋め戻された可能性が指摘出来る。溝はこの埋土のみで埋まっており、あまり水が流れた痕跡が認められず、地区を区画する要素が高いと考える。この溝と後述する溝014が直角に繋がる付近の溝008の肩部分に、幅0.4m長さ1mの範囲で焼土片(塊)が纏まって埋没していた。遺物は土器の小片が多く時期を判断できるものは僅かに瓦器片や土師器小皿片が出土している。

土坑012

前述した2条の溝が直角に繋がる付近で検出した、長径1.9m、短径1.5m程の卵形の平面形を



第43図 2区 第3面 遺構平面図(1/200)、断面図(1/50)



1～4 (溝008)、5 (溝014)、6～9 (包含層)

第44図 2区 第3面 出土土器・移動式カマド (1/4)

した浅い皿状の断面を持つ土坑である。砂混じりの暗灰色粘質シルトで埋まっており、人為的に埋めたと考えられる。遺物は土器小片が出土しただけである。

溝 014

調査区北東部で、溝 008 と直角に繋がる幅 0.3 ～ 0.5m、深さ 0.15m 程のものである。溝 008 から 4m 程で西に角度を変え、円弧を描くように延び、更に土坑 015 内に 1m 程検出している。この溝の底部は南側の溝 008 や北側の土坑 015 のどちらにも下り勾配がみられた。溝からは灯明用に使用された完形の土師器小皿や須恵器壺の比較的大きな破片が出土している。

土坑 015

調査区北東部で長径 3.5m 以上になる大型土坑の一部を検出している。溝 014 の北端はこの土坑に下り勾配の状況で繋がっている。出土した遺物は磨耗した土器小片が大部分で、この遺構に直接関係する遺物は出土していない。この土坑は、前述の溝 014 と一連の遺構でと考えている。

掘立柱跡 009 ～ 011・013

調査区南部で比較的明確な柱跡を検出しているが、部分的に検出しただけで、現状では建物跡として復元できない。遺物は各柱跡から土器小片が出土しているだけである。

<出土遺物> (第44図 1～4、図版 56)

1～4 は溝 008 から出土した瓦器碗と土師器皿である。5 は土師質小皿で口縁部に黒斑が残る部分があり灯明用として使用されたものである。6～9 は第3面上層の遺物包含層から出土している。6 は土師質小皿である。1～6 は 12 世紀の年代を考えている。7 は内面に放射状の暗紋が施された土師器杯。8 は内面及び口縁破断面に黒斑が残り、灯明用として使用された須恵器高台付杯。9 は土師質移動式カマドの焚口底付近の破片である。これら 3 点は共に 8 世紀後半頃のものである。

12) 第2面 (中世後半～近世前半)

第1面で検出した島島の造成時の盛土と考えられる土層を掘り下げて、T.P.6.90～7.20m付近で検出した耕作地遺構である(第45図、図版11e・f)。第1面で検出した畝と直交する南西-北東方向の高まりを検出した。この高まりの北西側は溝状を呈し、前進遺構としての落込も検出している。

以前の調査での島島検出状況と大畝や溝状部分の方向・規模等が類似しており、その一部を検出したと考えている。本体部の「第1-2面」に比定できる。

大畝 007

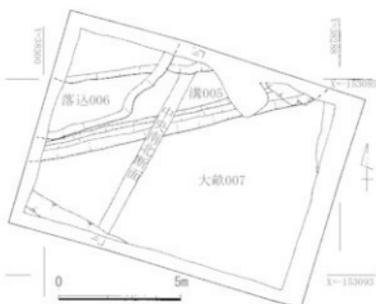
上幅約8m以上の南西-北東方向の高まり遺構で、上面には耕作痕と考えられる縞状の堆積が見られる。水処理施設本体の調査で検出している島島遺構と合致するため、大畝の一部を検出したと考えている。畝の造成時期を明確に示すものはなく、この大畝の盛土内に奈良・平安時代の遺物に混じて16～18世紀頃の遺物が出土している。

溝 005、落込 006

島島を構成する大畝と大畝の間の溝状部分の一部と考えている。前述したように高まり部を大畝と考えており、この遺構面においても数回の盛り直しを確認している。また、大畝造成時は溝状ではなく深さ約0.6mの池状の落込006であった。それが盛り直しの過程で埋め戻されて深さ約0.2mの溝状に再掘削されている。以前の調査結果を参考にすると、この溝の幅は約10～12mと推定している。

<出土遺物>

瓦や被熱した土器を含む土器小片が出土しているが、図化できるようなものはなかった。溝005から加工面の残る凝灰岩片が出土している。瓦片や被熱土器片等と共に奈良時代末から中世



第45図 2区 第2面 遺構平面図(1/200)



第46図 2区 第1面 遺構平面図(1/200)



- 1 褐色粘質土(砂、礫層砂混じり)
- 2 暗褐色粘質土(砂、礫層砂混じり)
- 3 暗黄褐色粘質土(砂、礫層砂混じり)

- 4 薄褐色砂・礫層砂混じり粘質シルト(土器片少量含む)
- 5 暗褐色砂混じり粘質シルト(土器片や多く含む)

第47図 2区 第2面 中央 南北断面(1/60)

初頃の遺物である。

13) 第1面（近世中～近代）

竜華操車場造成時の盛土を除去し、造成以前の旧耕作土及び床土を掘り下げて、T.P. 7.20～7.50m付近で検出した耕作地遺構である（第46図、図版11g・h）。調査区の中央を北西～南東方向に延びる大畝状の高まりを検出した。その南北両側が溝状となっており所謂「島（竊）畝」と呼ばれる耕作地状になっている。本体部の「第0面、第1-1面」としているものと検出状況が似る。

大畝 001

上幅約5mで北西～南東方向の畝状高まりを盛土により造成している。もとは比較的平坦な面を畝とする部分を残して深さ0.5m程掘り下げ、その出た土を盛り上げている。そのため、下層の遺物包含層や遺構の遺物を多く含んだままの盛土である。現状では大畝と考えているが、周辺で検出している島畝と方向が異なることや、大畝上面に遺存していた小溝の方向がこの畝の方向と異なるなど、別のものの可能性もある。

溝 002、杭列 003

溝 002は大畝 001の南西側に並行する溝である。幅等の規模は調査が部分的なため不明であるが、畝の肩から約2mのところ幅約0.6m、深さ0.3mの溝を段掘りし、畝側に間隔1.1mで角杭を一列に打設して土留めを行っている。この杭列 003は、打設されている杭の先端が鋸を用いて尖らせたものであり、旧国鉄時代の比較的新しい時代のもと考えられる。

土坑 004

大畝の北東側の溝状部分である。土坑としたのは、平面形は溝状であるが、底の形状が東側では浅く、西側では深く水が溜まった状態での堆積土であったため、貯水施設としての機能を推定したからである。

<出土遺物>

第2面同様に奈良時代末から中世初頃の遺物を含む土器小片が出土しているが、図化出来るようなものはなかった。

第3項 小結

2区は、水処理施設本体部の南西部の調査区であることから、本体部で検出した各遺構の南西への拡がりを推定する資料である。第13面とした弥生時代前期の遺構群で、さらに南及び西に遺構が拡がる状況である。第12面とした弥生時代後期頃の遺構面は、水田跡を検出した。この2遺構面の検出状況から弥生時代中期頃の2区は、水深の浅い水域であったと考えられる。第11面とした弥生時代後期頃の遺構面は、水深の浅い水域の南向きの汀線のような状況を検出している。第10面とした古墳時代前期の遺構面は、第11面からすると汀線がさらに南に後退し、比較的安定した地勢となり、墓域か或いは何等かの祭祀的行為がなされた場所と考えられる。マウン

ト059と周溝058は、検出時は周溝墓と考えていたが、埋葬主体が無く、周溝部分で埋葬跡を検出したが、遺構の性格は不明である。また、調査区西側でエノキ（属）の立木があり、その周辺で土器が集中して出土した状況は、何等かの祭祀跡ではないかと考えている。他の周溝遺構も墓とは考えにくい遺構である。第9面とした古墳時代前期の遺構面は、第10面が一度水没して堆積した粘土層を利用して水田を開拓したようであるが、短期間で水没し放棄されたようである。第8面とした古墳時代前期の遺構面は、第10面のマウンド059に重複した場所で多角形堅穴遺構を検出しており、居住域を調査したと考えている。第7面とした古墳時代前期～中期の遺構面は、本体部で検出した久宝寺44号墳の後方部を確認したと考えている。第6面とした古墳時代後期の遺構面は、第7面の墳墓群造営が終了し水田化されたことが分かる。第5面とした奈良時代後半の遺構面では、東西方向の区画溝と思われる溝039を検出している。他に小溝やピットを検出しているが建物跡等は確認できない。第4面とした奈良時代末～平安時代中頃の遺構面では、第5面の溝039の掘直しと考える東西方向の区画溝、溝016を検出している。この溝016の北側で雨落ち溝を持つ建物や、甕を据えた跡ではないかと思われる土坑030、灰が堆積していた土坑017等良好な遺構を検出している。第3面とした平安時代の遺構面も、第5面の溝039、第4面の溝016を踏襲した東西方向の区画溝、溝008を検出している。ただ、調査区北側が中世以降耕作地開拓に伴い大きく掘削されており、明確な遺構が遺存していない。第2面とした中世後半～近世前半の遺構面では大畝をつくる耕作地が開発されている。第1面とした近世中頃～近代の遺構面では、第2面と方向が異なる規格の大畝をつくる耕作地が開発されている。

第5節 3区の調査

発掘調査部分を3-A～E区と呼称している（第2図）。3-A区はT.P.6.16m、3-B区はT.P.6.013m、3-C区はT.P.6.013m、3-D区はT.P.6.013m、3-E区はT.P.5.122m（工事深度）まで調査を実施している。以下、地点ごとに記述する。調査番号は10002。

(1) 3-A区

第1項 層序

第0層から第8層までの層序を確認している（第48図、図版12a）。古墳時代中期から中世までの遺構面は近世以降の耕作や整地によって削平されていた。

第0層 浄水場造成時の盛土および表土で、上面の標高はT.P.8.3mで、本体部の「第0層」に対応する。

第1層 操車場造成時の盛土で、本体部の「第0層」に対応する。

第2層 操車場造成前の近代耕作土で、上面の標高はT.P.7.1～7.13m、層厚6～15cmをはかる。

第3層及び第4層 近世の包含層で、上面の標高はT.P.6.97～7.04mをはかる。本体部の「第1層」

に対応する。第3層中より陶磁器2、瓦質土器1、瓦器椀10、土師質土器30、須恵器2片、第4層中より陶磁器1、瓦質土器1、瓦器椀7、土師質土器17、土師器8、須恵器1片が出土している。

第5層 古墳時代中期から後期の包含層で、上面の標高はT.P. 6.62～6.72mで、層厚12～28cmをはかる。本体部の「第4-1層～第4-1b層」、2区の「第7層」、8区の「第5層～第6b層」に対応する。層中より土師器30、須恵器1、弥生土器1片が出土している。

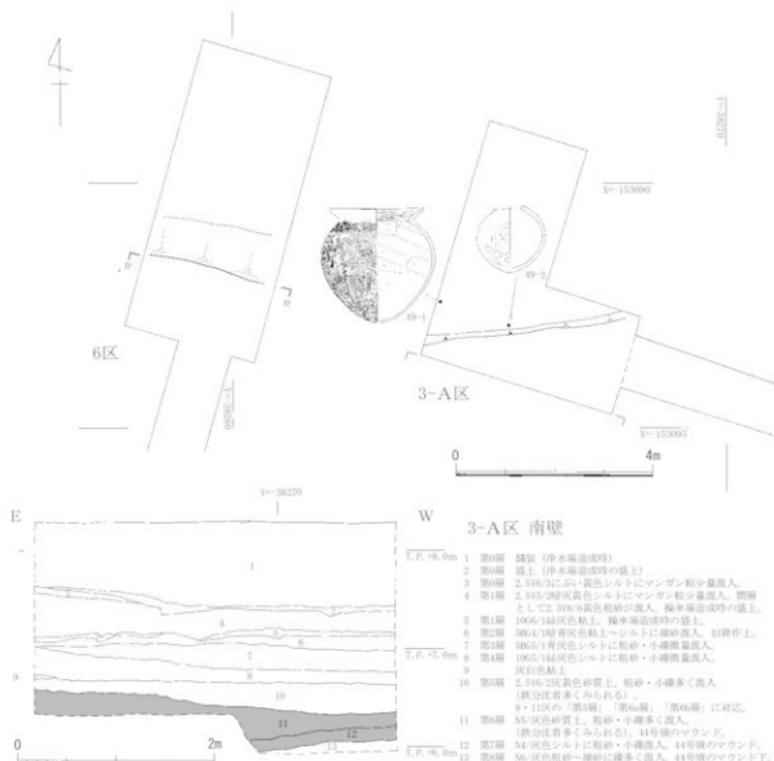
第6層～第7層 本体部の「44号墳のマウンド」に相当する。第7層中より土師器壺・甕、砥石など39片が出土している。上面の標高はT.P. 6.35～6.57mをはかる。

第8層 「44号墳マウンドの基底層」に対応する。上面の標高はT.P. 5.95～6.07mをはかる。

第2項 調査成果

墳墓（前方後方墳44号墳）

調査区と本体部の「44号墳」の位置関係（第56図）から、「44号墳の墳丘」の存在が想定さ

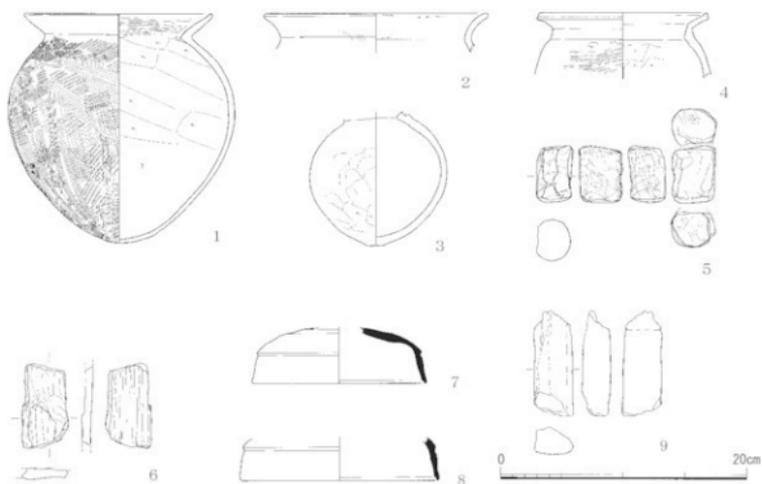


第48図 3-A区、6区 平面図（1/100）、3-A区 南壁断面図（1/50）

れていたが、3-A区の北半部は本体部の調査終了後の工事によってT.P. 6.0mまで掘削され、調査では明確な形状を把握することは困難で、南側壁面でかろうじて墳丘の存在を確認することができた。墳頂部の標高はT.P. 6.57mで、残存する盛土の高さは57cmをはかる。遺物は墳丘の下位(第7層)から土師器直口壺・甕、砥石などが出土している(第48図、図版12b・c)。

<出土遺物>(第49図1~6、図版61)

1は庄内形甕で口径15.1cm、器高18.8cm、体部最大径18.4cmをはかる。肩が張り上半に最大径をもつ無花果形の体部に、屈曲して外傾する口縁部をもつ。口縁端部は拡張せず、丸くおさめ、底部は尖底をなす。口縁部内面はヨコハケ、体部内面はヘラケズリ、外面は右上がりのタタキメ成形後、全体的にハケメ調整を施している。2・4は土師器甕で、2は口径18cmをはかる。4は口径13.5cmをはかり、口縁端部は肥厚して、端面は凹線状に窪む。体部外面はタタキメ、内面はヘラケズリ調整を施している。3は直口壺で、口頸部を欠く。球形の体部に、小さな平底を有し、体部最大径は11.2cmをはかる。体部上半はナゲ、下半はヘラケズリ調整を施している。5は砥石、6は結晶片岩である。



1~6 (3-A区 第7層)、7 (3-B区 第5層)、8 (3-B区 溝006)、9 (3-C区 排土)

第49図 3区 包含層、溝、排土 出土土器・砥石・石棒 (1/4)

(2) 3-B区

第1項 層序

第0層から第6層までの層序を確認している(第50図、図版13a・b)。

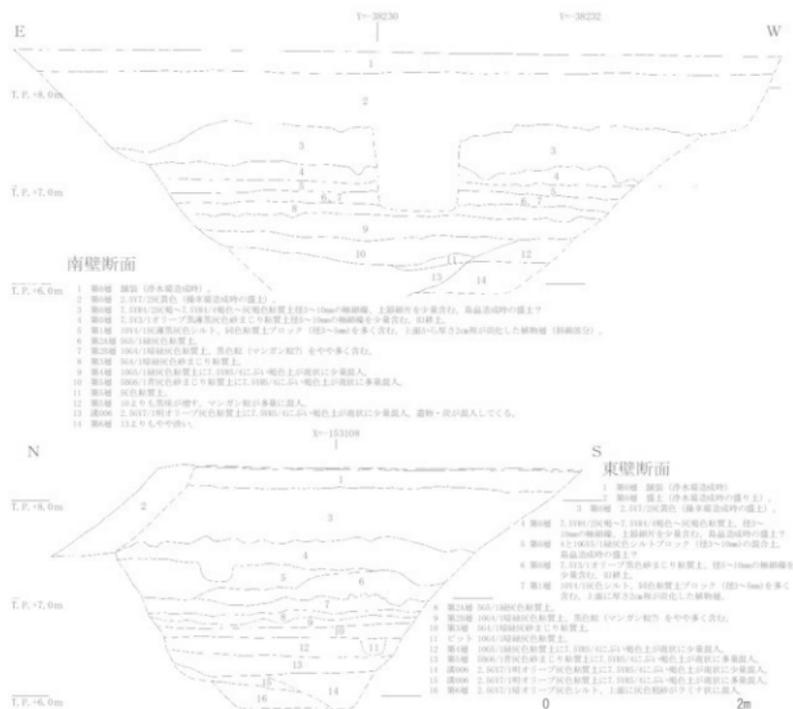
第0層 浄水場造成時の盛土、操車場建設時の盛土および近代の耕作土で、上面の標高はT.P. 8.31mをはかる。本体部の「第0層」に対応する。

第1層～第5層 本体部の「第1層」に対応する。上面の標高はT.P. 6.93～7.04m、層厚10～16cmをはかる。第1層より染付1、陶磁器1、瓦質土器1、瓦器碗1、土師質土器14片、第2層より磁器1、瓦器碗3、土師質土器10、瓦1、須恵器1片、第3層より染付2、陶磁器1、磁器6、瓦質土器1、瓦器碗3、土師質土器19、須恵器1片、第4層より陶磁器1、瓦質土器3、瓦器碗10、土師質土器18、瓦2、須恵器4片、第5層より丹波焼播鉢1、瓦器碗1、土師質土器3、青磁1、土師器7片、須恵器灯蓋（第49図7、図版61-6）が出土している。須恵器灯蓋（7）は復元口径14cmをはかり、口縁端部は内側へ傾斜し、浅く窪む。形態的特徴から、II型式1段階（MT15）で、6世紀前半に比定される。

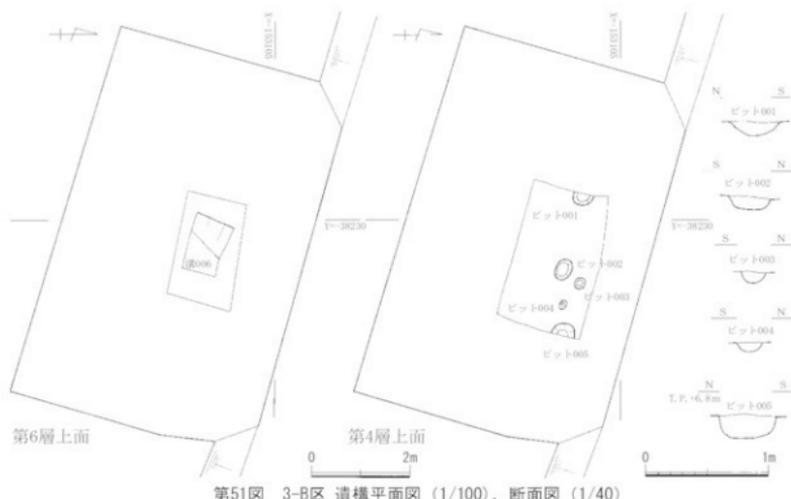
第6層 本体部の「第4-1層」、7-D区の「第4層」、8区の「第5層」に対応し、上面の標高はT.P. 6.2～6.23mをはかる。上面で溝006を検出している（第51図）。

第2項 調査成果

第6層上面（古墳時代後期）で溝006、第4層上面（近世）でピット001～005を検出している（第



第50図 3-B区 南壁、東壁断面図(1/50)



第51図 3-B区 遺構平面図 (1/100)、断面図 (1/40)

51図)。溝006は本体部の「第4-1面の04043溝」、11-A区の「流路253」と同一の溝で、幅1.1m以上、深さ40cm以上をはかる。層中から6世紀の須恵器坏蓋(第49図8、図版61-5)、土師器甕が出土している。須恵器坏蓋はII型式1段階(MT15)で、復元口径18cm、器高3.5cmをはかる。ピット001は径0.44m、深さ15cm、ピット002は径0.36×0.44m、深さ15cm、ピット003は径0.20m、深さ10cm、ピット004は径0.13×0.20m、深さ7cm、ピット005は径0.40m、深さ8cmをはかる。埋土は10G/4暗緑灰色粘質土で、ピット001・004・005から土師質土器の小片が出土している。

(3) 3-C区

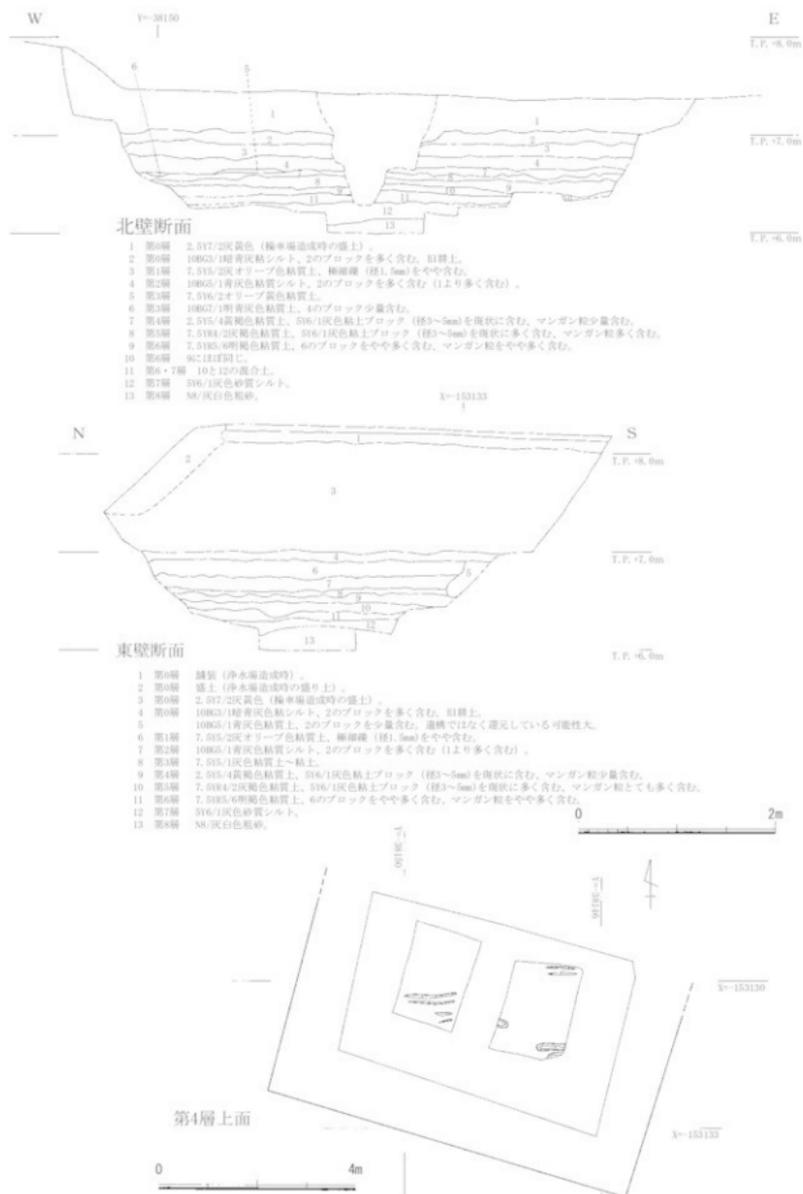
第1項 層序と概要

第1層から第8層の層序を確認している(第52図、図版13d)。

第0層 操車場建設時の盛土および近代の耕作土で、本体部の「第0層」に対応し、上面の標高はT.P.8.3mをはかる。

第1層～第3層 本体部の「第1層」に対応する。上面の標高はT.P.6.88～7.06m、層厚10～14cmをはかる。第1層から染付1、土師質土器10、東播系練鉢1、須恵器2片、第2層から陶磁器1、磁器3、瓦質土器3、瓦器椀5、土師質土器23、瀬戸美濃焼1、瓦5、須恵器4片、第3層から陶磁器1、瓦器椀3、土師質土器23、備前焼1、瓦2、須恵器1片が出土している。

第4層(黄褐色粘質土) 上面の標高はT.P.6.54～6.58m、層厚6～12cmをはかる。本体部の「第4-1層」に対応し、上面で小溝6条を検出している(第52図下)。層中から染付1、瓦器椀5、土師質土器8、備前焼1、瓦1片が出土していることから、時期は近世以降と考えられる。



第5層～第6層 上面の標高はT.P. 6.55～6.65mをはかる。本体部の「第4-1b層」、8区の「第6b層」に対応する。層中から須恵器1片が出土している。

第7層～第8層 上面の標高はT.P. 6.32～6.5mをはかる。本体部の「第5-1(2)面～第5-2b(2)面」での05006溝、1区の「溝054」に対応すると考えられる。

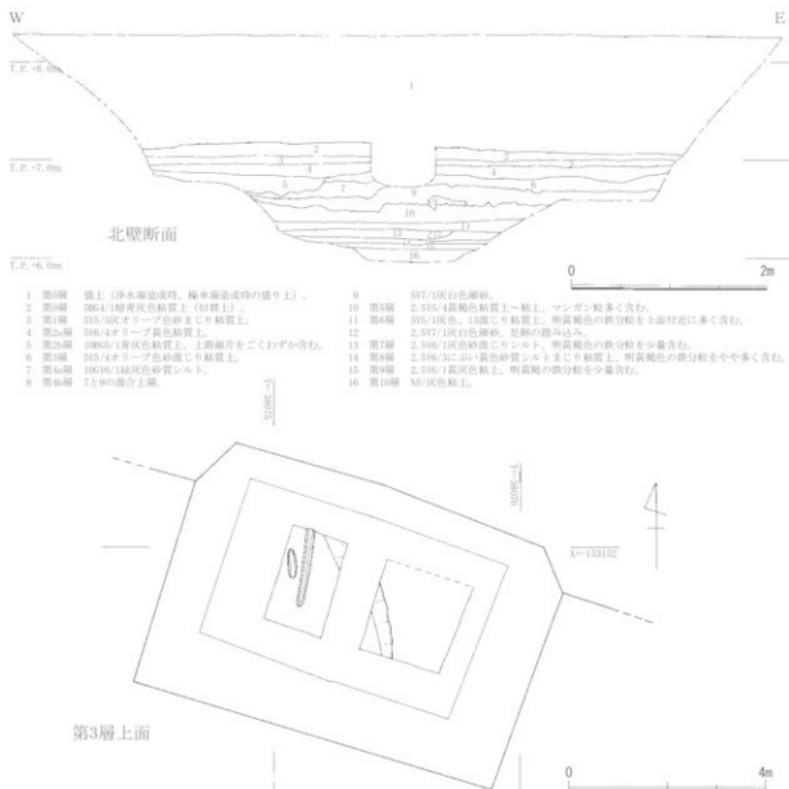
なお、層不明であるが、排土から石棒(第49図9)が出土している。

(3) 3-D区

第1項 層序

第1層から第10層の層序を確認している(第53図上、図版13e・f)。

第0層 操車場建設時の盛土および近代の耕作土で、本体部の「第0層」に対応し、上面の標高はT.P. 8.28m。



第1層～第4層 本体部の「第1層」に対応し、第3層上面で小溝、第4a層上面で落込を検出している。上面の標高はT.P. 7.0～7.05m、層厚5～9cmをはかる。第1層から磁器3、瓦質土器2、瓦器椀3、土師質土器12片、第2層から瓦質土器3、瓦器椀6、土師質土器13、青磁1、瓦1、須恵器1片、第2b層から染付2、陶磁器2、瓦質土器1、瓦器椀2、土師質土器21、唐津焼1片、第3層から土師質土器8片、第4層から瓦器椀1、土師質土器3片が出土している。

第5層(黄褐色粘質土) 上面の標高はT.P. 6.61～6.76m、層厚10～20cmをはかる。本体部の「第4-1層」、8区の「第5層」に対応し、6世紀前半以前に比定される。

第6層(灰色砂混じり粘質土) 上面の標高はT.P. 6.37～6.4m、層厚7～12cmをはかる。

第7層(灰色砂混じりシルト) 上面の標高はT.P. 6.28～6.3mをはかる。上面で足跡を確認している。

第8層(にぶい黄色砂質シルト) 上面の標高はT.P. 6.2mをはかる。

第9層(黄灰色粘土で、鉄分粒を少量含む) 上面の標高はT.P. 6.16mをはかる。

第10層(灰色粘土) 上面の標高はT.P. 6.1mをはかる。

第2項 調査成果

第7層上面で足跡、第4a層上面で落込、第3層上面で小溝2条(第53図下)を検出している。落込は深さ13cm、小溝は幅15cm、深さ2cmをはかる。いずれも遺物が出土していないものの、包含層出土の遺物及び層の前後関係から、足跡(第7層上面)は6世紀前半以前、小溝、落込は近世以降と考えられる。

(4) 3-E区

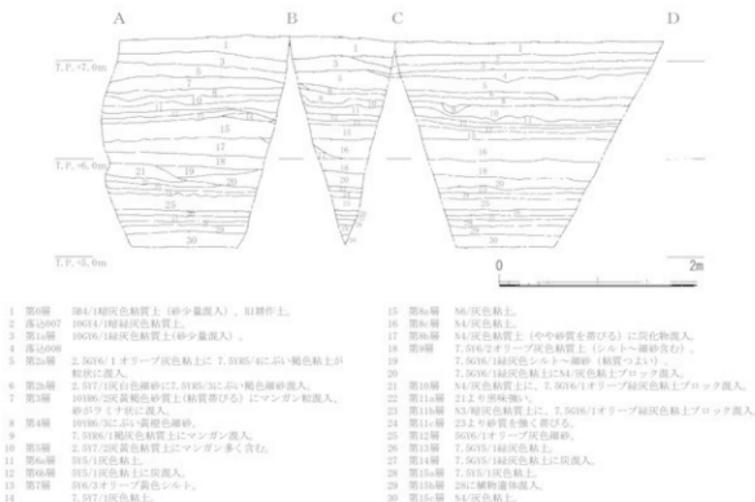
第1項 層序

第1層から第15層の層序を確認している(第54図、図版13g)。隣接する1区(第4図)との対応関係を示すと第1a層上面は1区の「第1面」、第2a層上面は「第2面又は第3面」、第3層上面は「第4面」および本体部の「第4-1層」、第4層上面は「第5面」、第5層上面は「第6面a」、第7層上面は「第6面b」、第13層上面は「第7面」となる。

出土遺物は第1層から陶磁器2、瓦質土器5、瓦器椀8、土師質土器28、須恵器1片、第2層から土師質土器3片、第3層から土師器13片、第8層から庄内～布留式の土師器7片、第9層から土師器10片、桃核、第11b層から土師器甕口縁部1片が出土している。

第2項 調査成果

第11層上面(T.P. 5.86m)で落込015、第9層上面(T.P. 6.07m)で落込014、第8層上面(T.P. 6.18m)で落込013、第7層上面(T.P. 6.32m)で落込012、第5層上面(T.P. 6.51m)で畦畔011、第3層上面(T.P. 6.81m)で畦畔010、第2a層上面(T.P. 6.94m)で落込008、小溝019、第1層上面



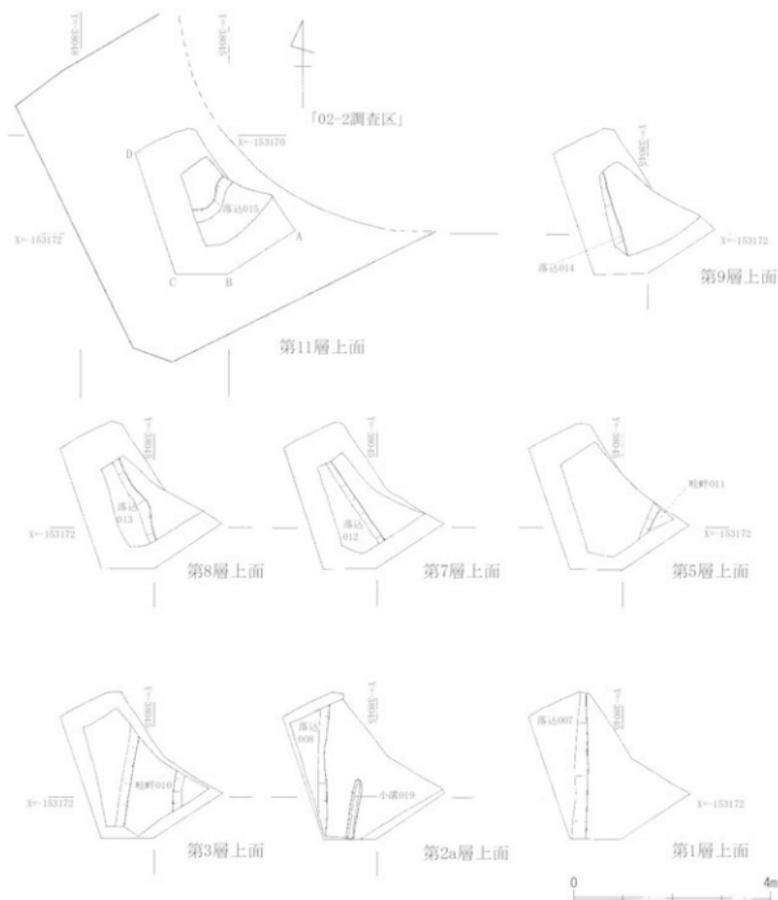
第54図 3-E区 土層断面図(1/50)

(T.P. 7.04m) で落込 007 を検出している(第55図、図版14)。

各々のベースとなる包含層出土遺物から、畦畔 011、落込 012～015 は古墳時代前期、畦畔 010 は古墳時代後期、落込 008、小溝 019 は中世～近世、落込 007 は近世と考えられる。

第3項 小結

3区は、調査地点がかなり離れ、かつ調査面積も極小(下位では1m²)で、調査区間で各時代の遺構面を面的に把握することは困難を極めた。ただし、3-E区は1区、3-A～D区は本体部と比較することで一部ではあるが、遺構面の対応関係を明らかにすることができた。調査の結果、3-A区で中世の包含層、落込、古墳時代前期の古墳(44号墳)の墳丘の一部を検出している。墳丘内から、時期が遡る古墳時代初頭の土器が出土している。3-B区では中近世の遺構面、古墳時代後期の溝一条を検出した。3-C・D区は古墳時代～近世の水田跡、そして東端の3-E区では弥生時代～中近世の水田跡を検出した。いずれも調査面積が小さいため規模等については明らかにすることができなかった。



第55図 3-E区 遺構平面図 (1/100)

第6節 6区の調査

調査区は3-A区の西側に位置している。管渠築造工事に先立つ調査で、立会部分（幅1m、延長164m）、発掘調査部分（幅2.7m×長さ6.0m）に分けられ、発掘調査部分（6区東側の北端）は8区の調査終了後に調査を実施した。

調査区と本体部の「44号墳」との位置関係から（第56図）、調査区全体が本体部の「44号墳」の南西の周溝内に相当する。3-A区北半部同様に本体部の調査終了後の工事によってT.P. 5.62m

まで掘削され、面的に調査をすることができなかった。かろうじて南側壁面で「44号墳」の周溝の存在を確認した(第57図・12・13、図版15a)。調査はT.P. 5.62mまで実施している。調査番号は10017。

第1項 層序と概要

操車場建設時の盛土および近代の耕作土除去後、第1層から第12層の層序を確認している(第57図、図版15a)。以下、7-D区の層序(第60図)を中心に、各調査区と対比して記述する。

第0層 操車場建設時の盛土および近代の耕作土で、本体部の「第0層」に対応し、上面の標高はT.P. 8.28m、層厚約110cmをはかる。

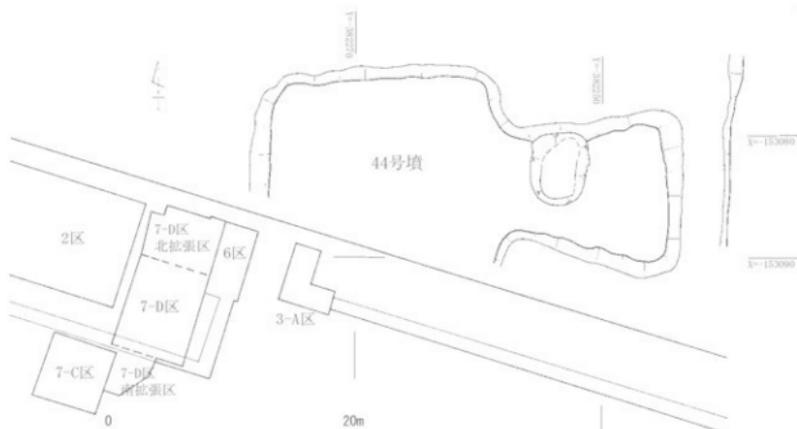
第1層 7-D区の「第1層」、本体部の「第1層」に対応する。上面の標高はT.P. 7.15～7.18m、層厚34～46cmをはかる。

第2層 上面の標高はT.P. 6.75～6.81m、層厚17～42cmをはかる。7-D区の「第3層中位～下位」、8区の「第4層b～d」、01-4調査区の「18・19(3b層)」、本体部の「第3-3b層」に対応する。

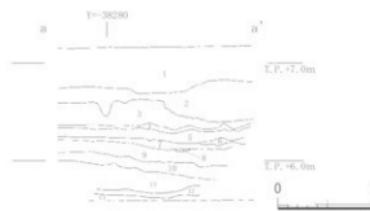
第3層 (にぶい黄色粘質土で、2～3mm前後のマンガン斑を多く含む) 上面の標高はT.P. 6.4～6.6m、層厚10～22cmをはかる。7-D区の「第4層」および8区・10区・11-A区の「第5層」、01-4調査区の「20(4-1層)」、本体部の「第4-1層」に対応する。古墳時代後期に相当する。

第4層 (灰オリーブ色シルトで、5～10mm前後の鉄分斑を多く含む) 上面の標高はT.P. 6.32～6.39m、層厚2～5cmをはかる。7-D区の「第5層」および8区・10区・11-A区の「第6a層」、01-4調査区の「21層」に対応する。

第5層 (暗灰黄色粗砂層) 上面の標高はT.P. 6.28～6.33m、層厚9～14cmをはかる。7-D区の



第56図 44号墳(本体部)と調査区(2区、3-A区、6区、7区) (1/400)



第57図 6区 南壁断面図(1/50)

- 1 第1層 7-D区の第1層に相当。
- 2 第2層 7-D区の第3層下部に相当。
- 3 第3層 2.016/2cにふい黄色粘質土位～3cm前後のマンガン塊を多く含む。
- 4 第4層 34.4/1灰色粘土(ややシルト質で鉄分塊を含む)。
- 5 第5層 30.6/2灰色オリブシルト (2cm前後の鉄分塊を多く含む)。
- 6 第6層 2.015/2暗緑灰色粗砂層。
- 7 第7層 第8層+7.016/2オリブ色細砂のブロック。
- 8 8 2.016/2cにふい黄色細砂。
- 9 第9層 10.015/1緑灰色粘質シルト。
- 10 第10層 7.003/4暗緑灰色粘土 (2cm前後の炭化物と10Y5/1灰色細砂を含む)。
- 11 第11層 50.6/1灰色砂層 (7.015/1灰色シルトのウレチ)。
- 12 第12層 10.013/2暗緑色微砂 (2cm前後の礫や有機物を多量に含む)。
- 13 第13層 7.003/4/1暗緑灰色微砂混じりシルト (1cm前後のレキを多く含む)。

「第6層」および8区・10区・11-A区の「第6b層」、本体部の「第4-1b層」に対応する。

第6層 (暗灰黄色粗砂層) 上面の標高はT. P. 6.18～6.24m、層厚5～9cmをはかる。2区の「第8層、7-D区の「第60図38」、8区・10区・11-A区の「第7層」に対応する。古墳時代前期に相当する。

第7層 (灰オリブ色極細砂のブロック) 上面の標高はT. P. 6.18～6.25m、層厚3～9cmをはかる。7-D区の「第6層」に対応し、本体部の調査では「44号墳」の墳丘を覆う。

第8層 (緑灰色粘質シルト) 上面の標高はT. P. 6.12～6.22m、層厚12～15cmをはかる。7-D区の「第7層」に対応する。

第9層 (暗緑灰色粘土で、3mm前後の炭化物と10Y5/1灰色細砂を含む) 上面の標高はT. P. 5.95～6.1m、層厚8～14cmをはかる。7-D区の「第8層」に対応する。

第10層 (灰色シルトのラミナ) 上面の標高はT. P. 5.8～6.0m、層厚28cmをはかる。

第11層 (黒褐色微砂で、2mm前後の礫や有機物を多量に含む) 上面の標高はT. P. 5.67～5.74m、層厚5～10cmをはかる。

第12層 (暗緑灰色微砂混じりシルトで、1mm前後のレキを多く含む) 上面の標高はT. P. 5.62～5.65mをはかる。

以上、第7層～第10層は本体部の「44号墳の周溝」の窪みの堆積土、第11層～第12層は「44号墳の周溝」の埋土にそれぞれ対応すると考えられる。具体的には第9層、第10層は本体部の「報告書411頁(第437図4・5)」に比定される(財団法人大阪府文化財センター2007)。いずれの層からも遺物が出土していないが、隣接する調査区の調査成果から、第1層は中世～近世、第2層は古墳時代後期～奈良時代、第3層は古墳時代後期、第4層は古墳時代中期～後期、第5層は古墳時代前期～中期、第6層～第10層は古墳時代前期と考えられる。

第7節 7区の調査

調査は立会部分(電気管)を7区1～7、発掘調査部分(ハンドホール)を7-A～D区と呼称している。7-A区はT. P. 5.98m、7-B区はT. P. 6.73m、7-C区はT. P. 6.71m、7-D区はT. P. 6.33mまで調査を実施している。以下、地点ごとに記述する。調査番号は10003。

(1) 7-A 区

第1項 層序

操車場廃絶後の整地土(第0層)除去後、第1層から第5層の層序を確認している(第58図上、図版15e)。上面の標高はT.P. 8.28m。

第1a層(にぶい褐色粘質土) 操車場建設時の盛土で、上面の標高はT.P. 7.43～7.61m、層厚5～47cmをはかる。層中より土師質土器4片が出土している。

第1b層(灰色粘土) 近代の耕作土で、上面の標高はT.P. 7.12～7.51m、層厚4～15cmをはかる。層中より土師質土器4片が出土している。

第1c層(にぶい黄褐色粘質土) 近世の整地土(島島)で、上面の標高はT.P. 7.06～7.48m、層厚40～70cmをはかる。層中より瓦器椀4、土師質土器32、黒色土器A類1、須恵器1片が出土している。

第1d層(にぶい黄褐色粘質土) 上面の標高はT.P. 6.7～6.86m、層厚10～23cmをはかる。層中より須恵器環B(8世紀)が出土している。

第1e層(明黄褐色粗砂) 上面の標高はT.P. 6.57～6.67m、層厚5～15cmをはかる。本体部の「第4-1層」、6区の「第2層」、7-D区の「第3層下位」、8区の「第4層」に対応する。

第2a層(明赤褐色粘質土) 上面の標高はT.P. 6.47～6.55m、層厚15～18cmをはかる。上面で足跡を検出している。6区の「第3層」、7-D区の「第4層」、8区・10区・11-A区の「第5層」に対応する。

第2b層(暗赤褐色粘質土) 上面の標高はT.P. 6.31～6.42m、層厚5～13cmをはかる。2区の「第7層」、6区の「第4層」、7-D区の「第5層」、8区・10区の「第6a層」に対応する。

第3層 a・bに分かれ、第3a層(明褐色シルト) 上面の標高はT.P. 6.25～6.34m、層厚7～11cmをはかる。6区の「第5層」、7-D区の「第6層」、8区の「第6b層」、01-4調査区の「23層」、本体部の「第4-1b層」に対応する。第3b層(にぶい黄褐色粘質土) 上面の標高はT.P. 6.19～6.27m、層厚5～9cmをはかる。古墳時代中期～後期に相当する。

第4層 a～cに分かれ、第4a層(オリーブ灰色シルト) 上面の標高はT.P. 6.13～6.22m、層厚4～11cmをはかる。2区の「第8層」、01-4調査区の「24層」、6区の「第6層」、8区・10区の「第7層」に相当する。第4b層(暗オリーブ灰色シルト) 上面の標高はT.P. 6.1～6.14m、層厚5～10cmをはかる。2区の「第9層上」、8区・10区の「第8a層」、01-4調査区の「25・26(4-2層)」に対応する。第4c層(灰色細砂) 上面の標高はT.P. 6.0～6.06m、層厚8cmをはかる。

第5層 a・bに分かれ、第5a層(灰色～浅黄色粗砂) 上面の標高はT.P. 6.14m、層厚13cmをはかる。第5b層(灰色粘土～粘質土) 上面の標高はT.P. 5.96～6.01mをはかる。2区の「第9層下」、01-4調査区の「28(4-2b層)」、8区の「第8b層」に対応する。

以上、第1c層は中世～近世、第1d層は古代～中世、第1e層～第2a層は古墳時代後期、第2b層～第3b層は古墳時代中期～後期、第4層～第8層は古墳時代前期に相当する。

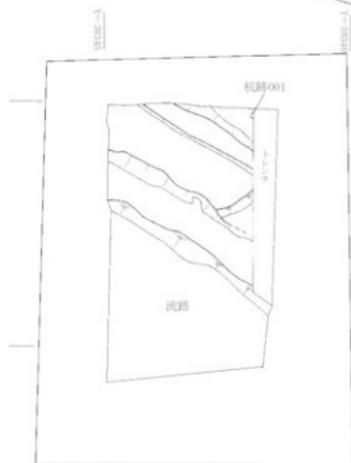


7-A区 東壁断面

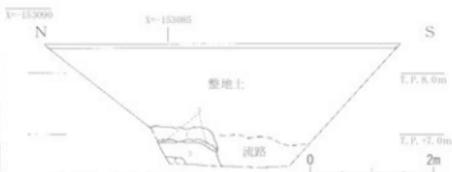
- 1 第16層 7.5G5/4に多い黄褐色粘質土 (2のブロックや9に似たブロックを多く含む)。
- 2 第16層 N4/灰色粘土 (耕作土)。
- 3 第16層 10I85/4に多い黄褐色粘質土 (土器破片を少量含む、よく締まっている)。
- 4 第16層 10I85/4に多い黄褐色粘質土 (マンガン粒を多く含む、7-B区の「第3層9」に対応)。
- 5 第16層 7.5I85/6明褐色粗砂 (8区・10区・11区の「第4層」、7-B区の「第3層下位」に対応)。
- 6 7.5G5/1緑灰色シルト。
- 7 第2層 9I85/6明赤褐粘質土 (腐葉や多い)。上面で足跡を認め、8区・10・11区の「第5層」に対応)。
- 8 第2層 10I83/3緑赤褐色粘質土 (腐葉多い、8・11区の「第6層」に対応)。
- 9 第2層 7.5I85/6明褐色シルト (灰色砂まじり粘質土ブロックを少量含む、8・10・11区の「第6層」に対応)。
- 10 第3層 10I86/4に多い黄褐色粘質土 (灰色粘質土ブロックをやや多く含む)。
- 11 第4層 9G3/1オリーブ灰色シルト (粗砂ブロックを多く含む、8・10・11区の「第7層」に対応)。
- 12 第4層 9G3/4/1緑オリーブ灰色シルト (8・10・11区の「第8層」に対応)。
- 13 第4層 10I83/1灰色粗砂。
- 14 12.5.15の混合土。
- 15 第3層 10I86/1灰色～9I7/4浅黄色粗砂。
- 16 第3層 N4/灰色粘土～粘質土 (8・10・11区の「第8層」に対応)。



7-B区 第1c層上面



7-A区 第1c層上面



7-B区 東壁断面

- 1 第16層 10I86/4に多い黄褐色粘質土 (腐葉をわずかに含む)。
- 2 第16層 7.8I6/1灰色粘質土 (1のブロックを多く含む)。
- 3 第16層 10I85/4に多い黄褐色粘質土 (マンガン粒を多く含む、土器破片をわずかに含む)。
- 4 第16層 10I86/3Lに多い黄褐色粗砂。

第58図 7-A、7-B区 遺構平面図(1/100)、断面図(1/80)

第2項 調査成果

第5a層上面で落込、第2b層上面で溝002、第2a層上面で足跡、第1c層上面で杭001、第1a層上面で11区から続く流路「流路017」を検出している。

1) 第5a層上面 (古墳時代前期)

落込

南側は近現代の流路に切られる。幅1.1～2.2m、深さ12.4cmをはかり(第59図上)、埋土は5GY4/1暗オリーブ灰色シルト～10Y5/1灰色細砂である。

2) 第2b層上面 (古墳時代中期～後期)

上面で溝002を検出している(第59図下、図版15b)。検出面の標高はT.P. 6.31～6.42mで、2区の「第7面」、7-D区の「第5層上面」、8区・10区の「第6a層上面」に対応する。

溝002

南西-北東方向の溝で、南側は近現代の流路に切れ、幅0.40～0.45m、深さ4.4cmをはかる。

3) 第2a層上面 (古墳時代後期)

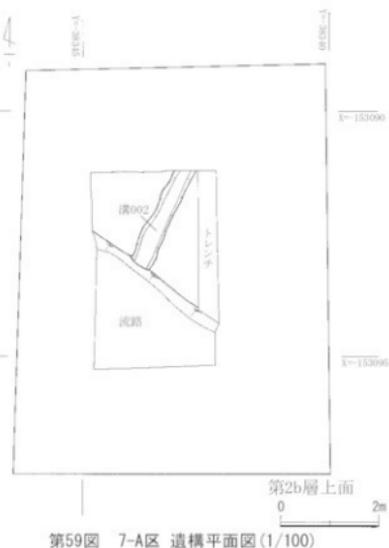
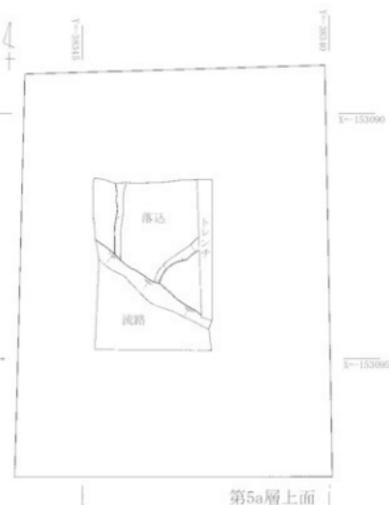
検出面の標高はT.P. 6.47～6.55m、上面で水田跡にともなう多数の足跡を確認している。2区の「第6面」、7-D区の「第4層上面」、8区・11-A区の「第5層上面」に対応する。

4) 第1c層上面 (中世～近世)

検出面の標高はT.P. 7.06～7.48mで、杭跡001を検出している(第58図、図版15c)。2区の「第2面」、7-B～D区の「第1c層上面」、本体部の「第1面」に対応する。

杭跡001

調査区の北東隅で検出した。径0.08×0.1m、深さ20.5cmをはかり、埋土は第1c層である。



第59図 7-A区 遺構平面図(1/100)

(2) 7-B区

第1項 層序と概要

操車場廃絶後の整地土除去後、第1a層から第1d層の層序を確認している（第58図下右）。上面の標高はT.P. 8.5mで、南側の大半は11区から続く近現代の流路「流路018」に切られている（第58図中、図版15d）。第1a層～第1c層の層序は7-A区に同じ。

第1d層は7-D区の「第2層」に対応し、層中から瓦器椀（第71図18）、土師質羽釜・小皿・台付き皿（第71図26）、須恵器3片が出土している。12世紀前半に相当する。

(3) 7-C区

南側の大半は11区から続く近現代の「流路019」に切られている（第72図、図版16e）。7-D区同様、他の調査区に比べて中世の包含層の遺存状態は良好である。

第1項 層序

第0層から第4層の層序を確認している（第60図左下、図版16a）。調査は第4層上面まで実施している。

第0層 操車場廃絶後の整地土で、本体部の「第0層」に対応し、上面の標高はT.P. 8.24m。

第1層 a～dに分かれ、第1a層は操車場建設時の盛土。第1b層は近代の耕作土。第1c層は中世の包含層で、層中より瓦器椀8、土師質土器32、須恵器2片が出土している。第1d層は12世紀の包含層で、層中より瓦器椀6、土師質（羽釜・小皿など）18、須恵器1片が出土している。

第2層 本体部の「第2層」および11-A区の「第2層」、10区の「西半部第2層」に対応する。層中より瓦器7、土師質土器64、須恵器10片が出土している。

第3層 a～dに分けられる。第3a層～第3c層は7-D区の「第3層上位～中位」、8区の「第4a層」に対応する。第3d層は7-D区の「第3層下位」、8区の「第4b～d層」、01-4調査区の「18・19（3b層）」に対応する。第3層から土師質土器6、須恵器2片が出土している。

第4層 6区の「第3層」、8区・10区の「第5層」、01-4調査区の「20（4-1層）」に対応する。層中より土師器皿片が出土している。

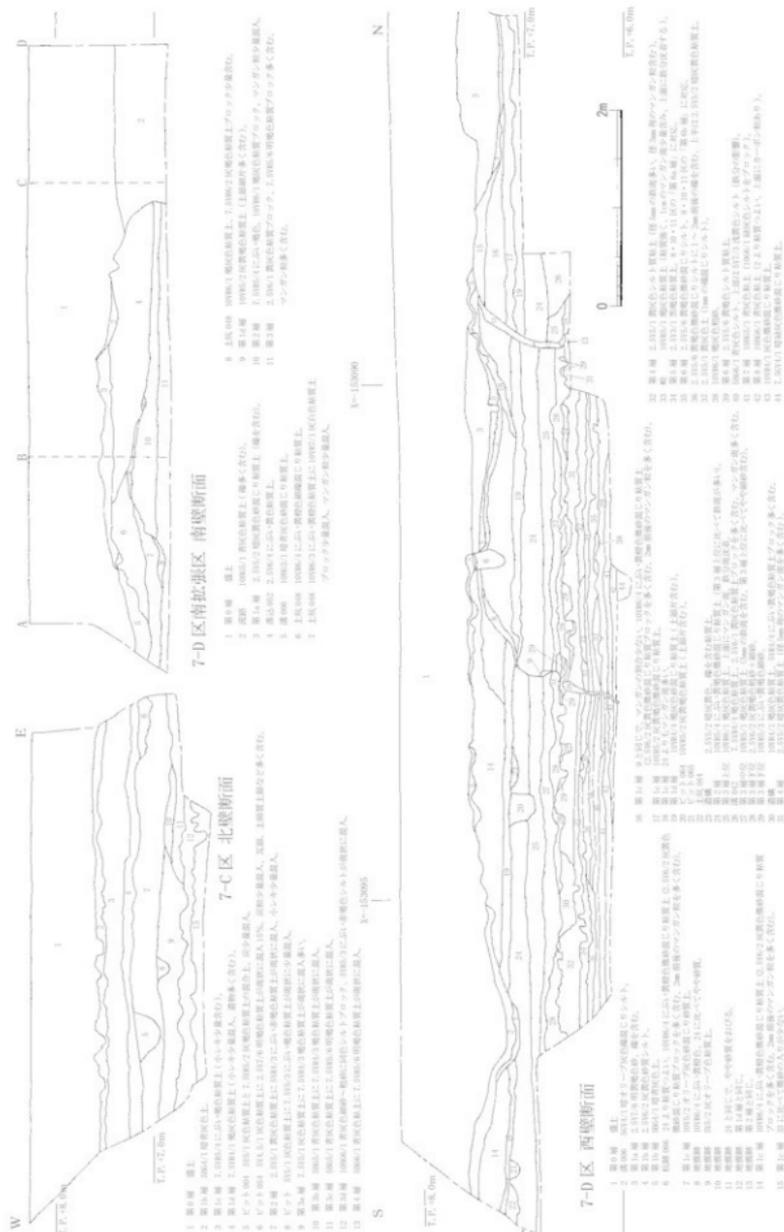
<出土遺物>（第71図17・19～21・29）

第2層から17・19～21・29、第3層から29が出土した。17・19・20は瓦器椀で、17は口径12.6cmをはかる。21は瓦器小皿で口径9.9cm、器高2.7cmをはかり、内外面はヘラミガキ調整を施す。29は須恵器環で口径13.8cmをはかる。

第2項 調査成果

1) 第4層上面（古墳時代後期）

検出面の標高はT.P. 6.6mで、2区の「第6面」、8区・10区の「第5層上面」、本体部の「第4-1面」に対応する。上面で東西南北方向の畦畔を検出している（第63図、図版16b）。



第60図 7-C区、7-D区 断面図(1/50)

2) 第3層上面(奈良時代～平安時代)

検出面の標高はT.P. 6.90～6.99mで、2区の「第5面」、8区・10区の「第4層上面」、本体部の「第2面」に対応する。ビット008～010を検出した(第64図、図版16c)。

ビット008

径0.25m、深さ17cmをはかる。底部には須恵器甕の体部片を据えていた(第64図左上)。層中より須恵器甕、土師器羽釜、皿または坏片が出土している。

<出土遺物>(第67図8、図版64)

土師質羽釜は復元口径25.8cmをはかる。体部内面は板状工具によるナデ調整を施す。頭部の立ち上がりが高いため、7-D区ビット047出土の土師質羽釜(第71図12)同様に11世紀後半以前に比定される。

ビット009・010

ビット009は径0.29×0.25m、深さ19cmをはかる。層中より土師器片が出土している。ビット010は径0.27m、深さ25cmをはかる。層中より土師器、須恵器甕体部片が出土している。

3) 第2層上面(平安時代)

検出面の標高はT.P. 7.12～7.14mで、8区・10区の第3層上面に対応する。土坑003・007、ビット004を確認している(第68図、図版16d)。

土坑003

調査区東端で検出した。平面隅丸方形を呈し、径0.82×0.53m、深さ20.8cmをはかる。埋土はビット004と同じで、12世紀前半の瓦器椀、土師質小皿、須恵器片が出土している。

<出土遺物>(第71図11)

土師質小皿は口径9.0cm、器高2.0cmをはかる。

土坑007

調査区西端で検出した。西側は調査区外で、南側は11-A区から続く「流路019」に切られる。規模は東西1.05m以上、南北0.33m以上、深さ56cmをはかる。埋土は10Y7/1灰白色粘質土に7.5YR5/6明褐色粘質土が斑状に混入する。埋土から12世紀前半の瓦器椀、土師質土器、土師器甕片が出土している。

<出土遺物>(第71図10、図版64-3)

瓦器椀は口径15.4cm、器高6.1cm、底径5.1cmをはかる。外面のヘラミガキは四分割で、器壁の凹凸によりヘラミガキが当たっていない部分があり、つくりはやや粗雑である。

ビット004

北側断面内にかかる(第60図左下の5)。径0.22m、深さ35cmをはかる。埋土から土師質小皿、須恵器片などが出土している。

<出土遺物> (第70図2)

土師質小皿で、口径9.8cm、器高1.8cmをはかり、体部外面は指オサエ後、ナデ調整を施す。

(4) 7-D区

調査区は、2区の東側に位置する。調査中に北側及び南側で、構造物の設置が当初設計よりも下位にさがることがわかり、追加調査することになる(第3図参照)。北側を北拡張区、南側を南拡張区とし、第3層上面(T.P.6.98m)まで調査を行った。7-C区と同様、周辺の調査で想定されたレベルよりも上位で中世の包含層及び遺構面が存在することが明らかになった。なお、調査区と本体部の「44号墳」との位置関係から(第56図)、調査区全体が本体部の「44号墳」の西側の周溝内に相当する。

第1項 層序

第0層から第8層の層序を確認している(第60図、図版17)。調査は第6層上面まで実施している。第7層、第8層は西壁際に設けた先行トレンチで確認している。

第0層～第4層 基本的に7-C区と同じ。第1c層から陶磁器3(近世の播鉢)、瓦器152、土師質土器356、白磁4、青磁1、瓦2、黒色土器2、須恵器38片が出土している。第1d層から瓦器120、土師質土器360、白磁2、瓦1、須恵器28片が出土している。第2層から瓦器5、土師質土器35、瓦3、須恵器39、土師器33、黒色土器A類椀1片が出土している。第3層から瓦1、土師器21、須恵器6、土師質土器12、瓦、須恵器2、土師器坏1片が出土している。第3層上位から瓦器1、土師質土器12、土師器坏、須恵器2片が出土している。第3層中位から須恵質瓦、第3層下位から土師器13、瓦1、須恵器2片、第4層から土師器9片が出土している。

第5層(黒褐色粘質土) 上面の標高はT.P.6.42～6.45m、層厚5～10cmをはかる。土壌層で、2区の「第7層」、6区の「第4層」および8区・10区・11-A区の「第6a層」に相当する。

第6層(黄褐色微砂混じりシルト) 上面の標高はT.P.6.3～6.4m、層厚8～10cmをはかる。6区の「第5層」および8区・10区・11-A区の「第6b層」、01-4調査区の「23層」に対応する。

第7層(青灰色粘土で、緑灰色シルトをブロック) 上面の標高はT.P.6.21～6.26m、層厚6～8cmをはかる。6区の「第8層」に対応する。層中より土師器3片が出土している。

第8層(青灰色粘土で、上面にカーボン粒) 上面の標高はT.P.6.15～6.24m、層厚約10cmをはかる。6区の「第9層」に対応する。層中より土師器9片が出土している。

<包含層出土遺物> (第71図22・24・25・27・28・30・31、図版62-4)

第1d層から22・27、第2層から24・25、第3層から31、第3層上位から28・30が出土した。22は瓦器小皿で口径9.7cm、器高1.95cmをはかり、内外面に丁寧なヘラミガキ調整を施す。27は白磁皿で底径3.3cmをはかる。24は土師質小皿で復元口径8.8cm、器高1.55cmをはかる。25は土師質羽釜で口径20.6cmをはかる。時期は、いずれも12世紀前半を示す。31は土師器坏で

復元口径16.0cmをはかり、口縁部はヨコナデ、底部外面はヘラケズリ調整を施す。ピット063の可能性ある。28は土師質羽釜で口径28.8cmをはかる。11世紀後半頃に比定される。30は土師器杯で、口径12.9cm、器高3.25cmをはかり、口縁部はヨコナデ、底部外面は指オサエで成形する。

第2項 調査成果

1) 第6層上面（古墳時代中期～後期）

検出面の標高はT.P.6.3～6.4mで、南側で畦畔を検出している。畦畔は幅約1.0m、高さ5.2cmをはかる（第61図、図版18a）。8区・10区・11-A区の「第6b層上面」、本体部の「4-1b面」に対応する。

2) 第5層上面（古墳時代中期～後期）

検出面の標高はT.P.6.42～6.45mで、層厚約5～10cmをはかる。南側で畦畔を検出している。畦畔は幅1.0～1.2m、高さ3cmをはかる（第62図、図版18b）。2区の「第7面」、8区・10区・11-A区の「第6a層上面」、01-4調査区の「21層上面」に対応する。

3) 第4層上面（古墳時代後期）

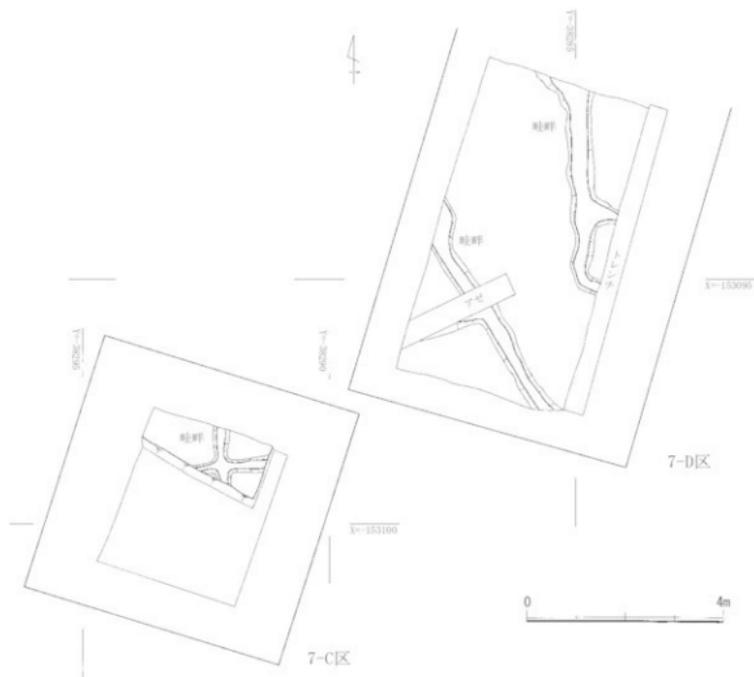
検出面の標高はT.P.6.54～6.70m、層厚20cmをはかる。上面で東西、南北、北西-南東方向の畦畔を検出している。幅0.4～0.5mで、高さ5～7cmをはかる（第63図、図版18c）。2区の「第6面」、8区・10区・11-A区の「第5層上面」、01-4調査区の「20（4-1層）上面」に対応する。



第61図 7-D区 第6層上面 遺構平面図(1/100)



第62図 7-D区 第5層上面 遺構平面図(1/100)



第63図 7-C・D区 第4層上面 遺構平面図(1/100)

4) 第3層上面 (奈良～平安時代)

検出面の標高は南側でT.P. 6.98m、北側ではT.P. 6.85mをはかる。第3層は本体部の「第2層」の一部及び「第3-1層」、8・10・11-A区の「第4層」に対応する。第3層は上位・中位・下位に分層でき、上位から溝042、ピット025・027・029～032・043・060～062、中位から溝042、ピット038～040・059・063を確認している(第64図)。なお、第3層上位は2区の「第3面」、第3層中位は2区の「第4面」、第3層下位は2区の「第5面」に対応するものと考えられる。(第64図、図版19)

溝042

北拡張区、第3層上位～中位で検出した。幅0.9m以上、深さ30cmをはかる(図版20c・d)。西側は2区に続き、2区の「第5面の溝039」、「第4面の溝016」、「第3面の溝008」に対応する。下～中位から土師器甕・銅、須恵器蓋、黒色土器A類鉢または椀、砥石、製塩土器(第67図1～4、図版62)、上位から瓦器椀、土師質土器が出土している。

<出土遺物>(第67図1～4、図版62)

土師器甕(1)は口径23.4cmをはかり、口縁端部は上方へつまみ出す。外面はハケメ、体部

内面は板ナデ調整を施す。土師器鍋(2)は口径37.4cmをはかり、体部外面はハケメ、内面は板ナデ調整を施す。須恵器蓋(3)は口縁部を欠く。黒色土器A類碗または鉢(4)は復元口径15.9cmをはかり、体部内外面はヘラミガキ調整を施す。図版62-5は砥石である。

ピット025・027・029・030

第3層上位で検出した。ピット025は径0.19×0.18m、深さ15.2cmをはかる。埋土から土師器片1が出土している。ピット027は径0.21×0.20m、深さ11.8cmをはかる。ピット029は径0.45×0.33m、深さ36cm、柱痕跡は径18cmをはかる(図版19d)。埋土から瓦器碗、土師質土器片が出土している。ピット030は径0.17×0.18m、深さ16.6cmをはかる(図版19b)。埋土から土師器片が出土している。ピット031は径0.30m、深さ8.7cmをはかる。埋土から土師器片が出土している。ピット032は径0.22×0.23m、深さ27.7cmをはかる。

ピット038

東壁内、第3層中位で検出した。径0.49×0.51m、深さ26.0cm、柱痕跡は径16×20cmをはかる(第65図、図版20a・b)。埋土から8～9世紀の土師器坏が出土している。

<出土遺物>(第67図5、図版62-3)

土師器坏は口径15.4cm、器高3.05cmをはかる。口縁部はヨコナデ、底部外面は指オサエで成形する。口縁部内面上位に軽い沈線を巡らしている。

ピット039

第4層上面で確認したが、本来は第3層中位である。径0.28×0.26m、深さ15.0cmをはかる。

ピット040

第3層中位で検出した。径0.32×0.27m、深さ16.0cmをはかる。層中より土師器5片が出土している。

ピット043

北拡張区、第3層上位で検出した。径0.25m、深さ31.0cmをはかる(図版19e)。溝042を切る。

ピット059

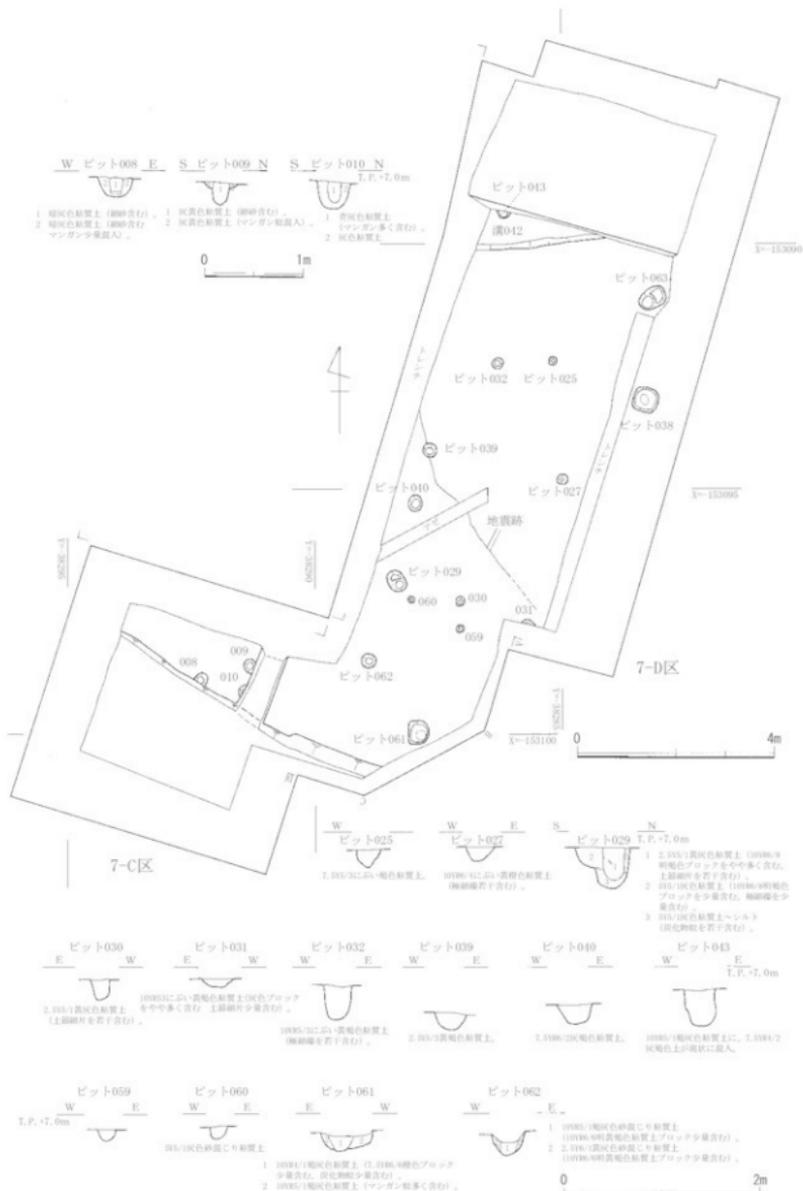
南拡張区、第3層中位で検出した。径0.14m、深さ10cmをはかる。層中より土師質土器片が出土している。

ピット060～062

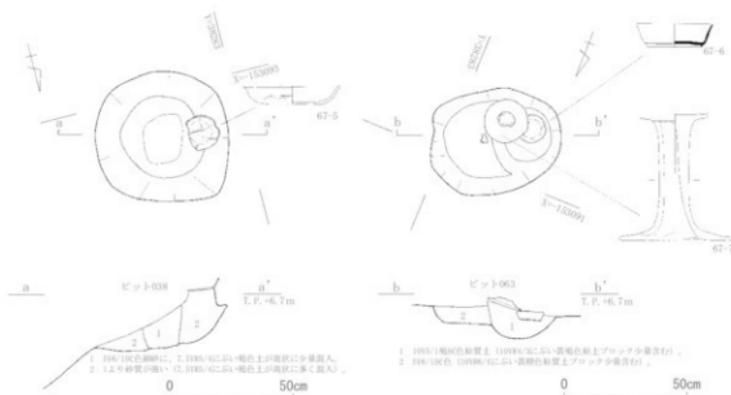
南拡張区、第3層上位で検出した。ピット060は径0.13×0.14m、深さ12cmをはかる(図版20h)。ピット061は径0.40×0.46m、深さ16cm、柱痕跡21cmをはかる(図版20f)。ピット062は径0.29×0.28m、深さ21cm、柱痕跡は径14cmをはかる(図版20g)。層中より土師器片が出土している。

ピット063

北拡張区、第3層掘削中に確認した。径0.57×0.41m、深さ14.5cm以上をはかる。先行トレンチを設けた際に、誤って上部を削平してしまい、土器が出土した時点でかろうじてピットとし



第64図 7-C・D区 第3層上面 遺構平面図(1/100)、断面図(1/50)



第65図 7-D区 ビット038 平面・断面図(1/20)

第66図 7-D区 ビット063 平面・断面図(1/20)

て認識できた。土師器高坏と須恵器坏Bが接して出土している(第66図、図版19c)。おそらく柱抜き後、人為的に埋置したものと考えられた。その他に、埋土から口縁部内外面に煤が付着する土師器皿の小片が出土している。なお、第71図31の土師器坏はビット063の可能性がある。
 <出土遺物>(第67図6・7、図版62-1・2)

須恵器坏B(6)は口径12.4cm、器高3.8cm、底径9.0cmをはかる小型品である。土師器高坏(7)は脚部と坏部が接合しないものの、残存高20.7cm、底径17.4cmをはかる。坏部内面に螺旋状の暗文と放射状暗文、外面に放射状暗文、裾部外面は5区にわけ暗文を施している。脚部は縦方向に丁寧なヘラケズリで八角形に面取りを行う。裾部内面の端部よりに一条の沈線をめぐらしている。裾部内面に煤が付着していることから、蓋として二次的に転用したものと考えられる。時期は8世紀末～9世紀初頭に比定される。

5) 第2層上面(平安時代)

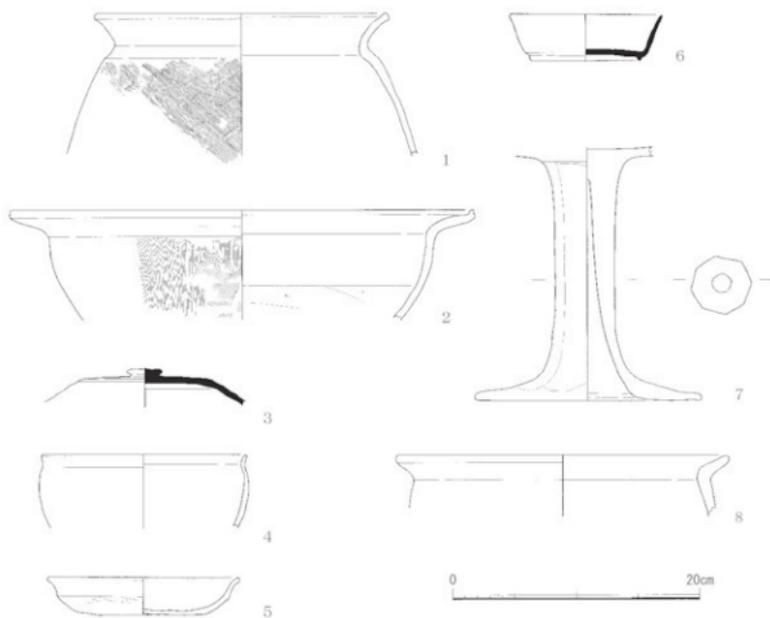
検出面の標高はT.P.7.0～7.14mをはかる。2区の「第3面」、10区・11-A区の「第3層上面」に対応する。大半の遺構は出土遺物から12世紀前半に比定される。

土坑005

調査区の南西部、第1d層除去中に検出した。平面プランは隅丸方形を呈し、径1.70×1.26m、深さ24cmをはかる。北東側は地震(本体部の連壁築造時の影響による陥没の可能性も考慮)の影響を受ける。層中より12世紀前半の瓦器椀・小皿、土師質羽釜・皿、瓦などが集中して出土している(第69図、図版21)。

<出土遺物>(第70図1～19、第71図23、図版63)

1～5は瓦器小皿で、口径9.6～10.4cm、器高2.0～2.5cmをはかる。1は大和型、2～5は和泉型である。3以外は内外面にヘラミガキを施している。1・2は見込に斜格子の暗文、3は直



1~4 (7-D区 溝042)、5 (7-D区 ビット038)、6・7 (7-D区 ビット063)、8 (7-C区 ビット008)

第67図 7区 第3層上面 溝、ビット 出土土器 (1/4)

線文の暗文を施す。6～14は瓦器椀で、口径13.4～16.8cmをはかる。15～17は土師質羽釜で、15は口径25cmをはかり、口縁端部を内側に折り曲げることを特徴とする大和型である。16は口径25cmをはかり、口縁部はくの字状に屈曲し、端部を丸くおさめる。18・19は土師質皿で口径16～16.4cmをはかる。23は土師質小皿で口径8.6cm、器高1.6cmをはかる。内外面ナデ調整。なお、1・11・12は下位から出土した。

土坑 044

南拡張区の中央で検出した。平面プランは径1.8×1.75mの不定形を呈し、深さ16cmをはかる。ビット049に切られ、ビット051～052・054と重複する(図版23a・b)。埋土から12世紀前半の瓦器椀・皿、土師質小皿・羽釜・耳皿、須恵器片などが出土している。

<出土遺物> (第71図15・16、図版64-4)

15は瓦器小皿で口径9.8cm、器高2.0cmをはかる。内外面にヘラミガキ調整を施す。16は土師質耳皿で最大口径8.9cm、最大器高3.0cm、底径3.8cmをはかる。表面は磨耗のため調整は不明である。土師質耳皿は八尾市中田遺跡(中田遺跡第24次井戸SE-01)に類例があり、時期は12世紀前半に比定されている(原田1995)。



- | | | |
|----|-------|--|
| 1 | 地蔵跡 | 10195/4にぶい黄褐色砂泥じり粘質土。 |
| 2 | 地蔵跡 | 10195/2灰黄褐色粘質土。 |
| 3 | 地蔵跡 | 2.5/6.7黄灰色細砂(粗砂少量混入)。 |
| 4 | 第16層 | 10194/2灰黄褐色砂泥じり粘質土。 |
| 5 | 土坑005 | 2.3/15.2黄褐色砂泥じり粘質土(糊状物多く含む)。 |
| 6 | 第2層 | 10195/3にぶい黄褐色砂泥じり粘質土(糊状物多く含む)。 |
| 7 | 第3層上位 | 10195/2灰黄褐色砂泥じり粘質土(マンガン粒多く含む糊状物少量含む、10196/6明黄褐色粘質土ブロック少量含む)。 |
| 8 | 第3層中位 | 10196/1褐色砂泥じり粘質シルト(マンガン粒少量混入、10196/6明黄褐色粘質土ブロック多く含む)。 |
| 9 | 第3層下位 | 10197/1灰白色シルト～細砂～粗砂+10198/2にぶい黄褐色細砂～粗砂。 |
| 10 | 第4層 | 7.3/196/22灰褐色粘質土～10196/1褐色粘質土(マンガン粒多く含む)。 |
| 11 | 第4層 | 5.5/灰色粘質土(糊状物若干含む)。 |
| 12 | 地状高さ9 | 10195/7褐色粘質土(粘質強く、1cmのマンガン屑少量含む、上面に鉄分沈着する)。 |
| 13 | 第5層 | 3.4/灰色粘質シルトと7.5/194/1褐色粘質シルト(85%、105%の「第6層」に対応)。 |
| 14 | 第6層 | 10196/6明黄褐色砂泥じり粘質シルト(5.6/灰色粘質土ブロック少量混入)。 |
| 15 | 第6層 | 10196/1黄褐色粘質シルト(粗砂少量含む)。 |

第69図 7-D区 土坑005 平面、断面図(1/20)

土坑 048

南拡張区で検出した(第60図左上の6～8)。東側は調査区外で、幅0.6m以上、深さ52cmをはかる。南側は落込052に切られる。層中より瓦器椀、土師質土器の細片が出土している。

ピット 022・034・035

北拡張区で検出した。ピット022は径0.23×0.18m、深さ11.8cmをはかり、埋土から瓦器椀、

土師器4片が出土している。ピット034は径0.28×0.29m、深さ48cm、柱痕跡は径25cmをはかる(図版22e)。埋土から瓦器椀、土師質土器、須恵器片が出土している。ピット035は径0.24×0.26m、深さ30.5cmをはかる(図版22f)。埋土から土師質土器片、須恵器片が出土している。

ピット036・037・058

ピット036は径0.26×0.26m、深さ18.7cmをはかる(図版22h)。埋土から瓦器椀、土師質土器片が出土している。ピット037は径0.30×0.31m、深さ18.4cmをはかる(図版22g)。ピット058は径0.31×0.26m、深さ17cmをはかり、埋土から土師質土器、土師器片が出土している。

ピット011

径0.23×0.25m、深さ57.9cmをはかる(図版22b)。ピット028を切る。埋土から12世紀の瓦器椀、土師質皿・小皿・羽釜、須恵器片が出土している。

<出土遺物>(第70図21・22、図版64)

土師質小皿(21)は口径12.7cm、器高3.05cmをはかる。口縁端部はやや上方につまみ上げ、外面は指ナデ、内面はヨコナデ調整を施す。土師質羽釜(22)は口径27.6cmをはかる。

ピット012

径0.16×0.15m、深さ19.9cmをはかる。埋土から12世紀前半の瓦器椀・小皿、8世紀の土師器皿、須恵器片、そして柱痕跡から土師質土器の小片が出土している。

<出土遺物>(第70図24・25、図版64)

瓦器椀(24)は口径14.8cmをはかり、内外面ともに密にヘラミガキ調整を施している。瓦器小皿(25)は口径9.7cm、器高2.5cmをはかり、内外面にヘラミガキ調整を施す。

ピット013

径0.19×0.21m、深さ26.7cmをはかる。埋土から12世紀前半の瓦器椀、土師質土器片が出土している。

<出土遺物>(第70図23、図版64)

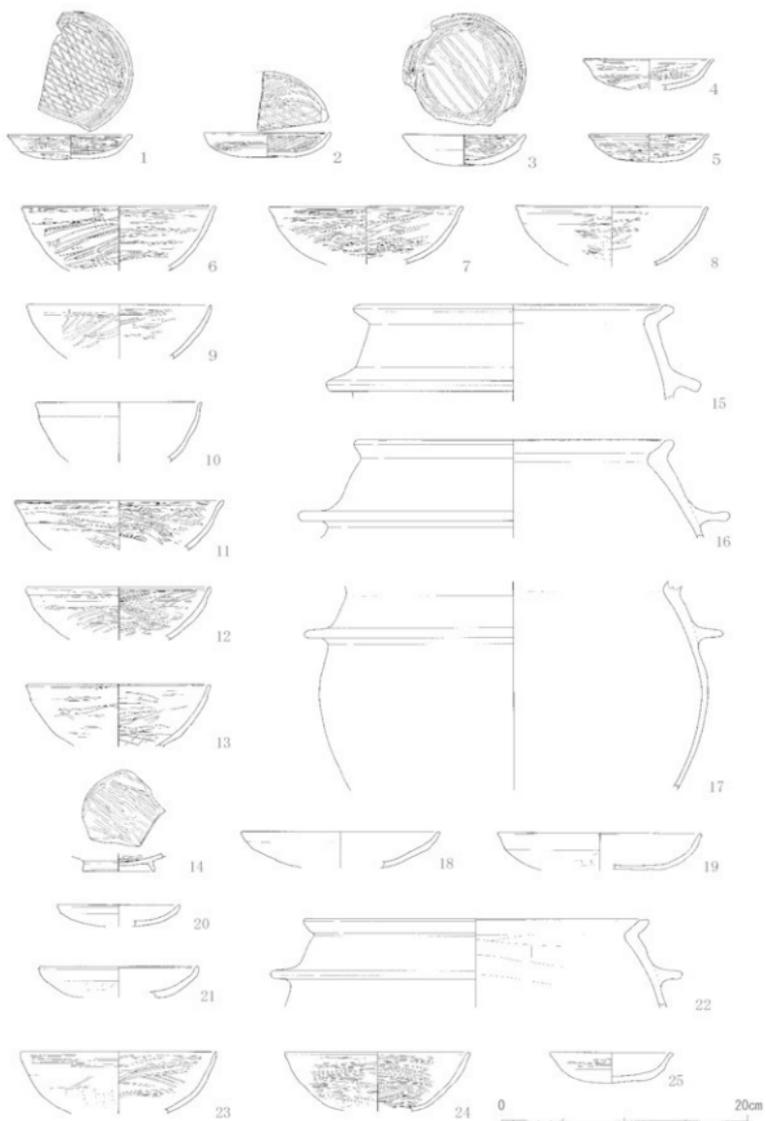
瓦器椀は口径15.8cmをはかり、内外面はヘラミガキ調整を施す。

ピット015～016・019・033・064

調査区の南半部で検出した。ピット015は径0.8m、深さ4.1cmをはかる。ピット016は径0.14×0.13m、深さ5.5cmをはかる。埋土から瓦器椀、土師質小皿が出土している。ピット019は径0.24×0.21m、深さ6.5cmをはかり、土坑005と重複する。埋土から土師質小皿片が出土している。ピット033は径0.21×0.21m、深さ16.3cmをはかる。ピット064は西壁内で検出した(第60図右の20)。径0.33m、深さ28cmをはかる。埋土から瓦器椀、土師質土器の小片が出土している。

ピット017

調査区の南半部で検出した。径0.46×0.41m、深さ35.4cmをはかる。埋土の上位から12世紀前半の瓦器椀、土師質小皿・羽釜が一括して出土し(図版22a)、下位から土師質羽釜が出土



1~19 (7-D区 土坑005) 、20 (7-C区 ビット004) 、21・22 (7-D区 ビット011) 、
23 (7-D区 ビット013) 、24・25 (7-D区 ビット012)

第70図 7区 第2層上面 土坑、ビット 出土土器 (1/4)

している（図版22c）。

<出土遺物>（第71図1～5、図版65）

上位から1・3～5、下位から2が出土した。3・4は瓦器碗で、3は口径14.8cm、4は底径5.9cmをはかる、内外面ともにヘラミガキ調整を施している。5は土師質小皿で口径10cm、器高1.5cmをはかる。1・2は土師質羽釜で、1は口径26cmをはかり、体部内面はヨコハケ、体部外面は横方向のヘラケズリ調整。2は口径25.8cmをはかり、体部内面はナデ調整を施している。

ピット020

径0.25×0.24m、深さ37.2cmをはかる（図版22d）。土坑015と重複する。埋土から12世紀前半の瓦器碗・小皿、土師質皿が出土している。

<出土遺物>（第71図6～9、図版65-6～8）

6・7は瓦器碗で、6は口径14.8cmをはかる。7は口径14.8cmをはかり、口縁部に強いヨコナデ調整を施し、外反する。8は瓦器小皿で、口径9.0cm、器高2.1cmをはかり、口縁部はヨコナデ、底部内外面は指オサエ後に内外面にヘラミガキ調整を施す。9は土師質皿で口径14.7cm、器高2.7cmをはかる。

ピット028

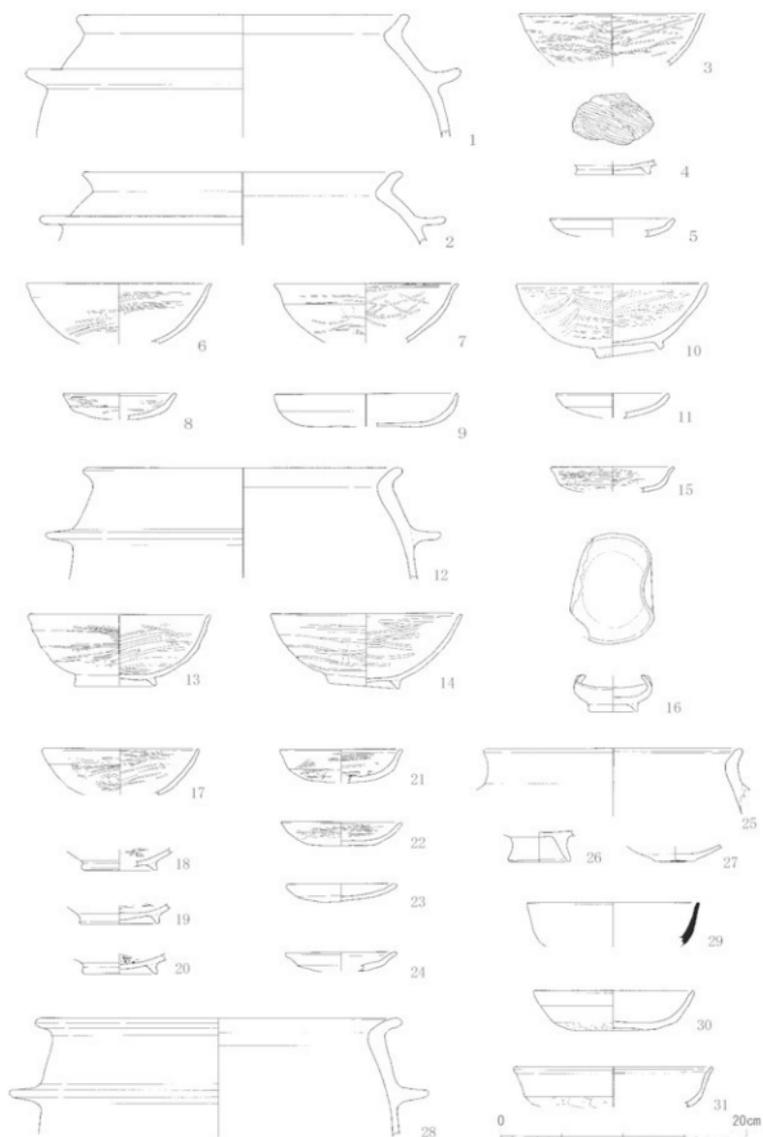
径0.22m、深さ15.0cmをはかる（図版22b）。ピット011に切られる。埋土から12世紀前半の瓦器碗、土師質小皿が出土している。

<出土遺物>（第71図14、図版64-2）

瓦器碗は口径15.5cm、器高6.1cm、底径5.6cmをはかる。内外面にヘラミガキ調整を施す。

ピット045・046・049～051・053～057・065

南拡張区で検出した。ピット045は径0.25×0.22m、深さ37cm、柱痕跡は径23cmをはかる（図版23c）。ピット046は径0.25×0.23m、深さ16cmをはかる。埋土から瓦器碗、土師質土器の細片が出土している。ピット049は径0.44×0.45m、深さ45cmで、土坑044を切る。柱痕跡は径31cmをはかる（図版23d）。埋土から瓦器碗、土師質皿、土塊が出土している。なお、柱痕跡から12世紀末頃の瓦器碗が出土している。ピット050は土坑044の下面で検出した（図版23g）。径0.39×0.41m、深さ35cm、柱痕跡は径21cmをはかり、ピット051を切る。埋土から瓦器碗、土師質小皿・羽釜、須恵器片が出土している。ピット051は土坑044の下面で検出した（図版23h）。径0.33m、深さ30cm、柱痕跡は径11cmをはかり、ピット050に切られる。埋土から土師質土器、須恵器片が出土している。ピット053は土坑044の下面で検出した。径0.28×0.23m、深さ13cmをはかる。埋土から土師質土器片が出土している。ピット054は径0.32m、深さ20cmをはかる。埋土から12世紀の瓦器碗、土師質小皿、須恵器片が出土している。ピット055は径0.25m、深さ27cmをはかる（図版23f）。下層に石を敷いていた。埋土から土師質土器片が出土している。ピット056は径0.19m、深さ29cmをはかる。ピット057は径0.14m、深さ5cmをはかる。埋土から土師質土器片が出土している。ピット065は西壁内で検出した（第60図左の21）。



1~5 (7-D区 ビット017)、6~9 (7-D区 ビット020)、10 (7-C区 土坑007)、11 (7-C区 土坑003)、
 12・13 (7-D区 ビット047)、14 (7-D区 ビット028)、15・16 (7-D区 土坑044)、18・22・26・27 (第1層)、
 17・19~21・24・25 (第2層)、28・29~31 (第3層)、23 (7-D区 土坑005)

*22・24・25・27・28・30・31(17-D区)、17・19~21・29(17-C区)、18・26(17-B区)

第71図 7区 第2層上面 ビット、土坑、包含層 出土土器 (1/4)

径0.20m、深さ10cmをはかる。埋土から瓦器椀、土師質土器、須恵器片が出土している。

ピット047

南拡張区で検出した。径0.21×0.26m、深さ30cmをはかり、土坑048を切る。人為的に埋置したような状態で11世紀後半の瓦器椀、土師質羽釜が出土している（図版23e）。

＜出土遺物＞（第71図12・13、図版64-1、65-1）

瓦器椀（13）は口径14.7cm、器高5.9cm、底径6.5cmをはかる。口縁部は二段にヨコナデを加え、内外面全体に暗文を施しているが、外面に指オサエの跡が観察され、つくりはやや雑なイメージを与える。高台は「ハ」字状に開き、しっかりとしている。土師質羽釜（12）は復元口径24.6cmをはかる。調整等は磨耗を受けているため不明である。

6) 第1c層上面（近世）

操車場造成以前の旧耕作土（第1b層）を除去した面で、上面の標高はT.P.7.30～7.50mをはかる。2区の「第2面」、8区・11-A区の「第1層上面」に対応する。上面で落込052、杭跡066を検出している（第72図）。

落込052

南拡張区、南端で検出した。東及び南側断面（第60図左上の4）の検討から、土坑048を切る。幅0.45m以上、深さ46cmをはかる。埋土から土師質土器、瓦器椀の細片が出土している。

杭跡066

西壁内で検出した（第60図右の83、図版17b）。径0.2m、深さ31cmをはかる。

7) 第1b層上面（近現代）

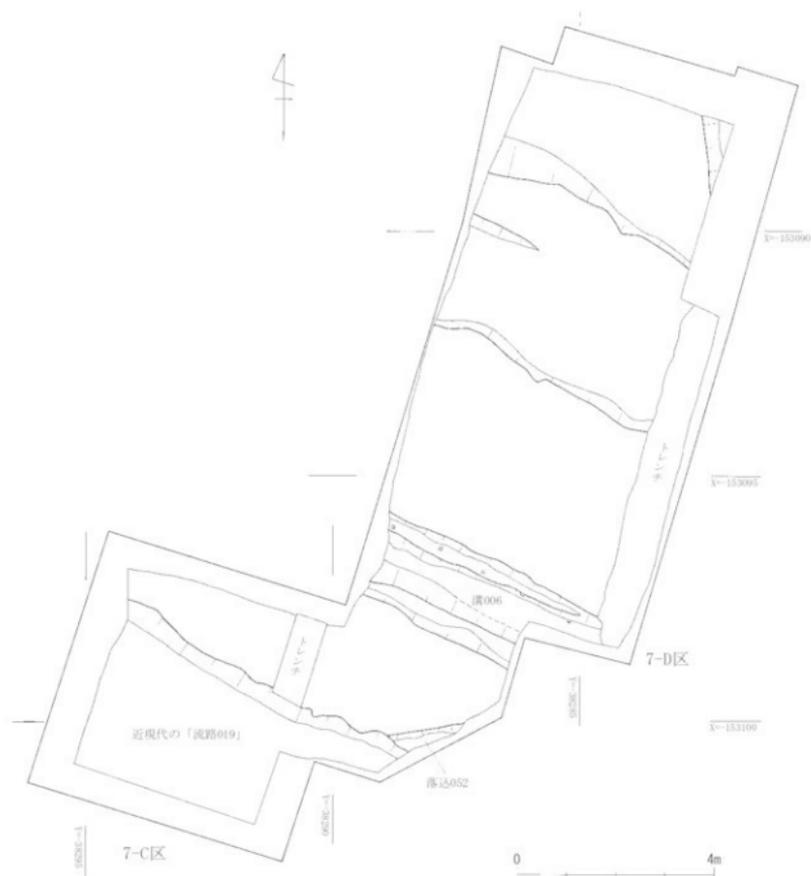
操車場造成時の盛土および整地土を除去した面に相当し、上面の標高は東端でT.P.7.55mである。隣接する2区の「第1面」、8区・11-A区の「第0層下面」に対応する（第72図）。

溝006

調査区の南端で検出した。幅1.8m、深さ30cmをはかり、北側に杭を伴う。2区の「溝001」、8区の「溝002」、11-B区の「溝001」と一連の溝である。

第3項 小結

7区は、各調査地点が離れ、掘削深度が異なるものの、概ね調査地点間で各時代の遺構面を面的に把握することができた。調査の結果、7-A区では4面の遺構面を確認した。第5a層上面で古墳時代前期の落込、第2b層上面で古墳時代中期～後期の溝002、第2a層上面で古墳時代後期の水田跡に伴う足跡、第1c層上面で中世～近世の杭跡を検出している。7-C・D区では、第6層及び第5層上面で古墳時代中期から後期の畦畔（7-D区のみ）、第4層上面で古墳時代後期の水田跡に伴う畦畔、足跡、第3層上面で奈良～平安時代の柱穴、溝、土坑、第2層上面では平安時



第72図 7-C・D区 第0層及び第1層上面 遺構平面図(1/100)

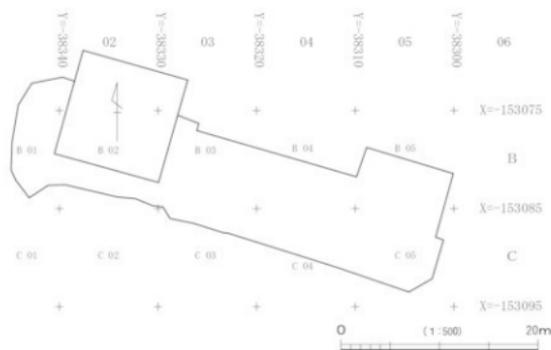
代のピット、土坑が検出され、土坑から12世紀前半の土器群が一括して出土した。第1c層上面では近世の落込、杭跡、第1b層上面では溝を検出している。

以上、西側に隣接する2区同様に、奈良～平安時代の遺構面は良好で、ピットも多く検出しているが、調査面積が限られていたため、建物跡に復元することはできなかった。なお、ピットの中には、柱抜き後に土器を埋置した例が、ピット11・17・28・38・47・63で確認された。

第8節 8区の調査

8区は、2区の西側、01-4調査区及び本体部の南側、10・11-A区の北側に位置する。調査区の中央部分は、11-A区から続く近現代の流路によってT.P. 6.0mまで浸食される。

8区の調査から日本測地系（平面直角座標第VI系）による10m区画の地区割りを設定し、遺物の取り上げ、遺構の位置表示に使用している（第73図）。調査番号は10016。なお、B02・C02区以西は、工事深度の関係で第6b層までの調査とした。



第73図 8区 調査区 区割図 (1/500)

第1項 層序

基本層序は先に調査を実施している7-D区に準じて実施したが、調査の結果、7-D区の第1b層～第3層に相当する層は存在しないことが明らかとなり、層名の呼称は統一できなかった。調査は、西側については01-4調査区、東側については2区、7-D区の調査成果を参考にしている。第0層から第10層の層序を確認している（第74・75図、図版30）。

第0層 操車場廃絶後の整地土、操車場建設時の盛土および近代の耕作土で、本体部の「第0層」に対応し、上面の標高はT.P. 8.24mである。

第1層（にぶい黄橙色粘質土） 上面の標高はT.P. 7.0～7.5mである。島畠、落込、小溝などを検出している（第94図、図版29c・d）。7-D区の「第1c層」に対応する。層中より染付、陶磁器、瀬戸美濃天目茶碗、瓦器、土師質土器、白磁、唐津焼（第93図1）、黒色土器、須恵器、瓦など83片が出土している。11-A区の「第1層」に相当する。

第2層（褐色シルト～細砂） 近世の耕作土および11-A区から続く「落込020」（第133図）に相当する。上面の標高は6.98～7.45mで、層厚10～30cmをはかる。第2層は当初、レベル的にも7-D区の「第2層」に対応すると考え、調査を進めていたが、調査の途中で、近世の陶磁器や、近世の井戸が検出され、近世の堆積層であることが明らかとなる。上面で井戸、小溝群、

第2層下面で小溝、落込を確認している。層中より染付、陶磁器、瀬戸美濃天目茶碗、瓦質土器、瓦器、土師質土器、青磁、東播系土器、唐津焼、志野焼、備前焼播鉢、黒色土器、須恵器、土師器、瓦など375片が出土している。

第3b層 第2層の場合と同じく、当初、第3層とし、7-D区の「第3層」対応と考えていた層は、近世以降の層であることが調査中に判明したため、近世の包含層をそのまま第3層とし、中世の包含層を新たに第3b層としている。東半部では近世以降の攪拌により第3b層は認められず、第4層上面まで削平されていた。また、西半部に堆積する土層（第3b層）についても01-4調査区および7-D区の層序と対比することができなかった。層中より土師質土器、瓦器、東播系土器、黒色土器、須恵器、土師器、瓦など59片が出土している。

第4層 上面の標高T.P.6.8～6.65m、層厚20～42cmをはかり、西へいくほど層厚を増す。上面で掘立柱建物、井戸、ピット、溝を検出している。層中より土師器甕・坏、須恵器、製塩土器など37片が出土している（第89図15）。a～dに分けられ、第4a層（灰色シルト～細砂）は7-D区の「第3層中位」、10区の「第4層上」に対応する。第4b～d層は氾濫堆積層で、7-D区の「第3層下位」および01-4調査区の「18・19（3b層）」に対応する。

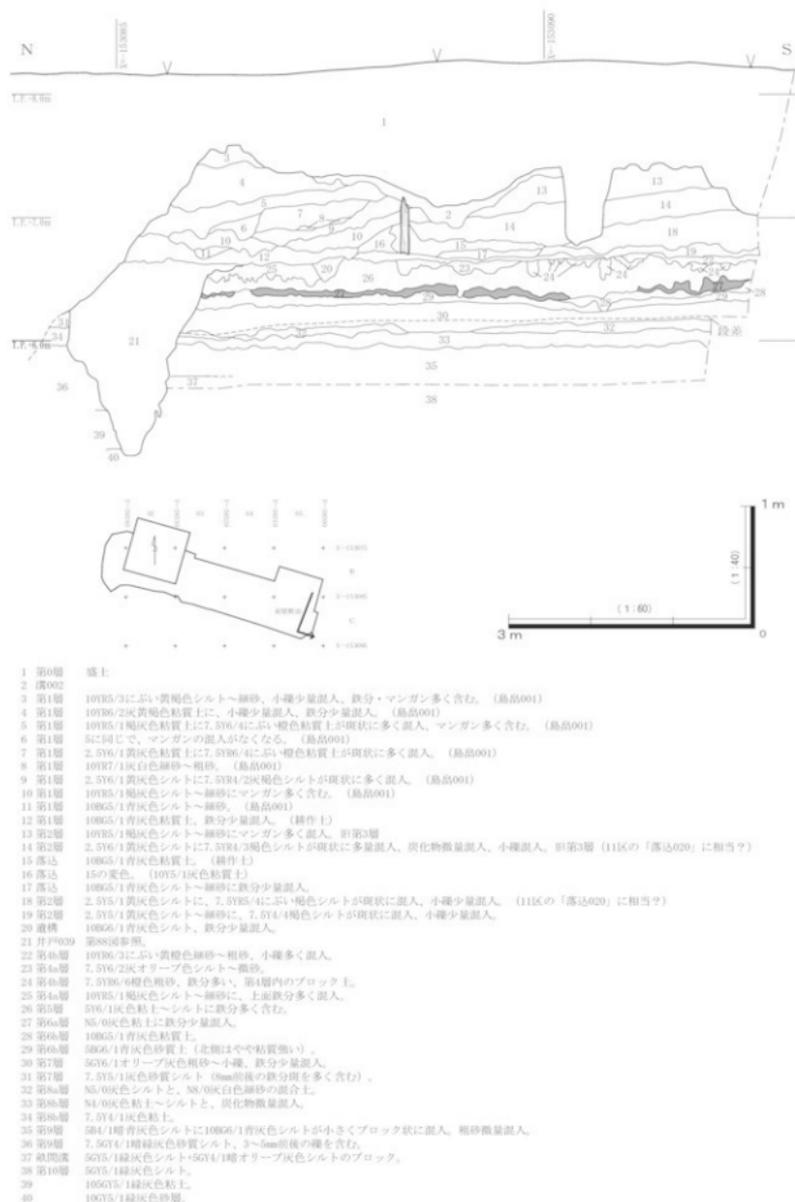
第5層 マンガン斑、鉄分斑の沈着によって上下2層に分かれる。7-D区の「第4層」、10区の「第5層」、01-4調査区の「20（4-1層）」に対応する。第5層上（灰オリーブ色粘質シルトで、マンガン斑含む）上面の標高はT.P.6.45～6.65m、層厚5～10cmをはかる。作土層で、上面で畦畔、落込、足跡を検出している。第5層下（灰オリーブ粘質シルトで、鉄分斑含む）上面の標高はT.P.6.45～6.55m、層厚10～20cmをはかる。層中より土師器甕・高坏など7片が出土している。

第6層 a・bに分けられる。第6a層（黒褐色粘質シルト）上面の標高はT.P.6.2～6.4mで、層厚3～5cmをはかる。層中より土師器2片が出土している。2区の「第7層」、7-D区の「第5層」、10区の「第6a層」、01-4調査区の「21層」に対応する。第6b層（灰色粘土～細砂で、炭化物混入）上面の標高はT.P.6.2～6.38mで、層厚5～10cmをはかる。2区の「第7層?」、01-4調査区の「23層」、本体部の「第4-1b層」、7-D区の「第6層」、10区の「第6b層」に対応する。第6a層から土師器2片、第6層から瓦質土器または土製品（第96図、図版82-2）が出土している。

第7層（灰色シルト～微砂と粗砂～小礫の互層）上面の標高はT.P.6.22～6.38mで、層厚20～30cmをはかる。01-4調査区の「24層」、2区の「第8層」、6区の「第6層」、10区の「第7層」に対応する。層中より布留形甕が出土している。古墳時代前期に相当すると思われる。

第8層 検出面の標高はT.P.6.1～6.22mをはかる。a～cに分けられ、第8a層（灰色シルト～微砂）は2区の「第9層上」および01-4調査区の「25・26（4-2層）」に対応する。第8b層（灰色粘土～シルト、炭化物微量混入）は2区の「第9層下」および01-4調査区の「28（4-2b層）」に対応する。第8c層（灰色粘土に炭化物、植物遺体多く含む）は01-4調査区の「29～31（5-1層）」に対応する。層中より土師器壺・高坏、弥生形甕、庄内形甕など234片が出土している。

第9層（灰色～明オリーブ灰色シルト） 検出面の標高はT.P.5.75～5.88mをはかる。層中より



第75図 8区 東壁断面図 (1/60・1/40)

土師器壺・高坏・手埴り形土器・小型鉢、弥生形甕、庄内形甕など278片が出土している。2区の「第10層」、01-4調査区の「32（5-2層）」、KH2005-65の「第23層」に対応し、本体部の調査では、古墳時代初期～前期の墳墓群が築造されている（財団法人大阪府文化財センター2007）。

第10層（青灰色シルト～極細砂） 検出面の標高はT.P.5.55～5.78mで、西側へ傾斜する。層中より土師器壺・高坏、弥生形甕、庄内形甕など31片が出土している。2区の「第10層」（第24図33）および01-4調査区の「34層」、本体部の「第5-2b（1）」、KH2005-65の「第25層」に対応し、上面で古墳時代初期の小溝（畝溝）が検出されている。本体部、東西線では、同一面及び下面で堅穴建物、流路、溝、落込などが検出されている。

第2項 調査成果

1) 第10層上面（古墳時代初頭）

炭溜まり土坑110、落込104を検出している（第76図、図版24）。検出面の標高はT.P.5.55～5.78mで、西側へ傾斜する。上面で東西、南北方向の畝溝（小溝105～109・111～149）、本体部の「5-2b（1）面」、01-4調査区の「34層上面」、KH2005-65の「第25層上面」、2区の「第10面下層」、東西線の「1・2・3・5、7区6面」に対応する。なお、B02区、C02区以西は予定掘削深度に達したため未調査である。

土坑110

調査区西半部、C04～C05区で検出した。平面プランは不定形を呈し、径1.2×1.7m、深さ14.6cmをはかり、小溝115を切る。埋土から土師器の小片が出土している。

落込104

調査区の東端、B05～C05区で検出した。平面プランは不定形で、径2.3×4.0m、深さ4cmをはかり、小溝111・113を切る。埋土から土師器壺2・甕3片が出土している。

小溝（畝溝）105～109・111～149

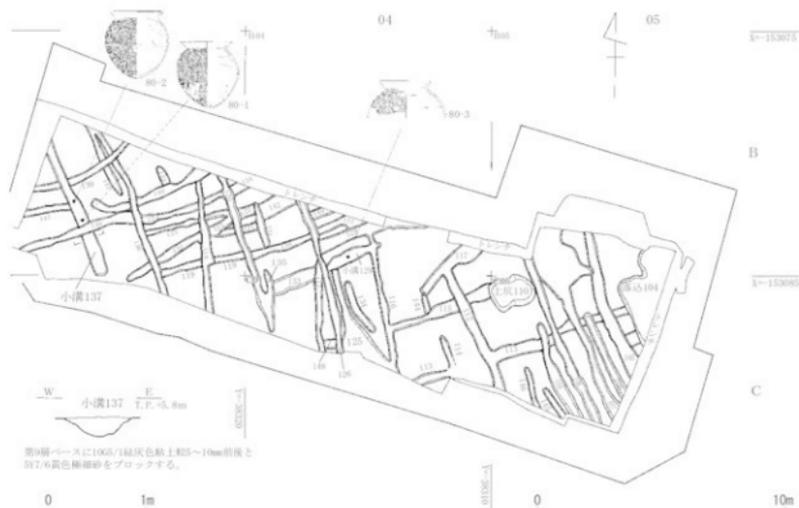
幅0.30～0.60m、深さ1.4～27cmをはかる。小溝105～109・112・114・116・118・120・125・126・131・132・134～137・141・143～146は西北西-南南東（南北方向）、小溝111・115・117・119・121～124・127～130・133・138～140・142・147～149は西南西-東北東（東西方向）。南北方向の小溝が東西方向の小溝に先行する。埋土は基本層序の第9層をベースに10G5/1 緑灰色粘土粒5～10mm前後と5Y7/6 黄色極細砂をブロックする。

小溝105

調査区の東端、B05～C05区で検出した。幅0.5m、深さ16cmをはかり、小溝111・113を切る。埋土から土師器甕・高坏が出土している。第79図7は高坏の脚部片で、内面は指ナゲ、外面はハケメ調整を施している（図版70-5）。

小溝119

調査区の中央、B03～C03・04区で検出した。幅0.3m、深さ7.1cmをはかり、小溝120・136



第76図 8区 第10層上面 遺構平面図(1/200)、断面図(1/50)

に切られる。埋土から土師器壺、弥生形甕の底部（第79図11）が出土している。

小溝120

調査区のほぼ中央、B03・04～C04区で検出した。幅0.3m、深さ12cmをはかり、小溝119・121～124を切る。埋土から土師器壺、弥生形甕が出土している。第79図5は弥生形甕の口縁部片で、口径15cmをはかり、口縁端部は上方へ折り曲げ、受け口状を呈する（図版70-2）。

小溝129

調査区のほぼ中央、B04区で検出した。幅0.40m、深さ3.5cmをはかり、小溝126に切られる。埋土から弥生形甕が出土した（第76図、図版24b）。弥生形甕（第80図3、図版67-5）は口径16.2cmをはかり、外面の色調はにぶい橙色を呈している。体部外面は1cmあたり3本の太筋のタタキメ、内面はナデ調整を施す。

小溝136

調査区の西半部、B03～C03区で検出した。幅0.30m、深さ9.9cmをはかり、小溝141に切られる。埋土から弥生形甕、庄内形甕、土師器壺・有稜高坏が出土している。有稜高坏（第80図4）は口径22.4cm、器高16.3cm、底径13.5cmをはかる。口縁部～体部内外面、脚部外面は縦方向のヘラミガキ、脚部内面上位はナデ、下半はヨコナデ調整を施す。透孔は四方向の円形透かしを穿つ（図版68-1）。

小溝137

調査区の西半部、B03～C03区で検出した。幅0.60m、深さ18.6cmをはかり、小溝138に切れ、

小溝 139・147 を切る。埋土から土師器壺、庄内形甕2点、弥生形甕、加工木が出土している（第76図、図版24c）。

他の小溝に比較して、深さがあることから、下面の遺構の可能性も考えられ、本体部の「第5-2b(2)面」に対応することも考慮すべきであろう。

＜出土遺物＞（第80図1・2、図版67）

庄内形甕（1・2）はほぼ同形同大で、口径16.5～17cm、器高21.7～22cm、体部最大径20.2～20.8cmをはかる。底部は突出するものわずかではあるが、平らな面を意識している。いずれも内面に炭化物の付着が見られ、生駒西麓産の胎土をもつ。口縁部は屈曲し、端部は上方につまみ出す。外面は1cmあたり4本のタタキメ、内面はヘラケズリ調整を施している。ただし、1はタタキメ成形後、下半の一部にナデを加えている。2はタタキメ成形後、体部中位の一部にヘラケ調整を施している。時期は（西村2008）の庄内式古段階新相に相当する。

小溝 138

調査区のはぼ中央、B03・04～C04区で検出した。幅0.35m、深さ10cmをはかり、小溝136に切られ、小溝137を切る。埋土から庄内形甕が出土した。庄内形甕（第79図6）は口径14cmをはかり、生駒西麓産の胎土をもつ。土器群103出土の庄内形甕（第79図1）と調整はほぼ同じである（図版70-1）。

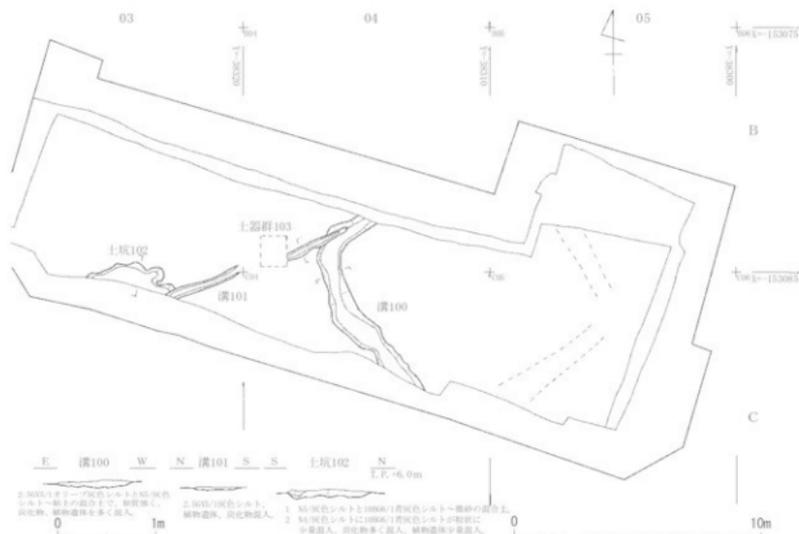
その他に、溝107から土師器壺2・甕1片、溝112から土師器片、溝113から弥生形甕（生駒西麓産の胎土）1、土師器6片、溝115から土師器甕3片、溝116から土師器甕2、小型鉢片1、溝118から土師器壺3・高坏1片、溝121から土師器壺1片、溝122から土師器5片、溝123から土師器甕2片、溝124から土師器1片、溝125から土師器壺3・甕5・碗形高坏1片、溝126から土師器壺1・甕2、庄内形甕3片、溝127から土師器壺3片、溝128から土師器壺2・甕2片、溝130から庄内形甕2片、溝132から土師器甕1片、溝133から土師器壺1片、溝134から土師器壺1片、溝135から土師器壺2・甕9・高坏1片、溝139から土師器1片、溝140から土師器壺2・甕1片、溝147から土師器壺2・甕2片が出土している。

2) 第9層上面（古墳時代初頭）

溝100、溝101、土坑102、土器群103を検出している（第77図、図版25）。検出面の標高はT.P.5.75～5.88mで、西側へやや傾斜している。01-4調査区の「32（5-2面）」、KH2005-65の「第23層上面」、2区の「第10面？」に対応する。なお、B02区、C02区以西は予定掘削深度に達していたため未調査である。層中より、庄内形甕、弥生形甕、土師器手焙り形土器・高坏・壺・二重口縁壺・小型鉢などが多く出土している（図版25c）。

＜第9層出土遺物＞（第80図5～16、第81図1～9、図版68～70）

第80図5は二重口縁壺で口径27.6cmをはかり、口縁部内面は横方向のヘラミガキ調整を施し、外面には二帯の波状文を巡らしている。第80図6～9は壺で、6は頭部に刻み目突帯を巡らし



第77図 8区 第9層上面 遺構平面図(1/200)、断面図(1/50)

ている。7～9は広口壺で、7は口径14.2cmをはかり、口頸部内外面及び体部外面はヘラミガキ、体部内面は工具ナデ調整。8は口径13.6cmをはかり、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はヘラミガキ、内面は指ナデ調整を施す。9は口径16cmをはかり、口縁部内外面をヨコナデ後、内面に粗いヘラミガキ調整を施す。第80図10・12は庄内形甕で、いずれも生駒西麓産の胎土をもつ。10は口径15.2cmをはかり、第80図2と同タイプ。12は口径14.4cmをはかり、口縁部内面はハケメ、体部外面は右上がりの細かなタタキメ、内面はヘラケズリ調整を施している。第80図11・13～16は弥生形甕で、11は口径15.4cmをはかり、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は右上がりのタタキメ、内面はナデ調整を施している。13～16は底部片である。

第81図1は手焙り形土器で体部最大径は18.8cmをはかる。体部と底部の境に刻み目を施す突帯を巡らしている。体部内面は粗いハケメ、底部内面は細かなハケメ、外面はナデ調整で仕上げている。第81図2～7は小型鉢で、2は口径9.5cm、器高9.2cmをはかり、体部外面はヘラミガキ、内面は工具ナデ。3は体部から口縁部にかけてやや内湾気味に斜め上方に立ち上がり、口径12cm、器高7.35cmをはかる。内面は工具ナデ、外面は指ナデ調整を施す。4は体部から緩やかに短く屈曲して立ち上がる口縁部をもつ。口径8.1cmをはかり、体部内外面はヘラミガキ調整。5は底部が尖底を呈する碗形で、口径8.6cm、器高5.5cmをはかり、口縁部上端は波打つ。内外面はハケメ調整で、胎土は生駒西麓産である。6・7は体部から斜め上方に立ち上がる口縁部をもつ。6は口径9.8cmをはかり、口縁部内外面ヨコナデ、体部外面はタタキメ後ナデ調整を施している。7は口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面はナデ調整を施す。第81図8・9は高坏で、8

は裾径21cmをはかり、裾部内面はハケメ、外面は横方向の細かなヘラミガキ調整を施している。内面には二次的に煤が付着し、蓋として転用したものが、9は脚部片で、坏部外面、裾部外面はハケメ、柱状部外面は縦方向のヘラミガキ、裾部内面はナデ調整を施す。

溝 100

調査区の東半部～中央部、B04・C04区で検出した。幅1.2m前後、深さ14.2cmをはかるL字状の溝で、溝101に切られる。西側でわずかに窪んだ痕跡が観察され、方形に周る可能性も考えられる。埋土から土師器壺・甕・高坏などが36片出土している。

溝 101

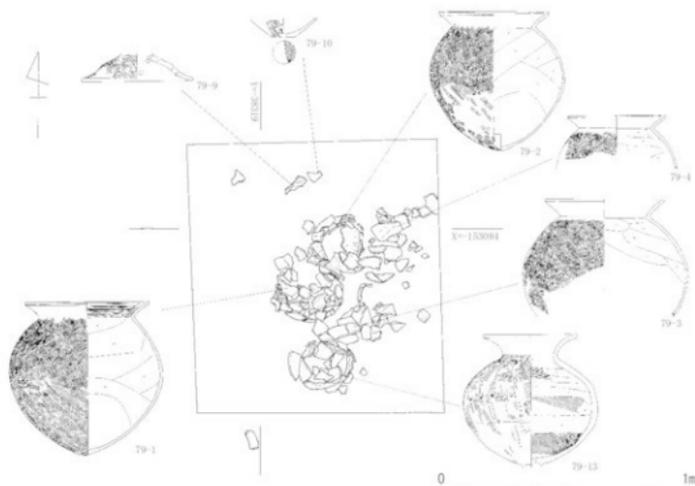
調査区の中央、B04・C03区で検出した。幅0.4m、深さ6.1cm、長さ7.68m以上をはかる。土坑102、周溝状遺構100を切る。埋土から土師器壺4片が出土している。

土坑 102

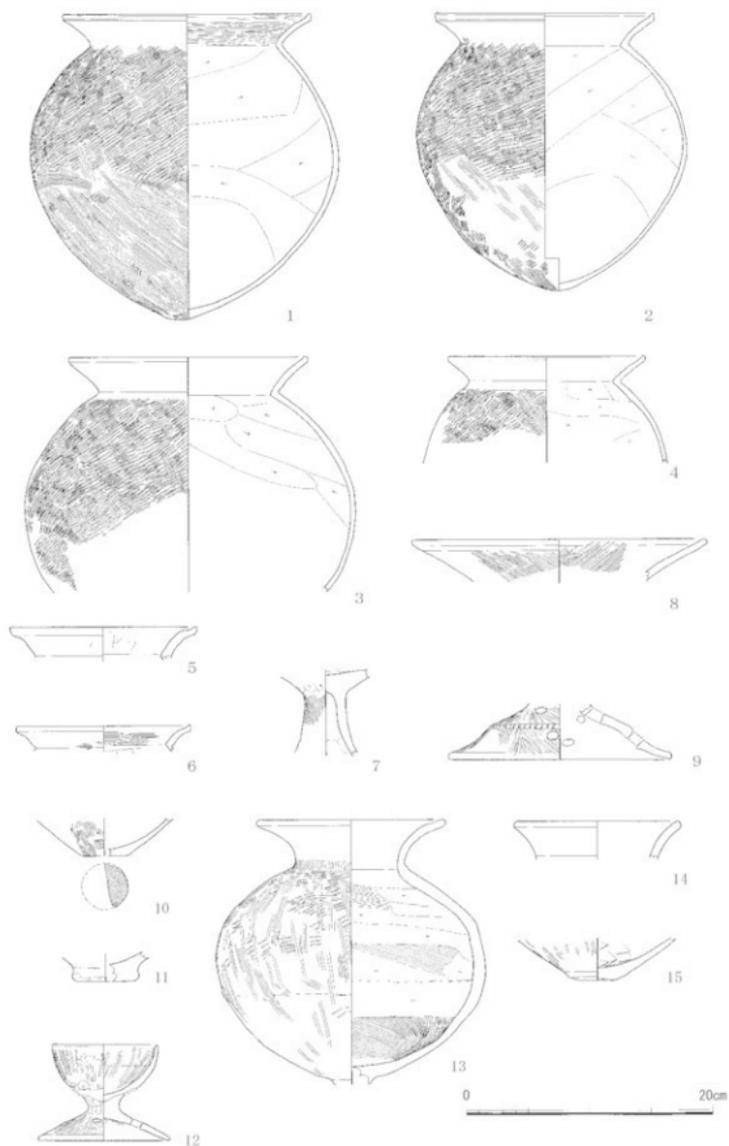
調査区のはぼ中央、B03・C03区で検出した。平面プランは不定形を呈し、径1.0m×3.5m以上、深さ11.5cmをはかる。溝101に切れ、南側は調査区外に伸びる。埋土から土師器壺10・高坏10片が出土している。

土器群 103

調査区の中央、B-04区、第9層中で確認した土器群で、1m四方の範囲から、庄内形甕5点、壺3点、高坏3点がまとまった状態で出土している（第78図、図版25b）。検出レベルはT.P.5.85mで、溝101に切られる。本体部の「05313 土器集積」と出土状況や器種構成（甕に庄内形甕以外のタイプが含まれない）が共通している点で、同様な性格を有するものと考えられる。



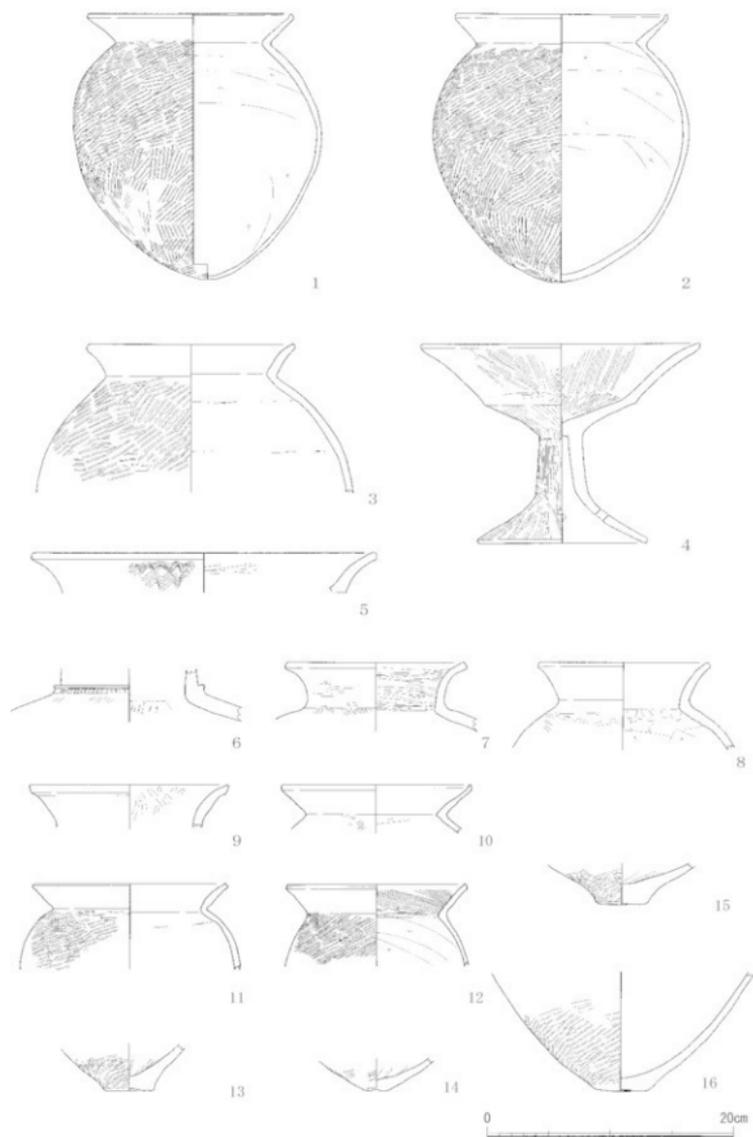
第78図 8区 土器群103 遺物出土状況図(1/20)



1~4・8~10・12~15 (土器群103)、5 (溝120)、6 (溝138)、7 (溝105)、11 (溝119)

*1~4・8~10・12~15は第9層中、5~7・11は第10層上面

第79図 8区 第10層上面、第9層中 土器群、溝出土土器 (1/4)



1・2 (溝137)、3 (溝129)、4 (溝136)、5～16 (第9層)

第80図 8区 第10層上面 溝、包含層 出土土器 (1/4)

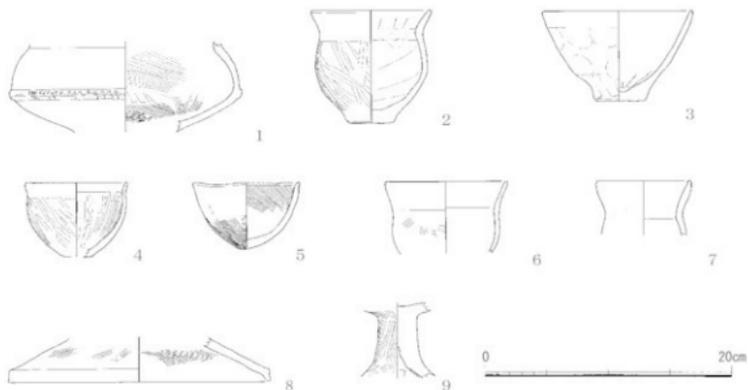
<出土遺物> (第79図1~4・8~10・12~15、図版66・67・70)

1~4・10は庄内形甕で、溝137(第80図1・2)と比較して、体部の張りが強く、外面のタタキメが細い(1cmあたり5本)。1は口径20cm、器高25cm、体部最大径25.1cm、底径1.4cmをはかる。尖底に近い小さな平底をなす(図版66-1)。口縁部内面はハケメ、体部外面は右上がりの細筋のタタキメ成形後、下半にハケメ、内面は幅広のヘラケズリ調整を行う。2は口径17.6cm、器高22.7cm、体部最大径22cm、底径2.1cmをはかる。底部は尖底に近い小さな平底をなす(図版66-2)。口縁部内面は工具ナデ、体部外面は右上がりの細筋のタタキメ成形後、下半に一部ハケメを施し、内面は幅広のヘラケズリ調整を行う。1・2とも外面全体に煤が付着し、内面下半には炭化物が付着する。3・4は1・2と調整は同じであるが、口縁端部の上方へのつまみ出しはやや弱い。3は口径19.1cm、体部最大径26.9cm、4は口径15.8cmをはかる。6は1と同タイプで口径14cmをはかる。第79図10は底径3.8cmをはかる。外面の調整は底部から体部にかけてハケメで、内面は粗雑なヘラケズリ?底部内面に炭化物が付着している。第79図1~4は生駒西麓産の胎土である。

第79図8・9は有段高坏で同一個体の可能性がある。8は口縁端部に強いヨコナデを施し、端部は面をもつ。口縁部内外面は斜め方向の細かいヘラミガキ調整を施している。9は稜を有する裾部の中位に刻み目を施し、二段に四方向の円形透孔を穿つ。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整を施している。

第79図12は椀形高坏で口径8.5cm、器高7.5cm、裾径10.6cmをはかり、庄内形甕(1)の下から出土した。坏部内外面及び裾部外面はヘラミガキ、内面は工具ナデ調整である。三方向の円形透孔を穿つ。

第79図13~15は広口壺で、13は口径13cm、器高21.7cm、体部最大径21.9cm、底径3cmをはかる。やや扁平な体部に、ラッパ状に開く口縁部と突出する小さな底部をもつ。口縁部内外面



第81図 8区 第9層 出土土器(1/4)

はヨコナデ、頸部外面の下半にハケメ、体部外面は右上がりの太筋のタタキメ成形後、ハケメ調整を加え、さらに部分的に縦方向のヘラミガキを疎らに施している。内面は分割成形が明瞭で、下からハケメ、ケズリ、ハケメ、ケズリ、ハケメ、ナデ調整を施している。胎土は生駒西麓産である。第79図14は口径13cmをはかる。第79図15は底径4.3cmをはかり、外面はヘラミガキ、内面は工具状ナデ調整を施している。底部の周縁は著しく摩耗しており、比較的長時間使用されていたことを示している。

3) 第8b層上面(古墳時代前期)

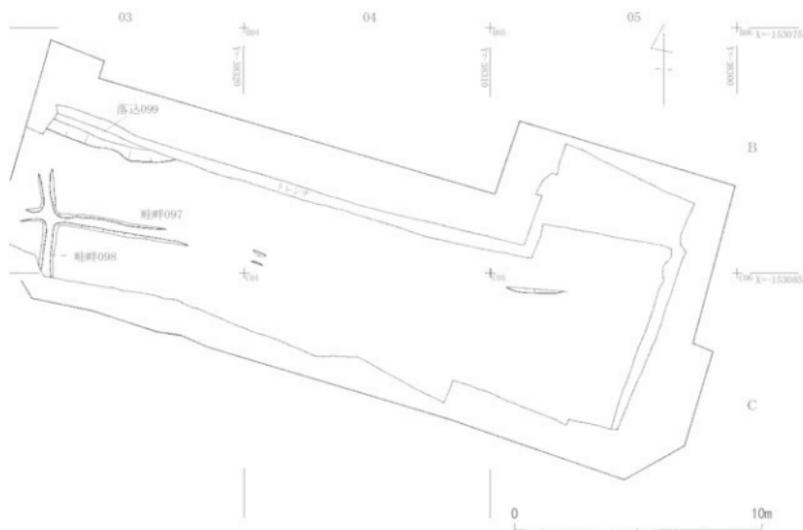
畦畔097・098、落込099を検出した(第82図、図版26a)。検出面の標高はT.P. 5.92～6.05mで、西側へわずかに傾斜している。本体部の「第4-2b面」、01-4調査区の「28(4-2b層)上面」、2区の「第9層(第24図20)上面」、10区の「第8b層上面」に対応すると考えられる。

畦畔097・098

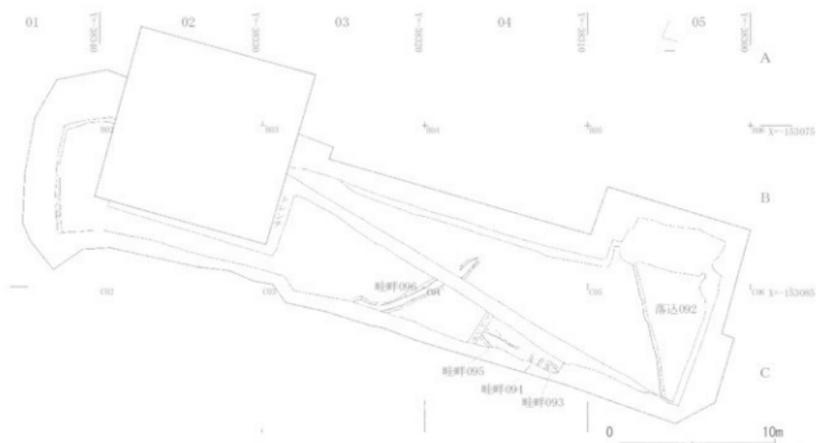
調査区の西寄り、B03区で検出した。畦畔097は幅0.55m、高さ4.3cmをはかり、長さ4.15mを確認している。畦畔098は幅0.55m、高さ4.3cmをはかり、長さ4.5mを確認している。

落込099

調査区の西寄り、B03区で検出した。北側は調査範囲外に伸び、幅0.8m以上、深さ7.3cmをはかる。



第82図 8区 第8b層上面 遺構平面図(1/200)



第83図 8区 第6層上面 遺構平面図(1/300)

4) 第6層上面(古墳時代中期～後期)

落込092、畦畔093～096を検出している(第83図、図版26b)。検出面の標高はT.P.6.2～6.38mで、南東から北西方向へ向かってやや傾斜する。01-4調査区の「23層上面」、本体部の「第4-1b面」に対応する。

落込092

B05・C05区で検出した。幅3.8m以上、長さ7.75m、深さ17.9cmをはかる。

畦畔093～096

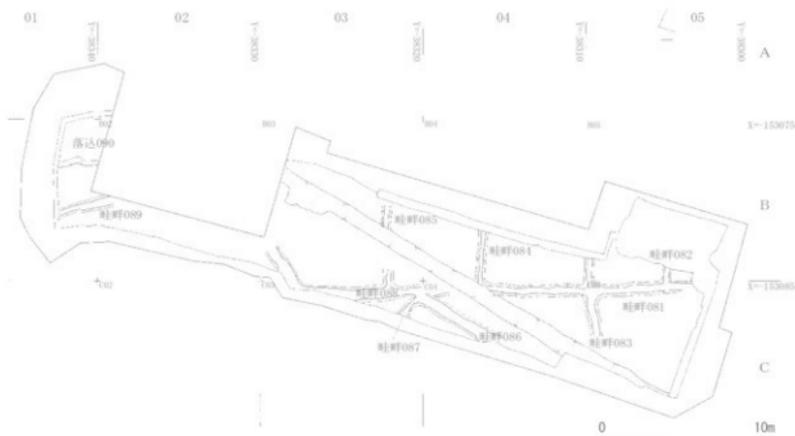
畦状遺構093はC04区で検出した。幅0.7m、高さ1.7cmをはかる。畦畔094はC04区で検出した。幅0.52m、長さ0.6m以上をはかる。畦畔095はC04区で検出した幅0.75m、長さ2.5m以上、高さ6.4cmをはかる。畦畔096はB04、C03・04区で検出した。幅0.5m、長さ7.0m以上、高さ6.7cmをはかる。

5) 第5層上面(古墳時代後期)

畦畔081～089、落込090、および夥しい足跡を検出している(第84図、図版26c)。検出面の標高はT.P.6.45～6.65mで、西側へ向かってやや傾斜する。本体部の「第4-1面」、01-4調査区の「20(4-1層)上面」、2区の「第6面」、7-A区の「第2a層上面」、7-C・D区の「第4層上面」、10区・11-A区の「第5層上面」に対応する。

畦畔081～089

畦畔081・089は東西方向、畦畔082～085は南北方向、畦畔086・088は北西-南西方向で、



第84図 8区 第5層上面 遺構平面図(1/300)

幅 0.5～0.85m、高さ 3.4～6.9cm をはかる。

落込 090

調査区の西端、B01～02区、幅 3.75m、長さ 2.4m 以上、深さ 28cm をはかる。埋土は 4層に分かれ、上層は 5Y7/1 灰白色微砂～細砂で、N5/0 灰色シルトのラミナが入る。中層は上層に炭化物が混ざる。下層（上層にはほぼ同じ）、最下層は 10B65/1 青灰色微砂に植物遺体を含む。

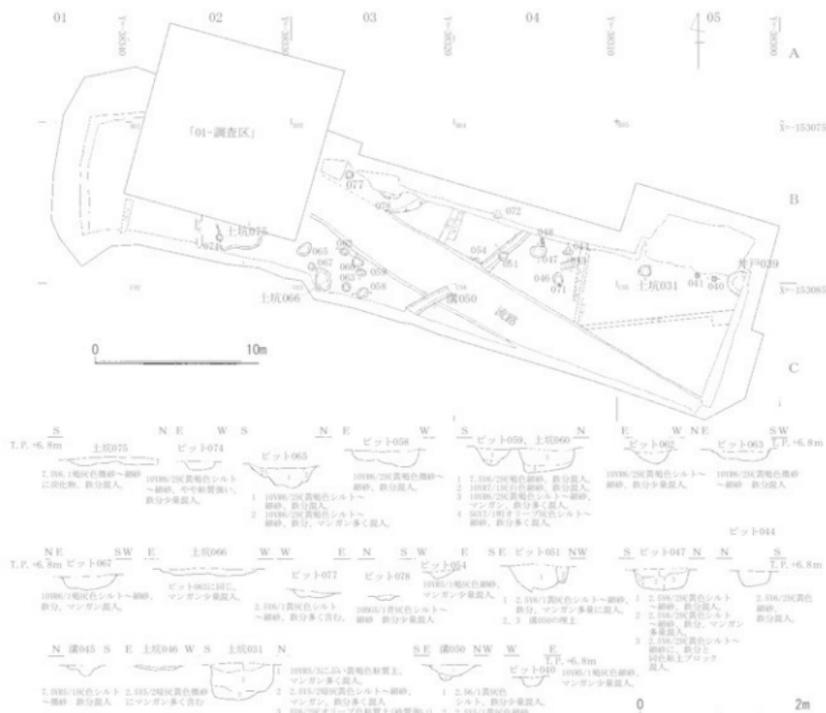
6) 第4層上面（古代）

掘立柱建物（ピット 044・047・051・072）、土坑 031・046・060・065・066・075・078、井戸 039、ピット 040・041・054・058・059・062・063・067・071・074・077、溝 045・048・050 を検出している（第85図、図版27）。検出面の標高は T.P. 6.57～6.72m で、本体部の「第2面～第3-1面」、01-4 調査区の「18・19（3-b層）上面」、2区の「第4面および第5面」、7-D 区の「第3層中位～下位上面」、10・11 区の「第4層上面」に対応する。

掘立柱建物

調査区中央の北側、B04 区で検出した（第86図、図版27）。1間以上（2.6m 以上）×2間以上（4.1m 以上）で、北側は調査区外に伸びる。検出面の標高は T.P. 6.72m で、ピット 044・047・051・072 で構成される。南北方向の柱間は 2.6m、東西方向の平均柱間は 2.05m である。柱掘方の径は 0.4～1.0m、平均 0.61m、深さは 19～43cm で、平均 31.5cm をはかる。柱痕跡はピット 047 で確認され、径 28cm である。主軸方位は N-8°-W。ピット 047 は溝 048 を切り、ピット 051 は溝 050 を切る。

埋土から土師器、須恵器片が出土しているが、いずれも細片で図化することができない。時期



第85図 8区 第4層上面 遺構平面図(1/300)、断面図(1/60)

については土師器皿の形態から、8世紀頃と考えられる。

土坑 031

調査区東半部、B05区で検出した。径0.92×0.85m、深さ45cmをはかる。埋土から須恵器杯B、土師器皿などが出土している。

<出土遺物> (第89図13、図版70-15)

須恵器杯Bは口径13cm、器高3.7cmをはかる。焼成が甘く、全体に摩耗している。

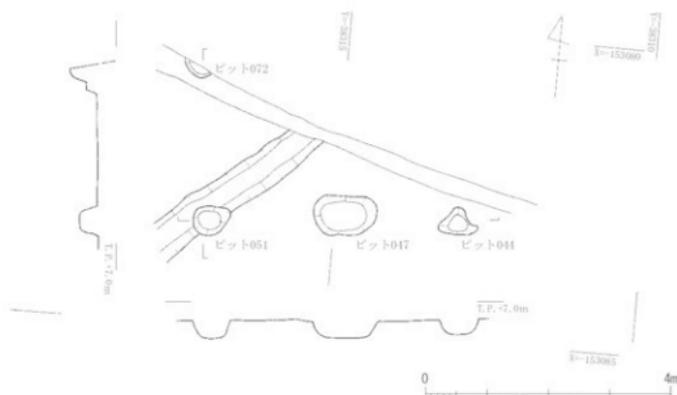
土坑 046

調査区東半部、B04区で検出した。径0.60×0.78m、深さ8.1cmをはかり、ピット071を切る。

土坑 060・065・066

調査区西半部、B03区で検出した。土坑060は径0.70×0.60m、深さ34cmをはかる。埋土から土師器8片が出土している。土坑065は径1.0×0.66m、深さ28.9cmをはかる。埋土から土師器皿、須恵器の小片が出土している。土坑066は径1.15×1.25m、深さ13.9cmをはかる。

土坑 075



第86図 8区 第4層上面 掘立柱建物 平面・断面図 (1/80)

調査区西半部、B02区で検出した。北側は調査区外で、平面隅丸方形を呈し、径 $2.5 \times 1.80\text{m}$ 以上、深さ 14.1cm をはかる。ビット074に切られている。

<出土遺物> (第89図10～12、図版70下)

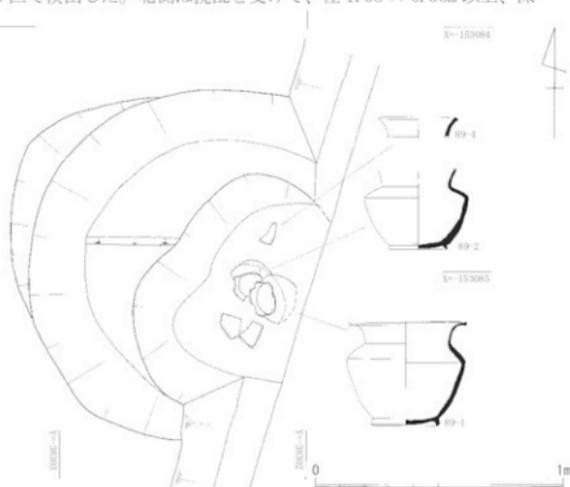
埴輪(10)、須恵器坏A(11)、土師器甕(12)が出土している。10・12は下位からの混入と考えられる。11は口径 12.8cm 、器高 3.5cm 、底径 8.2cm をはかる。12は庄内形甕の口縁部片で、口径 19cm をはかる。

土坑078

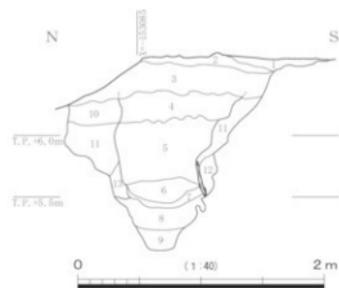
調査区西半部の北側、B03区で検出した。北側は攪乱を受けて、径 $1.38 \times 0.36\text{m}$ 以上、深さ 6cm をはかる。埋土から土師器1、須恵器1片が出土している。

井戸039

調査区東端、B05～C05区で検出した(第85・87図、図版28a・b)。平面プランはほぼ円形を呈し、径 $1.4 \times 1.0\text{m}$ 以上、深さ 151cm をはかる。南側に井側の木片が一部残存していた。二段掘りで、埋土は最上層、上層、中層、下層(ブロック土)、最下



第87図 8区 第4層上面 井戸039 遺物出土状況図(1/20)



第88図 第8区 第4層上面 井戸039 断面図 (1/40)

- 1 最上層 5Y6/29Cオリーブ色細砂～粗砂。
- 2 最上層 10YR5/1褐色細砂に、鉄分多く含む。
- 3 上層 2.5Y6/3にぶい黄色細砂に、N5/0灰色粘質土がブロック状に混入し、全体に鉄分多く含む。炭化物微量。土器片含む。
- 4 中層 N5/0灰色粘質土に、2.5Y6/2灰色細砂ブロックが混入し、炭化物少量混入。
- 5 下層 11に同じで、ブロックは小さい。
- 6 最下層1 10Y3/1暗緑灰色微砂。上面に10Y3/1褐色シルト～細砂に、鉄分多く混入。
- 7 最下層2 7.5Y4/2Cオリーブ粘土と50Y6/1オリーブ灰色細砂のラミナ。
- 8 最下層2 6c、7.50Y5/1緑灰色砂質シルトをブロックする。
- 9 最下層3 7.50Y5/1緑灰色粘土(2～3cm)と50Y5/1オリーブ灰色砂のブロック。
- 10 掘り方 4と同じ、全体的に鉄分含む。第8層をブロックする。
- 11 掘り方 10に比べて鉄分の入り方がなく、5Y6/2Cオリーブ砂。第8層を10cmぐらいブロックする。
- 12 掘り方 7.50Y4/1暗緑灰色微砂。
- 13 掘り方 5cに比べて粘質が強い。

層に分けられる(第88図、図版28b)。最下層(第88図6)から大小2点の須恵器広口壺と広口壺の口縁部、須恵器杯B、土師器杯、製塩土器などが出土している(第87図、図版28a)。

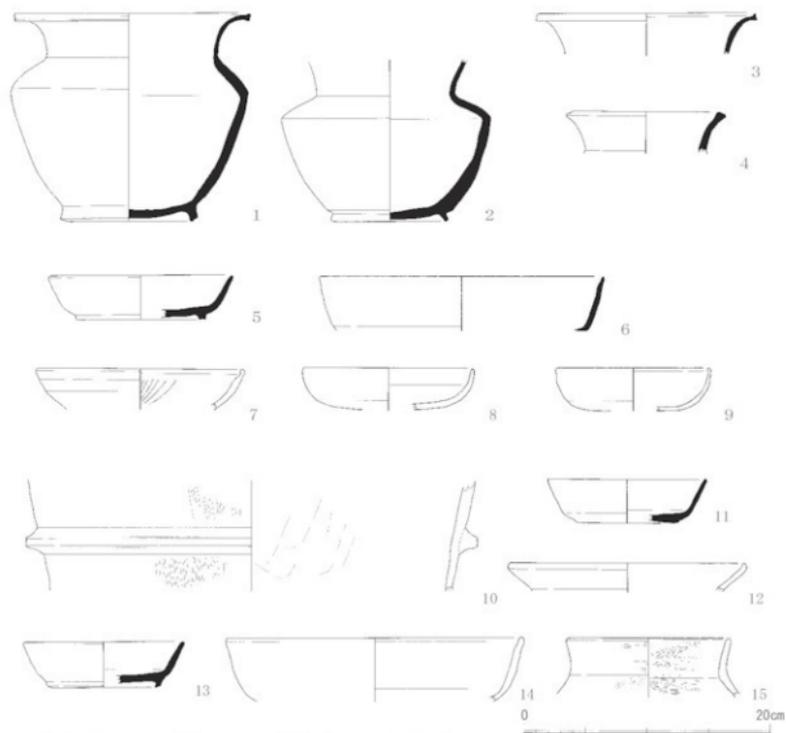
〈出土遺物〉(第89図1～9、第90図、図版45・70・71)

最下層から須恵器広口壺(1～3)・横瓶(4)・杯B(5)、土師器杯(図版71-10・11)、製塩土器、横櫛(図版45-4)、数珠(第90図、図版45-5)、瓢箪、桃核、下層から土師器杯(7～9)・皿(図版71-9)、上層から須恵器杯B(6)が出土している。1～3は須恵器広口壺で、肩部で強く屈曲する体部に、外反して立ち上がる広口の口頸部とハの字形に開く高台をもち、端部は上下に肥厚して面をもつ。1は口径19cm、器高17cm、体部最大径19.3cm、底径10cmをはかる。2は口縁部を欠き、1に比べて腰の低い小型品で、体部最大径17cm、底径9cmをはかる。3は1・2とは別個体で口径17.8cmをはかる。IV型式2段階で、8世紀の中頃に比定される。肩部を中心に自然軸が付着し、内外面は回転ナデ調整を施す。4は横瓶と考えられる口縁部片で、口径11.8cmをはかる。5・6は須恵器杯Bで、5は口径14.9cm、器高3.6cm、底径9.6cmをはかる。6は口径21cmをはかる大型品。7～9・図版71-10・11は土師器杯で、7は口径16.6cmをはかり、内面に放射状の暗文、螺旋状の暗紋が施されている。第89図8は口径12.6cmをはかり、口縁部はヨコナデ、底部内面はナデ、外面は指ナデ調整を施している。第89図9は口径13.6cmをはかり、口縁部はヨコナデ、底部内面はナデ、外面はヘラケズリ後にナデ調整を施している。図版71-10は内面に暗紋、外面に横方向の粗いヘラミガキを施す。図版71-11は内面に密な斜向暗紋を施す。図版71-9は土師器皿で、底部外面はヘラケズリ調整、内面には放射状の暗文を施している。

木製品の樹種については、横櫛(図版45-4)はマンサク科イヌノキ属イヌノキ、数珠(第90図、図版45-5)は広葉樹である。

ビット040・041

調査区東半部、B05区にて検出した。ビット040は径0.35×0.30m、深さ14.8cmをはかる。埋土は10YR5/1褐色細砂で、マンガン少量混入。埋土より土師器片が出土している。ビット041は径0.26×0.34m、深さ5.6cmをはかる。



1～9 (井戸039)、10～12 (土坑075)、13 (土坑031)、14 (ビット074)、
15 (第4層)

第89図 8区 第4層上面 井戸、土坑、ビット、包含層 出土土器 (1/4)

ビット054

調査区中央北側、B04区にて検出した。径0.32m、深さ12cmをはかり、南側は近現代の流路に切られる。

ビット058・059・062・063・067

調査区中央の南寄り、B03～C03区で検出した。ビット058は径0.74×0.50m、深さ24.5cmをはかる。埋土から土師器1、須恵器片1が出土している。ビット059は径0.60×0.40m、深さ25.8cmをはかる。埋土から土師器1片が出土している。ビット062は径0.50×0.45m、深さ18.4cmをはかる。ビット063は径0.50m、深さ17.5cmをはかる。埋土から土師器1片が出土している。ビット067は径0.44m、深さ24.9cmをはかる。



ビット071

調査区中央北側、C04区にて検出した。土坑046に切れ、径0.2m、深さ

第90図 8区
第4層上面 井戸039
出土木製品 (1/2)

3cmをはかる。

ピット074

調査区の西半部、B02区で検出した。径0.448×0.40m、深さ18.1cmをはかる。土坑075を切る。埋土から土師器坏(第89図14、図版70-13)が出土した。

ピット077

調査区の中央やや北寄り、B03区で検出した。径0.42×0.39m、深さ10cmをはかる。

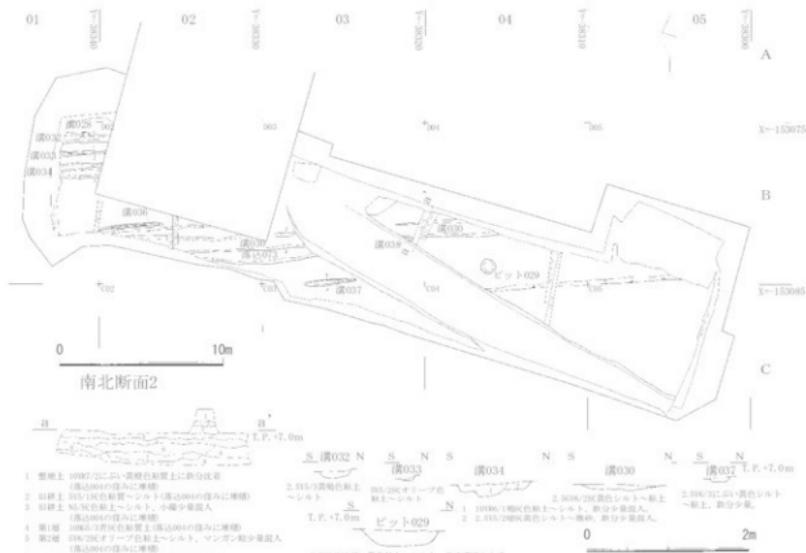
溝045・048

調査区の中央、B04区で検出した。溝045は幅0.44m、長さ1.30m、深さ11.7cmをはかる。層中より土師器の小片が出土している。溝048は幅0.14m、長さ0.5m以上、深さ9.2cmをはかる。掘立柱建物のピット047に切られる。

溝050

調査区の中央、B04～C03・04区で検出した。幅0.72m、深さ24.8cmをはかる(図版27e)。北東-南西方向の溝で、掘立柱建物のピット051に切られる(図版27d)。埋土から土師器7片が出土している。

7) 第3b層上面(中世～近世)



第91図 8区 第3b層上面 遺構平面図(1/300)、断面図(1/60)

東半部の北側部分は落込004によって、T.P. 6.6～6.74mまで削平を受け、7-D区の「第3層」(奈良時代～平安時代)の堆積は認められない。なお、第3b層は7-D区の調査成果から、「第3層」対応と考え、調査を実施している(実際は対応する層は不明)。小溝028・032～034・036～038、ビット029、溝030、落込073を確認している(第91図、図版28c)。

小溝028・032～034・036～038

調査区の西半部、B01～03区にて検出した。東西方向の小溝で、幅0.16～0.94m、幅2.8～18.8cmをはかる。埋土から陶磁器、瓦質土器、瓦器、土師質土器、瓦、須恵器の小片が出土している。

ビット029

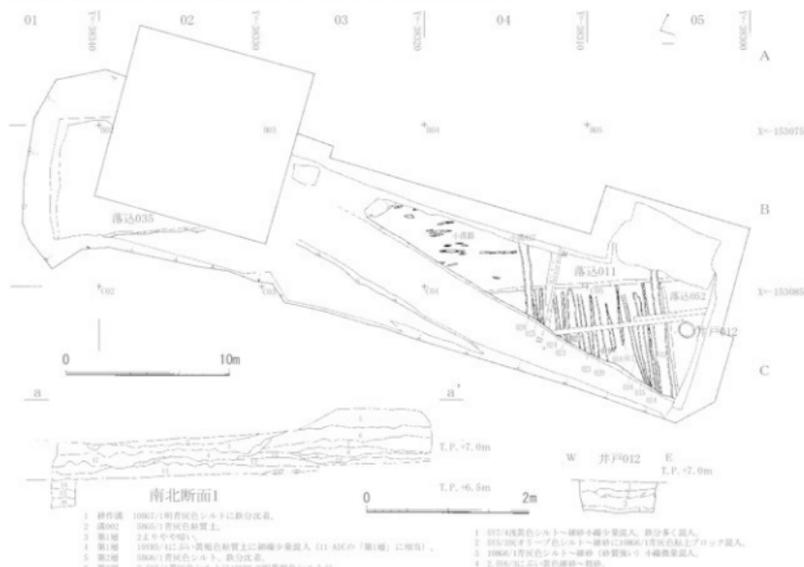
B04区で検出した。平面プランはほぼ円形を呈し、径0.94m、深さ20.9cmをはかる。

溝030

B03～C04区で検出した東西方向の溝で、11区から続く「流路019」に切られる。幅1.0m、深さ14cmをはかる。埋土から土師質土器28、土師器3、須恵器2片が出土している。

落込073

調査区の西南、B02～03区で検出した。幅0.90m以上、長さ7.15m以上、深さ18.2cmをはかる。埋土から瓦器2、土師質土器9、須恵器4片が出土している。



第92図 8区 第2層上面・下面 遺構平面図(1/300)、断面図(1/60)

8) 第2層上面・下面 (近世)

第2層上面で井戸012、小溝群、第2層下面で小溝013～027、落込011・035・052を確認している(第92図、図版29a・b)。検出面の標高はT.P. 6.98～7.45mをはかる。

井戸012

調査区東端、C05区にて検出した。径1.0m、深さ39.9cm以上をはかる。痕跡的に曲物の箆が遺存していた。埋土中から染付(肥前系)、瓦が出土している。時期は18世紀以降と考えられる。

<出土遺物> (第93図5・6)

5は口径9cm、器高3.5cmをはかる肥前系小椀で、コンニャク印判を施す。6は底径4cmをはかる肥前系の椀である。

小溝群

調査区の中央部、B03～04区、落込011の窪みに堆積する第2層上面で検出した。検出レベルはT.P. 6.83～6.87mで、幅0.10～0.15m、深さ1～2cmをはかる東西方向の耕作溝である。

小溝013～027

調査区東半部で検出した。北側は落込004に切られる。11-A区の「落込020」の下面で検出した小溝(第130図)と一連で、幅0.18～0.8m、深さ1.7～13cmをはかる。なお、小溝027は11-A区の「小溝069」に続く。埋土から瓦質土器、瓦器、土師質土器の小片が出土している。

落込011

調査区東半部、B04～05、C04区で検出した。幅3.40m以上、長さ11.1m以上、深さ23.3cmをはかる。

落込035

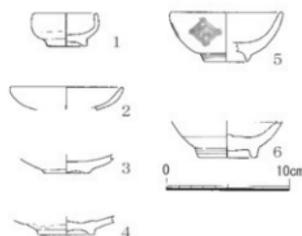
調査区西端、B02区で検出した。幅1.15m以上、長さ5.84m以上、深さ15.7cmをはかる。落込011と一連の遺構の可能性が考えられる。埋土から染付1、丹波焼播鉢1、土師質土器11、土師器1、須恵器3片が出土している。丹波焼播鉢は17世紀第2四半期に比定される。

落込052

調査区東端、B05～C05区で検出した。幅2.0m以上、長さ7.0m以上、深さ12cmをはかる。埋土から土師器2片が出土しているが、混入と考えられ、遺構の時期を示すものではない。

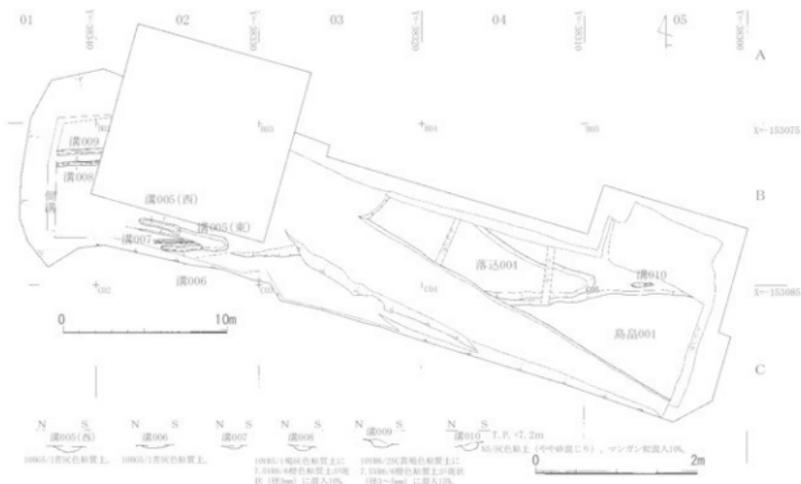
9) 第1層上面 (近世)

島島001、落込004、小溝005～010などを検出している(第94図、図版29c・d)。検出面の



1～3(落込004)、4(第1層)、5・6(井戸012)
*1～3は第1層上面、5・6は第2層下面

第93図 8区 第2層下面～第1層上面
溝、井戸、包含層 出土土器 (1/4)



第94図 8区 第1層上面 遺構平面図(1/300)、断面図(1/60)

標高はT.P.7.0～7.5mである。本体部の「第1面」、2区の「第2面」、7-D区の「第1c層上面」に対応する。第1層上面で寛永通宝(第97図1、図版82-5)が出土している。

島001

調査区の東側、C04・05区及び西端にて検出した。検出面の標高はT.P.7.36mで、幅6.6m以上をはかる。当初、7-D区の「第2層」に対応し、中世に所属すると考え、第2層および第3a層と呼称し、調査していたが、層中より染付碗、唐津碗、青磁、瀬戸美濃焼の天目茶碗、瓦片が出土し、近世以降に下ることが明らかとなる。本体部の「第1-2面」、「第1-3面」で検出している「01104島畠」、2区の「大畠007」と一連の島畠である。

落込004

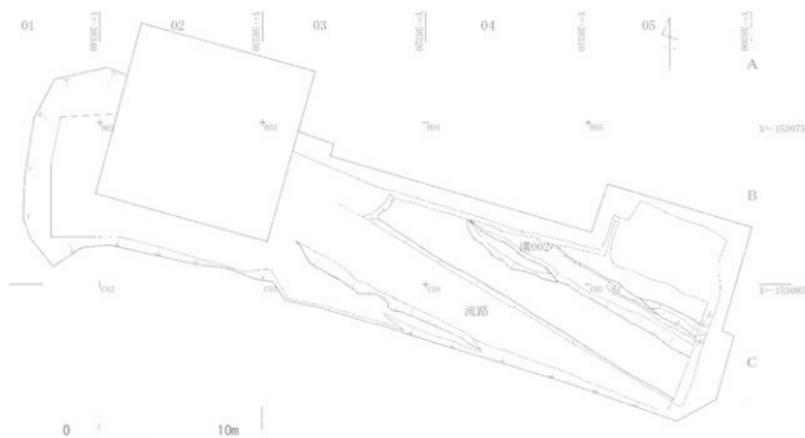
調査区の東側、B04～05、C04区にて検出した。幅3.25m以上、長さ13.9m以上、深さ約65cmをはかる。島畠001の形成時にできた窪地で、埋土中より近世の陶磁器(唐津焼など)が出土している。2区の「落込006」(50頁、第45図)に続くと考えられる。

<出土遺物>(第93図1～3)

1は口径9cm、器高2.7cmをはかる志野焼小坏。2は口径9cm、器高1.9cmをはかる土師質小皿。3は唐津焼皿の底部片である。

小溝005～010

B01・02・05区で検出した東西方向の耕作溝である。検出の標高はT.P.7.01mで、幅0.18～0.65m、深さ3～17.2cmをはかる。埋土は細砂を含む5B4/1暗青灰色粘質土である。調査時は第2層上面で検出した小溝としていた。埋土から瓦器碗、土師質土器の小片が出土している。



第95図 8区 第0層下面 遺構平面図(1/300)

10) 第0層下面(近現代)

第0層下面は近代の操車場造成時の盛土および整地土を除去した面に相当し、上面の標高は東端でT.P.7.42mである。本体部の「第0面、1-1面」、2区の「第1面」、7-D区の「第1a層上面」に対応する。溝002、流路を検出している(第95図、図版29e)。

溝002

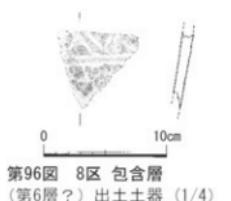
調査区の東側、B03～C05区で検出した。幅1.55～1.85m、深さ38.8cmをはかり、南東-北西方向に走行する。2区の「溝002」、7-D区の「溝006」、11-B区の「溝001」と同じ溝で、北側に1m間隔に角杭を伴う。埋土より陶器、土師質土器、鉄釘、須恵器片などが出土している。

流路

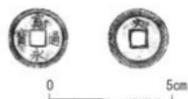
調査区内を南東-北西方向に幅4.0～4.7m、深さ1.1m以上。11-A区の「流路019」と同じ。層中にコンクリート塊、人頭大の礫などを多量に含む。

第3項 小結

8区は、調査の結果、古墳時代初頭から近現代にかけての10枚の遺構面を確認している。第10層上面では古墳時代初頭の浅溝(畝溝)・土坑、第9層上面では古墳時代初頭の溝・土坑を検出している。第9層中からは古墳時代初頭の土器群を検出し、庄内甕5点、壺、高坏、鉢などが1m四方の範囲内にまとめたような状態で出土している。第8層～第6層上面では古墳時代前



第96図 8区 包含層(第6層?) 出土土器(1/4)



第97図 8区 包含層(第1層上面) 出土錢貨(1/2)

期から中期の畦畔・落込を検出している。第5層上面では古墳時代の水田跡、第4層上面では奈良時代の井戸・掘立柱建物・土坑・ピット・溝を検出している。井戸は径約1.4m、深さ約1.51mをはかり、最下層から須恵器広口壺3点、土師器皿、櫛、数珠などが出土している。第3b層上面では平安～鎌倉時代のピット・溝・落込、第2層下面では近世の小溝・落込、第2層上面では近世の井戸・小溝、第1層上面では近世の島畠・落込、第0層下面では近現代の溝・流路を検出した。以上、古墳時代初頭では主に畠地であったのが、古墳時代前期から後期に水田跡に移り変わり、奈良時代～平安時代にかけては集落跡、近世以降は再び耕作地へと変化していく土地利用の様子を明らかにすることができた。

第9節 10区の調査

調査区は、8区の南側、KH2005-65の北側に位置する。10区は、東西で下水管の設置深度がことなり、東半部は第5層上面（T.P. 6.62m）まで、西半部は鋼矢板を打設して、第26層上面（T.P. 3.46m）まで調査を実施している。2011年度には調査区を取り囲むかたちで、11-A区の調査が実施されることになる。そのため、第1層上面から第5層上面の遺構については11-A区の遺構平面図に二桁の遺構番号で追加図示している（第112・115・118・129・130・133・136図）。調査番号は10075。

第1項 層序

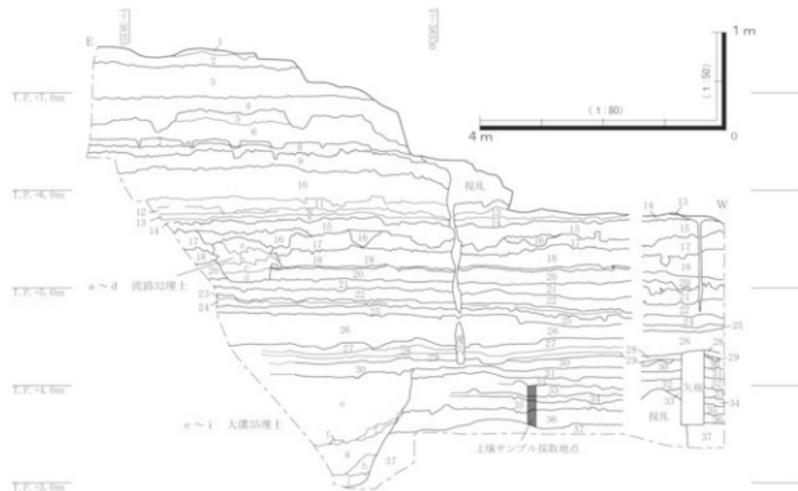
縄文時代から近世に至る第1層～第26層の層序を確認している（第98図、図版30）。

第0層 近世以降の耕作土および近代の操車場設置に伴う盛土・攪乱層で、東端部での上面の標高はT.P. 8.3mで、層厚70～85cmをはかる。

第1層（にぶい黄橙色細粒砂～極細粒砂） 上面の標高はT.P. 7.52～7.56m、層厚10cmをはかる近世の包含層で、上面で小溝群（鋤溝）を検出している。

第2層（灰黄褐色細粒砂～シルト） 上面の標高はT.P. 7.28～7.32m、層厚28～38cmをはかる。東西で堆積状況が異なり、また、包含する遺物にやや時期差が認められる。東半部の第2層はa、bに分かれ、第2a層は近世、第2b層は平安時代の遺物を包含する7-D区の「第2層」に対応する。西半部の第2層は11世紀後半～12世紀前半で、7-D区の「第2層」、11-A区の「第2b層」に対応する。（第100図6・7）は西半部の第2層から出土した。（6）は土師質小皿で、口径9.1cm、器高1.45cmをはかり、口縁端部を内側に折り曲げる「て」字状口縁（図版72-5）である。（7）は瓦器小皿で、口径10.8cm、器高2.85cmをはかる（図版72-4）。

第3層（灰黄褐色細粒砂～シルト） 上面の標高はT.P. 6.96m、層厚15～21cmをはかる。本体部の「第2層」、7-D区の「第1d層～第3層上位」に対応する。層中より土師質土器4、瓦器椀9、土師器57、須恵器5片、そして動物骨（図版72-6）が出土している。



- 1 第0層 田耕土。1016.5/1灰色細粒砂～シルト(全体的に粗粒砂若干混入)。
- 2 第1層 10196.2/3白～黄褐色細粒砂～極細粒砂(全体的に粗粒砂若干混入)。
- 3 第2層 2.516/2黄褐色細粒砂～シルト(全体的に粗粒砂若干混入)。
- 4 第3層 2.516/2黄褐色細粒砂～シルト(全体的に粗～中粒砂少量混入)。層上部に酸化マンガン菌叢の沈着が顕著。
- 5 第4層上 1017.1/1灰色極粗～粗粒砂。
- 6 第4層下 1017.1/1灰白色極粗～粗粒砂。細粒砂ラミナ部分的に混入。全体的に水平方向のラミナを認める。底部には71層の緑灰色シルトブロックを少量含む。7との境界に酸化鉄・マンガンの沈着が顕著。
- 7 第5層 7.5016/1緑灰色シルト。層上面から10～30cmの範囲で鉄分の沈着が顕著。
- 8 第6層 2.5014.5/1オリーブ灰色シルトブロックと、1017/1.5灰白色中～細粒砂ブロックとの5:5の撻拌土?
- 9 第7層 2.5015/1オリーブ灰色シルトラミナと、87/0灰白色粗～中粒砂ラミナとの2:8の互層。西側及び下方へ行くにつれ粗粒化。
- 10 第8層 土平部 2.5014/1オリーブ灰色シルト粗中～細粒砂。下平部 87/0灰白色粗～中粒砂。底部極粗粒砂。全体的に水平方向のラミナを認める。
- 11 第8層 1014/1灰色細～極細粒砂シルト。腐植。炭化物粒状(径2～8mm)若干混入。撻拌土?
- 12 第8層 1017/1～6/1明オリーブ灰色(中～)細粒砂ラミナと、2.5015/1オリーブ灰色シルトラミナとの7:3の互層。いずれも水平方向。
- 13 第8層 2.5016/1明オリーブ灰色シルト～粘土ラミナと、2.5017/1灰色細～極細粒砂ラミナとの7:3の互層。炭化物ラミナ挟在は1%。いずれも水平方向。層上面に腐植を認める。
- 14 第8層 1013.5/1オリーブ黒色シルト。1016/1灰色極細粒砂～シルト小炭状ブロック全体的に2～5%混入。炭化物粒状混入。撻拌土?
- 15 第9層 1014/1灰色極細粒砂部シルトと、2.5016/1オリーブ灰色細～極細粒砂との9:1の撻拌土?
- 16 遺溝埋土 1014/1灰色極細粒砂部シルトと、2.5016/1オリーブ灰色細～極細粒砂との7:3の撻拌土?
- 17 第10層 1014/1灰色極細粒砂部シルトと、2.5016/1オリーブ灰色細～極細粒砂との3:7の撻拌土?
- 18 第11層 5015.5/1オリーブ灰色極細粒砂～シルトラミナと、2.5017/1～6/1明オリーブ灰色細粒砂ラミナとの5:5の互層。いずれも水平方向。
- 19 第11層 2.5016.5/1明オリーブ灰色細粒砂ラミナ(水平)。
- 20 第12層 2.5016/1オリーブ灰色シルト～粘土ラミナと、1014.5/1灰色シルト～粘土(腐植)ラミナと、2.5016.5/1明オリーブ灰色細粒砂ラミナとの5:3:2の互層。腐植若干混入。
- 21 第13層 2.5015.5/1オリーブ灰色シルト～粘土ラミナと、炭化物ラミナ(厚み1～5mm)と、1015/1灰色シルト～粘土(腐植)ラミナとの7:2:1の互層。いずれも水平方向。炭酸ノジュール。
- 22 第14層 1014/1灰色シルト～粘土(腐植)。腐植片(厚さ1mm)水平方向～断片的に1%混入。炭酸ノジュール。
- 23 第15層 1014/1灰色シルト～粘土(腐植)。1016/1.5/1明緑灰色シルト中の成分小炭状ブロック(径3～5mm)3～3%混入。水平方向のラミナを認める。
- 24 第15層 1012.5/1オリーブ黒色シルト～粘土(25%土成分に炭化物が撻拌されて黒味を帯びたもの)。1016/1.5/1明緑灰色シルト(25の成分)小炭状ブロック(径3～5mm)全体的に30～35%混入。撻拌土?
- 25 第16層 1016/1.5/1明緑灰色シルト。1017/1灰白色粗～中粒砂(26の成分)ラミナ部分的に混入。全体的に腐植片が1%混入。
- 26 第17層 1017/1灰白色極粗～粗粒砂。1016/1灰色極細粒砂～シルトラミナ挟在。水平方向のラミナを認める。
- 27 第18層 5015/1緑灰色シルト～粘土(腐植)ラミナとの互層。腐植若干混在。下部に1017/1灰白色シルトブロック(径5～10mm)20%。最下部に炭化物ラミナ10%。いずれも水平方向。炭酸ノジュール。
- 28 第18層 1013.5/1灰色極細粒砂シルト(腐植)。腐植片10%全体的に混入。
- 29 第18層 1015.5/1灰色極細粒砂シルト(腐植)。炭化物粒状(径2mm)7～10%。1017/1灰白色シルトブロック(径2mm)7～10%混入。撻拌土?
- 30 第19層 1015/1灰色シルト～粘土。腐植片2～3%混入。
- 31 第20層 1012/1オリーブ灰色シルト～粘土。1016/1.5/1明緑灰色シルト～粘土ブロック(径5mm)小炭状20～30%混入。層上部は中粒砂が顕著。撻拌土?
- 32 第21層 1013.5/1緑灰色シルト～粘土ブロックと、1014/1灰色シルトブロックとの7:3の撻拌土(こなれていない)。
- 33 第22層 7.513/1オリーブ黒色シルト～粘土。1015.5/1緑灰色シルト～粘土ブロック(径3～5mm)小炭状に10～10%混入(こなれている)。撻拌土?
- 34 第23層 1013.5/1緑灰色シルト～粘土ブロックと、1014/1灰色シルトブロックとの7:3の撻拌土(こなれていない)。
- 35 第24層 7.513/1オリーブ黒色シルト～粘土(粗～中粒砂少量含む)。7.5016/1緑灰色シルトブロック(径3～5mm)小炭状に7～10%混入。腐植全体的に少量含む。撻拌土?
- 36 第25層 7.5016/1緑灰色(粗～)極細粒砂～シルト。7.5013/1オリーブ黒色シルト～粘土ブロック炭状に20～30%混入。撻拌土?。
- 37 第26層 2.5017/1明オリーブ灰色粗～中～細粒砂。水平方向のラミナを認める。

第98図 10区 西平部南壁断面図(1/80・1/50)

第4層 上下2層に分けられる。第4層上(灰白色極粗～粗粒砂)上面の標高はT.P. 6.8m、層厚10cmをはかる。第4層下が耕作行為によって攪拌されたものと思われ、上面で小溝を検出している。本体部の「第2層～第3-1層」、8区の「第4a層」に対応する。第4層下(灰白色極粗～粗粒砂)は氾濫堆積層で、上面の標高はT.P. 6.76～6.8m、層厚20～26cmをはかる。01-4調査区の「18～19(3b層)」、本体部の「第3-3b層」、8区の「第4c～d層」に対応する。層中より土師器、須恵器の小片が出土している。古墳時代後期に相当する。

第5層(灰黄色～緑灰色シルト) 上面の標高はT.P. 6.38～6.53m(東から西へ向かってやや傾斜)、層厚7cmをはかる。東半部については第5層上面で調査を終了している。本体部の「第4-1層」、01-4調査区の「20(4-1層)」、KH2005-65の「7～12層」に対応する。層中より6世紀前半の須恵器坏蓋が出土している。古墳時代後期に相当する。

第6層 a・bに分けられる。第6a層(灰褐色微砂～シルト)上面(西端)の標高はT.P. 6.7mで、層厚10cmをはかる。西半部では氾濫堆積土(第4層下)の浸食により認められない。2区の「第7層」、01-4調査区の「21層」に対応する。第6b層(オリーブ灰色シルト)上面の標高はT.P. 6.47～6.5m、層厚10cmをはかる。01-4調査区の「23層」、6区の「第5層」、7-D区の「第6層」に対応する。第100図4は第6層以下から出土した生駒西麓産の胎土をもつ庄内形甕であるが、下の層からの混入と思われる(図版72-2)。古墳時代中期から後期に相当すると想定される。

第7層(オリーブ灰色シルトラミナ～灰白色粗・中粒砂ラミナ) 上面の標高はT.P. 6.4～6.3mで、層厚20～23cmをはかる。2区の「第8層」、6区の「第6層」、01-4調査区の「24層」に対応する。層中より土師器8片が出土している。古墳時代前期に相当すると考えられる。

第8層 4つ(第8a層、第8b層、第8b'層、第8c層)に分けられる。第8a層(灰オリーブ色シルト～細粒砂)上面の標高はT.P. 6.17～6.0mで、層厚さ35cmをはかり、2区の「第9層上」、本体部の「第4-2層」、01-4調査区の「25・26(4-2層)」に対応する。第8b層(灰色細粒砂～シルト)上面の標高はT.P. 5.9～5.86mで、層厚15～20cmをはかり、2区の「第9層下」、01-4調査区の「28(4-2b層)」に対応する。層中より土師器片1が出土している。第8b'層(明オリーブ灰色シルト～粘土ラミナ)上面の標高はT.P. 5.8～5.58mで、層厚5～12cmをはかり、8区・11-A区の「第8b'層」に対応する。第8c層(オリーブ黒色シルト)上面の標高はT.P. 5.76mで、層厚5～10cmをはかり、01-4調査区の「29～31(5-1層)」、8区・11-A区の「第8c層」に対応する。層中より土師器の小片とともに庄内形甕(第100図2、図版72-3)が出土している。古墳時代前期に相当する。

第9層(灰色極細粒砂混じりシルト) 上面の標高はT.P. 5.7mで、層厚15～20cmをはかる。2区の「第10面」、8区の「第9層」、01-4調査区の「32(5-2層)」、KH2005-65の「23層」に対応する。層中から古墳時代前期の土師器甕・壺・高坏などが出土している。

第10層(灰色極細粒砂混じりシルト) 上面の標高はT.P. 5.62～5.55m、層厚20cmをはかる。2区の「第10面下層」、3-E区の「第10層」、本体部の「第5-2b(1)」、01-4調査区の「34層」、

KH2005-65の「第25層」、東西線の「2・3・5区4面、7区6面」に対応する。層中から古墳時代前期の土師器片が出土している。上面で9条の畝間溝（小溝と呼称）を検出している（第99図f、図版32a）。古墳時代初頭に相当する。

第11層（オリーブ灰色極細粒砂～シルトラミナ） 上面の標高はT.P.5.42mで、層厚18～20cmをはかり、01-4調査区の「36（5-2b層）」、KH2005-65の「第26層」、2区の「第10層」に対応する。上面で流路32を検出している。

第12層（オリーブ灰色シルト～粘土ラミナ） 上面の標高はT.P.5.24～5.20mで、層厚3～4cmをはかり、01-4調査区の「37層」、本体部の「第5-2b層」、KH2005-65の「第27層」、2区の「第10層」に対応する。

第13層（オリーブ灰色シルト～粘土ラミナ、炭化物ラミナ） 上面の標高はT.P.5.10～5.04mで、層厚10～17cmをはかり、01-4調査区の「38層」、本体部の「第5-2b層」、KH2005-65の「第28層」、2区の「第11層」に対応する。西端部の上面で足跡を確認している。

第14層（灰色シルト～粘土） 上面の標高はT.P.4.9～5.02mで、層厚12～14cmをはかり、01-4調査区の「39層」、本体部の「第5-2b層」、KH2005-65の「第29層」、2区の「第11層」に対応する。

第15層（灰色シルト～粘土） 上面の標高はT.P.4.79～4.94mで、層厚5～10cmをはかる。層中に青粘の細かなブロックを含むことから、作土の可能性が考えらる。01-4調査区の「40（6-1層）」、KH2005-65の「第31層」、1区の「第7面」、2区の「第11層」に対応する。弥生時代後期に相当する。

第16層（暗青色小礫混じり粘質土） 上面の標高はT.P.4.7～4.81mで、層厚7～11cmをはかり、2区の「第11層（第24図40）」、01-4調査区の「41層」、KH2005-65の「第32層」に対応する。上面で落込を検出している。

第17層（灰白色粗粒砂～シルトラミナ挟在） 上面の標高はT.P.4.75～4.63mで、層厚14～36cmをはかり、2区の「第11層（第24図41）」、01-4調査区の「42（6-1b層）」、KH2005-65の「第34層」に対応する。

第18層 a～cに分けられる。第18a層（緑灰色細粒砂～灰色シルト～粘土の互層） 上面の標高はT.P.4.49mで、層厚7～10cmをはかり、2区の「第12層」、01-4調査区の「50（6-2層）」、に対応する。第18b層（灰色極細粒砂～灰色シルト） 上面の標高はT.P.4.42mで、層厚6～9cmをはかり、01-4調査区の「51（6-2b層）」に相当する。上面で弥生時代後期初頭の壺形土器体部片が出土した（図版31e～g）。壺形土器（第100図3、図版72-7）は体部下半のみ遺存し、内面の下半は細いハケメ、中位はハケメ後にナデ調整、外面は縦方向のヘラミガキ調整を施す。第18c層（灰色極細粒砂～灰色シルトに炭化物混ざる） 上面の標高はT.P.4.33m、層厚4～7cmをはかり、01-4調査区の「57（7-2層）」に対応する。上面で溝1条を検出している。

第19層（灰色シルト～粘土） 上面の標高はT.P.4.29～4.3mで、層厚12～16cmをはかる。

01-4 調査区の「58 (8層)」に対応する。弥生時代前期に相当する。

第20層 (オリーブ黒色シルト～粘土) 上面の標高はT.P. 4.15～4.2mで、層厚10～13cmをはかる。上面で弥生時代前期の大溝を検出している。2区の「第13層」、01-4調査区の「76 (8b層)」、KH2005-65の「第41層」に対応する。弥生時代前期に相当し、2区の調査では土坑、ピット、溝が検出されている(28頁、第25図)。

第21層 (緑灰色シルト～粘土) 上面の標高はT.P. 4.1mで、層厚9～11cmをはかる。01-4調査区の「77 (8b層)」に対応する。弥生時代前期に相当する。

第22層 (オリーブ黒色シルト～粘土) 上面の標高はT.P. 3.97～4.02mで、層厚8～12cmをはかる。01-4調査区の「78 (9層)」、KH2005-65の「第42層」に対応する。上面で畦畔37を検出している。縄文時代に相当する。

第23層 (緑灰色シルト粘土) 上面の標高はT.P. 3.9～3.93mで、層厚4～8cmをはかる。01-4調査区の「79層」、KH2005-65の「第43層」に対応する。縄文時代に相当する。

第24層 (オリーブ黒色シルト～粘土) 上面の標高はT.P. 3.82～3.9mで、層厚8～13cmをはかる。01-4調査区の「80層」、KH2005-65の「第44層」に対応する。上面で畦畔36を検出している。縄文時代に相当する。

第25層 (緑灰色極細粒砂～シルト) 上面の標高はT.P. 3.75mで、層厚10～25cmをはかる。本体部の「第9b層」、01-4調査区の「81 (9b層)」、KH2005-65の「第45層」に対応する。縄文時代に相当する。

第26層 (明オリーブ灰色粗～細粒砂) 上面の標高はT.P. 3.66mで、01-4調査区の「82層」、KH2005-65の「第46層」に対応する。縄文時代に相当する。

第2項 調査成果

1) 第24層上面 (縄文時代)

畦畔36を検出している(第99図a、図版31a)。検出面の標高はT.P. 3.82～3.9mをはかる。01-4調査区の「80層上面」、KH2005-65の「第44層上面」に対応する。

畦畔36

調査区西半部の西寄り、D02区で検出した。幅0.7～1.0m、高さ5cmをはかる。土壌分析の結果、水田畦畔の可能性は低いというデータが得られている。また、放射性炭素年代測定の結果、3350～3210年前という値がでている(分析編第4章第3節参照)。

2) 第22層上面 (縄文時代)

畦畔37を検出している(第99図b)。検出面の標高はT.P. 3.97～4.02mをはかる。01-4調査区の「76 (9層) 上面」、KH2005-65の「第42層上面」に対応する。

畦畔37

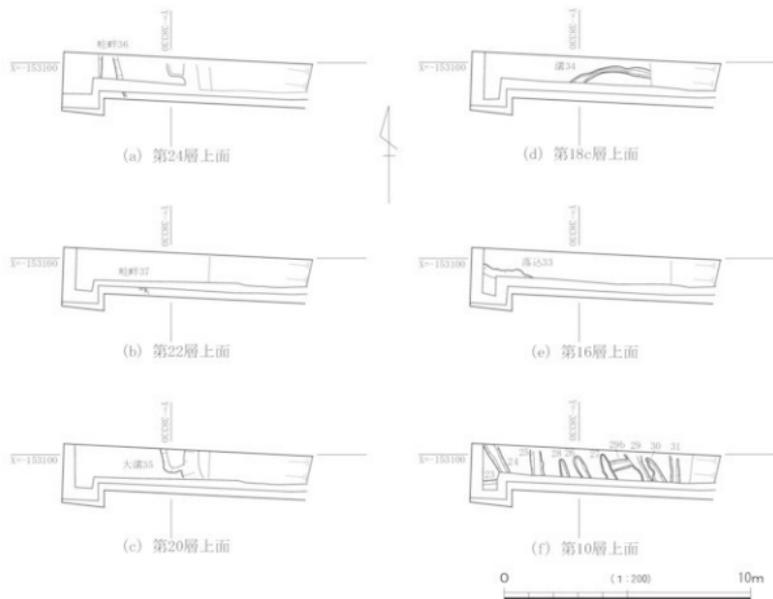
調査区西半部の中央、D02区で検出した。幅0.3m、高さ4.8cmをはかる。土壌分析の結果、水田畦畔の可能性は低いというデータが得られている（分析編第4章第3節参照）。

3) 第20層上面（弥生時代前期）

大溝35を検出している（第99図e、図版31b・c）。検出面の標高はT.P. 4.15～4.2mをはかる。2区の「第13面」、01-4調査区の「76（8b層）上面」、KH2005-65の「第41層上面」に対応する。

大溝35

調査区西半部の東寄り、D02～03区で検出した南北方向の大溝で、幅2.0m以上、深さ120cmをはかる。埋土は5層（e～i）に大別される（第98図）。埋土は5層（e～i）に大別される（第98図）。eは2.5GY7/1明オリーブ灰色細粒砂ブロック（径10～25mm）と、5GY6/1緑灰色シルトブロック（径10～25mm）と、5Y3/1オリーブ黒色シルト～粘土ブロック（径10～25mm）との3:4:3の混合土で、突帯文土器が出土した。fは2.5GY7/1明オリーブ灰色細粒砂ブロック（径10～25mm）と、5GY6/1緑灰色シルトブロック（径10～25mm）と、5Y3/1オリーブ黒色シルト～粘土ブロック（径10～25mm）との6:2:2の混合土。gは7.5Y3/1オリーブ黒色シルトに、5GY6/1緑灰色シルトブロック（径1～5mm）15%、2.5GY7/1明オリーブ灰色細粒砂ブロック（径5mm）1%、炭化物粒状（径1～2mm）3～5%混入。ラミナなし。第20層によく似る。hは



第99図 10区西半部 第24・22・20・18c・16・10層上面 遺構平面図（1/200）

5Y6/1 灰白色中～細粒砂に、7.5Y3/1 オリーブ黒色シルトブロック（径10mm前後）5～7%混入（上部に顕著）。2.5Y5/2 暗灰黄色シルト～粘土ブロック（径10～25mm、腐植）30～40%混入。2.5GY7/1 明オリーブ灰色シルトブロック（径10mm前後）2～3%混入。iは5Y6/1 灰色中～細粒砂（ラミナ見えず）に、2.5Y5/2 暗灰黄色シルト～粘土ブロック（径10～25mm、腐植）5～7%、2.5GY7/1 明オリーブ灰色シルトブロック（径10mm前後）3～5%混入。e・fは埋め立て土、gは機能時の堆積土、h・iは肩崩れの二次堆積土と考えられる。

KH2005-65の「SD602」、01-4調査区の「080883」と同一の大溝である。なお、2区で検出された「溝085」はほぼ同時期の遺構である。

<出土遺物>（第100図1、図版72-1）

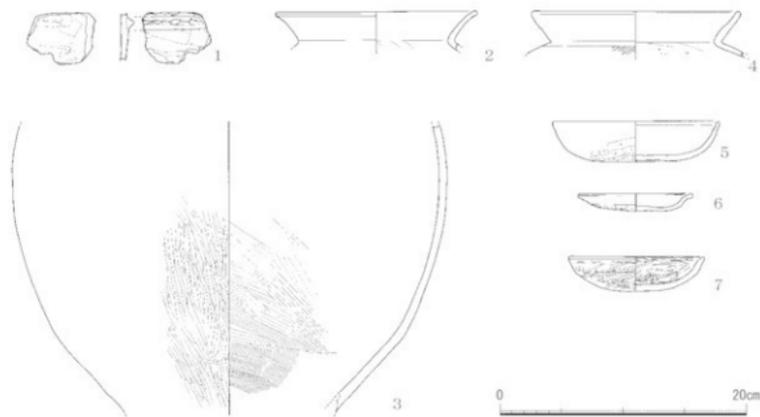
突帯文土器（1）は胴部突帯付近の破片で、突帯上面に刻み目を加えている。体部外面はケズリ調整を施す。長原式（新）に比定される。

4) 第18c層上面（弥生時代中期）

溝34を検出した（第99図d、図版31d）。検出面の標高はT.P. 4.33mをはかり、01-4調査区の「57（7-2層）上面」に対応する。

溝34

調査区西半部、D02～03区で検出した。幅0.2m、深さ9cmをはかる。埋土は第18b層で、10Y5.5/1 灰色極細粒砂～シルト（腐植）に、腐植片10%全体的に混入する。



1（大溝35）、2（第8c層）、3（第18b層上面）、4（第6層以下）、5（溝21）、6（第2層）

*1は第20層上面、5は第4層上面

第100図 10区 大溝、溝、第18b層上面、包含層 出土土器（1/4）

5) 第16層上面(弥生時代後期)

落込33を検出した。検出面の標高はT.P.4.7～4.81mをはかる。01-4調査区の「41層上面」、KH2005-65の「第32層上面」に対応する。

落込33

調査区南西隅、D02区で検出した(第99図e)。南肩は調査範囲外で、幅1.0m以上、深さ6.2cmをはかる。埋土は10Y3.5/1オリーブ黒色シルト～粘土(第15層の主成分に炭化物が攪拌されて黒味を帯びたもの)。10GY6.5/1明緑灰色シルト(第16層の成分)小斑状ブロック(径3～5mm)全体的に30～35%混入する。

6) 第11層上面(古墳時代初頭)

流路32を検出した。検出面の標高はT.P.5.42mをはかる。01-4調査区の「36(5-2b層)上面」、KH2005-65の「第26層上面」に対応する。

流路32

西半部の東寄りで見出した。幅1.1m、深さ55cmをはかる(第98図)。埋土はa～dに分層でき、aは10Y4/1灰色シルトブロックと、2.5GY6/1オリーブ灰色(極粗～)中粒砂ブロックと、2.5GY6/1オリーブ灰色シルトブロックと、2.5GY7/1灰白色中～細粒砂ブロックの4:3:2:1の混合土で、淘汰は不良である。bは2.5GY6.5/1オリーブ灰色中粒砂で、部分的にラミナを認める。cは2.5GY6/1オリーブ灰色極粗粒砂。dの上位は2.5GY6.5/1オリーブ灰色細～極細粒砂と腐植ラミナ(幅1～2mm)の互層、中位は5Y3/1オリーブ黒色シルト～粘土、下位は7.5Y4/1灰色シルト～粘土と、7.5Y7/1灰白色細粒砂ラミナの8:2の互層。

7) 第10層上面(古墳時代初頭)

9条の畝間溝(小溝と呼称)を検出している(第99図f、図版32a)。検出面の標高はT.P.5.62～5.55mをはかる。第10層は8区・11-A区の「第10層上面」、2区の「第10面下層」、3-E区の「第10層上面」、本体部の「第5-2b(1)面」、01-4調査区の「34層上面」、KH2005-65の「第25層上面」、東西線の「2・3・5区4面、7区6面」に対応する。

小溝23～31

西半部、D02・03区に位置する。東西方向(小溝23・29b)、南北方向(小溝24～31)の畝間溝で、幅0.25～0.47m、深さ6～19cmをはかる。埋土は10Y4/1灰色極細粒砂混シルトと、2.5GY6/1オリーブ灰色細～極細粒砂との7:3の攪拌土。層中より土師器の小片が出土している。8区の調査では古墳時代初頭(庄内式)の土師器甕・壺(第79～80図)などが出土している(第76図)。

8) 第5層上面(古墳時代後期)

土坑22、多数の足跡を検出している(第112図)。本体部の「第4-1面」、2区の「第6面」、

7-D区の「第4層上面」に対応する。検出面の標高はT.P.6.38～6.53mをはかる。

土坑22

東半部、D05区に位置する。東側は調査区外で、南北1.15m、東西0.5m以上、深さ17.3cmをはかる。埋土は2.5Y6.5/1黄灰色シルト混じり極粗～粗～中粒砂で、灰白色シルトがブロック小斑状に3～5%混入する。埋土から6世紀前半の須恵器坏蓋が出土している。

9) 第4層上面（奈良時代～平安時代）

小溝16・17・19、溝20・21、土坑18を検出した（第115・118図、図版32b～d）。2区の「第4面～第5面」、7区の「第3層中～下位上面」に対応する。検出面の標高はT.P.6.8mをはかる。

小溝16・17・19

西半部、D03区に位置する南北方向の溝で、幅0.38～0.45m、深さ15～17cmをはかる。埋土は2.5Y6/2灰黄褐色細粒砂～シルト（全体的に粗～中粒砂少量混入）である。

土坑18

西半部、D03区に位置する。西側は近現代の流路（11-A区の「流路017」）に切られ、東西0.7m以上、南北0.35m以上、深さ31cmをはかる。埋土は2.5Y6/2灰黄褐色細粒砂～シルト（全体的に粗～中粒砂少量混入）である。

溝20

東半部、D05区に位置する。南北方向の溝で、幅0.93m、深さ15cmをはかる。埋土は2.5Y7/1灰白色シルト混中～細粒砂で、底部に粗粒砂が顕著である。

溝21

東半部、D05区に位置する。南北方向の溝で、幅0.69m、深さ12cmをはかり、北側は11-A区の「溝175」に続く。埋土は2.5Y7/1灰白色シルト混中～細粒砂に10YR4/1褐灰色シルトブロック（径30～50mm）を全体的に1～2%混入する。層中より8世紀の土師器坏（第124図5）、須恵器大甕片が出土している（図版32d）。出土遺物は11-A区の「溝175」で扱う（142・146頁参照）。

10) 第3層上面（平安時代）

東半部で小溝06～12、西半部で小溝13・15を検出している（第129・130、図版32e・f）。検出面の標高はT.P.6.96mをはかる。7-D区の「第1d層～第3層上位上面」に対応する。

小溝06～12

東半部、D05区に位置する。東西方向の溝で、幅0.12～0.26m、深さ約4cmをはかる。埋土は2.5Y6/3にぶい黄色シルト混り中～細粒砂（全体的に極粗～粗粒砂1%以下含む）に、2.5Y7.5/3浅黄色シルト粒状ブロック（径10mm）1～2%混入する。

小溝13・15

西半部、D03区に位置する。東西方向の溝で、幅0.15～0.29m、深さ3～4cmをはかる。埋土

は小溝 06～12 と同じ。

11) 第2層上面(平安時代～近世)

東半部第2a層上面で落込01、溝02、西半部第2層上面で杭跡03・04を検出している(第133図、図版32g)。検出面の標高はT.P. 7.28～7.32mをはかる。

落込01

東半部の北東隅、D05区に位置する。幅2.8m以上、深さ65cmをはかる。11-A区の「落込020」と同一遺構である。埋土は3層に分けられ、上層は2.5Y6/2灰黄色シルト混り中～細粒砂。中層は2.5Y6/2灰黄色シルト混り中～細粒砂で、極粗～粗粒砂1%以下含む。下層は2.5Y6/3にぶい黄色シルト混り中～細粒砂で、10YR6/5にぶい黄橙色細粒砂混りシルトブロックを小斑状に5～7%混入する。層中より近世の染付をはじめ、磁器2、陶器6、瓦質土器2、瓦器4、土師質土器16、瓦6、唐津焼、志野焼、須恵器5片が出土している。

溝02

東半部の南東隅、D05区に位置する。南肩は調査範囲外で、幅0.8m以上、深さ10cmをはかる。11-A区の「溝027」と同一遺構である。埋土は落込01の上層と同じ。

杭跡03・04

西半部、D03区に位置する。杭跡03は径0.15m、深さ47cm、杭跡04は径0.13m、深さ14cmをはかる。埋土は10Y5/1粗～中粒砂混り極細粒砂～シルトで、酸化鉄斑紋が若干沈着している。杭跡04から瓦器椀1、土師質土器1片が出土している。

12) 第1層上面(近世～近代)

操車場建設時の盛土、近代耕作土を除去した面で、本体部の「第1-1面」に対応する。小溝群を検出している(第136図、図版40b・c)。検出面の標高はT.P. 7.52～7.56mをはかる。

小溝群

東半部、D05区、旧耕作土除去後に検出した。東西方向の小溝で、幅0.1m前後、深さ5～10cmをはかる。埋土は2.5GY6/1オリーブ灰色中～細粒砂である。

第3項 小結

10区は、調査の結果、第1層～第26層の層序(縄文時代から近現代)を確認し、弥生時代前期から近世にかけての12枚の遺構面を検出している。縄文時代の第24層、第22層上面では畦畔(第4章第3節の自然科学分析によって、水田畦畔の可能性が低いという結果)、第20層上面では弥生時代前期の大溝、第18c層上面では弥生時代中期の溝、第18b層上面では弥生時代後期初頭の土器、第16層上面では弥生時代後期の落込、第11層上面では古墳時代初頭の流路を検出している。第10層～第1層までは8区と同じ堆積状況を示し、第10層上面では古墳時代初頭の

小溝（畝間溝）、第5層上面では古墳時代後期の土坑・水田跡に伴う足跡、第4層上面では奈良時代～平安時代の小溝・溝・土坑、第3層上面では平安時代の小溝、第2層上面では平安時代～近世の落込・溝・杭跡、第1層上面で近世～近代の小溝群を検出した。

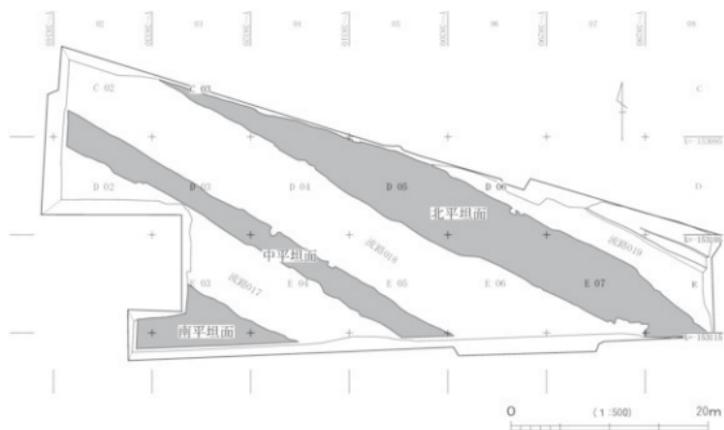
なお、第10層上面で検出した小溝（畝間溝）は、8区を含めて竜華水みらいセンター敷地内のほぼ全域及び東西線においても確認され、古墳時代初頭には大規模な畠地が周辺一帯に広がっていることがより鮮明となった。

また、第20層上面で検出した大溝は、周辺の調査でも同一面と考えられる面で検出されているが、出土遺物から遺構の時期を決定することが出来なかった。今回見つかった大溝出土の長原式の突帯文土器（第100図1）の存在から、少なくとも弥生時代前期の中頃に人為的に埋められたことが明らかとなった。

第10節 11区の調査

竜華水みらいセンター場内整備工事に先立つ調査で、A～Dの4地点に分かれている。C・Dは掘削深度が中世包含層まで達しないことから、立会調査とした。発掘調査部分は11-A区、11-B区と呼称し、11-A区はT.P.6.3～6.5m、11-B区はT.P.6.8mまで調査を実施している。なお、11-A区の調査終了後、西側で放流部の工事が追加され、西拡張区とし、第3層上面（工事深度）まで調査を実施した。以下、地点ごとに記述する。調査番号は11001。

(1) 11-A区



第101図 11-A区 区割図 (1/500)



第102図 11-A区 断面位置図 (1/500)

調査区は南東から北西方向の走行する近現代の流路 017～019 によって分断されていた。遺物の取り上げ、遺構の位置を表示するにあたっては、流路 017 の以南を「南平坦面」、流路 017 と 018 の間を「中平坦面」、流路 018 と 019 の間を「北平坦面」と呼称する（第 101 図）。地区割りには 8 区に準じている。

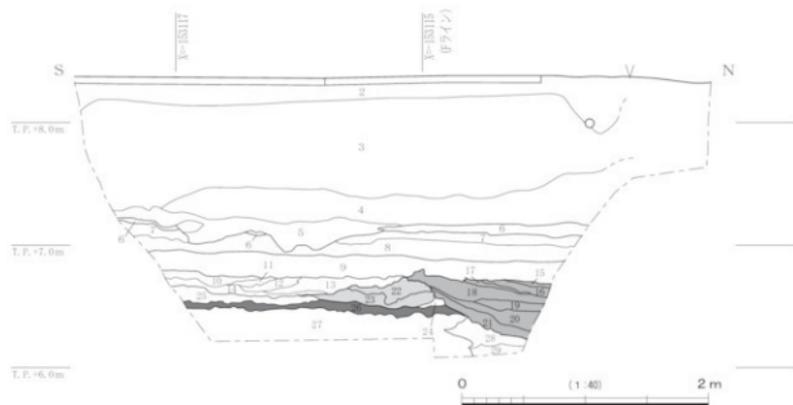
第 1 項 層序

調査は第 7 層上面まで実施し、南側の一部で第 8 層を確認している（第 103～108 図、図版 33c）。概ね 8 区、10 区と同じ層序である。

第 0 層 操車場廃絶後の整地土、操車場建設時の盛土および近代の耕作土で、本体部の「第 0 層」に対応し、上面の標高は T.P. 8.25～8.47m、層厚 90～130cm をはかる。

第 1 層（明黄褐色土～灰白色砂質土） 上面の標高は T.P. 7.2～7.6m、層厚 10～20cm をはかる。上面で落込 023、小溝群を検出している。7 区の「第 1c 層」に対応する。層中より染付 5、青花 1、陶磁器 3、瓦質土器 6、瓦器碗 24、土師質土器 40、白磁 2、東播系土器 2、瀬戸美濃焼 1、備前焼 1、志野焼 1、瓦 18、土師器 6、須恵器 1 片などが出土している。

第 2 層 上面の標高は T.P. 7.20～7.56m で、層厚 10～52cm をはかる。地点によって堆積状況（幾度となくの整地）が異なり、平面的に層の連続性を把握することはほとんど不可能であった。それでも大きく 2 つに分けられる。第 2a 層（にぶい黄橙色細粒砂～シルト）と第 2b 層（灰黄色細粒砂～シルト）で、北側断面（第 104 図参照）の検討から、第 2b 層は島畠、第 2a 層は島畠を整地した堆積土と考えることもできる。第 2a 層は C～F04 区以東（高まり 028 を除く）に堆積

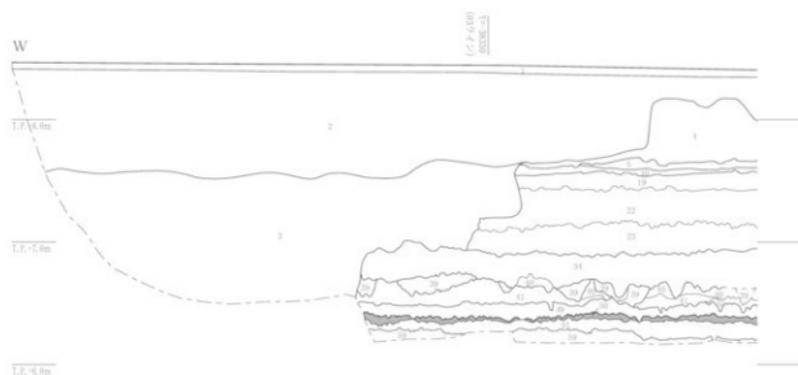


- 1 第0層 アスファルト
- 2 第0層 跡盤
- 3 第0層 7.5GY/1暗緑灰色粘土ブロック+5GY/1オリーブ灰色粘質土。こぶし大～2cm前後の塊を含む。
- 4 第0層 5Y4/2Rオリーブ色砂質土に5GY/1暗オリーブ灰色粘土塊(2～3cm前後)、1～2cm前後の塊を含む。整地土。
- 5 第0層 5BG/1青灰色砂質シルト。上面に5Y4/2Rオリーブシルトが来る。
- 6 1層土 5BG/1暗青灰色粘質土。1cm前後の塊を含む。
- 7 第2層 2.5GY/1オリーブ灰色細粒砂～シルト。極粗～粗粒砂全体の7～10%混入。特に下部に多い。淘汰不良。鉄分により、10YR系に多い黄褐色を帯びる。
- 8 第2021 10BG/1青灰色(細粒砂～)微砂～シルト。極粗～粗粒砂全体の5～7%混入。淘汰不良。鉄分により、7.5YR系橙色を帯びる。
- 9 第2029 10BG/1青灰色細粒砂～シルト。極粗～粗粒砂全体の10%混入。淘汰不良。鉄分により、10YR系に多い黄褐色を帯びる。15と同じか?色を帯びる。
- 10 第4層 10Y7/1R灰色細粒砂～シルト。粗～中粒砂ブロック状に5～7%混入。ラミナは不明。鉄分により、7.5Y系オリーブ黄色を帯びる。10BG/1青灰色細粒砂～シルトブロック20～25%混入。
- 11 第4層 7.5Y7/1R灰色細粒砂と、2.5Y5.5/2Rオリーブ色微砂～シルトブロック(径10mm以下)の混合土(5:5)。
- 12 第4層 10Y6/1灰色極粗～粗粒砂(～中粒砂)。上部に10BG/1青灰色細粒砂～シルトブロック少量混入。
- 13 第4層 10BG/1青灰色中～細粒砂。背面～斜角で粗粒化し、極粗～粗粒砂10%混入。底部シルト混じり。
- 14 第4層 5Y6.5/1灰色微砂～シルト。上部所々粗粒化(2.5Y5/1)。その一方で、灰白色細粒砂ラミナが部分的に挟在する。北平は10GY/1緑灰色シルトと灰白色細粒砂ラミナの互層。
- 15 流路253 10BG/1青灰色細粒砂～シルト。
- 16 流路253 10Y7/1青灰色細粒砂。上部に極粗～粗粒砂ラミナを認める。
- 17 流路253 10Y5.5/1緑灰色微砂～シルト。
- 18 流路253 10BG/1青灰色細粒砂(～シルト)。極粗～粗粒砂水平ラミナ2～3%。
- 19 流路253 2.5GY7/1明オリーブ灰色中～細粒砂ラミナと、10Y6/1灰色微砂～シルトラミナの互層。上半部極粗(～粗粒砂)50%。
- 20 流路253 10Y7/1R灰色細粒砂ラミナと、10Y6/1灰色微砂～シルトラミナの互層。下部、極粗(～粗粒砂)25～30%。
- 21 流路253 10Y7/1R灰色細粒砂ラミナと、10Y6/1灰色微砂～シルトラミナの互層。下部、極粗(～粗粒砂)5～7%。
- 22 堤 10G6/1緑灰色シルト(径5mm)の粒状ブロック土に見える。中に灰白色細粒砂ラミナ。下位は中や粗粒化して、粗～中粒砂混じり。堤 7.5GY6/1緑灰色細粒砂～シルト。26%の炭化物混じりシルトを擁持して、N系灰色を帯びる。
- 23 第5層 10BG/1青灰色細粒砂(～シルト)。
- 25 第5層 10G7.5/1明緑灰色シルト。灰白色細粒砂～微砂のラミナが部分的に挟在する。鉄分により、10YR系明黄褐色を帯びる。
- 26 第6層 10Y5/1灰色中粒砂～シルト。10G7/1明緑灰色微砂～シルト(部分ラミナ)15%。10Y7/1R灰色粗粒砂10%混入。粒状あるいはハースト状の炭化物を3～5%含む。部分的にラミナが散見されるもの。土壌化による堆積構造の擾乱が顕著。
- 27 流路270 10BG/1青灰色粗～中粒砂。シルト含む。2.5Y系浅黄色に変色。
- 28 第8層 5Y4.5/1灰色シルト。灰白色極粗粒砂ラミナ。細粒砂ラミナ挟在(各々1%以下)。
- 29 第8層 5Y4.5/1シルト。粗粒砂全体の20～30%混入。

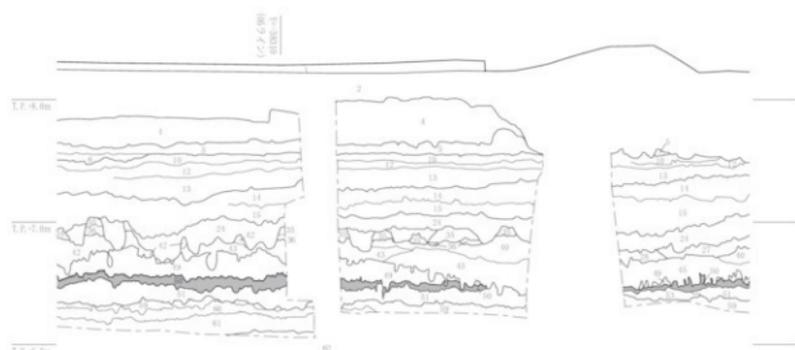
第103図 11-A区 西壁断面図 (1/40)

し(第133図参照)、層中より染付1、青花1、瓦質土器13、瓦器碗92、土師質土器269、白磁2、青磁1、東播系練鉢8、唐津焼2、瀬戸美濃焼2、丹波焼焼鉢、瓦1、黒色土器1、不明青銅製品(図版82-3)、鉄玉(図版82-4)、須恵器40片などが出土している。第2b層はC～E03区以西にみられ、10区の「西南部第2層」、7-D区の「第2層」に対応する。層中より瓦器碗46、土師質土器357、白磁1、青磁1、瓦2、黒色土器20、製塩土器1、土師器2、須恵器109片が出土している。第2b層はC～E03区以西にみられる(第133図参照)。なお、調査の結果、たかまり018は遺構ではなく、包含層で7-D区の「第1d層～第3層上位」に対応する。

第3層(浅黄色微砂混じりシルト) 上面の標高T.P.6.88～7.0m、層厚10～40cmをはかる。

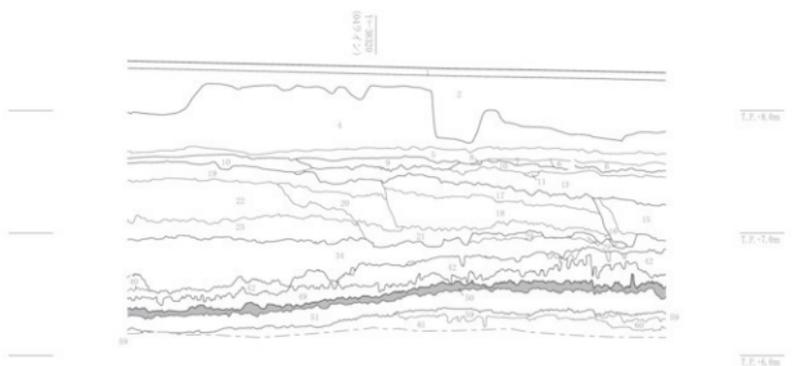


- 1 アスファルト
 2 砂層 瓦片
 3 道路018 2.517/2黄褐色 やや粘質を帯び、3mm前後の礫と鉄分・マンガンを含む。
 4 敷地土 100R.5/1黄灰色細粒砂～シルト(全体的に粗粒砂0~7%混入)。317.2灰白色細粒砂～シルトブロック(径20~50mmの不定形)20~30%混入。(第7-A区の第10層)
 5 砂層土 2.516/2灰黄色砂質。2~3mm前後の礫を含む。 (第7-A区の第10層)
 6 砂層 第7-A区の第10層に対応。
 7 砂層
 8 砂層
 9 砂層
 10 第1層 2.516.0明黄褐色土。2mm前後の礫を少量含む。上面に1cm前後の鉄分層。その下にマンガン層が堆積する。
 11 砂層 2.517/1灰白色細粒砂～微砂。細砂～粗粒砂約15%混入。
 12 第1層 2.517/1灰白色砂質土。3~5mm前後の礫を含む。
 13 第1層 100R.5/2に似た黄褐色細粒砂～シルト。全体的に礫混～粗粒砂約10%混入。
 14 第15020 2.515/3黄褐色土。2~3mm前後の礫をやや含む。バヤハヤ。
 15 第15020 2.516/4に似た黄色土。やや粘質を帯び、2~3mm前後の礫を含む。ブロック状に5mm前後の鉄分層を含む。
 16 第15020 2.516.5/2に似た黄色細粒砂(シルト)。
 17 第2層 100R.5/4に似た黄褐色細粒砂～シルト。礫混～粗粒砂約7~10%全体的に混入。濁注不良。
 18 第2層 100R.5/4に似た黄褐色細粒砂～シルト。礫混～粗粒砂約6~7%全体的に混入。濁注不良。
 19 第2層 100R.5/4に似た黄褐色細粒砂～シルト。礫混～粗粒砂約5%全体的に混入。濁注不良。(第7-A区の第10層)

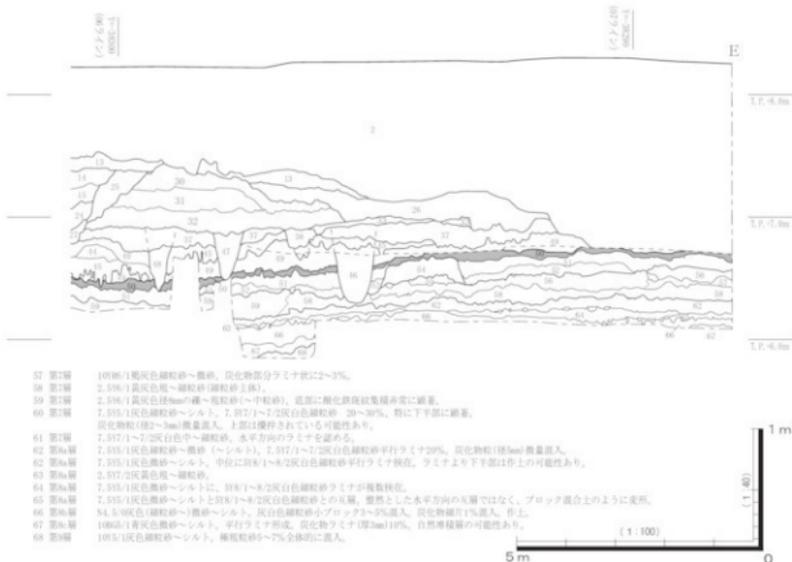


- 42 第4層 2.516.5/3~6.5/2黄褐色中粒砂～微砂(シルト)。中粒砂からシルトの範囲で、場所により多量が異なる。また、溝で42が挟定する。
 43 第4層 100R.5/2黄褐色細砂。上面に5mm前後のマンガン層が堆積し、全体的に良く混ざる。(第7-A区の第10層)
 44 第4層 40と同じ。ただし、平行ラミナが観察される。
 45 第4層 基本的に43と同じ。礫混～粗粒砂主体。
 46 p1177
 47 p1209
 48 p1197
 49 第5層 2.516/1黄灰色シルト質粘土。上面に鉄分・マンガンの層を形成。
 50 第6層 100R.5/1黄褐色微砂～シルト。炭化物層約2~3%混入。黄褐色微砂部分クマナらしきものあり。(7-A区の第5層)
 51 第6層 100R.1黄褐色微砂～シルト。2.517/2黄灰色細粒砂～微砂クマナ20%。若い土層に、水平方向のクマナを認める。特に下層部に顕著。上部は1層様になっている可能性あり。
 52 第6層 100R.2黄褐色細粒砂～シルト。粗～中粒砂全体的に20~3%混入。濁注。礫化現象も観察。
 53 第6層 55.0灰白色細粒砂～シルトと517/1~2灰白色(礫混～)粗～中粒砂との混合土(5:0)。
 54 第7層 100R.2黄褐色細粒砂～シルト(粗粒砂主体)。礫混～粗粒砂全体的に20~30%混入。
 55 第7層 2.516/1黄灰色砂8mmの礫～粗粒砂(～中粒砂)。
 56 第7層 2.516/1黄灰色粗～細粒砂(粗～中粒砂主体)。

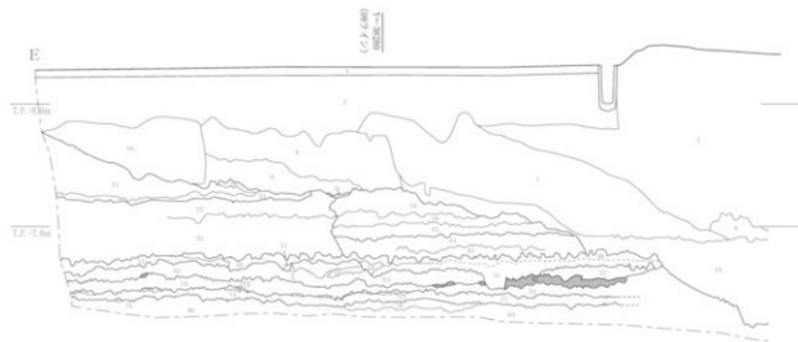
第104図 11-A区 北壁断面図 (1/100・1/40)



- 20 第20層 10196/42.501黄褐色細粒砂～シルト、極細～粗粒砂7～10%全体的に混入、湧水不貞。
 21 第21層 10196/34黄褐色細粒砂～シルト、極細～粗粒砂3～5%全体的に混入、湧水不貞。
 22 第22層 10196/42.501黄褐色細粒砂～シルト、極細～粗粒砂10%全体的に混入、湧水不貞。
 23 第23層 2.916/2灰白色細粒砂～シルト、極～中粒砂2～3%全体的に混入、全体的に鉄分の影響を少し受ける。
 24 砂層 第2層下の遺構。
 25 第24層 10196/42.501黄褐色細粒砂～シルト、極細～粗粒砂7～10%全体的に混入。
 26 第25層 10193.5/42.501黄褐色細粒砂～シルト、極細～粗粒砂7～10%全体的に混入。
 27 砂層 2.926/1オリーブ灰色細粒砂～シルト、全体的に105～106m7種～粗粒砂3～5%混入。(第2層下の遺構)
 28 砂層 2.926/1オリーブ灰色細粒砂～シルト、全体的に105～106m7種～粗粒砂3～5%混入。(第2層下の遺構)
 29 砂層 2.926/1オリーブ灰色細粒砂～シルト、全体的に105～106m7種～粗粒砂3～5%混入。(第2層上の遺構)
 30 高まり部 10195/42.501黄褐色細粒砂～シルト、極細～粗粒砂15～20%全体的に混入、酸化マンガン粒状(径1mm)に多く含み、若干で見える。(7-8区の第14層)
 31 高まり部 10196/42.501黄褐色細粒砂～シルト、極細～粗粒砂7～10%全体的に混入。(7-8区の第2層)
 32 高まり部 10195/4黄褐色細粒砂～シルト、極細～粗粒砂7～10%全体的に混入。(7-8区の第3層上段)
 33 10196/4黄褐色細粒砂～シルト、極細～粗粒砂全体的に7～10%混入。
 34 第3層 2.916/5.4黄褐色細粒砂～シルト、極細～粗粒砂10～15%混入、湧水不貞、鉄分の影響を少し受ける。(第7-8区の第14層)
 35 第3層 1017/3黄褐色細粒砂～シルト、全体的に鉄分の影響を受ける、4m前後のマンガン塊を多く含む。
 36 第3層 35.12にてやや粘質を帯び、上面に鉄分が見られ、5m前後のマンガン塊を多く含む。
 37 第3層 10195/15.01黄褐色細粒砂～シルト、極細～粗粒砂30～20%全体的に混入、上部に酸化マンガン塊状混入、(7-8区の第3層中層)
 38 遺構 遺構
 39 遺構 遺構
 40 第4層 45に人為的の加工が加えられたもの、整地上、中～細粒砂が混入し、埋積構造が不明確。
 41 第4層 2.916/1灰白色(塊)中～細粒砂、酸化鉄塊状混入顕著。



- 52 第1層 10196/1黄褐色細粒砂～シルト、炭化物部分ミネラルに2～3%。
 53 第2層 2.916/1黄褐色塊～細粒砂(埋積砂上段)。
 54 第3層 2.916/1黄褐色塊～粗粒砂(中粒砂)、底部に酸化鉄塊状混入種に顕著。
 55 第3層 2.916/1灰白色細粒砂～シルト、7.917/1～2/2灰白色細粒砂 30～50%、特に下部に顕著。
 炭化物粒(径～3mm)混入量多、上部は層状されている可能性あり。
 61 第4層 7.917/1～2/2灰白色～細粒砂、水平方向のクマを認める。
 62 第4層 7.916/1灰白色細粒砂～シルト(～シルト)、7.917/1～2/2灰白色細粒砂平行クマ20%、炭化物粒(径5mm)混入量多。
 63 第4層 7.916/1灰白色細粒砂～シルト、中位に10/8/1～8/2灰白色細粒砂平行クマ顕著、ミネラルより下部は作土の可能性あり。
 64 第4層 2.917/2灰褐色塊～細粒砂。
 65 第4層 7.916/1灰白色細粒砂～シルトに、917/1～2/2灰白色細粒砂ミネラル塊状混入。
 66 第4層 7.916/1灰白色細粒砂～シルトと917/1～8/2灰白色細粒砂との混入、整地とした水平方向の互層ではなく、ブロック混合土のように実用。
 67 第4層 N4.5/10灰白色(埋積砂)～粗粒砂～シルト、灰白色細粒砂(ゴブラス)5%混入、炭化物粒7%混入、存在。
 68 第4層 1060/3/1黄褐色細粒砂～シルト、平行クマ形成、炭化物ミネラル(層)30%10%、自然埋積層の可能性あり。
 68 第4層 10193/1灰白色細粒砂～シルト、極細粒砂6～7%全体的に混入。

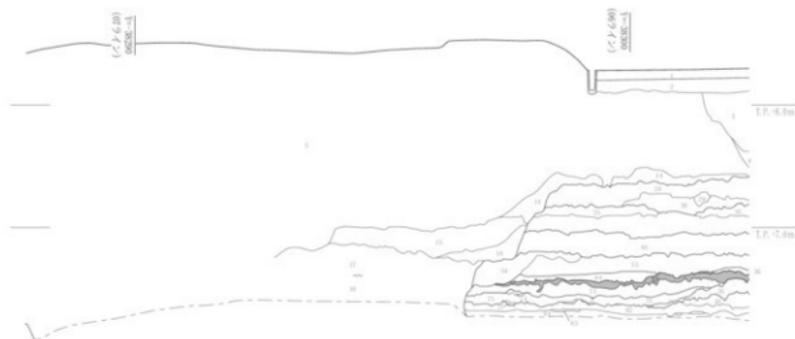


- 1 第0層 アスファルト
- 2 第0層 路盤
- 3~11 第0層 現代築地土
- 12~13 流路017
- 14~19 流路018
- 20~27 第0層 近代築地土
- 28 旧層上 N7/0灰白色細粒砂～シルト、粗粒砂微量混入、弱いグライ土。
- 29 旧層上 S16/1,5灰オリーブ色細粒砂～シルトと、2.S16/2灰黄色粗粒砂と、2.S17/1灰白色細粒砂の互層(5:3:2)。
- 30 旧層上 S6/0灰白色細粒砂～シルト、粗粒砂微量混入、グライ土。酸化鉄斑紋状者。
- 31 旧層上 S15/1,5灰オリーブ色細粒砂～微砂(粗粒砂微量含む)に、同色微砂～シルトブロック(径10mm以下)25～30%混入。
- 32 流路023 S15/1,5灰オリーブ色細粒砂～微砂(粗粒砂微量含む)に、同色微砂～シルトブロック(径10mm以下)25～30%混入。
- 33 流路023 上: 2.S16/5,1オリーブ灰白色細粒砂(極粗～粗粒砂少量含む)に、10T7/1灰白色微砂～シルトブロック(径5～10mm)25～30%混入、中: S17/1灰白色微砂～粗(中粒砂)に、同色微砂～シルトブロック(径3～5mm)25～30%混入、下: 10T7/1灰白色微砂～シルトブロック(径5～10mm)と同色中～細粒砂との混合土(7:3)、いずれも弱いグライ土。
- 34 第1層 T.S17/1灰白色微砂～シルト(極粗粒砂微量含む)に、10T7/6明黄褐色微砂～シルトブロック(径10～20mm)1%混入。酸化鉄斑紋全体的に比着。
- 35 第1層 T.S17/1灰白色細粒砂～微砂、(極粗～)粗粒砂全体的に2～3%混入。酸化鉄斑紋状者。
- 36 第1層 S15/2灰オリーブ色粘質土。
- 37 第1層 2.S13/2暗灰黄色粘質シルト、全体に鉄分を帯び、10m前後の礫を含む。
- 38 第1層 S25/1暗褐色灰色粘質土、10m前後の礫を含む。
- 39 第1層 T.S17/1灰白色細粒砂～微砂、極粗～粗粒砂少量含む。酸化鉄斑紋状者顕著。
- 40 第1層 2.S16/1オリーブ灰白色細粒砂～シルト、極粗～粗粒砂全体的に7～10%混入。特に下部に多い。黄灰不良。にぶい黄褐色に変色。

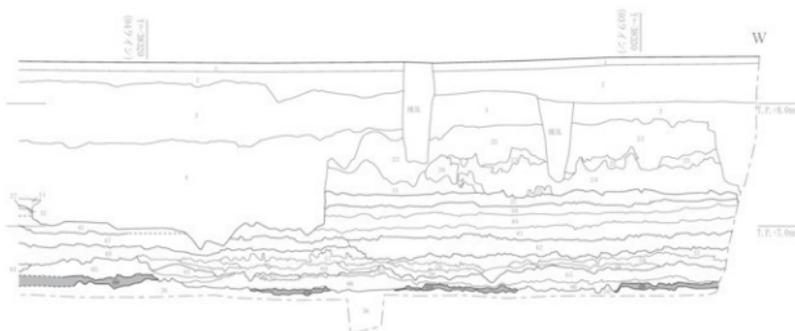


- 38 第4層 S16,5/1灰白色微砂～シルト、上部所々暗褐色(2.S15/1)、その一方で、灰白色細粒砂ラミナが部分的に挟在する。
- 39 第4層 10T7/1灰白色細粒砂、ラミナ不明瞭。鉄分により、2.S13系オリーブ色を帯びる。
- 40 第4層 S16,5/1灰白色微砂～シルト、灰白色細粒砂ラミナが部分的に挟在する。鉄分により、10T7系明黄褐色を帯びる。
- 41 第5層 2.S17/1灰白色中～細粒砂、シルト含む。
- 42 第5層 10T6/6/1青灰色微砂～シルト、70ブロック(径10～30mm)5～7%混入。炭化物細片(径3～5mm)微量混入。
- 43 第5層 2.S16/1,5微砂～シルト、酸化マンガン斑紋状者や礫者。
- 44 第5層 2.S15,5/1灰黄色微砂～シルト、極粗～粗粒砂若干混入。
- 45 第5層 10T6/6/1明緑灰色シルト、灰白色細粒砂～微砂のラミナが部分的に挟在する。鉄分により、10T7系明黄褐色を帯びる。
- 46 第5層 10T6/6/1青灰色中～細粒砂と、10T7/1明緑灰色微砂～シルトと、10T7/1灰白色細粒砂のブロック混合土(4:4:2)。
- 47 第6層 2.S15/1,5灰黄色微砂～シルト、70ブロック(径10mm)2～3%混入。全体的に炭化物を少量含んで暗褐色を帯びる。
- 48 第6層 S14/1灰粘土層、カーボンの影響が暗褐色を帯びる。
- 49 第6層 10T5/1灰色中粒砂～シルト、10T7/1明緑灰色微砂～シルト(部分ラミナ)15%、10T7/1灰白色粗粒砂10%混入。粒状あるいは柱状の炭化物が3～5%含む。部分的にラミナが散見されるもの、土層化による堆積構造の擾乱が顕著。
- 50 第6層 2.S16,5/1,5微粒砂～微砂(～シルト)、炭化物微量混入。部分ラミナを認める。酸化鉄斑紋(帯状)沈着構造。
- 51 第6層 2.S17/1,5灰白色シルト質粘土。水平方向のラミナを認める。特に下部に顕著。上部は礫状されている可能性あり。
- 52 第7層 2.S17/1,5灰白色細粒砂～微砂。

第105図 11-A区 南壁断面図 (1/100・1/40)



- 41 落込021 西平2.5%2黄灰色粘質土、5mm前後のマンガン塊、鉄分塊を含む。
東平7.5%5.1灰白色細粒砂～シルト。(極粗～)粗粒砂全体の15～7%混入。淘洗不良。酸化鉄・酸化マンガン塊状(径1～2mm)沈着顕著。
10%系明黄褐色に変色。
- 42 落込029 100%1細粒砂～シルト。極粗～粗粒砂全体の10%混入。淘洗不良。鉄分より、10%系に多い黄褐色を帯びる。
- 43 第3層(新) 2.5%5.1黄灰色中～細粒砂。極粗～粗粒砂少量混入。酸化鉄・酸化マンガン塊状全体の沈着。落込021もしくは落込090に対応か?
- 44 第3層(新) 2.5%5.1黄灰色微砂～シルト。極粗～粗粒砂微量混入。酸化鉄・酸化マンガン塊状全体の沈着。落込021もしくは落込090に对应か?
- 45 第3層(新) 2.5%5.1黄灰色微砂～シルト(極粗～粗粒砂微量混入)に、10%5.1明緑灰色粗～中粒砂(シルト微量混入)ブロック(径10～20mm)7%混入。
酸化鉄・酸化マンガン塊状全体の沈着。落込021もしくは落込090に对应か?
- 46 第3層(新) 7.5%5.1灰白色細粒砂～シルト。(極粗～)粗粒砂全体の10%混入。酸化鉄塊状沈着。淘洗不良。
- 47 第3層(新) 100%1細粒砂～シルト。極粗～粗粒砂全体の10%混入。淘洗不良。鉄分より、10%系に多い黄褐色を帯びる。粒状酸化鉄塊状沈着顕著。
- 48 第3層(新) 100%1明緑灰色1(細粒砂～)微砂～シルト。極粗～粗粒砂全体の1%混入。
- 49 第4層(?) 100%5.1明緑灰色粗～中粒砂(シルト微量混入)。酸化鉄塊状顕著。
- 50 第4層(?) 2.5%1～7.1黄灰色極粗～粗粒砂。酸化マンガン塊状全体の沈着。
- 51 第4層(?) 100%5.1黄灰色中～細粒砂(シルト微量混入)。部分ラミナを認める。東へ向かって粗粒化する。酸化鉄塊状沈着。酸化マンガン塊状の沈着の中核部着。2.5%5.1黄灰色1(細粒砂)に変色。
- 52 第4層(?) 100%5.1黄灰色細粒砂～シルト。部分ラミナを認める。黄灰色に変色。
- 53 第4層(?) 2.5%7.1～7.2灰白色微砂～シルト。酸化鉄塊状沈着。酸化マンガン塊状沈着や中核部。
- 54 第4層 100%7.1明黄灰色細粒砂～シルトと2.5%7.1～7.2灰黄色細砂～粗粒砂の互層(6-4)。
- 55 第4層 7.5%7.1灰白色細粒砂～シルトと2.5%7.1～7.2灰黄色細砂～粗粒砂の互層(4-5)。
- 56 第4層 2.5%5.1黄灰色微砂～シルト。極粗～粗粒砂若干混入。
- 57 第4層 100%7.1灰白色細粒砂～シルト。粗～中粒砂ブロック状に5～7%混入。ラミナは不明瞭。鉄分より、7.0%系オリーブ黄色を帯びる。
Y=3825m地点以西は100%6.1黄灰色細粒砂～シルトブロック20～25%混入。



- 73 第7層 2.5%1黄灰色シルトと2.5%7.1灰白色細粒砂～微砂との混合土(5-5)。酸化鉄塊状沈着。
- 74 第7層 10%2灰白色細粒砂。ラミナ形成。
- 75 第7層 5%0%色シルト。細粒砂微量混入。6m2地点以西は粗粒化して細粒砂主体。
- 76 流砂270 河口10%5.1灰白色細粒砂～微砂。ラミナ明瞭に認める。
流砂部:100%1黄灰色粗～中粒砂。シルト含む。2.0%系黄褐色に変色。
- 77 第8層 10%2灰白色細粒砂。
- 78 第8層 2.5%1.1黄灰色シルトと2.5%7.1灰白色細粒砂～微砂との混合土(5-5)。酸化鉄塊状沈着。
- 79 第8層 2.5%5.1微砂～シルト。粗～中粒砂微量混入。
- 80 第8層 5%0%色シルト。中粒砂少量混入。酸化鉄塊状沈着顕著。
- 81 第8層 7.5%1灰白色細粒砂～微砂。部分ラミナあり。
- 82 第8層 5%0%色シルト。細粒砂微量混入。作土? 落土?
- 83 第8層 10%2灰白色細粒砂。自然体粗粒。
- 84 第8層 10%1灰白色細粒砂～シルト。極粗～粗粒砂全体の10～15%混入。
- 85 第8層 10%1灰白色細粒砂～シルト。極粗～粗粒砂10～15%全体の混入。



第108図 11-A区 07ライン沿い断面図 (1/60・1/40)

- | | | | |
|----------|--|---------|--|
| 1 第6層 | 0965(白褐色色粘質土)に、7.516(2灰ベリ-オレンジ色粘砂)をプロットする。 | 23 第65層 | 1019(黒褐色色粘砂→シルト)、2.377(2黄褐色粘砂→粘砂)を20%、傾い土質化、水平方向のラスタを認める。特に下部部に腐食。上部は腐食されている可能性あり。 |
| 2 第5層 | 7.516(1灰褐色粘砂)シルト、1→3mmの礫を少量含む。 | 24 第62層 | 2.516(1黄褐色粘砂→粘砂)と、1066(7黄褐色粘砂→粘砂)との互層(8-2)。 |
| 3 第4層 | 016(2灰ベリ-オレンジ色粘質土)に、3.177(2黄褐色粘砂)をプロットする。2→3mm前後の礫を少量含む。 | 25 第61層 | 2.517(1灰褐色粘砂→粘砂)と、2.516(5.2黄褐色粘砂)の混合土(3-16)。 |
| 4 第3層 | 016(2灰ベリ-オレンジ色粘質土)を含む。 | 26 第59層 | 2.516(1黄褐色粘砂→粘砂)と、同じ色粘砂と、2.516(5.2黄褐色粘砂)の混合土(3-16)。 |
| 5 第2層 | 016(2灰ベリ-オレンジ色粘質土)を少量含む。5→7mm前後の礫を少量含む。 | 27 第58層 | 2.516(1黄褐色粘砂→粘砂)と、同じ色粘砂と、2.516(5.2黄褐色粘砂)の混合土(3-16)。 |
| 6 田植え | 016(2灰ベリ-オレンジ色粘質土)に、3.177(2黄褐色粘砂)をプロットする。礫なし。 | 28 第57層 | 1019(黒褐色色粘砂→粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)の混合土(3-16)。 |
| 7 深部018 | 016(2灰ベリ-オレンジ色粘質土)に、礫を少量含む。全体にバラバラで、1mm前後の礫を少量含む。 | 29 第56層 | 1019(黒褐色色粘砂→粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)の混合土(3-16)。 |
| 8 第1層 | 2.516(1灰褐色粘砂)シルト、1mm前後の礫を少量含む。 | 30 第55層 | 1019(黒褐色色粘砂→粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)の混合土(3-16)。 |
| 9 第1層 | 2.515(1黄褐色粘砂)シルト、1mm前後の礫を少量含む。 | 31 第54層 | 1019(黒褐色色粘砂→粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)の混合土(3-16)。 |
| 10 深部27 | 2.515(1黄褐色粘砂)シルト、1mm前後の礫を少量含む。 | 32 第53層 | 1019(黒褐色色粘砂→粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)の混合土(3-16)。 |
| 11 第1層 | 2.515(1黄褐色粘砂)シルト、1mm前後の礫を少量含む。 | 33 第52層 | 1019(黒褐色色粘砂→粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)の混合土(3-16)。 |
| 12 第2層 | 2.515(1黄褐色粘砂)シルト、1mm前後の礫を少量含む。 | 34 第51層 | 1019(黒褐色色粘砂→粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)の混合土(3-16)。 |
| 13 | 016(2灰ベリ-オレンジ色粘質土)に、2→3mm前後の礫を少量含む。 | 35 第50層 | 1019(黒褐色色粘砂→粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)の混合土(3-16)。 |
| 14 深部590 | 016(2灰ベリ-オレンジ色粘質土)に、礫を少量含む。1mm前後の礫を少量含む。 | 36 第49層 | 1019(黒褐色色粘砂→粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)の混合土(3-16)。 |
| 15 深部600 | 016(2灰ベリ-オレンジ色粘質土)に、礫を少量含む。1mm前後の礫を少量含む。 | 37 第48層 | 1019(黒褐色色粘砂→粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)の混合土(3-16)。 |
| 16 深部609 | 016(2灰ベリ-オレンジ色粘質土)に、礫を少量含む。1mm前後の礫を少量含む。 | 38 第47層 | 1019(黒褐色色粘砂→粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)の混合土(3-16)。 |
| 17 深部589 | 016(2灰ベリ-オレンジ色粘質土)に、礫を少量含む。1mm前後の礫を少量含む。 | 39 第46層 | 1019(黒褐色色粘砂→粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)の混合土(3-16)。 |
| 18 深部253 | 016(2灰ベリ-オレンジ色粘質土)に、礫を少量含む。1mm前後の礫を少量含む。 | 40 第45層 | 1019(黒褐色色粘砂→粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)の混合土(3-16)。 |
| 19 深部253 | 016(2灰ベリ-オレンジ色粘質土)に、礫を少量含む。1mm前後の礫を少量含む。 | 41 第44層 | 1019(黒褐色色粘砂→粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)の混合土(3-16)。 |
| 20 深部253 | 016(2灰ベリ-オレンジ色粘質土)に、礫を少量含む。1mm前後の礫を少量含む。 | 42 第43層 | 1019(黒褐色色粘砂→粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)の混合土(3-16)。 |
| 21 深部253 | 016(2灰ベリ-オレンジ色粘質土)に、礫を少量含む。1mm前後の礫を少量含む。 | 43 第42層 | 1019(黒褐色色粘砂→粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)の混合土(3-16)。 |
| 22 深部253 | 016(2灰ベリ-オレンジ色粘質土)に、礫を少量含む。1mm前後の礫を少量含む。 | 44 第41層 | 1019(黒褐色色粘砂→粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)の混合土(3-16)。 |
| 23 深部253 | 016(2灰ベリ-オレンジ色粘質土)に、礫を少量含む。1mm前後の礫を少量含む。 | 45 第40層 | 1019(黒褐色色粘砂→粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)の混合土(3-16)。 |
| 24 深部253 | 016(2灰ベリ-オレンジ色粘質土)に、礫を少量含む。1mm前後の礫を少量含む。 | 46 第39層 | 1019(黒褐色色粘砂→粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)の混合土(3-16)。 |
| 25 深部253 | 016(2灰ベリ-オレンジ色粘質土)に、礫を少量含む。1mm前後の礫を少量含む。 | 47 第38層 | 1019(黒褐色色粘砂→粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)の混合土(3-16)。 |
| 26 深部253 | 016(2灰ベリ-オレンジ色粘質土)に、礫を少量含む。1mm前後の礫を少量含む。 | 48 第37層 | 1019(黒褐色色粘砂→粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)の混合土(3-16)。 |
| 27 深部253 | 016(2灰ベリ-オレンジ色粘質土)に、礫を少量含む。1mm前後の礫を少量含む。 | 49 第36層 | 1019(黒褐色色粘砂→粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)の混合土(3-16)。 |
| 28 深部253 | 016(2灰ベリ-オレンジ色粘質土)に、礫を少量含む。1mm前後の礫を少量含む。 | 50 第35層 | 1019(黒褐色色粘砂→粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)の混合土(3-16)。 |
| 29 深部253 | 016(2灰ベリ-オレンジ色粘質土)に、礫を少量含む。1mm前後の礫を少量含む。 | 51 第34層 | 1019(黒褐色色粘砂→粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)の混合土(3-16)。 |
| 30 第5層 | 016(2灰ベリ-オレンジ色粘質土)に、礫を少量含む。1mm前後の礫を少量含む。 | 52 第33層 | 1019(黒褐色色粘砂→粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)の混合土(3-16)。 |
| 31 第5層 | 016(2灰ベリ-オレンジ色粘質土)に、礫を少量含む。1mm前後の礫を少量含む。 | 53 第32層 | 1019(黒褐色色粘砂→粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)と、3.177(1黒褐色粘砂)の混合土(3-16)。 |
| 32 第65層 | 016(2灰ベリ-オレンジ色粘質土)に、礫を少量含む。1mm前後の礫を少量含む。 | | |

作土層で上面にて小溝、ピットを検出している。層中より瓦器42、土師質土器233、青磁1、東播系土器3、瓦5、黒色土器2、土師器304、須恵器105、製塩土器2、土師質移動式カマド1片などが出土している。ただし、出土遺物の分布傾向からC03区、D02区、D03区西出土の遺物は8～10世紀の土器が比較的多く包含されていることから、地点によってはより下位の層を第3層として扱った可能性も考えられた。調査区の南半部(E～F03～08区)では、後世の攪拌によって第3層は削平され、存在しないことが調査中に明らかとなり、調査時に第3層としたものを第3層(新)と改称している(第105図43～48、第106図20)。第3層(新)中より染付3、陶磁器2、瓦質土器5、瓦器12、土師質土器86、白磁2、唐津焼1、備前焼壺(15世紀)1、瓦7、土師器4、須恵器38片などが出土している。

第4層 上面の標高T.P.6.7～7.0m、層厚10～50cmをはかり、東へいくほど標高が高くなる。上面で柱列、土坑、ピット、溝を検出している。8区・10区と同様、大きく2つに分かれ、下位の第4b層は氾濫堆積層である。調査区の南半部(E～F03～08区)では、後世の攪拌によって第4層は削平され、存在しない。層中より土師器124、須恵器30(6世紀後半の須恵器坏身を含む)、製塩土器1片などが出土している。

第5層(黄灰色シルト質粘土) 上面の標高はT.P.6.45～6.89m、層厚10～25cmをはかり、東へいくほど標高が高くなる。上面で畦畔、流路、土坑(10区)を検出している。E04～07区では後世の遺構によって、第6b層上面まで削平を受け、D05区では氾濫堆積層(第4b層)によって第6b層上面まで浸食を受けている。本体部の「第4-1層」、01-4調査区の「20(4-1層)」、KH2005-65の「第7～12層」、8区の「第5層」に対応する。層中より土師器13、須恵器12片が出土している。須恵器は6世紀前半の坏身で、10区での事例と合わせて、少ない資料であるが本層の形成は古墳時代後期といえる。

第6層 8区、10区と同様でa・bに分けられる。第6a層(褐灰色微砂～シルト)は土壤層で、上面の標高はT.P.6.4～6.73mで、層厚5～12cmをはかり、東へいくほど標高が高くなる。2区の「第7層」、01-4調査区の「21層」に対応する。第6b層(褐灰色微砂～シルト)上面の標高はT.P.6.32～6.72m、層厚10～22cmをはかる。本体部の「第4-1b層」、01-4調査区の「23層」、6区の「第5層」、7-D区の「第6層」に対応する。層中より土師器138、須恵器4片が出土している。須恵器の存在から、本層の形成は古墳時代中期～後期と想定される。

第7層(黄灰色粗～細粒砂) 上面の標高はT.P.6.2～6.6mで、層厚20～28cmをはかる。対応関係は8区、10区と同様で、古墳時代前期に相当すると考えられる。層中より土師器17片が出土している。6区の「第6層」、01-4調査区の「24層」に対応する。

第8層 調査対象外のため一部の深掘調査で確認した。5つに(第8a層、第8b層、第8b'層、第8b''層、第8c層)に分けられる。第8a層(灰黄色細粒砂)上面の標高はT.P.6.18～6.38mで、層厚10cmをはかり、2区の「第9層」、本体部の「第4-2層」、01-4調査区の「25・26層」に対応する。第8b層(灰色細粒砂～シルト)上面の標高はT.P.6.10～6.16mで、層厚14～20cmを

はかり、01-4 調査区の「28 (4-2b 層)」に対応する。層中より土師器片1が出土している。第8b'層(青灰色微砂)上面の標高はT.P. 6.0～6.08mで、層厚10～14cmをはかり、8区・11-A区の「第8b'層」に対応する。第8b''層(青灰色微砂～シルト)上面の標高はT.P. 6.04mで、層厚3cmをはかる。第8c層(青灰色微砂～シルト、炭化物ラミナ)上面の標高はT.P. 5.95mで、層厚5～10cmをはかり、01-4 調査区の「29～31層」、8区・11-A区の「第8c層」に対応する。層中より土師器2片が出土している。古墳時代前期に相当する。なお、第8層は本体部の「05419 落込」の窪みに堆積した土層と考えられる。

<古墳時代前期～中期包含層出土遺物> (第114図1～4・11、図版73)

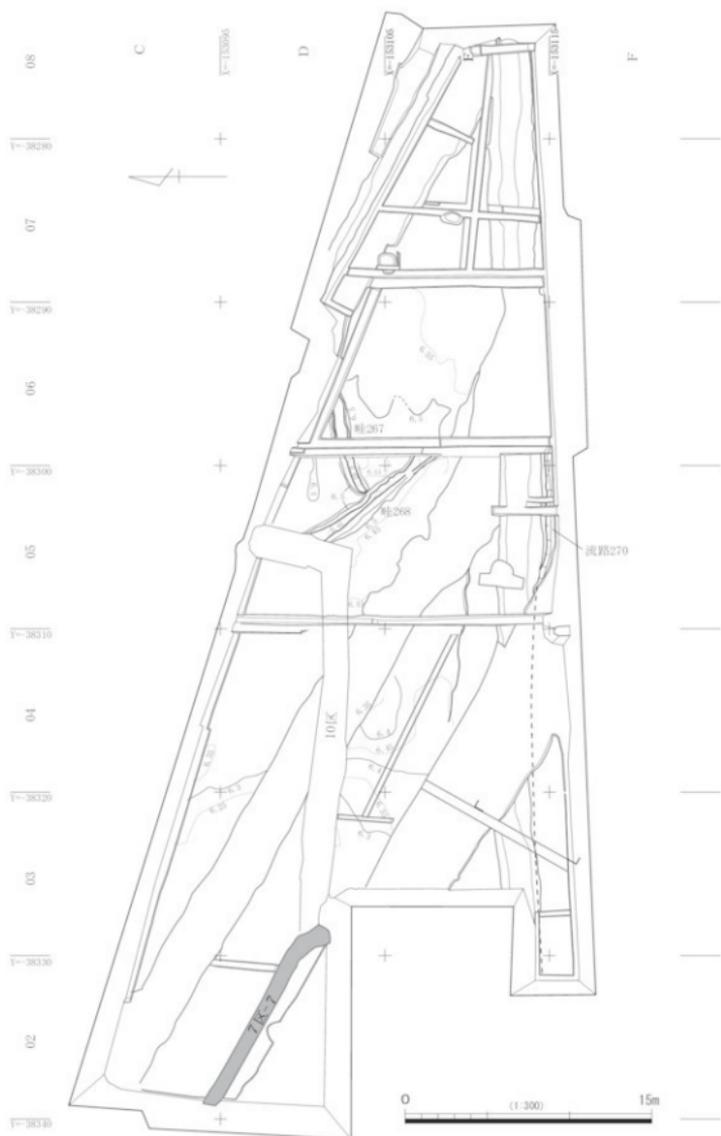
1は第8～10層、2は第7層、3・4は第8層、11は第6層から出土した。1・3は土師器小型鉢で、1は口径10cm、器高5.4cmをはかる。口縁部と体部の粘土紐のつなぎ目痕は明瞭に残る。外面は指オサエ後、ナデ、内面は板状工具によるナデ調整を施す。3は口径11.1cm、器高7.15cmをはかる。口縁部にヨコナデ調整を加え、端部は外側に折り曲げられ、尖頭状をなす。底部は上げ底で、体部内面はハケメ、外面は縦方向のタタキメ後に、ハケメ調整で整えている。4は土師器鉢で、口径17.3cmをはかり、体部外面はヘラケズリ後に縦方向のミガキを等間隔に施し、内面は横方向にヘラミガキを密に施している。11は土師器甕で口径13cmをはかり、体部外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のヘラケズリ調整を施している。なお、3・4は流路270の堤出土の可能性も考慮しておきたい。

<古墳時代後期～奈良時代包含層出土遺物> (第124図14～19、図版74)

14～18・図版74-9は第4層、19は第4層上面から出土した。14はII型式3段階(MT85)の須恵器坏身で、口径13cmをはかる。15は須恵器坏A、16は須恵器坏Gの蓋、17は土師器高坏の脚部、18は土師器坏、図版74-9は須恵器平瓶、19は甕で口径14.2cmをはかり、口縁部内面、体部外面はハケメ、内面はヘラケズリ調整を施している。生駒西麓産の胎土をもつ。以上、14は6世紀第3四半期、15～17は7世紀、18は8世紀、19は古墳時代前期と考えられる。

<奈良～平安時代包含層出土遺物> (第132図1～6・8～21、図版78・80～82)

1～6は第3層、8～15・18・19は第2b層、16・17・21は第2層、20は第3層(新)～第4層から出土した。1・10・11は土師器椀で、1は口径10.4cm、器高3.4cmをはかる。外面は指オサエ、内面はミガキ調整。10・11は口径10.4～11.2cmをはかり、外面はナデ後に指オサエ、内面はナデ調整を施している。2は黒色土器皿で口径20.8cmをはかり、内面に斜向暗文をめぐらしている。3・18は土師器羽釜で、いずれも生駒西麓産の胎土をもつ。4は土師器甕で口径21.8cmをはかり、体部外面は指オサエ、内面はケズリ後に指ナデ調整。5は須恵器坏Bで口径16.8cm、器高4.5cmをはかる。高台が内側寄りであることから、8世紀中頃以前と考えられる。6は須恵器坏Aの底部片。7～9・16は「て」字状口縁をもつ土師質小皿で、口径9.0～9.8cm、器高1.45～1.75cmをはかる。時期は11世紀後半。12は黒色土器A類椀で口径12.8cmをはかる。14～15は瓦器椀で、14は口径15.6cmをはかり、外面はヘラケズリ後にミガキ、内面は密にミガキを



第109図 11-A区 第7層～第8層上面 平面図 (1/300)

加えている。15の底部は同一個体の可能性がある。17は瓦器小皿、19は須恵器の大型鉢、20は把手付鉢、21は砥石である。20の類例は薬師寺西僧坊床面（古代の土器研究会1993）、池内遺跡（財団法人大阪府文化財センター2010）で報告例があり、時期は10世紀中頃と考えられる。

<第2層-近世包含層出土遺物>（図版81-5～10）

5は染付椀、6は青花椀、7は唐津焼皿、8は白磁椀、9は青磁椀、10は丹波焼播鉢である。

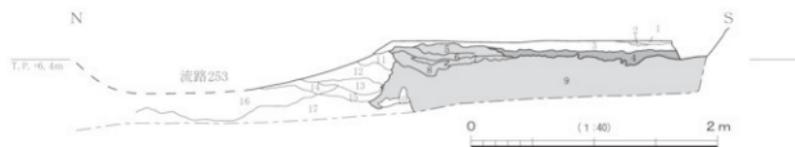
第2項 調査成果

1) 第8層上面（古墳時代前期）

流路270

調査区南端、F02～05区で検出した。幅2.8m以上、深さ50cm以上をはかり、東西方向に走行する（第103・109・110図）。古墳時代後期の流路253に切られ、F05区で北肩の一部を確認している。

2区の「溝054」、本体部の「05396・05421流路」、東西線の「739河川」、KH2005-65の「河川401」に対応し、その成果を参考にすれば幅約12m、深さ150cm以上をはかる。今回の調査では遺物を検出することができなかったが、東西線の「739河川」では古墳時代初頭～前期（庄内式～布留式土器）の土器が出土している。

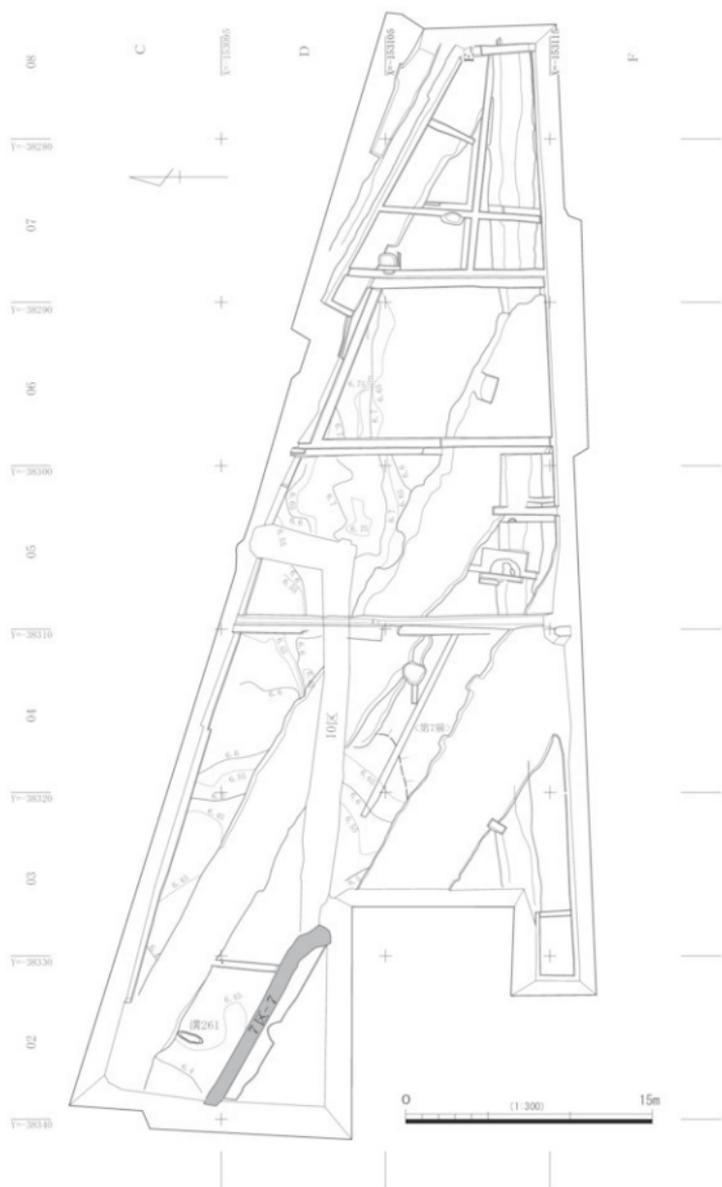


- | | |
|-----------|---|
| 1 第5層 | 10G76/5/1明緑灰色シルトに灰白細～微砂のラミナが部分的に挟在する。鉄分により10YR系明黄褐色を帯びる。(南壁65に対応) |
| 2 第5層 | 2.5/16/2赤白～2.5/17/20灰色粗～細砂。 |
| 3 第5層 | 10G66/1青灰色中～細粒砂と10G17/1明緑灰色細粒砂～シルトと10Y7/1灰白色粗粒砂ブロック混合土 (4:4:2)。 |
| 4 第6層 | 10Y5/1灰色中粒砂～シルト、10G17/1明緑灰色シルト微砂～シルト(一部分ラミナ) 15%、10Y7/1灰白色粗粒砂10%混入。(南壁60に対応) |
| 5 流路270 | 2.5/16/1黄灰色細粒砂シルト(シルト主体)と5/18/1灰白色細～極細のブロックの混合土(ともに径5～10mm)。 |
| 6 流路270 | 4に粒状ないしペースト状の炭化物が全体的に30～40%混入。 |
| 7 流路270 | 2.5/16/1黄灰色細粒砂～シルト(シルト主体)と7.5/17/1灰白色中～細粒砂の混合土(7:3)。 |
| 8 流路270 | 2.5/16/1黄灰色細粒砂～シルト(シルト主体)と7.5/17/1灰白色中～細粒砂の混合土(5:5)。 |
| 9 流路270 | 10G66/1青灰色粗～中粒砂、シルト含み、2.5/18系灰黄色に着色。 |
| 10 第8層及び埋 | 13のブロック。 |
| 11 第8層及び埋 | 5/16/1.5灰オリブ色細粒砂～シルト。全体的に極粗粒砂2～3%混入。 |
| 12 第8層及び埋 | 5/13/1灰微砂～シルト。灰オリブ色シルトブロック(径2～3mm)2～3%、粗粒砂1%以下、炭化物細片1%以下混入、7.5/17/1灰白色中～細粒砂部分ラミナ1%。 |
| 13 第8層及び埋 | 5/16/2灰オリブ色細粒砂～シルト。全体的に粗粒砂57～10%混入。 |
| 14 第8層及び埋 | N5.0/灰色細粒砂～シルトと2.5/17/1明オリブ灰色粗～微砂の混合土(5:5)。 |
| 15 第8層及び埋 | 5/16/2灰オリブ色シルトとN5.0/灰色細粒砂～シルトの混合土(8:2)。 |
| 16 第8層及び埋 | N5.0/灰色細粒砂～シルト。炭化物細片1%以下混入。 |
| 17 第8層及び埋 | N5.0/灰色細粒砂～シルトと、2.5/16/1オリブ灰色シルトの混合土(6:4)。 |

第110図 11-A区 第8層上面 流路270 断面図(1/40)

2) 第7層上面（古墳時代前期）

検出面の標高はT.P.6.2～6.66mで、西側へ向かってやや傾斜する。2区の「第8層」、6区の「第6層上面」、01-4調査区の「24層上面」に対応する。上面で畦267・268を検出している（第



第111図 11-A区 第6層上面 平面図 (1/300)

109 図、図版 33a・b)。

畦 267・268

畦 267 は調査区の中央北寄り、北平坦面、D05・06 区で検出した。西南西-東北方向で、幅 1.0m、高さ 20.8cm をはかる (第 104 図 54)。畦 268 は D05、E05 区で検出した。北西-南東方向で、幅 1.3m、高さ 25cm をはかる。

3) 第 6a 層上面 (古墳時代中期～後期)

検出面の標高は T.P. 6.4 ~ 6.73m で、東へ行くほど標高が高くなる。2 区の「第 7 面」、6 区の「第 4 層上面」、7-D 区の「第 5 層上面」、01-4 調査区の「21 層上面」に対応する。上面で溝 261 を検出している (第 111 図、図版 33d)。

溝 261

調査区の西端、中平坦面、C02 区で検出した。幅 0.5m、深さ 12cm、長さ 160cm をはかる。埋土から土師器 2 片が出土している。

4) 第 5 層上面 (古墳時代後期)

検出面の標高は T.P. 6.45 ~ 6.89m で、東へいくほど標高が高くなる。上面で畦畔 234・242・245 ~ 250、流路 253、畦状高まり 274 を検出している。E04 ~ 07 区では第 5 層、第 6a 層は後世の削平によって消失し、検出面は第 6b 層上面となっている (第 112 図、図版 33e ~ h)。本体部の「第 4-1 面」、7-D 区の「第 4 層上面」、8 区の「第 5 層上面」に対応する。

畦畔 234・242・245 ~ 250

畦畔 234 は南西-北東方向、畦畔 242・245・248・250 は東西方向、畦畔 246・247・249 は南北方向で、幅 0.38 ~ 0.72m、高さ 3 ~ 8cm をはかる。

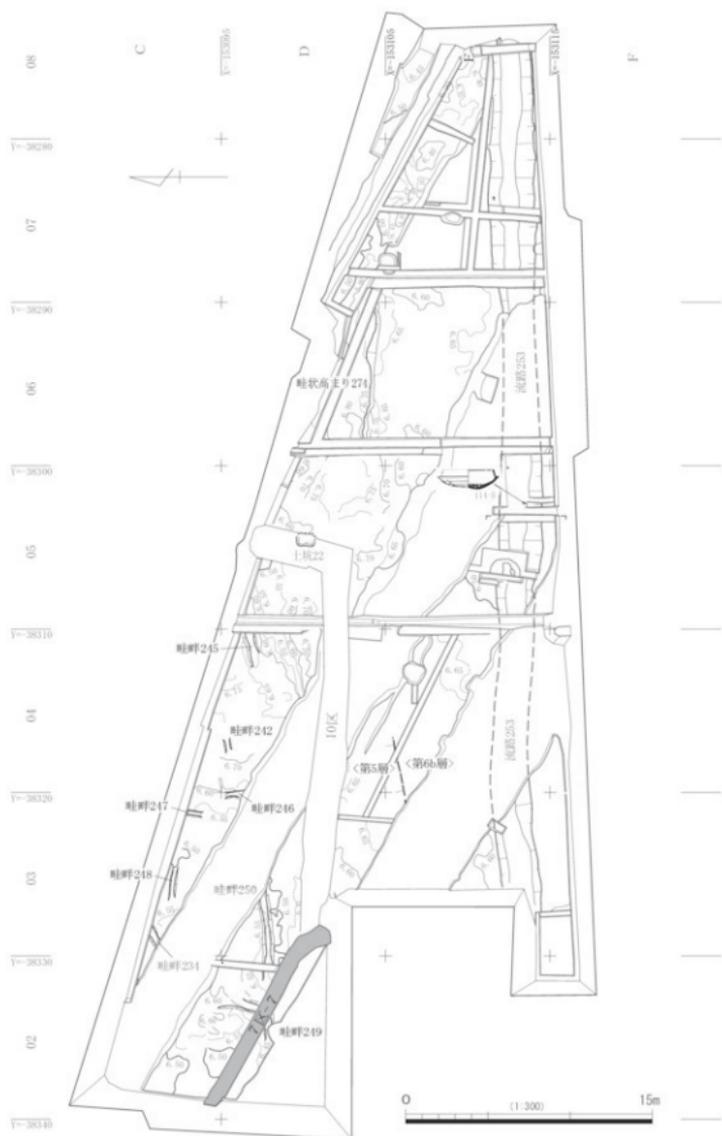
流路 253

調査区南端、E03 ~ 08 区にて検出した。東西方向に走行する流路で、幅 2.7 ~ 3.0m、深さ 48 ~ 64cm をはかる (第 113 図、図版 33f・h)。南肩に幅 1m、高さ 25cm の堤が築かれている (第 103 図の 22・23)。北肩の堤は削平されている。本体部の「04043 溝」、KH2005-65 の「流路 253」、1 区の「溝 024」に対応する。埋土は第 4b 層である。下層から須恵器坏身、土師器広口壺・二重口縁壺・甕などが出土している。

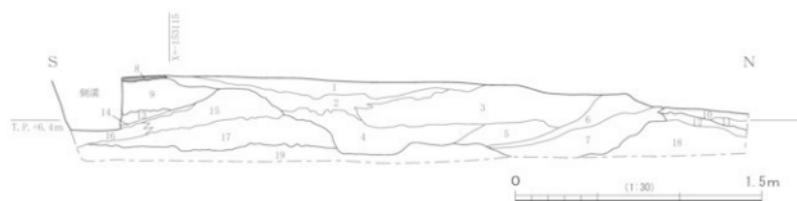
<出土遺物> (第 114 図 5 ~ 10、図版 73・74)

5 は須恵器坏身で、口径 13.3cm、器高 5.2cm をはかる。検出レベルは T.P. 6.303m である。内面中央に同心円文の当て具痕が残り、外面にヘラ記号を刻む。時期は口縁端部内側の段が痕跡的ではあるが、II 型式 1 段階 (MT15) で、6 世紀第 1 四半期と考えられる。

6 は広口壺で、復元頸部径 11.5cm をはかり、口縁外面の拡張部は剥がれている。口縁部内面に断面三角形の凸帯一条、二枚貝による刺突文、外面には赤色顔料を塗布している。頸部外面は

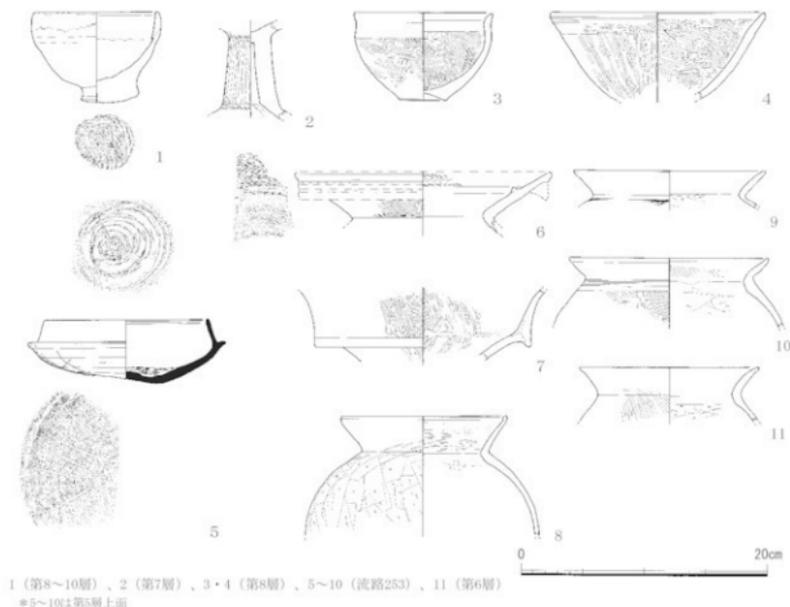


第112図 10区・11-A区 第5層上面 平面図 (1/300) *2ケタの道根番号は10区



- 1 流路253 2.5Y7/2灰黄色極細粒砂～シルト、2.5Y7/1灰白色細粒砂ラミナ (水平) 2～3%。
- 2 流路253 2.5Y7/2灰黄色極細粒砂～シルト、2.5Y7/1灰白色中～細粒砂ラミナ (水平) 30%。
- 3 流路253 2.5Y7/1～7/2灰黄色細砂 (径10mm) ～極粗粒砂、6のブロック20%混入 (6が倒置され再堆積したもの)。北側開口にかけて粗粒化、南側は細粒砂シルトが80%を占める。
- 4 流路253 2.5Y7/1～7/2灰黄色細砂 (径10mm) ～極粗粒砂、10Y5.5/1～6/1灰色細粒砂～シルトブロック (<第8a、8b層>起層) 40～50%。北側にかけて粗粒化、南側は極粗粒砂混細粒砂～シルト。
- 5 流路253 10Y7/1～7/2灰白色極細粒砂と粗～中粒砂の互層 (6:4)。
- 6 流路253 10B65/1青灰色極細粒砂～シルト、2.5Y7/3浅黄色細粒砂ラミナ (水平) 10%。
- 7 流路253 10Y7/1～7/2灰白色細粒砂と (粗～) 中粒砂の互層 (3:7)。
- 8 第6層 南壁68に対応。
- 9 流路270 南壁69に対応。
- 10 第7層 05ライン古い断面11に対応。
- 11 第7層 05ライン古い断面43に対応。
- 12 第8a層 05ライン古い断面44に対応。
- 13 第8層及び壁 南壁82に対応。
- 14 第8層及び壁 南壁83に対応。
- 15 壁 南壁84に対応。
- 16 壁 10Y5.5/1灰色細粒砂～シルト、極粗～粗粒砂混シルトブロック (径10mm) 底部に7～10%混入。
- 17 粗 05ライン古い断面48に対応。
- 18 第8b層 05ライン古い断面48に対応。
- 19 第9層 南壁85に対応。

第113図 11-A区 第5層上面 流路253 断面図 (1/30)



- 1 (第8～10層)、2 (第7層)、3・4 (第8層)、5～10 (流路253)、11 (第6層)

*5～10は第5層上面

第114図 11-A区 包含層、第5層上面 流路253 出土土器 (1/4)

ハケメ、内面はナデ調整を施す。色調は灰白色を呈し、東海地方からの搬入品で、バレススタイル壺形土器で、愛知県西上免古墳の周溝出土土器に近似する（財団法人愛知県埋蔵文化財センター1997）。

7は二重口縁壺で、内外面ともヘラミガキ調整を施す。8～10は土師器甕で、8は口径13.2cmをはかる布留形甕で、体部外面はヘラケズリ、内面はナデ調整。9は庄内形甕で、口径15.4cmをはかり、外面は右上がりのタタキメ、内面はヘラケズリ調整で、胎土は生駒西麓産である。10は庄内形甕で、口径16cmをはかり、体部外面はハケメ、内面はヘラケズリ調整を施している。なお、6～10は流路253の下の包含層（第9層または流路270の堤）に由来すると考えられる。

畦状高まり274

西半部のやや北寄り、北平坦面、D06区で検出した。削り出しの畦の可能性を考えている。

5) 第4層上面（奈良時代）

柱列1～3、溝175、小溝119～121・124・125・127～129・131～143・145～149・155・156・159～161・178～180・206・271、土坑244・122・123・126・130・144・173・176・181・212を確認している（第115～118図、図版34～36）。検出面の標高はT.P. 6.7～7.0mをはかる。なお、第4層は大きく2層に分けられ、上層は第4層、下層を第4b層としている。本体部の「第3面」、2区の「第5面」に対応し、第4層は第5層上面を覆う氈氈堆積土で、本体部の「第3-3b層」、7-D区の「第3層下位」にそれぞれ対応する。

柱列1

D06、E06区、北平坦面にて検出した（第116・117・123図、図版36・37a～d）。検出面の標高はT.P. 6.77mをはかる。ピット177・182・183・184で構成される。主軸方位はN-7°-W。平均柱間は2.3mで、柱掘方の径は平均0.7m程度で、円形もしくは不整形円形を呈している。柱痕跡はピット184、ピット177で確認され、その径は平均20.5cmをはかる。

<出土遺物>（図版77-3）

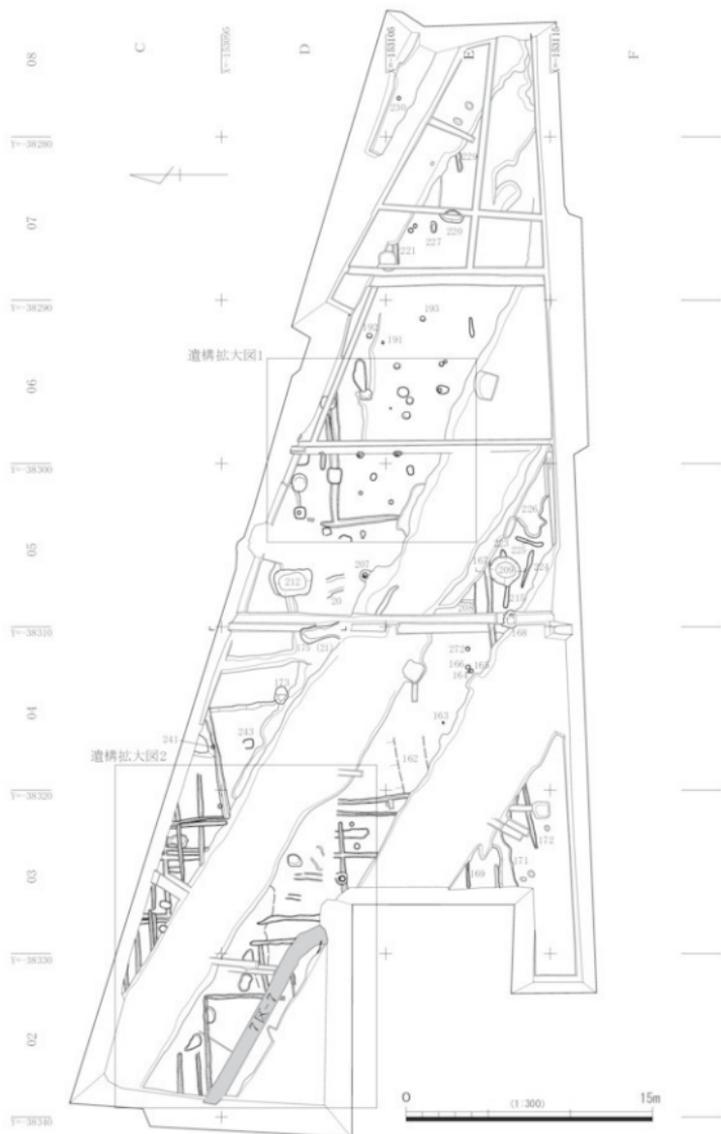
ピット177から土師器6、ピット182から土師器7（甕3片）、須恵器坏（図版77-3）、製塩土器1片、ピット184から土師器1片が出土している。

柱列2

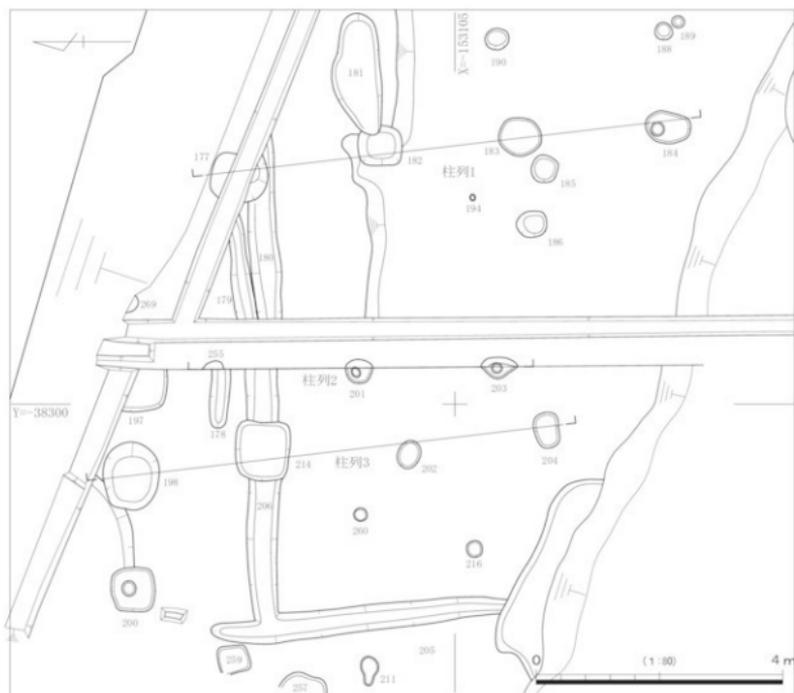
D06、E06区、北平坦面にて検出した（第116・117図、図版36・38b～d）。検出面は第4層～第6b層上面で、検出面の標高はT.P. 6.77mをはかる。ピット255・201・203で構成される。主軸方位はN-0.5°-W。平均柱間は2.3mで、柱掘方径は平均0.58m程度の円形もしくは不整形円形を呈している。柱痕跡は平均18cmをはかる。

<出土遺物>（図版77-9）

ピット255から土師器甕2、ピット177から土師器6、ピット182から土師器7（甕3片）、須恵器坏身1、製塩土器1片、ピット201から土師器8（甕2片、皿1片）、須恵器1片、ピット



第115図 10区・11-A区 第3層下面～第4層上面 平面図 (1/300) *2ヶタの道橋番号は10区



第116図 11-A区 第4層上面 道構拡大図1 (1/80)



2. 5Y6.5/1黄灰色粗～微砂と2. 5Y6/1黄灰色(粗～)中～細粒砂との混合土(6:4)に、2. 5Y8/25白色細粒砂ブロックが若干混入。
2. 5Y6.5/1黄灰色細粒砂～シルト(粗～中粒砂)少量混じる。柱取跡。
2. 5Y6.5/1黄灰色細粒砂～シルト(粗～中粒砂)少量混じる。1に比べ、鉄分の入りが多い。掘り方。

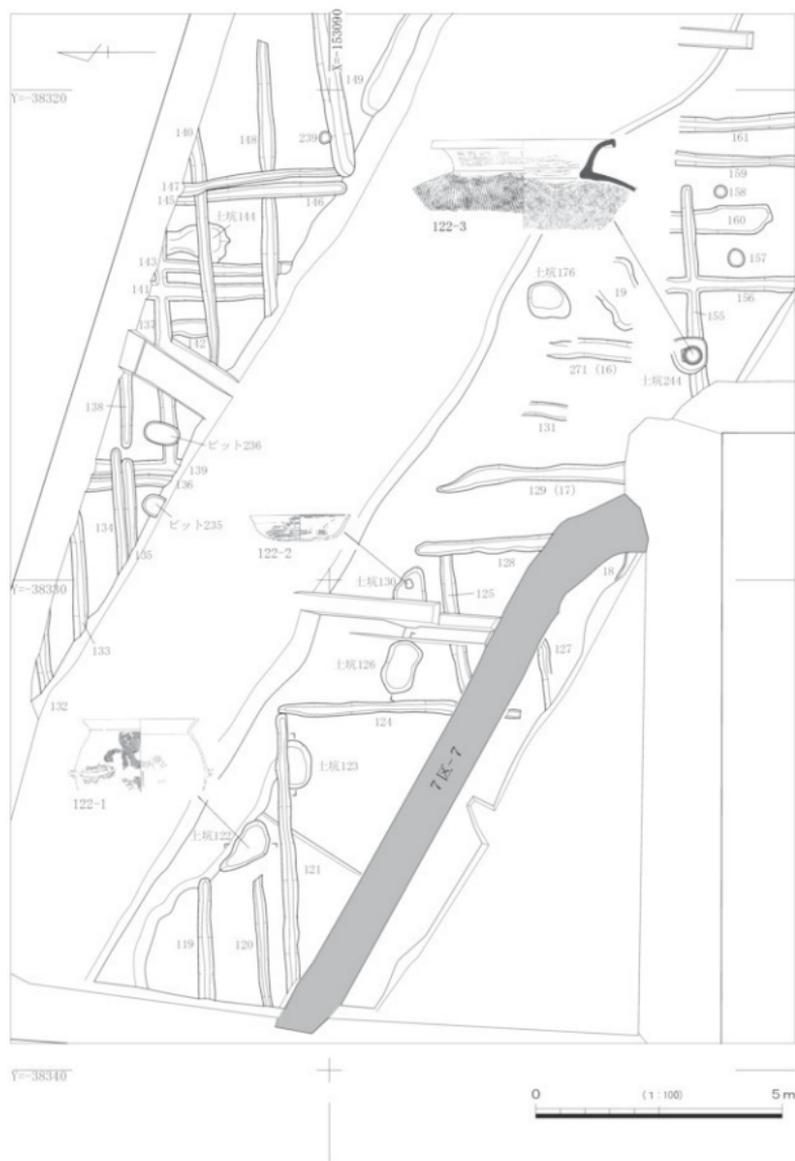


2. 5Y6.5/1黄灰色極粗～粗粒砂と細粒砂～シルトの混合土(4:6)。柱取跡。
2. 5Y6/1黄灰色細粒砂(～シルト)と粗～中粒砂と10Y5/1黄灰色微砂～シルト(<第6a層>ブロック)の混合土(3:2:5)。
2. 5Y7/2黄灰色細粒砂～シルト。
- ビット255の1とは117同し。
2. 5Y6.5/1黄灰色細粒砂(～シルト)と極粗～粗粒砂と<第6a層>ブロックの混合土(7:1:2)。
2. 5Y6.5/1黄灰色細粒砂～シルト。
- 10Y36/1黄灰色(極粗)粗～中粒砂。
2. 5Y6.5/1灰黄色～微砂と粗～中粒砂の混合土(7:3)。
2. 5Y6/2灰黄色粗～微砂→<第6a層>系。

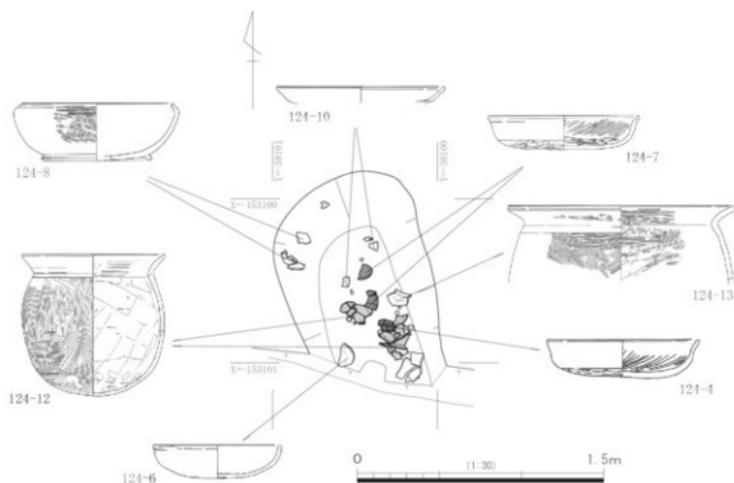


2. 5Y6/1黄灰色細粒砂～シルト(全体的に粗粒砂少量混じる)に、10Y35/1黄灰色シルトブロック(不整形、径20～25mm)1%混入。柱先端部の埋め戻し。
- 10Y5/1灰黄色～シルトと、N6/0灰黄色極粗粒砂～粗粒砂の混合土(7:3)。

第117図 11-A区 第4層上面 柱列1～3 断面図 (1/80)



第118図 10区・11-A区 第4層上面 遺構拡大図2 (1/100) *2ケタの遺構番号は10区



第119図 11-A区 第4層上面 溝175 遺物出土状況図 (1/30)

203 から土師器高杯の脚部片 (図版 77-9) が出土している。

柱列 3

D05、E05区、北平坦面にて検出した (第116・117図、図版36・37e~h)。検出面は第4層～第6層上面で、検出面の標高はT.P. 6.82mをはかる。ビット198・202・204・214で構成される。主軸方位はN-7°-W。平均柱間は2.28mで、柱掘方径は平均0.76m程度の隅丸方形もしくは不整形円形を呈している。

<出土遺物> (図版77-4～8)

ビット198から白石、土師器29、須恵器4片、ビット202からは土師器7 (甕2) 片、ビット204から土師器2片、ビット214から土師器7 (甕1、皿2) 片が出土している。図版77-4はビット214から出土した土師器皿である。図版77-5～8はビット198から出土した須恵器杯B、土師器杯、白石、土師器羽釜の鈔片で、土師器羽釜は生駒西麓産の胎土である。

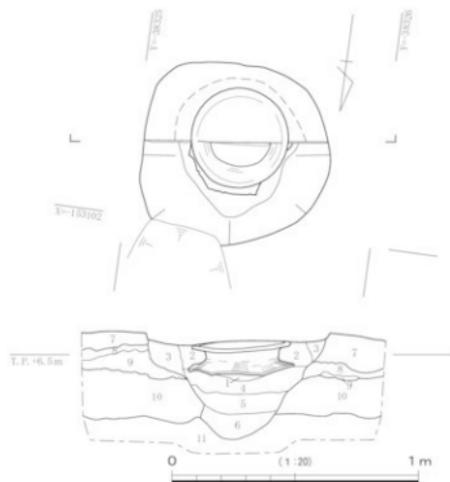
溝175

調査区中央の北半部、北平坦面、D04区、第4層 (粗砂) 上面で検出した。北側で収



2. 517/3浅黄色細砂混じりシルトで、全体に鉄分の影響を受け4m前後のマンガン炭を部分的に含む。(層込020層上)
7. 517/1灰白色粘質土で、2～3m前後の礫を含み、517/3浅黄色細砂をブロック。(層込600層上)
- 517/3浅黄色細砂混じりシルトで、全体に鉄分の影響を受け、4m前後のマンガン炭を多く含む。(第3層上段)
- 3cに比べてやや粘質を帯び上面に鉄分層が見られ、5m前後のマンガン炭を多く含む。
- 4cに比べてやや粘質が強い。上面に鉄分層とマンガン炭が見られ、全身的に鉄分の影響を受け、2m前後のマンガン炭を多く含む。(層込175層上)
- 516/2灰白色粘質土で、2m前後のマンガン炭を含み、カーボン層をブロックする。層込12517/23c灰白色砂をブロックする。この砂はよく締まる。(層込175層上)
- 10180/2灰黄褐色砂層で、上面に5m前後のマンガン炭が堆積し、全身的に良く締まる。(第4層)

第120図 11-A区 第4層上面 溝175 断面図 (1/40)



- 1 10136/4にぶい黄褐色(緑-)極細～シルト、粗～中粒砂微量混入、酸化鉄・マンガン痕跡状着でやや暗褐色がかる、褐色シルトブロック(＜第6a層＞上部)2～3%混入。
- 2 2.016.5/浅黄色(緑-)極細～シルト、酸化鉄沈着顕著。
- 3 2.017.3/浅黄色細粒砂混極細～シルト、粗～中粒砂微量混入、比較的単層。
- 4 10136/4にぶい黄褐色粗～中粒砂と極細～シルトの混合土(5:5)。
- 5 10135/1灰色細粒砂～シルト、細粒～極細粒少量混入、グライ土。
- 6 10136.5/4明黄色極細粒砂～シルト、粗～中粒砂微量混入。
- 7 第5層
- 8 第6層
- 9 第6層
- 10 第7層
- 11 第8層

第121図 11-A区 第4層上面 土坑244 平面・断面図 (1/20) 口径13.8、器高3.6cmをはかり、口縁部はヨコナデ、体部内外面はナデ調整を施す。7は口径19cm、器高4.4cmをはかる大型品で、体部内面に放射状の暗文、底部内面に螺旋状の暗文を巡らし、底部外面は細かなヘラケズリ調整を施す。8は土師器高台付鉢で口径18.8cm、器高8.2cm、底径13.1cmをはかる。口縁端部はS字状を呈し、蓋受けの形状を有する。体部外面は丁寧なヨコヘラミガキ調整を施し、光沢を帯びるものの器面の内外面は脆弱で、細かなひび割れが入り、遺存状態は不良である。9・10は土師器皿で、口径20～20.6cmをはかり、体部内面に放射状の暗文を巡らす。11は須恵器環で口径11.8cmをはかる。12・13は土師器甕で、12は口径17.6cm、器高17.8cmをはかる。口縁部内面、体部外面はハケメ調整、体部内面は強いナデ調整を施している。13は口径30cmをはかる。口縁部はくの字状に屈曲し、口縁部はヨコナデ、体部内外面はヨコハケ調整を施している。内面には煤などの附着物が認められた。

小溝 119～121・124・125・127～129・131・155・156・159～161・271

調査区の西半部、中平坦面、C02、D02・03、E03区で検出した小溝群で、幅0.19～0.49m、深さ2～11cmをはかる(第118図、図版34a)。小溝119～121・125・127・155は東西方向、小溝124・128・129・131・156・159～161・271は南北方向の溝である。

東する溝で、幅0.7m、深さ42cmをはかる。10区の調査で検出した「溝21」と同一の溝である。埋土から8世紀中頃の土師器環・皿・高台付鉢・甕、須恵器環・大甕、製塩土器、土塊、瓦などが出土している(第119・120図、図版34d・e)。

<出土遺物>(第124図4～13、図版75・76)

4～7は土師器環で、4は口径12.2cm、器高3.2cmをはかる。内面に放射状の暗文を巡らす。口縁部内面から体部外面にかけてヨコナデ、底部外面はヘラケズリ調整を施している。5は10区の「溝21」から出土したもので、口径13cm、器高3.1cmをはかる。口縁部に強いヨコナデ、体部内面はナデ、底部外面はヘラケズリ調整を施している。6は

＜出土遺物＞

小溝 119 から土師器 6 片、小溝 120 から土師質土器 2 片、小溝 121 から土師質土器 4、須恵器 3 片、小溝 124 から土師質土器 1 片、小溝 125 から土師器 2 片、小溝 128 から土師質土器 2、須恵器 1 片、小溝 129 から土師質土器 1、黒色土器 1、須恵器 1 片、小溝 131 から瓦器椀 1、土師質土器 1 片、小溝 155 から黒色土器 1、須恵器 1 片、小溝 156 から土師質土器 1、土師器 3、須恵器 1 片、小溝 159 から土師器 3 片、小溝 160 から土師器 2 片が出土している。

小溝 132 ～ 143・145 ～ 149

調査区の北西部、北平坦面、C03 ～ 04 区で検出した南北・東西方向の小溝群である（第 118 図、図版 34a）。幅 0.18 ～ 0.40m、深さ 3 ～ 12cm をはかる。埋土は 2.5Y6/2 灰黄色微砂混じりシルトで、5mm 前後のマンガン斑を多く含む。

＜出土遺物＞小溝 132 から土師器 1 片、小溝 133 から土師器 3 片、小溝 137 から土師器 3 片、小溝 138 から土師器 2 片、小溝 139 から土師器 3 片、小溝 140 から土師器 10 片、小溝 146 から土師器 5 片、小溝 147 から土師器 1、須恵器 1 片、小溝 148 から土師器 4 片、小溝 149 から土師器 1 片が出土している。

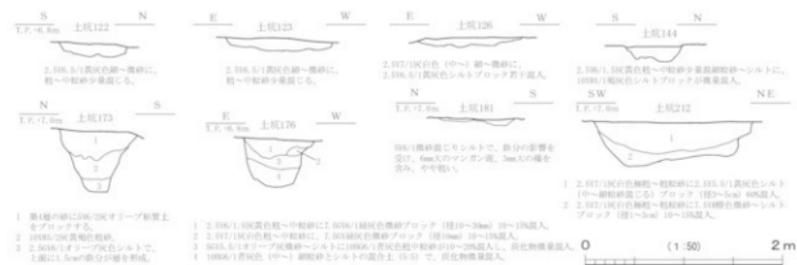
小溝 178 ～ 180・206

北平坦面、D05 ～ 06 区、第 4 層上面で検出した（第 116 図、図版 36b・c）。幅 0.28 ～ 0.45m、深さ 3 ～ 10cm をはかる。小溝 179・180 の埋土は 10YR6/1 褐灰色微砂混じりシルトで、やや粘質を帯び、全体に鉄分の影響を受け、4mm 前後のマンガン斑を含む。小溝 206 は L 字状に曲がり、西側で小溝 179・180 に枝分かかれ、ピット 214・177 と重複する。

＜出土遺物＞小溝 178 から土師器 1 片、小溝 180 から土師器 2 片、小溝 206 から土師器 24、須恵器 5 片が出土している。

土坑 244

調査区の西寄り、中平坦面、D03 区、第 4 層（シルト）上面で検出した（第 118 図）。上位は小溝 155 に切られる。平面プランはほぼ円形を呈し、径 0.78 × 0.8m、深さ 44cm をはかる（第 121 図、図版 35a～c）。口径 39cm の須恵器大甕（肩部より上位のみ遺存）を埋置していた。地



第122図 11-A区 第4層上面 土坑 断面図 (1/50)

鎮の意図をもって据えた可能性が考えられる。その他に土師器小皿・椀片が出土している。

<出土遺物> (第124図3、図版76-2～4)

須恵器大甕(第124図3、図版76-2)は口径39cmをはかる。頸部内面はタタキメ後に回転ナデ、内面はヨコナデ、体部外面は平行タタキメ調整を施し、内面に同心円文の当て具痕が残る。図版76-3は土師器椀または坏、図版76-4は土師器椀である。時期は8世紀と考えられる。

土坑122

調査区の西寄り、中平坦面、C02区、第4層(シルト)上面で検出した(第118・122図、図版34b)。北側は流路018に切られ、平面プランは不定形を呈し、径1.3×0.6m、深さ15cmをはかる。埋土から8世紀中頃の土師器把手付鍋、須恵器片が出土している。土師器把手付鍋は押し潰された状況を呈していた。

<第124図1、図版77>

土師器把手付鍋は口径30cm、体部最大径35cmをはかる。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はハケメ調整を施している。

土坑123

調査区の西寄り、中平坦面、C02区、第4層(シルト)上面で検出した。北側は小溝123に切られ、径0.96×0.46m以上、深さ13cmをはかる(第118・122図、図版34a)。埋土から土師器1片が出土している。

土坑126

調査区の西寄り、中平坦面、D02区、第4層(シルト)上面で検出した。平面プランは隅丸長方形を呈し、径1.04×1.8m、深さ9cmをはかる(第122図)。

土坑130

調査区の西寄り、中平坦面、D02～03区、第4層(シルト)上面で検出した(第118図)。平面プランは不定形を呈し、径0.66×0.7m、深さ20cmをはかる(第134図の5、図版34c)。埋土中より土師器坏・甕片が出土している。

<出土遺物> (第124図2、図版76)

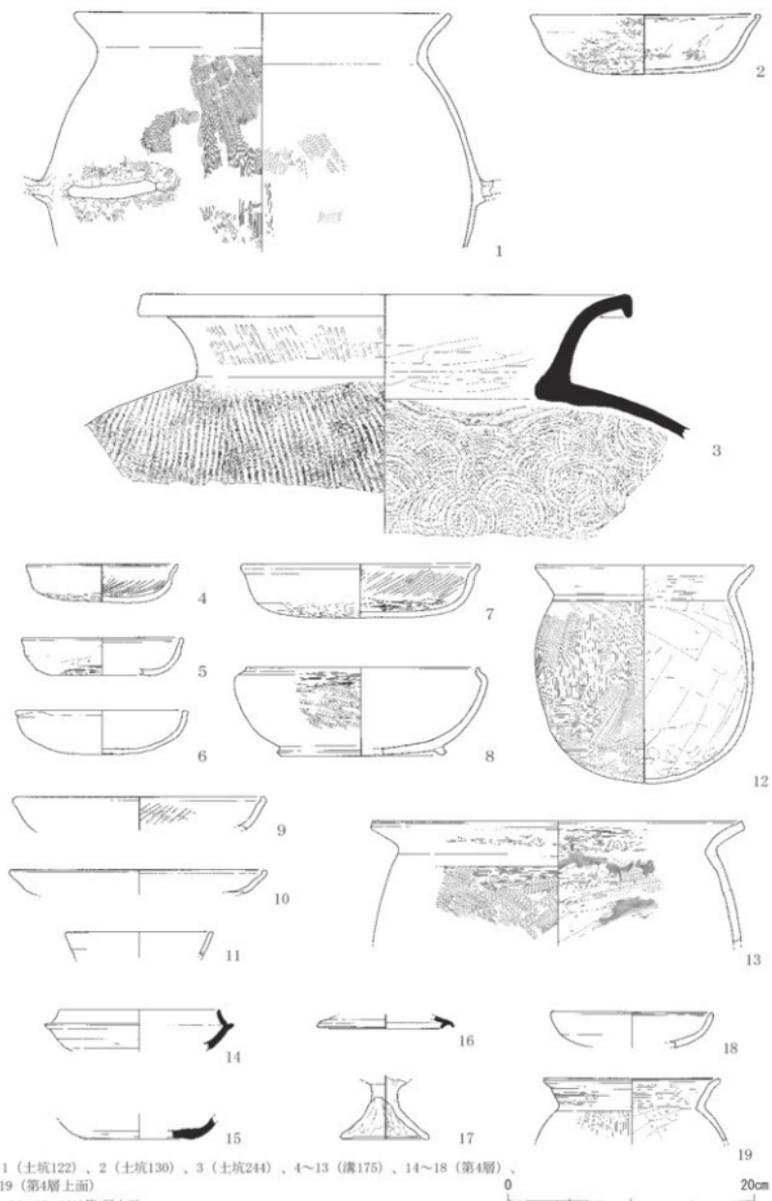
土師器坏は口径18.5cm、器高5.0cmをはかる。口縁部内面は放射状の暗文、外面はヨコヘラミガキ、底部外面はヘラケズリ調整を施している。

土坑144

北平坦面、C03区、第4層上面で検出した。径0.8×1.25m、深さ19cmをはかる(第122図)。小溝137・140に切られる。埋土から土師器高坏の坏部または裾部片(図版76-5)など7片が出土している。

土坑173

北平坦面、D04区、第4層上面で検出した。径0.7×1.10m、深さ63cmをはかる(第122図、図版35e)。埋土から瓦器椀1、土師器1片が出土している。瓦器椀は上位から出土したもので、



1 (土坑122)、2 (土坑130)、3 (土坑244)、4~13 (溝175)、14~18 (第4層)、19 (第4層上面)

*1~13・19は第4層上面

第124図 11-A区 第4層上面 土坑、溝、包含層 出土土器 (1/4)

さ2cmをはかる。検出レベルはT.P.6.66m。埋土は10YR6/1 褐灰色微砂混じり粘質土で、全体に鉄分の影響を受け、5mm前後のマンガン斑を含む。ピット189は径0.20m、深さ4cmをはかる。検出レベルはT.P.6.6m、埋土は10YR6/1 褐灰色微砂混じり粘質土で、全体に鉄分の影響を受け、5mm前後のマンガン斑を含む。ピット190は径0.35×0.39m、深さ3cmをはかる。検出レベルはT.P.6.6m、埋土は10YR6/1 褐灰色微砂混じり粘質土で、5mm前後の鉄分斑、マンガン斑を多く含む。ピット191は径0.12×0.18m、深さ7cmをはかる。検出レベルはT.P.6.8m、埋土は2.5Y5/1 黄灰色微砂混じりシルトで、やや粘質を帯びる。ピット192は径0.19m、深さ8cmをはかる。検出レベルはT.P.6.76m、埋土は5Y6/1 灰色シルトで、3～5mm大のマンガン斑、鉄分斑を多く含み、2.5Y6/1 黄灰色微砂混じりシルトをブロックする。部分的に鉄分の影響を受けややしめる。ピット193は径0.30×0.36m、深さ6cmをはかる。検出レベルはT.P.6.64m、埋土は2.5Y6.5/1 黄灰色細粒砂～シルト。出土遺物は鉄片1が出土している。ピット194は径0.09m、深さ2cmをはかる。埋土は2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土で、鉄分の影響を受け、2mm大のマンガン斑を含む。ピット200は径0.71×0.70m、深さ21cm、柱痕跡は径0.22×0.23mをはかる。建物を構成するピットと考えられるが、対をなすものは確認できなかった。埋土から土師器皿(図版77-10)・羽釜(図版77-11)など9片、須恵器1片が出土している。ピット207は径0.33×0.29m、深さ10cmをはかる。埋土から土師器甕片が出土している。ピット211は径0.49×0.27m、深さ10cmをはかる。ピット257は西側の一部が未調査で、径0.75m、深さ25cmをはかる。ピット259は径0.45×0.50m、深さ20cmをはかる。埋土から土師器3片が出土している。ピット260は径0.20×0.11m、深さ12cmをはかる。埋土は2.5Y7/3 浅黄色粗～中粒砂少量混入し、細粒砂～シルトである。

ピット197

調査区中央の北寄り、北平坦面、D06区で検出した(第116図)。径0.94m以上、深さ35cmをはかる(第104図の48、図版38a)。埋土から土師器3片(甕2片)が出土している。

ピット230

調査区北東隅、第4層上面で検出した。径0.22m、深さ24cmをはかる。

ピット235

調査区の西寄り、北平坦面、C03区、第4層(シルト)上面で検出した(第118図)。南側は流路018に切られるが、平面プランは円形を呈し、径0.43×0.42m以上、深さ23cm、柱痕跡は径15cmをはかる(第123図)。

ピット236

調査区の西寄り、北平坦面、C03区、第4層(シルト)上面で検出した(第118図)。上位は小溝137に切られる。径0.75×0.46m、深さ36.5cmをはかる(第123図)。埋土から土師器3片が出土している。図版77-2は土師器坏である。

ピット239

調査区の西寄り、北平坦面、C03区、第4層(シルト)上面で検出した(第118図)。径0.24

×0.26m、深さ9.5cmをはかる(第123図)。

ピット241

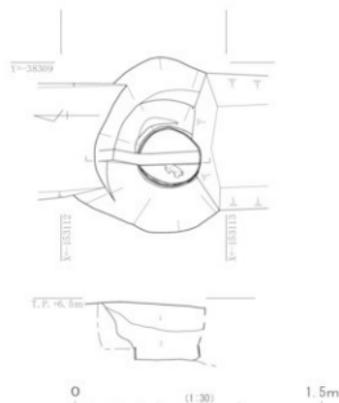
調査区の西寄り、北平坦面、C04区、第4層(シルト)上面で検出した(第115図)。径0.25×0.20m、深さ11cmをはかる。埋土は2.5Y6/1.5灰黄色粗～中粒砂で、細粒砂～シルトを少量混入する。

ピット243

調査区の西寄り、北平坦面、D04区、第4層(粗砂)上面で検出した(第115図)。平面プランは隅丸方形を呈し、径0.6m、深さ16cmをはかる(第123図)。埋土から土師器2片が出土している。

ピット269

調査区中央の北寄り、北平坦面、D06区で検出した(第116図)。北側は調査範囲外で、径0.62m、深さ39cmをはかる(第104図の47)。埋土は10YR5/6黄褐色細粒砂～シルトに2.5Y6/1黄灰色シルト質粘土ブロックを5～7%混入する。



1 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土、上位はマンガンを多く含み、下位は鉄分斑が全体に回りやシルト質である。
2 2.5Y5/1黄灰色微砂混じり砂質シルト、縦長の鉄分斑が入る。

第125図 11-A区 井戸168 平面・断面図 (1/30)

6) 第3層下面(中世)

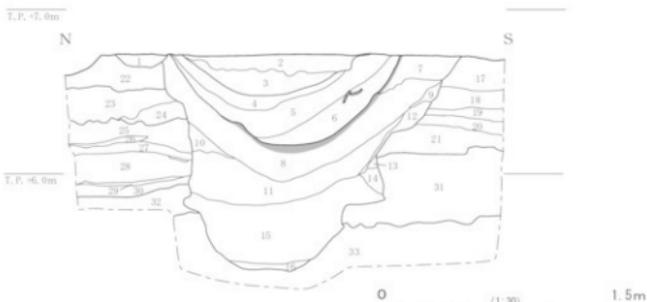
調査区の南半部(E～F03～08区)では、第3層及び第4層は近世以降に大規模な削平を受けたため、第5層上面で確認したが、本来は第3層に由来するものである。井戸168・209、土坑220・226・227、ピット163～166・272、落込208、溝171、小溝167・169・172・215・221・223～225・229を検出している(第115図)。

井戸168

調査区中央の南寄り、中平坦面、E05区、第3層(新)の除去後、T.P.6.72mで検出した。南側は流路017に削平される。平面プランは円形で径0.97m、深さ56cmをはかる(第125図、図版38h)。底に曲物を据えていた。曲物は径36×38cm、高さ7cmで、曲物内から木片が出土している。

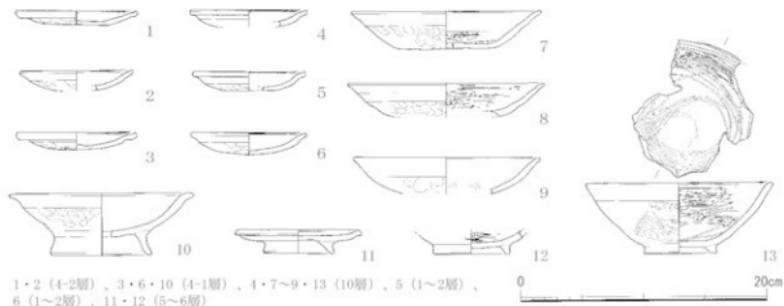
井戸209

井戸168の東側2m、中平坦面、E05区、第3層(新)下面で検出した。流路253を切り、溝167に切られる。平面プランは円形で、径1.76×1.65m、深さ131cmをはかる。埋土は炭層を介して大きく最上層(1層)、上層(1層～3層・4-1層・4-2層)、中層(5～12層)、下層(13～15層)、最下層(16層)の5層に分層される(第126図、図版38e～g)。埋土から瓦器椀、土師質皿・小皿・羽釜、黒色土器B類椀、瓦片、須恵器、多量の焼土塊、焼け石、桃核2などが出土



- 1 溝167
- 2 井戸209 1層 2.5V6/1黄灰色微砂混じりシルトに、7mm前後の鉄分面を多く含む。
- 3 井戸209 2層 10V82/1灰白色シルトに5V7/3浅黄色シルトブロック (径5~10mm) が7~10%混入。炭化物片 (径2mmの粒状、2mm×10mmの細片) 微量混入。炭化物(ペースト状)になり、細~微砂と混合したもの。2~3%混入。黄土細塊 (径5mm~10m) 微量混入。鉄分面状層 (最上層)
- 4 井戸209 3層 2.5V7/1灰白色炭混じり微砂に、2.5V3/1黒褐色炭化物混じり細~微砂ツミナ (木片) が30~40%。炭化物片 (径10mm以下) 1~2%。黄土塊 (7.5V85/6明褐色径15mm以下) 微量混入。(井戸209上層)
- 5 井戸209 4層 10V37/6明黄色シルト~粘土、10V36/1褐色シルト~粘土ブロック (径5mm粒あるいは管状7~10%混入。植生痕と考えられる)。(井戸209上層)
- 6 井戸209 4-1層 2と11層同じで、炭化物ツミナ10~20%。(井戸209上層)
- 7 井戸209 4-2層 2.5V2/1~3/1黒褐色炭化物 (炭化物が分解してペースト状になったもの) に、2.5V7/1灰白色炭混じり極細~シルトがラミナ状に混入。黄土塊 (径.5V85/6~6/6明褐色~褐色、径30~10mm) 5~7%。炭化物片 (径30~10mm) 2~3%混入し、層口は2.5V6/5/1灰白色シルト~粘土ブロック (径5mm前後) 粒状に微量混入。7・8との層界にやや赤変、硬化が認められ、被熱痕の可能性が高い。熱痕行為の結果と考えられる。
- 8 井戸209 5層 5V7/1灰白色粗~中粒砂少量混微砂~シルト、鉄分面状状層。(井戸209中層)
- 9 井戸209 6層 5V6/5/1~6/1灰白色粗~細粒砂5~7%混入。特に北側層口に粗砂顕著。炭化物粒 (径3~5mm) 微量混入。底部を除き鉄分面状状層。(井戸209中層)
- 10 井戸209 8層 5V7/1灰白色粗~微砂、層口からの流入。(井戸209中層)
- 11 井戸209 8層 5V6/1灰白色粗~中粒砂中量混微砂~シルト。層口からの流入。(井戸209中層)
- 12 10V5/1灰色(極粗~)粗粒砂少量混シルト。北側に粗砂顕著。南側層口には細砂混じる。(井戸209中層)
- 13 井戸209 11層 21のブロック上。厚薄上。(井戸209下層)
- 14 井戸209 12層 31のブロック上。厚薄上。(井戸209下層)
- 15 井戸209 16層 6と11層同じ。(井戸209下層)
- 16 11と15の混合土。(井戸209下層)
- 17 瓦路253 2.5V7/5/1灰白色細粒砂と2.5V6/2灰白色シルトと2.5V6/1黄灰色極粗~微砂の互層 (7:1:2)
- 18 瓦路253 2.5V7/5/1灰白色細粒砂と2.5V6/2灰白色シルトと2.5V6/1黄灰色極粗~微砂の互層 (3:1:6)
- 19 瓦路253 2.5V7/5/1灰白色細粒砂と5V5/1灰色細~シルトと2.5V6/1黄灰色極粗~微砂の互層 (1:6:3)
- 20 瓦路253 2.5V7/5/1灰白色中粒砂~細粒砂と5V5/1灰色細砂~シルトの互層 (5:5)
- 21 瓦路253 2.5V7/5/1.5灰白色中粒砂~細粒砂と2.5V6/1黄灰色極粗~微砂の互層 (2:8)
- 22 第6層 5ライン近い断面の51に对应。7.5V6/2灰白オリーブ色シルトで、5mm前後のマンガン塊を含み、全体的に鉄分を帯びる。
- 23 第7層 5ライン近い断面の28に对应。
- 24 第7層 5ライン近い断面の41に对应。
- 25 第8層 5ライン近い断面の44に对应。
- 26 第8層 5ライン近い断面の44に对应。
- 27 第8層 5ライン近い断面の47に对应。
- 28 第8層 5ライン近い断面の49に对应。10V65/5/1青灰色微砂(平行ツミナ形成)に、5V7/1~7/2灰白色細粒砂水平ツミナ40%。
- 29 第8層 10V7/1灰白色細粒砂(ツミナ)で、ペースト状炭化物ツミナ(径2mm)残存。
- 30 第8層 10V65/1青灰色微砂~シルト。平行ツミナ形成。炭化物ツミナ(径2mm)10%。5ライン近い断面の51に对应。
- 31 第9層 10V4/5/1灰白色極粗粒微砂混微砂~シルトに、炭化物片(16×20mm)微量混入。
- 32 第9層 10V65/1青灰色微砂~シルト。細塊~粗粒砂を少量含む。炭化物粒(径5mm)微量混入。
- 33 第10層相当 10V14/1緑緑灰色微砂~シルト。10V38/1明緑灰色微砂ブロック30%混入。

第126図 11-A区 第3層下面 井戸209 断面図 (1/30)



- 1・2 (4-2層)、3・6・10 (4-1層)、4・7・9・13 (10層)、5 (1~2層)、6 (1~2層)、11・12 (5~6層)

第127図 11-A区 第3層下面 井戸209 出土土器 (1/4)

土している。各層から出土した土器を検討した結果、時間的な差異は見いだせない。

<出土遺物> (第127図1～13、図版79・80)

5は1～2層、3・6・10は4-1層、1・2は4-2層、11・12は5～6層、4・7～9・13は10層から出土した。1～6は土師質小皿で、口縁部端部は内側に折り曲げる「て」字状口縁を呈し、口径9～9.8cm、器高1.25～1.8cmをはかる。7～9は土師質皿で、口径15～15.8cm、器高2.8～4.4cmをはかり、体部～底部外面は指オサエ、内面はナデ調整を施す。8は口縁部を二段にヨコナデで仕上げ、二次的に火を受けたためか表面は剥離している。10は土師質台付皿で口径14cm、器高5.05cm、底径7.9cmをはかる。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は指オサエ、内面は指オサエ後ナデ調整を施す。11は土師質台付小皿で、口径9.8cm、器高1.75cm、底径5.7cmをはかる。内面はナデ、外面はヨコナデ調整を施す。皿部は非常に浅いことから、別の器を受ける台とも考えられる。12は黒色土器B類椀で、底径6.0cmをはかり、内外面はヘラミガキ調整を施す。13は瓦器椀で、口径15cm、器高5.85cm、底径5.8cmをはかる。外面は指オサエ後に粗いヘラミガキ、内面はやや粗いヘラミガキを円圈状に施す。色調は暗灰色を呈し、焼成は良好で、胎土は密である。以上、出土土器から、廃絶の時期は11世紀中頃～後半と考えられる。

土坑220

調査区の東半部、北平坦面、E07区で検出した。上部は削平を受け、検出面は第5層面である。平面プランは楕円形で径1.48×0.74m、深さ62cmをはかる(第128図)。埋土から12世紀の瓦器椀、土師質小皿・羽釜、土師器甕(庄内形)が出土している。

土坑226

調査区中央の南寄り、中平坦面、E05区で検出した。北側は流路018、南側は小溝104に切られる。平面プランは不定形を呈し、幅1.3m×4.8m以上、深さ7cmをはかる。埋土は2.5Y/1灰白色極細粒砂(鉄分が全体的に沈着して、にぶい黄橙色を呈する)。土師器1片が出土している。

土坑227

調査区東半部、中平坦面、E07区、上部は削平を受け、検出面は第5層面である。平面プランは楕円形で0.68×0.33m、深さ16cmをはかる(第128図)。埋土中より土師器1、須臾器2片が出土している。

ピット163～166・272

調査区中央の南寄り、中平坦面、E04区で検出した。上部は削平を受け検出面は第5層面である。ピット163は径0.13m、深さ13cm、ピット164は径0.20m、深さ2cm、ピット165は径0.25m、



第128図 11-A区 第3層下面 遺構断面図 (1/50)

深さ3cm、ビット166は径0.30m、深さ3cm、ビット272は径0.20m、深さ5cmをはかる。ビット163の埋土は5Y6/1灰色砂質シルト。ビット165・166の埋土は2.5Y6/1黄灰色粘質土で、5mm前後の鉄分斑を含む。

落込 208

調査区中央の南寄り、北平坦面、E05区で検出した。北側は流路018に切られ、幅0.87m以上、深さ14cmをはかる(第128図)。埋土から土師質土器4片が出土している。

小溝 169・172、溝 171

調査区南西部、南平坦面、E03～04区で検出した東西方向の溝である。小溝169・172は幅0.18～0.23m、深さ3～6cmをはかる。溝171は幅0.65～0.84m、深さ7cmをはかり、埋土から須恵器1片が出土している。

小溝 167・215・223～225

調査区中央南半部、中平坦面、E04～05区で検出した。小溝167・215・223・224は東西方向、小溝225は南北方向の溝である。幅0.15～0.35m、深さ3～5cmをはかる。小溝167は井戸209を切る。小溝167の埋土は2.5Y6/1黄灰色微砂混じりシルトで、7mm前後の鉄分斑を多く含み、埋土から白磁1片が出土している。

小溝 221・229

調査区東端、北平坦面、E07区で確認した。上部は削平を受け、検出面は第5層面である。幅0.24～0.35m、深さ6cmをはかる。

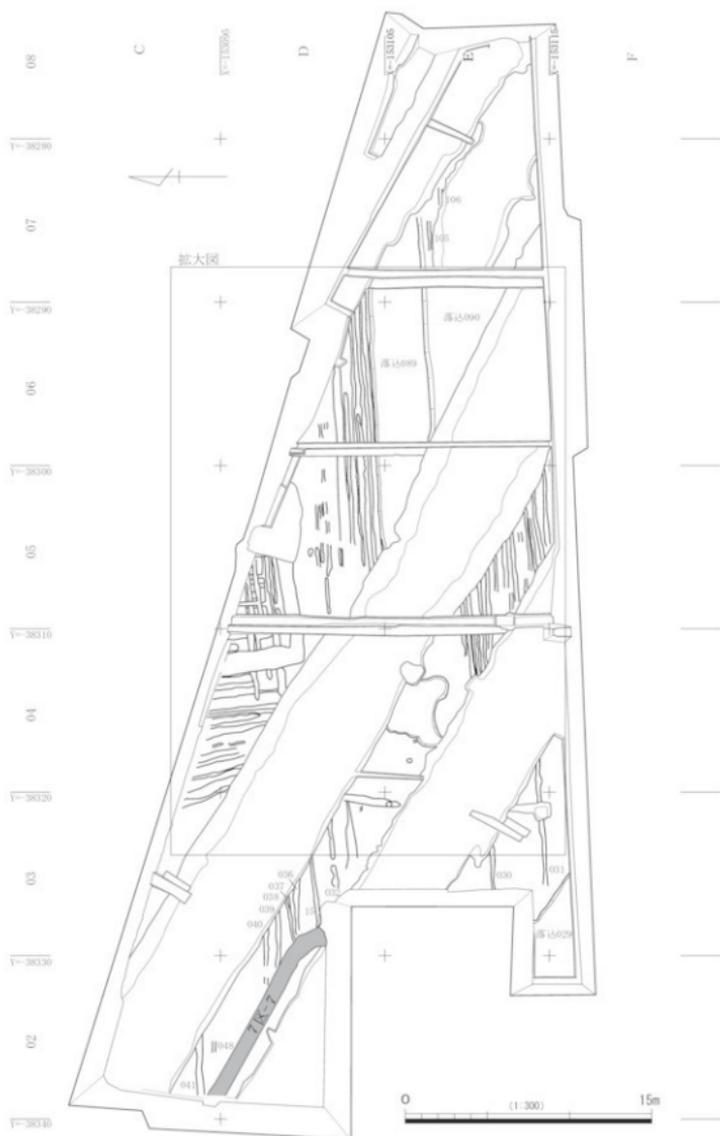
7) 第3層上面(中世)

検出面の標高はT.P. 6.88～7.0mで、調査区の南半部(E～F03～08区)では、後世の遺構によって、第3層は削平されていた。小溝032～034・036～041・048・053～060・076～080・086・087、ビット035を検出している(第129・130図、図版39a)。

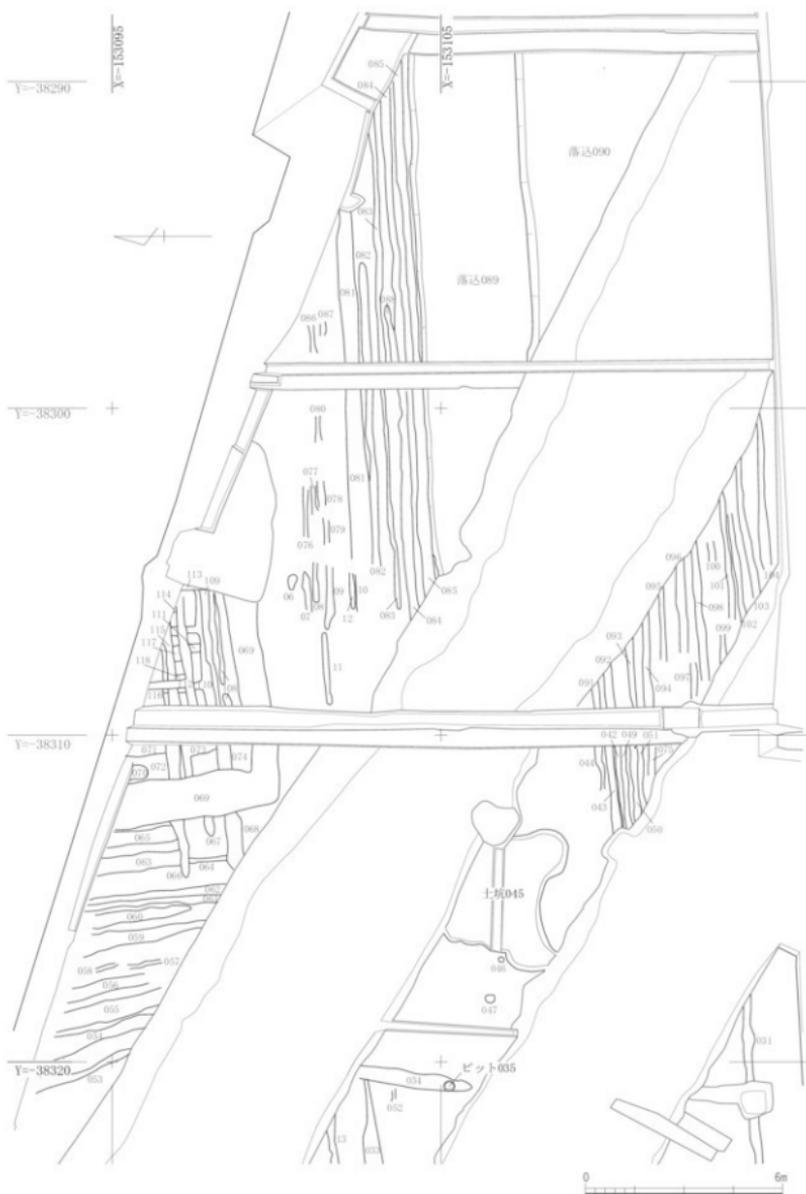
小溝 032～034・036～041・048

調査区西半部の中央、中平坦面、C02、D02・03、E03区で検出した(第134図)。小溝032～033・036～041・048は東西方向、小溝034は南北方向で、幅0.12～0.49cm、深さ1～5cmをはかる。小溝034は小溝033、ビット035を切る。小溝032・033・036～041の埋土は2.5Y6/4にぶい黄色微砂混じり砂質シルトで、5mm前後の鉄分斑を多く含む。小溝034の埋土は5Y6/2灰オリーブ土で、やや粘質を帯び1mm前後の礫と5mm前後の鉄分斑を多く含む。

<出土遺物>小溝033から土師質土器5片、小溝034から土師器皿1、土師質土器3片、小溝036から瓦器椀1、土師質土器3片、小溝037から瓦器椀1、土師質土器5、須恵器1片、小溝038から瓦器椀3、土師質土器8片、小溝039から瓦器椀6、土師質土器12片、小溝040から土師質土器6片、小溝041から黒色土器B類1、土師器3、須恵器1片が出土している。小溝039の瓦器椀は13世紀末～14世紀に比定される。



第129図 10区・11-A区 第2層下面～第3層上面 平面図 (1/300) *2ヶタの遺構番号は10区



第130図 10区・11-A区 第2層下面～第3層上面 遺構拡大図 (1/150)

*2ケタの遺構番号は10区



第131図 11-A区 第2層上面～第3層上面 遺構断面図 (1/50)

小溝 053～060

調査区中央の北寄り、北平坦面、C03～04区、D04区で検出した幅0.08～0.63m、深さ1～6cmをはかる小溝群である(第104図の29)。小溝052・053の埋土は2.5Y6/4にぶい黄色微砂混じり砂質シルトで、5mm前後の鉄分斑を多く含む。小溝054～060の埋土は5Y6/2灰オリーブ土で、やや粘質を帯び、1mm前後の礫と5mm前後の鉄分斑を多く含む。

<出土遺物>

小溝053から土師質土器3、須恵器1片、小溝054から瓦器碗2、土師質土器17、須恵器3片、小溝055から瓦器碗4、土師質土器23、須恵器1片、小溝056から瓦質三足1、土師質土器1、瓦1片、小溝057から土師質土器1片、小溝059から瓦質土器1、瓦器碗5、土師質土器17、瓦1、須恵器2片、小溝060から瓦質土器1、瓦器碗3、土師質土器5、須恵器2片が出土している。

小溝 076～080・086・087

調査区中央の北寄り、北平坦面、D05・06区で検出した東西方向の溝で、幅0.1～0.20m、深さ1～5cmをはかる。出土遺物は小溝079から土師質土器1、小溝086から瓦器碗2片が出土している。

ピット 035

調査区西西部の中央、中平坦面、E03区、小溝034の下面、T.P.6.87mで検出した。径0.3m、深さ38cmをはかる。柱痕跡は径20cmをはかる(第131図)。土師質小皿、土玉が出土している。出土土器から11世紀後半と考えられる。

<出土遺物> (第132図7)

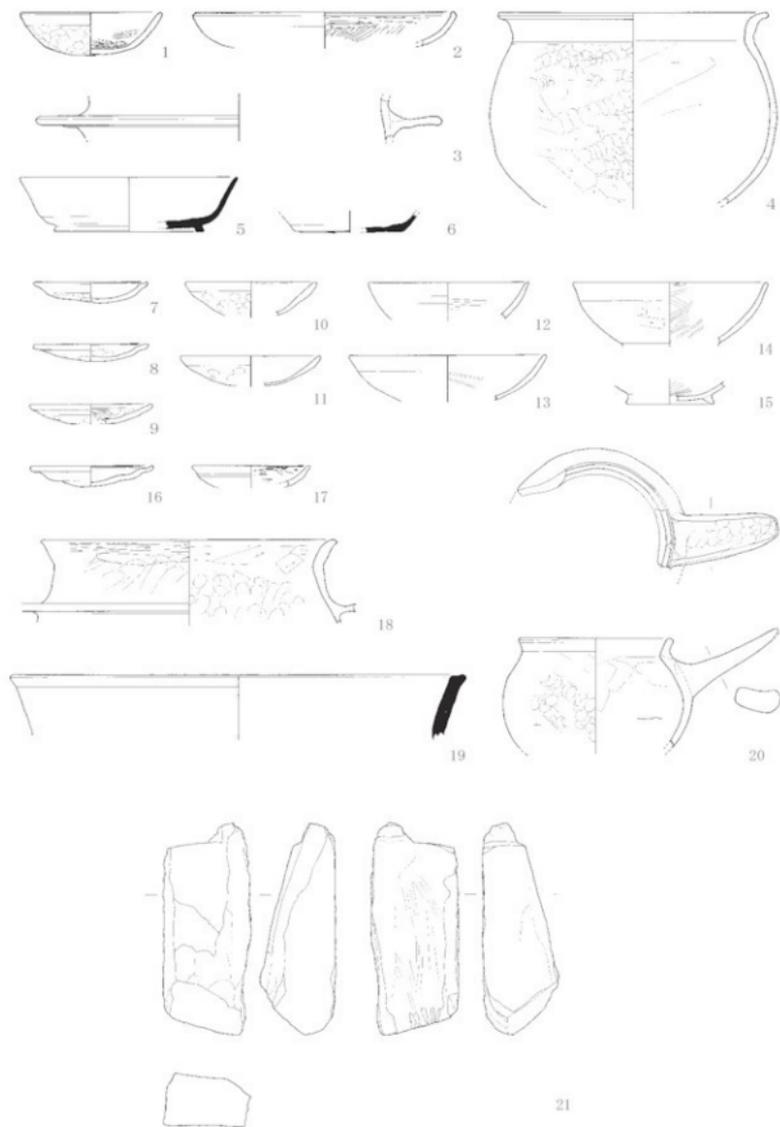
土師質小皿は「て」字状口縁を呈し、口径9.1cm、器高1.75cmをはかる。ピット022から出土した破片の一部が接合した。

8) 第3層(新)上面～第2層下面(近世)

第2層下面及び第3層(新)上面で、落込029・089・090、小溝030・031・042～044・049～051・061～068・070～075・091～105・108、溝069・081～085・088・105・106、土坑045、ピット046・047を検出した(第129・130図、図版39a・b)。

落込029

調査区南西端、南平坦面、E03～F03区、第3層(新)上面で検出した。北西～南東方向で、幅6.5m以上、深さ18.5cmをはかる(第103・105図の42)。上部を落込021が覆う。



1～6 (第3層)、7 (ピット022・035)、8～15・18・19 (第26層)、16・17・21 (第2層)、20 (第3層新～第4層)
 * 71: 第2層～第3層上面

第132図 11-A区 第2層～第3層上面 ピット、包含層 出土土器・砥石 (1/4)

落込 089

調査区東半部、北平坦面、D05、E05、D06、E06区、第2層下面で検出した東西方向の落込で、幅3.4m以上、深さ24cmをはかる(第107図の12)。落込090に切られる。埋土から染付1、陶磁器5、磁器2、瓦質土器1、瓦器椀17、土師質土器60、白磁2、瀬戸美濃焼1、唐津焼3、備前焼1、志野焼1、瓦5、須恵器14片が出土している。

落込 090

調査区東半部、北平坦面、E06～07区、第3層上面で確認したものの、土層断面の検討から(第106図)、第2層上面で検出した落込021と同一の遺構の可能性も考えられる(第108図の14・15)。埋土から染付、土師質土器、瓦質土器、備前焼、瓦片が出土している。

小溝 030・031

調査区南西部、南平坦面、E03～04区で検出した。溝030は幅0.19m、深さ3cm、溝031は幅0.23m、深さ4cmをはかる。埋土は2.5Y6/2灰黄色微砂混じり砂質シルトで、3mm前後のマンガン斑、鉄分斑を含む。

小溝 042～044・049～051・075・091～105

調査区南半部、中平坦面、E04・05区、落込021の除去後に確認した東西方向の小溝群で、南平坦面で確認した溝030・031と一連の小溝群と考えられる。幅0.17～0.24m、深さ5～7cmをはかる。埋土は2.5Y6/2灰黄色微砂混じり砂質シルトで、3mm前後のマンガン斑、鉄分斑を多く含む。

<出土遺物>

小溝042から、瓦器椀2、土師質土器1、瓦2片、小溝043から土師質土器2片、小溝044から瓦器椀1、須恵器1片、小溝050から土師質土器2片、小溝051から土師質土器1片、小溝091から土師質土器1片、小溝092から土師質土器1片、小溝093から土師質土器2片、小溝094から土師質土器1、須恵器1片、小溝095から土師質土器1片、小溝096から磁器、土師質土器2、瓦片、小溝098から瓦器椀1、土師質土器4片、小溝099から土師質土器1片、小溝101から瓦器椀1、土師質土器2片、小溝104から染付1、瓦器椀1、瓦質土器1片、小溝105から土師質土器2片が出土している。

小溝 061～068・070～074・108～118、溝 069

調査区中央の北半部、北平坦面、D04・05区、落込020の下面で検出した南北東西方向の小溝群および溝である(第104図の24・27～28)。

小溝061～068・070～074・108～118は幅0.11～0.50m、深さ2～10cmをはかる。溝069は幅1.3m、深さ32cmをはかる。

小溝061・063・064・071・074の埋土は、2.5Y6/3にぶい黄色微砂混じり土で、やや粘質を帯び1cm前後の鉄分斑と3mm前後のマンガン斑を含む。小溝062・065・066・068・070・072・073、溝069の埋土は2.5Y6/4にぶい黄色粘質土で、5mm前後の鉄分斑を多く含み、バサバサ。

小溝 067 の埋土は 5Y6/2 灰オリーブ土で、やや粘質を帯び 1mm 前後の礫と 5mm 前後の鉄分斑を多く含む。

<出土遺物>

小溝 061 から土師質土器 5 片、小溝 062 から土師質土器 4 片、小溝 063 から瓦質土器 1、瓦器 4、土師質土器 11、須恵器 3、製塩土器 1、土師器 1 片、小溝 064 から瓦器 1、土師器 2 片、小溝 065 から瓦質土器 2、瓦器 4、土師質土器 6、須恵器 1 片、小溝 066 から瓦器 1 片、小溝 067 から土師質土器 2 片、小溝 068 から土師質土器 1、須恵器 3 片、溝 069 から染付 1、瓦器 3、土師質土器 78、青磁 1 片、東播系土器 1、瓦 1、黒色土器 1、須恵器 9 片、小溝 072 から土師質土器 1 片、小溝 073 から瓦器 1、土師質土器 1、白磁 1、須恵器 1 片、小溝 074 から土師質土器 2、須恵器 1 片、小溝 108 から土師質土器 2、青磁 1、小溝 109 から土師質土器 6、小溝 110 から土師質土器 3、小溝 112 から白磁、瓦、須恵器片、小溝 115 から土師質土器 5 片、小溝 116 から土師質土器 2 片が出土している。

溝 081 ～ 085・088

調査区中央の北半部、北平坦面、D05・06 区、第 2 層下面で検出した東西方向の小溝で、幅 0.12 ～ 0.55m、深さ 1 ～ 9cm をはかる (第 107 図の 8 ～ 11)。埋土は 2.5Y7/3 浅黄色細～極細粒砂で、極粗～粗粒砂 5 ～ 7% 混入し、鉄分、マンガン沈着。

<出土遺物>

小溝 081 から瓦器 2、土師質土器 15、備前焼播鉢 1、須恵器 4 片、小溝 082 から瓦質甕 1、瓦器 5、土師質土器 14、須恵器 3 片、小溝 083 から土師質土器 2 片、小溝 084 から瓦器 2、土師質土器 9、東播系土器 1 片、小溝 085 から瓦器 1、土師質土器 3、瀬戸美濃焼天目茶碗 1、須恵器 1 片、小溝 088 から瓦器 1、土師質土器 1 片が出土している。

溝 105・106

調査区東半部、北平坦面、E07 区、落込 090 の下面で検出した東西方向の小溝で幅 0.11 ～ 0.17m、深さ 3 ～ 8cm をはかる。

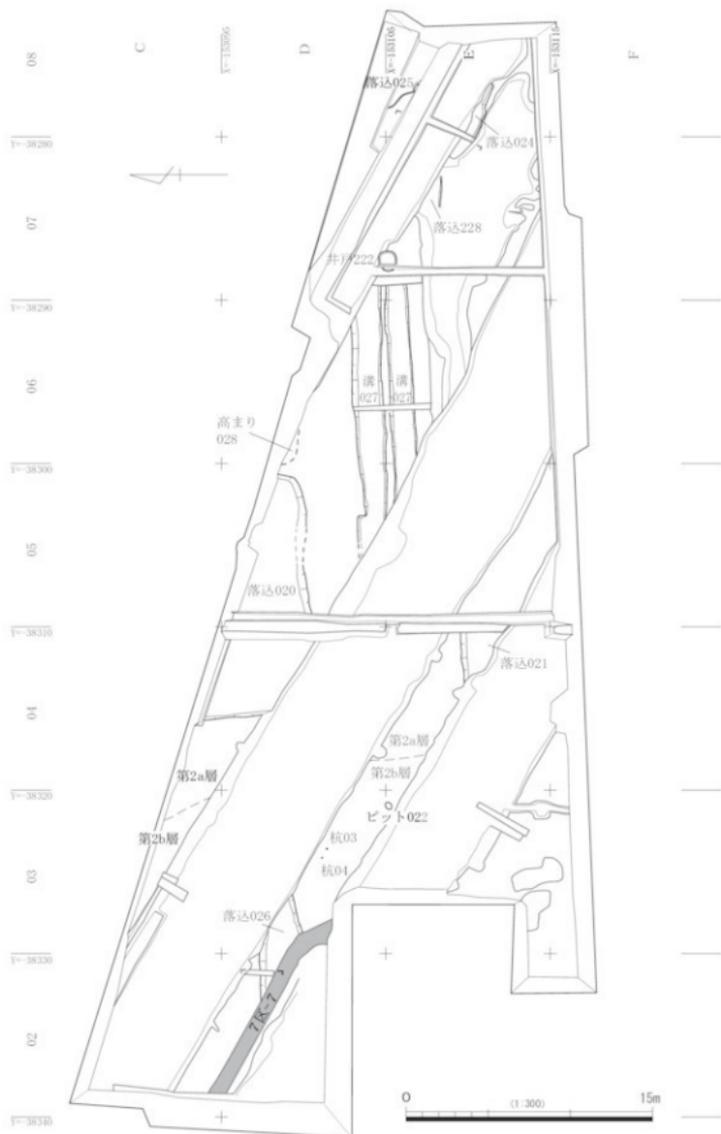
土坑 045

調査区中央部、中平坦面、E04 区、第 2 層下面で検出した。南西および北側は流路 017・018 に切れ、規模は 4.2 × 2.5m 以上、深さ 3cm をはかる (第 131 図)。

ピット 046・047

調査区中央部のやや西寄り、中平坦面、E04 区、第 2 層下面で検出した。ピット 046 は径 0.15m、深さ 10cm をはかる。埋土は 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルトで、全体に鉄分の影響を受け、1mm 前後の礫を若干含む。

ピット 047 は径 0.3m、深さ 12cm をはかる。埋土は 5Y5/3 灰オリーブ砂質シルトで、1mm 前後の礫、2mm 前後の焼土粒を少量含み、3mm 前後のカーボン粒を若干含む。埋土から瓦器 1 片が出土している。



第133図 10区・11-A区 第2層上面 平面図 (1/300) *2ケタの遺構番号は10区

9) 第2層上面(中世～近世)

第2層はa、bに分かれ、第2a層は近世で、10区の「東半部第2a層」に相当する。第2b層は平安時代の遺物を包含し、10区の「西半部第2層」、7-D区の「第2層」に相当し、調査区の北西付近にのみ確認される。本来、第2b層上面の遺構は第3層上面で記述すべきであるが、構成の都合上ここで扱っている。第2a層上面で落込020・021・024・025・228、溝027、高まり028、井戸222、第2b層上面でピット022、落込026、杭跡03・04(10区)を検出している(第133図、図版39c・40a)。

ピット022

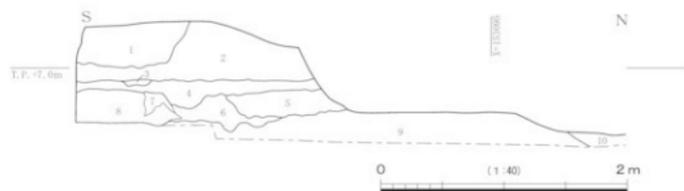
調査区西半部の中央、中平坦面、E03区、第2b層上面で検出した。径0.46×0.4m、深さ23cmをはかる(第131図)。埋土から土師質小皿6片が出土している。第3層上面で検出したピット035と重複し、破片の一部はピット035の土師質小皿(第132図7)に接合した。

落込020

調査区中央の北側、北平坦面、C04、D04、D05区、第2a層上面で確認した。北側は調査区外(8区)に伸び、規模は東西15.6m、南北5.1m以上、深さ58.9cmをはかる。10区の「落込01」と同じ遺構である。埋土は大きく2層(第104図の14～16)に分けられ、埋土から近世の染付、瓦片など出土している。下面で南北・東西方向の小溝061～068・070～074・108～118、溝069を確認している(第130図)。

落込021

調査区中央の南側、中平坦面、第2a層上面で確認した。幅2.1m以上、深さ26cmをはかる。西側は流路017に切られる。第3層(新)上面(第2層下面)で確認している落込090と同一の可能性あり。埋土は7.5Y6/1灰色微砂混じり砂質シルトで、上面に鉄分があり、全体的に鉄分を帯びる(第106図の17)。埋土から近世の染付、瓦片などが出土している。下面で小溝042～044・049～051・075・091～104を確認している(第130図)。



- 1 落込028 2.5Y6/6明褐色粘質土で、2mm前後のマンガシ、2～4mm前後の礫を含む、全体的に鉄分の影響を受ける。
- 2 第2層 10YR4/3に5～1黄褐色土で、全体的にマンガシの影響を受ける。
- 3 溝040 2.5Y6/4に5～1黄色微砂混じり砂質シルトで、1mm前後の鉄分塊を多く含む。
- 4 第3層 2.5Y6/3に5～1黄色微砂混じりシルトで、鉄分塊、マンガシ塊を多く含む。
- 5 土坑130 2.5Y6/2灰黄色粘質土、全体的に鉄分の影響を少し受ける。
- 6 第4層 2.5Y6/2灰黄色砂質シルトで、鉄分の影響を少し受ける。
- 7 第4層 2.5Y6/2灰黄色シルト、鉄分塊、マンガシ塊を少量含む。
- 8 第4層 10YR5/2灰黄褐色砂層で、全体的にマンガシの影響を受ける。
- 9 第5層 5Y6/2灰オリブ粘質土で、全体的に鉄分の影響を受ける。
- 10 流路018

第134図 11-A区 D02区 南北断面図 (1/40)

落込024

調査区東半部、北平坦面、E07～08区、第2層（第2a層相当）上面で確認した。北側は流路019に切られ、径1m以上×5.3m以上、深さ64cmをはかる（第135図）。埋土は上下2層に分けられる。上層から土師質皿、下層から瓦質土器1、土師質土器5、土師器7、須恵器1片が出土している。

落込025

調査区の北東隅、D08～E08区、第2層（第2a層相当）上面で検出した。南側は流路019に切られ、規模は2.8m以上×4.5m以上、深さ44.4cmをはかる。埋土から陶磁器3、磁器4、瓦質土器3、瓦器椀3、土師質土器17、瓦15、須恵器1片が出土している。

落込026

調査区西半部、中平坦面、D02～03区、第2b層上面で検出した。東西方向の落込で、流路017・018に切られ、幅2.6m、深さ20cmをはかる（第134図）。埋土から土師質土器5、瓦1、須恵器1片が出土している。

落込228

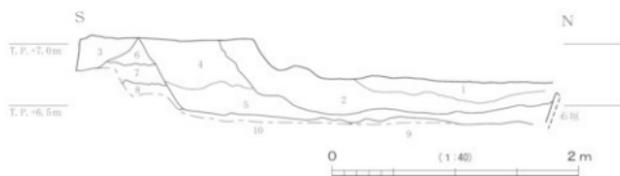
調査区西半部、北平坦面、E07区、第5層上面（本来は、第2層上面に対応）で検出した。北側は流路019に切られ、幅1.0m以上、深さ約10cmをはかる。

溝027

調査区西半部、北平坦面、D05～06区、E05～06区、第2層（第2a層相当）上面で検出した。流路018・019に切られ、幅3.8m、長さ17m以上、深さ22cmをはかる（第108図の10）。下位では2つにわかれ、二条の溝になる。埋土から17世紀中頃の唐津焼碗が出土している。

高まり028

調査区西半部の北寄り、北平坦面、D06区で検出した。規模は2.4×0.55mで、7-D区の「第1d層～第3層上位」に相当する（第104図の30～32）。埋土から12世紀代の瓦器椀、土師質皿



- 1 流路019 1064/1暗緑灰色砂質土、やや粘質を帯び2.516/3.51に5~10μm黄色砂層をラミナ状に含み、上面に3~5cm大の礫を含む。
- 2 流路019 2.516/3に5~10μm黄色砂と2.516/2灰色粘質土がラミナ状に入る。4の粘土塊（2.516/6黄褐色で5mm前後のマンガン塊を含む）をブロックする。北にいくほど青味を帯びる。
- 3 落込023 5064/1暗青灰色粘砂混じり粘質土。
- 4 落込024 2.517/2灰色粘砂と、2.516/6明黄褐色粘質土をブロックする。全体的に5mm前後のマンガン塊を含む。
- 5 落込024 2.516/1黄灰色粘砂に、5cm~10cm大の2.516/4に5~10μm黄色粘質土をブロックする。北にいくほど青味を帯びる。
- 6 第2層? 7.516/1灰色粘砂混じりシルトで、5mm前後の鉄分塊を多く含む。
- 7 第3層? 7.516/2灰色オーソープ粘砂混じりシルトで、やや粘質を帯び、5mm前後のマンガン塊、鉄分塊を含む。
- 8 第4層 2.516/3に5~10μm黄色粘砂で、全体的に鉄分を帯びる。
- 9 1077/1灰色粘砂。
- 10 第5層 7.516/1灰色粘質土で、5mm前後の鉄分塊を多く含む。

第135図 11-A区 落込023・024 断面図 (1/40)

が出土している。

井戸 222

調査区西半部、北平坦面、D～E07区、第5層上面（本来は、第2層上面に対応）で検出した。北側の一部は流路019に切られるものの、平面プランは円形で径1.1m、深さ100cm以上をはかる。埋土から16世紀代の青花碗1片、土師器76片が出土している。

10) 第1層上面（近世）

落込023、小溝群を検出した（第136図、図版40b・c）。8区の「第1層上面」に対応する。小溝はいずれも耕作に関連する遺構と考えられ、上面の標高T.P.7.52mをはかる。

落込 023

調査区西半部、北平坦面、E06～07区で検出した。流路018・019に切られ、径14.5m以上×4.5m以上、深さ80cmをはかる（第108・135図）。埋土から陶磁器1、瓦質土器1、瓦器碗10、土師質土器29、東播系練鉢1、瓦7、須恵器6、弥生土器2片が出土している。

小溝群

調査区中央の北寄り、北平坦面、C03～05区、D04～D06区、E06区で確認している。幅20m、深さ3cm、東西、南北方向の小溝で、操車場建設以前の旧耕作土に伴う溝溝と考えられる。

11) 第0層上面（近現代）

調査区内を南東→北西方向に走向する近代から現代にかけての流路017～019を検出している（第136図、図版40b・c）。流路はいずれも完掘はしていない。7-A区の「第1a層上面」に対応する。

流路 017

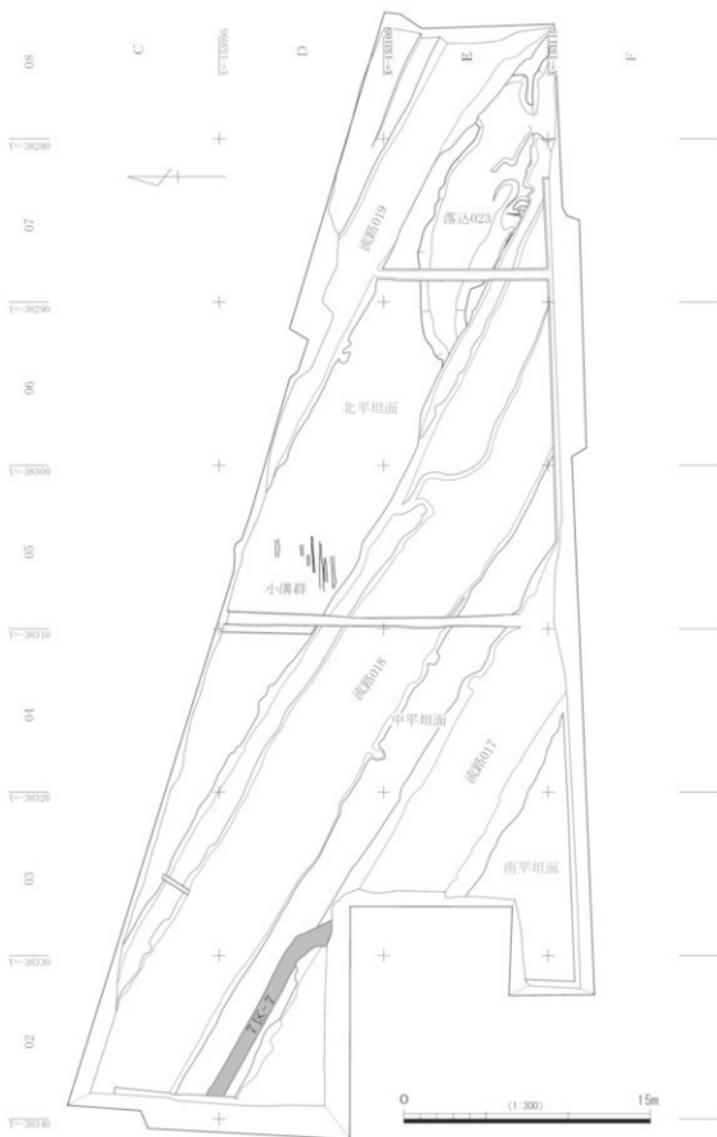
調査区の南西で検出した。南東→北西に走向する近代以降の人工の水路で、幅6.7m、深さ1.5m以上をはかる（第105・106図）。南肩に杭列を伴う。KH-2005-65の「旧用水路」、7-A区の「流路」に対応する。埋土上層より、磁器1、瓦器1、土師質土器13、東播系土器1、土師器7、須恵器4片、そして最上層から「昭和40年銘の10円硬貨」が出土している。

流路 018

調査区の中央で検出した。南東→北西に走向する幅7.7m、深さ2.5m以上をはかる（第104～108図）。北肩は二段（テラスをもつ）で、落込023を切る。下位に頭大の川原石を含む。7-B区の「流路」に対応する。埋土上層より、磁器1、陶磁器1、瓦器2、土師質土器8、東播系土器1、青磁1、瓦1、土師器11、須恵器2片、そして下駄、ウシの骨が出土している。

流路 019

調査区の北東で検出した。南東→北西に走向し、8区の「流路」へ続く（第95図）。幅3.9m、深さ1.5m以上をはかる（第135図）。D07・E08区では南肩に護岸用の杭列、北肩に護岸用の石垣を伴う（図版39b・c）。



第136図 10区・11-A区 第0層～第1層上面 平面図 (1/300)

(2) 11-B区

第1項 層序

第0層から第4層の層序を確認している(第137～139図)。調査は第4層上面まで実施した。

第0層 操車場廃絶後の整地土、操車場建設時の盛土および近代の耕作土で、本体部の「第0層」に対応し、上面の標高はT.P. 8.3mである。

第1層 (青灰色粘質土) 東半部にのみ認められた。上面の標高はT.P. 6.86～6.95m、層厚8～19cmをはかる。上面でピット、溝、下面で島畠007を検出している。層中より染付5、青花1、陶磁器3、瓦質土器6、瓦器碗24、土師質土器40、白磁2、東播系土器2、瀬戸美濃焼1、備前焼1、志野焼1、瓦18、土師器6、須恵器12片が出土している。

第2層 a～cに分けられる。第2a層(黄褐色微砂混じりシルト)上面の標高はT.P. 6.9～7.38mで、層厚8～50cmをはかり、西へ行くほど層厚を増す。層中より染付1、陶磁器2、瓦質土器6、瓦器49、土師質土器115、白磁1、東播系土器4、瀬戸美濃焼2、唐津焼2、瓦5、黒色土器1、須恵器7片が出土している。第2b層(にぶい黄色粘質土)は島畠009で、上面の標高はT.P. 7.35mで、層厚約33cmをはかる。層中より瓦器1、土師質土器6、黒色土器1、土師器1、須恵器5片が出土している。第2c層(明黄褐色砂質土)は、同じく島畠009に相当する。上位面から瓦器8、土師質土器17、土師器1、須恵器6片が出土している。

第3層 上面の標高T.P. 6.85～7.07m、層厚9～22cmをはかり、東半部は後世の削平を受け、存在しない。

第4層 (灰オリーブ色粘質土～褐色砂礫層) 上面の標高はT.P. 6.6～6.76m(西から東へ向かってやや傾斜)をはかる。本体部の「第3-1層～第3-3層」、8区の「第4層」に対応する。層中より土師器甕(第143図1)が出土している。

<包含層出土遺物>(第143図2、図版81-12～18)、

12・14～18は第2a層、13は第2c層から出土した。12は東播系練鉢、13は瓦器小皿(第143図2)、14は唐津焼皿、15・16は白磁碗、17は青花碗、18は瀬戸美濃焼皿である。13は復元口径7.8cm、器高1.45cmをはかる。

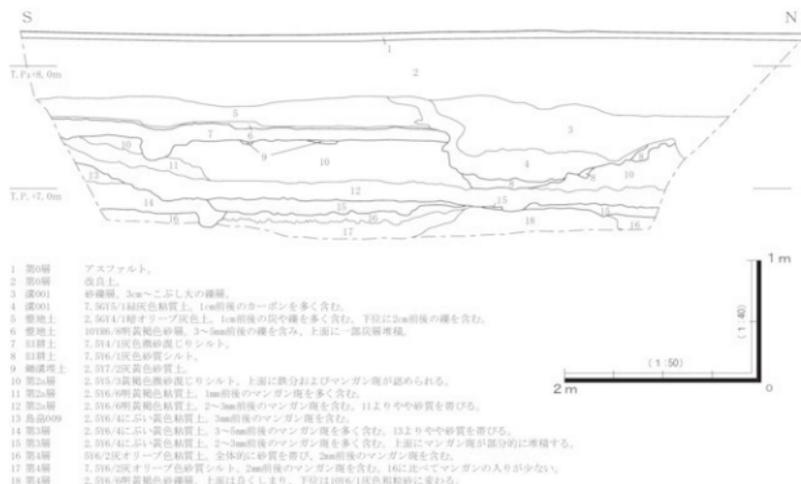
第2項 調査成果

1) 第4層上面(奈良時代)

本体部の「第3-1面」、8区・10区・11-A区の「第4層上面」に対応する。溝014・015を検出している(第140図、図版41a)。

溝014

調査区の南西、E10区で検出した。幅0.3m、深さ11cmをはかる。埋土は5Y5/3灰オリーブ粘質土で、3mm前後のマンガン斑、鉄分斑を含む。



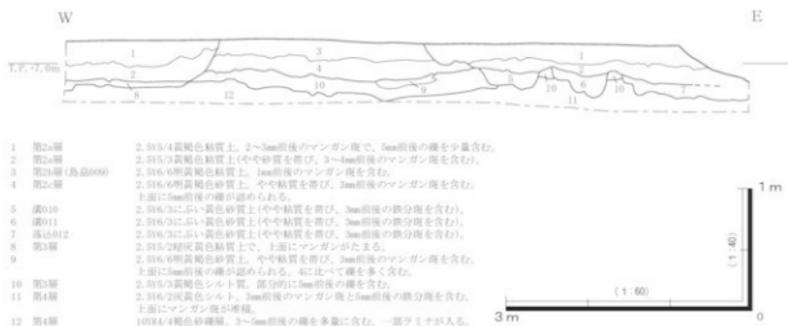
第138図 11-B区 西壁断面図 (1/50・1/40)

溝 015

調査区中央、E10区で検出した。幅0.3m、深さ4.8cmをはかる。埋土は2.5Y6/2灰黄色砂質シルトで、1mm前後の礫を含む。埋土から土師器1片が出土している。

2) 第2b層上面 (中世)

本体部の「第1-4面」に対応する。島島009、溝010・011、落込012を検出している(第141図、図版41b)



第139図 11-B区 東西トレンチ断面図 (1/60・1/40)

島島 009

E10区で検出した。南北方向で、幅3.3mをはかる(第137・139図)。第2b層で形成され、層中より瓦器碗1、土師質土器6、黒色土器1、土師器1、須恵器5片が出土している。

溝 010・011、落込 012

E10区で検出した南北方向の耕作関連遺構である。溝010は幅0.7m、深さ19.1cmをはかる。埋土から瓦質土器4、瓦器2、土師質土器5、須恵器2片が出土している。

溝011は幅0.7m、深さ19.5cmをはかる。埋土から瓦質土器1、瓦器6、土師質土器7、須恵器1片が出土している。落込012は幅2.0m以上、深さ11cmをはかる。埋土から瓦質土器1、土師質土器1、瓦1、須恵器1片が出土している。

3) 第1層上面(中世～近世)

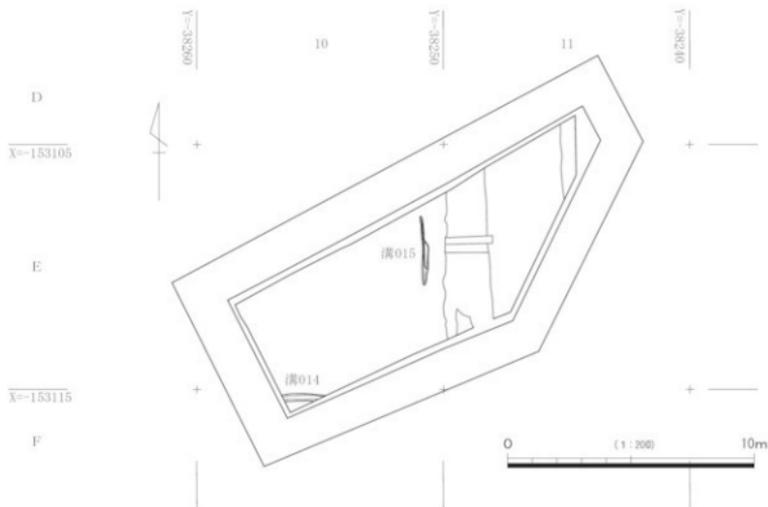
検出面の標高はT.P.6.86～7.37mで、東へ行くにしたがって標高が低くなる。上面で島島007、ピット002、南北方向の溝(溝003・004・008・013・016)を検出している(第142図、図版41c)。本体部の「第1面」、2区の「第2面」、7区の「第1c層上面」に対応する。

島島 007

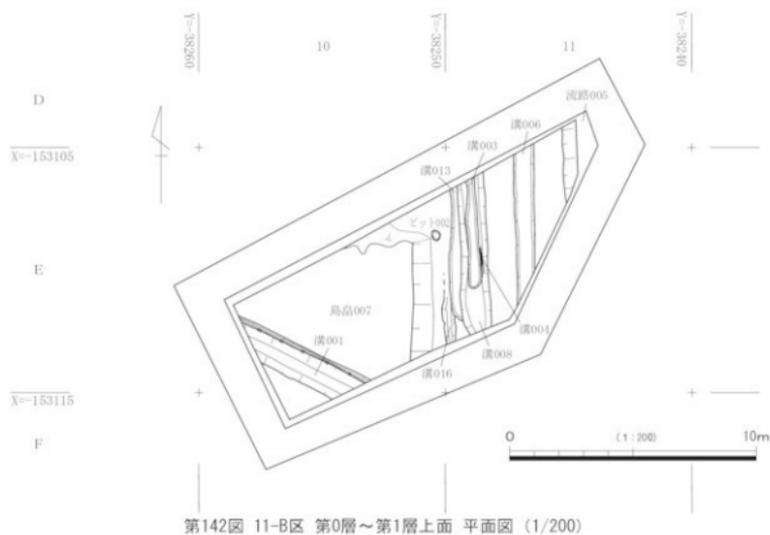
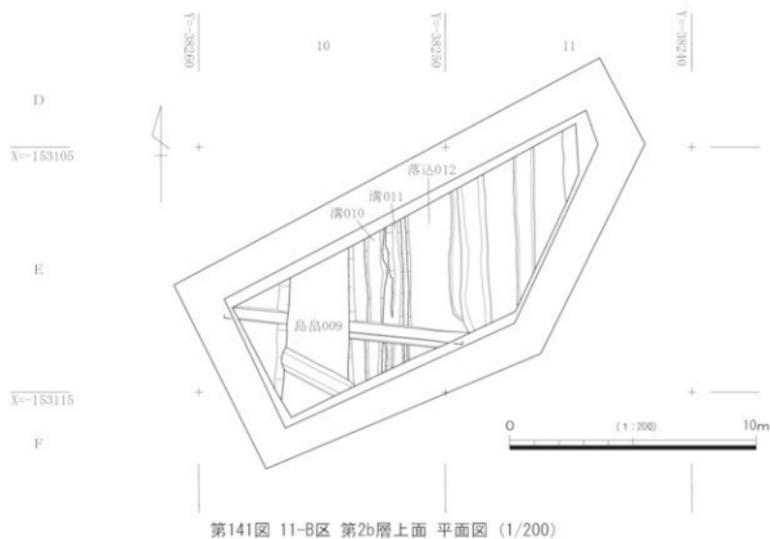
調査区東半部、E10区で検出した。南北方向で、幅6.0m以上をはかる。南側は溝001に切られている。

ピット 002

調査区中央、E10区で検出した。径0.41×0.31m、深さ7cmをはかる。埋土は10Y5/1灰色シ



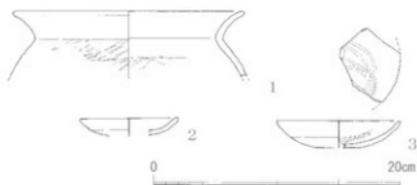
第140図 11-B区 第4層上面 平面図 (1/200)



ルトで、2mm 前後の礫をわずかに含む。

溝 003・004・008・013・016

調査区東半部、E11 区で検出した。溝 003 は幅 0.35m、深さ 13cm をはかる。埋土は旧耕作土（7.5Y4/1 灰色微砂混じりシルト）で、層中より瓦質土器 1、瓦器碗 5、土師質土器 17、瓦 1 片が出土している。



1 (第4層)、2 (第2c層)、3 (溝008) *3は第1層上面
第143図 11-B区 包含層、第1層上面 溝出土土器 (1/4)

溝 004 は幅 0.9m、深さ 3cm をはかる。埋土は 7.5Y4/1 灰色微砂混じりシルト。溝 008 は幅 1.2m、深さ 24cm をはかる。溝 003・004 の下で検出され、溝 013 を切る。埋土は 5GY4/1 暗オリブ灰色粘質土に、5mm 前後の鉄分斑を含み、10GY4/1 暗緑灰色細砂をブロックする。瓦器、土師質土器、瓦、須恵器の小片が出土している。瓦器碗（第 143 図 3、図版 81-11）は口径 9.8cm、器高 2.2cm はかり、14 世紀に比定される。

溝 013 は第 1 層中で検出した。幅 1.5m 以上、深さ 18.3cm をはかり、溝 008 に切られる。埋土は 10G4/1 暗緑灰色粘質土で、2mm 前後の小礫と部分的に鉄分斑がみられる。磁器 1、瓦器 1、土師質土器 7 片が出土している。

溝 016 は第 1 層中で検出した。幅 0.5m、深さ 12.3cm をはかる。溝 013 に切られる。埋土は 5Y5/2 灰オリブ粘質土で、やや砂質を帯びる。磁器 1、土師質土器 1、唐津焼 1（17 世紀前半）片が出土している。

4) 第 0 層下面（近現代）

操車場造成時の整地土を除去した面に相当し、上面の標高は東端で T. P. 7.52m である。本体部の「第 0 面」、2 区の「第 1 面」、7 区の「第 1b 層上面」に対応する。溝 001、流路 005 を検出している（第 142 図）。

溝 001

調査区の南西端、E10 区で検出した。北西-東南方向の溝で、幅 1.35m、深さ 75cm をはかる（第 138 図）。東側に杭列と棧を設けている。2 区の「溝 001」、8 区の「溝 002」と一連の溝である。埋土から染付 1、瓦器碗 2、土師質土器 11、須恵器 1 片が出土している。

流路 005

調査区の北東隅、E11 区に位置する。幅 2.0m 以上、深さ 1.0m 以上をはかり、護岸施設を伴う（第 137 図）。本体部の「01073 坪境溝」と同一の遺構で、埋土から近世以降の陶磁器片が出土している。

第 3 項 小結

11-A 区は、近現代の流路によって大きく 3 つに分断されていた。また、調査区の南半部は近

世の遺構によって削平され、平面的な広がりでも連続的に層序及び遺構面を把握するうえで支障となっていた。それでも部分的であれ、古墳時代前期から近世にかけての11枚の遺構面を確認している。調査の結果、第8層上面では古墳時代前期の流路、第7層上面では古墳時代前期の畦、第6a層上面で古墳時代中期～後期の溝、第5層上面では古墳時代後期の水田跡・流路・堤・畦状高まりを検出している。水田跡の時期は従前の調査では出土遺物から遺構の年代を決定することが出来なかったが、今回の調査で第5層出土土器及び流路253より出土した土器から、古墳時代後期（6世紀第1四半期）であることが明らかとなった。

第4層上面では奈良時代の柱列・溝・小溝・土坑・ピット、第3層下面では中世の井戸・土坑・ピット・落込・小溝・溝を検出している。井戸は2基で、内1基の井戸209は径約1.7m、深さ約1.3mをはかり、下層から11世紀中頃～後半の瓦器椀、黒色土器、土師質土器、そして炭層に混じって粘土塊などが出土している。第3層上面では中世の小溝・ピット、第3層（新）上面～第2層下面では近世の落込・小溝・溝・土坑・ピット、第2層上面では中世～近世の落込・ピット・溝・高まり・井戸、第1層上面では近世の落込・小溝群、第0層上面で近現代の流路を検出した。

以上、1区、2区、7区、8区、10区および本体部、01-4調査区、東西線、KH2005-65を含めて、古墳時代中期面での明確な遺構および遺物（2区、8区での埴輪を除くと）を確認することができなかった。

11-B区は、奈良時代～近現代にかけての4枚の遺構面を検出している。第4層上面では奈良時代の小溝、第2b層上面では中世の島畠・溝・落込、第1層上面では中世～近世の島畠・ピット・溝、第0層下面では近現代の溝・流路を検出した。

引用・参考文献

- ・荒川和哉 2006「久宝寺遺跡第65次調査（KH2005-65）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告89』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・（財）大阪府文化財センター 2004『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書VI-大阪竜華都拠点地区竜華東西線建設に伴う発掘調査報告書-』（財）大阪府文化財センター調査報告書第118集
- ・（財）大阪府文化財センター 2007『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書VII-寝屋川流域下水道竜華水みらいセンター水処理施設等建設工事に伴う発掘調査他-』（財）大阪府文化財センター調査報告書第156集
- ・（財）大阪府文化財センター 2010『池内遺跡』（財）大阪府文化財センター調査報告書第198集
- ・西村歩 2008「中河内地域の古式土師器編年と諸問題」『シンポジウム「邪馬台国時代の摂津・河内・和泉と大和」資料集』ふたかみ邪馬台国シンポジウム8 香芝市教育委員会
- ・原田昌則 1995「中田遺跡第24次調査（NT94-24）」『中田遺跡』財団法人八尾市文化財調査研究会報告49（財）八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則 2006「久宝寺遺跡23次調査（NH7-23）」『久宝寺遺跡』財団法人八尾市文化財調査研究会報告89（財）八尾市文化財調査研究会

第1章 久宝寺遺跡の調査

- ・原田昌則 2003「中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半（庄内式古相）の土器の細分試案について」『久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書』財団法人八尾市文化財調査研究会報告74（財）八尾市文化財調査研究会
- ・財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1997『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第73集
- ・古代の土器研究会編 1993『古代の土器2 都城の土器集成11』
- ・近つ飛鳥博物館 2006『陶色の須恵器－年代のものさし』平成17年度冬季企画展

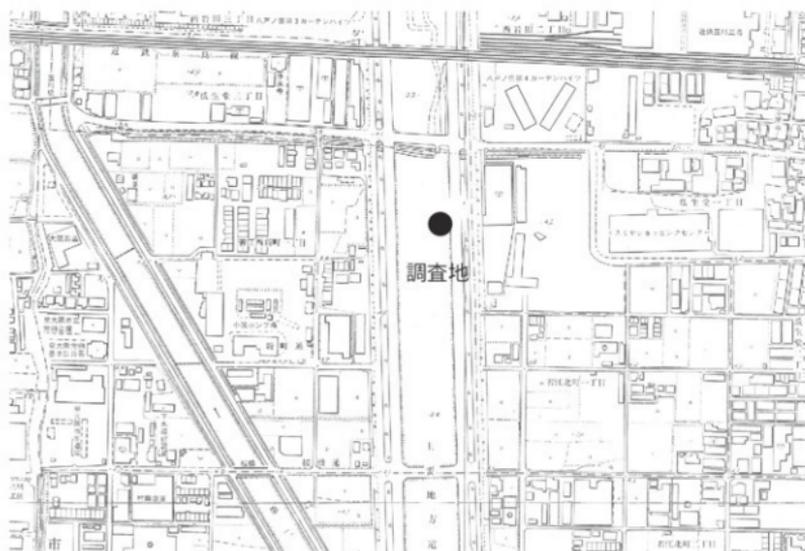
第2章 瓜生堂遺跡の調査

第1節 調査に至る経過と調査の方法

都市整備部下水道室・東部流域下水道事務所が実施している柏原八尾増補幹線外整備工事のうち、東大阪市若江西新町1丁目に位置する推進堅坑は、瓜生堂遺跡の範囲内に所在していた。そのため、推進堅坑部分（4㎡、一辺2mの正方形）の全域を対象にして、発掘調査（調査番号10015）を実施した。調査地は大阪中央環状線の中央緑地帯の南行き車線側にあたる場所である（第144図）。掘削に際しては、近畿自動車道建設時の整地土および旧耕土約1.3mをバックホウで機械掘削し、その下層については1層ずつ人力で掘削したうえで、精査・遺構検出、遺構掘削を行った。

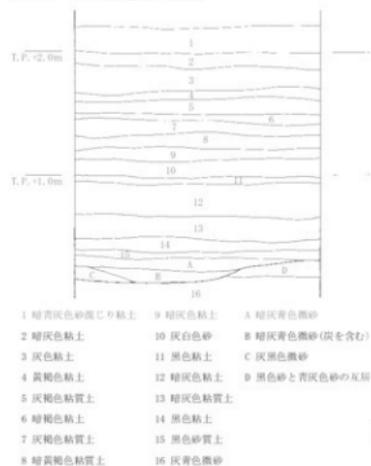
第2節 調査の成果

当該地の西側に隣接する地点を近畿自動車道大阪線が南北に走るが、その建設時に実施された発掘調査で弥生時代中期の墓域が検出されているため、今回の調査でも同様の成果が得られるものと予想された。

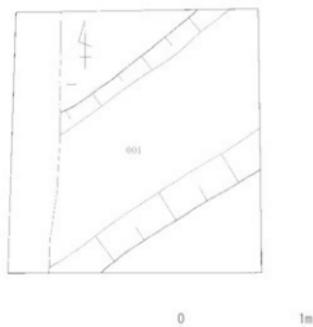


第144図 瓜生堂遺跡 調査区位置図（1/5000）

第2章 瓜生堂遺跡の調査



第145図 瓜生堂遺跡 土層柱状図(1/40)



第146図 瓜生堂遺跡 弥生時代遺構面 平面図(1/40)

第1項 層序

整地土除去後の第1層(上面がT.P.+2.2mを測る)から第15層(上面がT.P.+0.3mを測る)に至るまで、約1.9mの間に15層の堆積が認められた(第145図)。ほとんどの層には遺物が含まれていなかったが、唯一第2層暗灰色粘土から須恵器甕の破片が出土した。第16層灰青色微砂上面(T.P.+0.1m~0.2m)で遺構を検出した。上層の第15層との間にはいくつかの層が認められたが、これらは第16層を基盤とする遺構に関わる層である。

第2項 遺構と遺物

第16層上面で遺構を検出した。検出した遺構は方形周溝墓で、調査区中央で北東から南西方向の溝001(幅1.0m、深さ20cm)と、その南東側に盛土(黒色微砂と灰青色微砂の互層)が認められた(第146図、図版83)。周溝の埋土は3層で、暗灰青色ないしは灰黒色の微砂であった。周溝から遺物は出土しなかった。出土遺物はごくわずかで、そのうち図示し得たのは1点である。第155図1は須恵器で、甕の口縁部の小片である。第2層からの出土である。

第3節 まとめ

今回の調査範囲では、方形周溝墓から遺物は出土しなかったが、隣接する近畿自動車道大阪線の建設に伴う発掘調査成果を参考にすれば、弥生時代中期に属するものと考えられ、今回はその周溝と墳丘裾部の一部が検出されたものといえる。当該地域周辺では、これまでに100基以上の方形周溝墓が検出されている。弥生時代中期を中心とした墓域とされる地域であり、今回の調査ではその一端が確認できた。

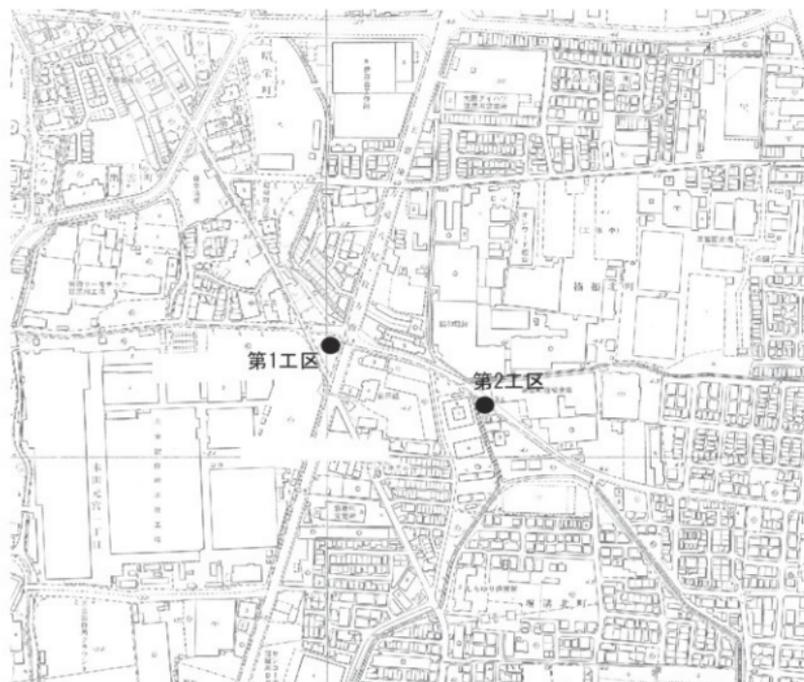
第3章 讃良郡条里遺跡の調査

第1節 調査に至る経過と調査の方法

都市整備部下水道室・東部流域下水道事務所豊島工区が実施している門真寝屋川（三）増補幹線（二）下水道整備事業のうち、寝屋川市中木田町～讃良西町にかけての範囲内で、第1工区（調査番号11002）1箇所（24㎡）、第2工区（調査番号11053）1箇所（48㎡）の2箇所の堅坑部分が讃良郡条里遺跡の範囲内に所在していた（第147図）。そのため、各堅坑の全域（計72㎡）を対象として発掘調査を実施した。

掘削に際しては、整地土および旧耕土をバックホウで機械掘削し、その下層については1層ずつ人力で掘削したうえで、精査、遺構検出、遺構掘削を行った。

検出した遺構面の実測については、調査区および各遺構の平面図を世界測地系の座標値を基準として作成し、断面図は東京湾平均海面（T.P.）を基準として作成した。

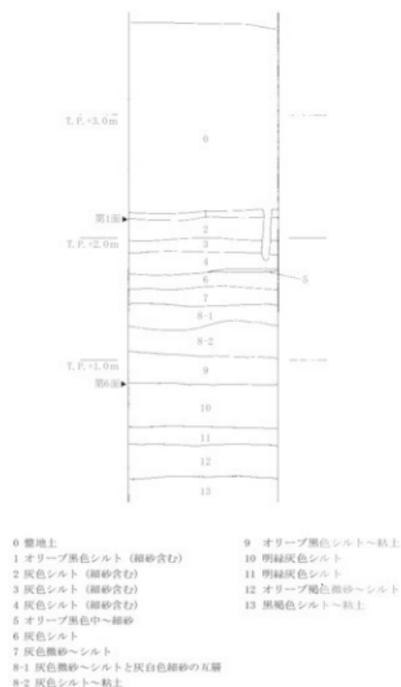


第147図 讃良郡条里遺跡 調査区位置図 (1/5000)

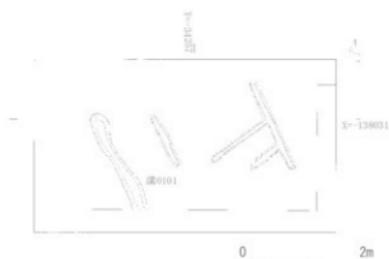
第2節 第1工区

第1項 層序

T.P. +3.8mの現地表面からT.P. +2.2m付近までの約1.6mの層厚で現代の整地土が存在し、その下はT.P. +1.8m付近の第4層まで、約40cmの層厚で耕作土が認められた(第148図)。そのうち第2層からは陶磁器、第3層からは瓦器が出土しており、これらは近世および中世の所産と考えられる。第4層からT.P. +1.4m付近の第8-1層までは遺構が認められなかったが、第7層からの出土遺物より第8-1層上面の第4遺構面が平安時代後期に比定されるため、この時期に讚良郡で施行されたとされる条里制に関連するものと考えられる。第9層オリーブ黒色粘土からは須恵器、土師器などが出土しており、これらによって古墳時代中・後期の包含層と確認された。したがってその下層の第10層明緑灰色シルト上面が同時期の遺構面と考えられた。



第148図 第1工区 土層柱状図(1/40)



第149図 第1工区 第1遺構面 平面図(1/80)



第150図 第1工区 第6遺構面 平面図(1/80)

第2項 遺構と遺物

本調査区で遺構が認められたのは溝と畦畔が検出された第1遺構面とピットが検出された第6遺構面で、その他の面から遺構は検出されなかった。

1) 第1遺構面

第1遺構面では溝が1条と畦畔が検出された（第149図、図版84a）。

溝 0101

調査区の西半部で検出した。北西端部から南南東方向に走る。幅0.15～0.3mで、深さ10cmを測る。埋土は1層で、灰色細粒砂混りシルトである。

内部から遺物は出土しなかったが、耕土内から陶磁器片が出土しており、近世の耕作面に関連するものと考えられた。

2) 第6遺構面

第6遺構面ではピットが2ヶ所検出された（第150図）。

ピット 0601

調査区の北端部やや西寄り検出した。楕円形状を呈し、長軸0.7m、短軸0.3mで、深さ7cmを測った。埋土は1層で、オリーブ黒色シルトである。埋土内から遺物は出土しなかった。

ピット 0602

調査区の中央部やや東寄り検出した。円形状を呈し、径軸0.25mで、深さ7cmを測った。埋土は1層で、オリーブ黒色シルトである。埋土内から遺物は出土しなかった。

遺構内から遺物は出土しなかったが、包含層出土の遺物より、古墳時代中・後期に属するものと考えられる。

遺物は各包含層から少量出土したが、そのうち図示し得たのは3点である。第155図3は瓦器で、椀の口縁部の小片である。第3層からの出土である。第155図2・4は須恵器で、ともに高坏の脚部の小片である。いずれも第9層からの出土である。

第3項 まとめ

本調査区は、平安時代後期に施行されたとされる讚良郡条里遺跡の範囲内に所在するが、古墳時代中・後期を主体とする長保寺遺跡に隣接するため、条里制に関わる遺構とともに古墳時代の遺構の検出も予想された。

調査の結果、第1工区で遺構が確認できたのは近世の耕作面である第1遺構面と、古墳時代中・後期と考えられる第6遺構面であった。その他では、第4遺構面が出土遺物から平安時代後期と考えられたが、遺構は検出されなかった。条里制施行以前の状況に関しては、古墳時代中・後期に対応すると考えられる面で遺構が確認できたが、近接する位置に集落の存在を想定させるもの

とは考えられない状況であった。

第3節 第2工区

第1工区到達堅坑(11002)から東方約100mの地点である。

第1項 層序

T.P.+3.8mの現地表面からT.P.+2.2m付近までの約1.6mの層厚で現代の整地土が存在し、その下層は旧耕土の第1層暗灰色シルト～細砂からT.P.+1.4～1.5mの第10層灰色粘土～シルトまで、約1.1mの層厚で4面の耕作面が確認できた(第151図)。その下層はT.P.+0.5m付近の第17層灰色微砂をベースとする第7面まで5層の自然堆積層が認められた。

T.P.+0.8～0.6mに堆積したオリーブ黒色粘土からは須臾器、土師器などが出土しており、これらによって古墳時代中・後期の包含層と確認された。したがってその下層の第15層緑灰色粘土上面が同時期の遺構面と考えられる。

T.P.+0.4m付近の第17層灰色微砂は古墳時代前期の包含層で、土師器の甕(第155図6)が出土した。

第2項 遺構と遺物

本調査区で遺構が認められたのは、畦畔が検出された第2遺構面、南北方向の畦畔が検出された第4遺構面、土坑、溝などが検出された第6遺構面であった。

1) 第2遺構面

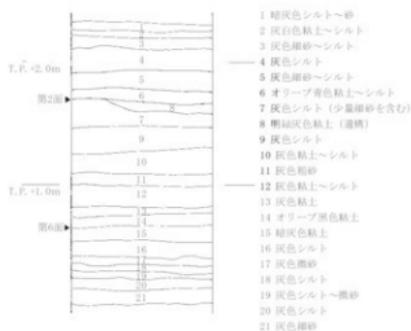
第2遺構面では、5ヶ所の遺構を検出した。内訳は土坑が4基、溝と思われるものが1条である(第152図)。

溝0201

調査区の南西端部で検出した。ほぼ南北方向であるが、検出したのが東側の肩部の一部で、側溝により削平された部分に加えて西側は調査区外にあたるため、全容は不明である。遺物は出土しなかった。

土坑0202

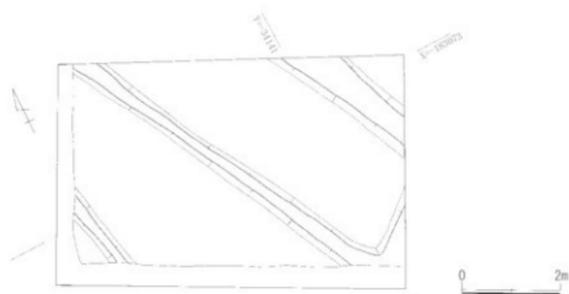
溝0201のすぐ東側に隣接する位置で検出した。ややいびつな長方形形状を呈する。



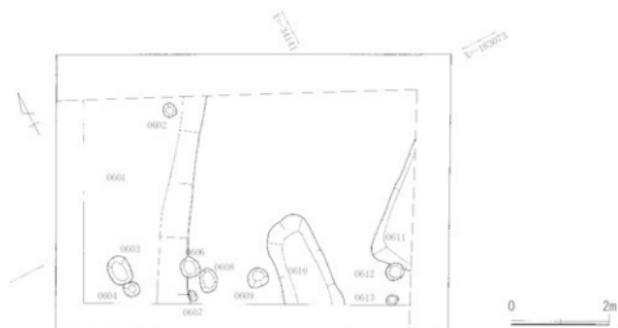
第151図 第2工区 土層柱状図(1/40)



第152図 第2工区 第2遺構面平面図 (1/100)



第153図 第2工区 第4遺構面平面図 (1/100)



第154図 第2工区 第6遺構面平面図 (1/100)

長軸 1.4m、短軸 0.9m、深さ 12cm を測った。埋土は 1 層で、明緑灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

土坑 0203

調査区の北西端部付近で検出した。検出したのが南端部付近のみで大半が北壁外にあるため、形状は不明である。検出範囲で長軸 2.7m 以上、短軸 1.0m 以上、深さ 10cm を測った。埋土は 1 層で、明緑灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

土坑 0204

土坑 0203 のすぐ東側に隣接する位置で検出した。不定形状を呈する。長軸 1.7m 以上、短軸 1.7m、深さ 12cm を測った。埋土は 1 層で、明緑灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

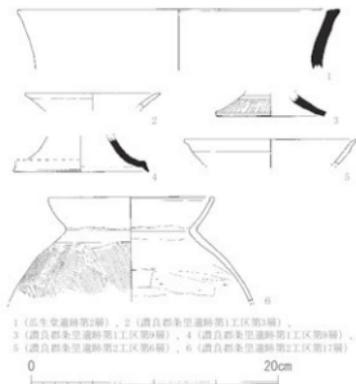
土坑 0205

調査区の北東端部付近で検出した。大半が東壁外にあるため全容は不明といわざるをえないが、検出部からみればややびつな長方形形状を呈するものと推定できる。長軸 1.7m、短軸 0.6m 以上、深さ 10cm を測った。埋土は 1 層で、明緑灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

2) 第 4 遺構面

第 4 遺構面ではほぼ南北方向の畦畔を 3 条検出した (第 153 図、図版 84b)。そのうち東側の畦畔は幅約 1.0m を測り、坪境の大畦畔の可能性がある。その他は幅約 0.4m 内外を測った。耕土内より土師器碗が出土しており (第 155 図 5)、平安時代後期に比定される耕作面で、讚良郡条里の施行期にあたるものと考えられる。

3) 第 6 遺構面



第155図 瓜生堂遺跡・讚良郡条里遺跡 出土土器 (1/4) 肩部付近で検出した。円形状を呈し、径

第 6 遺構面では 13ヶ所の遺構を検出した (第 154 図、図版 85a)。内訳は溝 1 条、土坑 2 基、ピット 10 個などである。

溝 0601

調査区の西端部を南北方向に走る浅い皿状の溝で、西側肩部は調査区外にあるため溝幅は不明である。幅 2.8m 以上、深さ 6cm を測った。埋土は 1 層で、青灰色粘土ブロックを少量含む灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

ピット 0602

調査区の北端部で、溝 0601 を掘削後に調査区の北端部で、溝 0601 を掘削後に

0.3m、深さ5cmを測った。埋土は1層で、青灰色粘土ブロックを少量含む灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

ビット0603

調査区の南西端部で、溝0601を掘削後に検出した。円形状を呈し、径0.5m、深さ10cmを測った。埋土は1層で、青灰色粘土ブロックを少量含む灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

ビット0604

調査区の南西端部で、溝0601を掘削後にビット0603の南側に接する位置で検出した。円形状を呈し、径0.3m、深さ6cmを測った。埋土は1層で、青灰色粘土ブロックを少量含む灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

ビット0605

調査区の中央部北端の、溝0601の肩部付近で検出した。円形状を呈し、径0.3m、深さ6cmを測った。埋土は1層で、青灰色粘土ブロックを少量含む灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

ビット0606

調査区の中央部南端で、溝0601の肩部を切る状態で検出した。円形状を呈し、径0.4m、深さ5cmを測った。埋土は1層で、青灰色粘土ブロックを少量含む灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

ビット0607

調査区中央部南端の、溝0601肩部付近のビット0606の南側で検出した。楕円形状を呈し、長軸0.4m、短軸0.2m、深さ4cmを測った。埋土は1層で、青灰色粘土ブロックを少量含む灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

ビット0608

調査区中央部南端で溝0601肩部付近の、ビット0606とビット0607の東側の位置で検出した。楕円形状を呈し、長軸0.5m、短軸0.3m、深さ7cmを測った。埋土は1層で、青灰色粘土ブロックを少量含む灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

ビット0609

調査区の南端部で検出した。円形状を呈し、径0.4m、深さ4cmを測った。埋土は1層で、青灰色粘土ブロックを少量含む灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

土坑0610

調査区の南端部の、ビット0609の西側で検出した。楕円形状を呈し、長軸2m以上、短軸1m、深さ10cmを測った。埋土は1層で、青灰色粘土ブロックを少量含む灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

土坑0611

調査区の東端部で検出した。楕円形状を呈し、長軸3m以上、短軸1m以上、深さ10cmを測った。埋土は1層で、青灰色粘土ブロックを少量含む灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

ピット0612

調査区の東端部の、土坑0611の南側に接する位置で検出した。円形状を呈し、径0.3m、深さ6cmを測った。埋土は1層で、青灰色粘土ブロックを少量含む灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

ピット0613

調査区の南東端部で検出した。円形状を呈し、径0.2m、深さ3cmを測った。埋土は1層で、青灰色粘土ブロックを少量含む灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

遺物は各包含層から少量出土したが、そのうち図示し得たのは2点である。第155図5は土師器で、碗の口縁部の小片である。第6層からの出土である。第155図6は土師器で、甕の口縁部から体部上半の破片である（図版85b）。第17層からの出土である。

第3項 まとめ

調査の結果、第4遺構面から平安時代後期に属する耕作面が検出され、南北方向の畦畔の存在など、これは讃良郡条里の施行期の様相を示すものといえる。

条里制施行以前の状況に関しては、第13層灰色粘土上面の第6遺構面が古墳時代中・後期の遺構面と考えられ、溝、ピットなどが検出されたが、各遺構から遺物は出土しなかった。

第4章 分析編

第1節 久宝寺遺跡2区出土の人骨および動物遺存体

大阪市立大学 安部みき子

はじめに

大阪府八尾市に位置する久宝寺遺跡の3世紀の周溝内で3基の土坑が発掘され、人骨および動物遺体が出土した(第30図、図版6b~h)。出土骨の保存状態は非常に悪かったため、骨周辺の土とともに取り上げ、保存処理を行った。

人骨が出土した遺構は土坑073で、土坑074は種の同定ができなかった約3×15cmの扁平骨1点が、土坑075はシカの上腕骨の遠位部が1点出土している(表1)。

土坑073の人骨

人骨の頭位は東で、顔を左に向けていることより、頭部と体幹は仰臥位と推定される(第31図、図版6g)。頭骨以外で同定できた部位は、右肩甲骨、右鎖骨、右腸骨と左右の大腿骨である。四肢骨の埋葬時の姿勢は、比較的保存状態の良かった大腿骨が後面が斜め上方を向き、体幹の縦軸に対して約45度傾き、左右が並んだ状態で出土していることから、埋葬時には両膝をそろえて膝関節を強屈していたと推測される。

頭骨の遺存部位は、前頭骨左側の蝶前頭縫合と後頭骨右側の頭頂乳突縫合を結んだ直線の左側の脳蓋蓋と、左上顎骨の歯槽突起、左下顎骨および歯である(図版60-1・2)。また、上顎骨は最も低い位置で出土した左側頭骨より約3cm上方より出土し、顔面骨の対面にある頭頂骨の位置まで移動していた。さらに、歯も頭蓋内に散乱していた。このような出土状況から、生前か死後かは不明であるが、顔面に何らかの力が加わったものと推測される。

下顎骨は左側の第1大臼歯歯槽部より後方が遺存しており、第2大臼歯の歯根と第3大臼歯が釘植していた(図版60-3)。

上顎と下顎臼歯の咬合面はいずれも平坦で、咬頭のエナメル質が摩耗して象牙質が点状に露出した。

肩甲骨と鎖骨は肩関節周辺(図版60-4)が出土している。腸骨は大坐骨切痕周辺が遺存しており、その角度は鋭角であった。大腿骨は両骨端破損しており、また骨幹は土圧等による変形が大きいため筋の発達程度などの観察はできなかった。

性の判定は側頭骨の乳様突起の大きさと寛骨の大坐骨切痕の角度でおこない、男性と推測された。年齢の推定は矢状縫合とラムダ縫合の状態、上顎臼歯と下顎第3大臼歯の咬合面の摩耗度でおこない、壮年と推定された。

表1 久宝寺遺跡2区出土の人骨および動物遺存体

資料	遺構	種類	部位名	左右	詳細	備考
①-1	土坑073	ヒト	大腸骨	左	両骨端破損	図版60-5上
①-2	土坑073	ヒト	大腸骨	右		図版60-5下
②	土坑073	ヒト	腸骨	右	大坐骨切痕の一部遺存	大坐骨切痕の角度より男性。図版60-6
③-1	土坑073	ヒト	尺骨or橈骨	不明	骨幹約3cm遺存	
③-2	土坑073	ヒト	尺骨or橈骨	不明	骨幹約2cm遺存	
③-3	土坑073	ヒト	長骨片			
③-4	土坑073	ヒト	尺骨or橈骨	不明	骨幹約5cm遺存	
③-5	土坑073	ヒト	長骨片			
③-6	土坑073	ヒト	長骨片			
④	土坑073	ヒト	長骨片			
⑤-1	土坑073	ヒト	肩甲骨	右	肩甲骨から関節窩および外側縁まで遺存	図版60-4左
⑤-2	土坑073	ヒト	鎖骨	右	骨幹中央～肩峰端まで8.5cm遺存	図版60-4右
⑤-3	土坑073	ヒト	不明		骨片	
⑤-4	土坑073	ヒト	不明		骨片	
⑤-5	土坑073	ヒト	不明		骨片	
⑤下-1	土坑073	哺乳類	不明		長骨片	
⑥-1	土坑073	ヒト	頭蓋骨		左側は頭頂骨、額頭骨、右側は頭頂骨の矢状縫合同辺と後頭骨遺存	乳様突起の大きさより男性、縫合の状態より壮年。図版60-1・2
⑥-2	土坑073	ヒト	下顎骨	左	下顎枝と第3大臼歯の歯槽部遺存。筋突起、関節突起と下顎角破損。第3大臼歯釘痕、咬頭は磨耗し咬合面は平坦であるが、象牙質は点状に見える。	壮年。図版60-3
⑥-3	土坑073	ヒト	上顎大臼歯	不明	咬頭は磨耗しているが、咬合面が平坦であるが、象牙質は点で見えている。	壮年。図版60-3
⑥-4	土坑073	ヒト	大臼歯	不明	歯冠部のエナメル質のみ半分遺存	
⑥-5	土坑073	ヒト	臼歯	不明	歯根のみ遺存	
⑥-6	土坑073	ヒト	歯	不明	エナメル質の破片	
⑥-7	土坑073	ヒト	臼歯	不明	エナメル質片	
⑥-8	土坑073	ヒト	臼歯	不明	エナメル質片	
⑥-9	土坑073	ヒト				
⑦	土坑074	哺乳類	骨片		3×13cm遺存	図版60-7
⑧	土坑075	シカ	上腕骨	右	遠位部のみ遺存、内側・外側の先端破損	図版60-8

まとめ

今回出土した人骨は出土状況が悪いため、詳細な観察はできなかった。しかし、性と年齢の推定できる部位が遺存していたため、壮年の男性と判定された。

その他の土坑からはシカの上腕骨（図版60-8）が同定された。

参考文献

- D. Aftandilian, 他13 1994 Standards for Data Collection from Human Skeletal Remains, Arkansas Archeological Survey Research Series, U.S.A

第2節 久宝寺遺跡1・2区出土樹種同定

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

古墳時代前期の溝・溝埋土上部（貯木施設）からは、作業台、槽等の木製品、丸木状、板状、角棒状等の加工材、原木、木屑等が出土している。樹種同定は2回に分けて実施し、1回目は針葉樹のヒノキを中心に12分類群が確認されている。2回目の分析調査では、主に貯木施設等から出土した加工材などについて樹種同定を実施し、2回の樹種同定結果も含め木材資源の利用状況について考察を行う。

1 試料

試料は、貯木施設などから出土した木材70点（資料No.1～70）である。

2 分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお、木材組織の名称や特徴については、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

3 結果

樹種同定結果を表1に示す。木材は、針葉樹4分類群（モミ属・ツガ属・コウヤマキ・ヒノキ）、広葉樹18分類群（オニグルミ・ヤナギ属・クマシデ属イヌシデ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・ムクノキ・エノキ属・ケヤキ・クスノキ科・ヒサカキ近似種・サクラ属・バラ属・フジキ属・センダン・ヌルデ・カエデ属・ミツバウツギ属・タニウツギ属近似種）とイネ科に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・モミ属 (*Abies*) マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

・ツガ属 (*Tsuga*) マツ科

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞は、年輪界近くに認められるが、数が少なく目立たない。放射組織は仮道管と柔細胞で構成される。柔細胞壁は滑らかで、垂直壁にはじゅうず状の肥厚が認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

- ・コウヤマキ (*Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc.) コウヤマキ科コウヤマキ属

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は窓状となり、通常1分野に1個。放射組織は単列、1～5細胞高。

- ・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～10細胞高。

- ・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura) クルミ科クルミ属

散孔材で、道管径は比較的大径、単独または2～3個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織はほぼ同性、1～3細胞幅、1～20細胞高。

- ・ヤナギ属 (*Salix*) ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または2～3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1～15細胞高。

- ・クマシデ属イヌシデ節 (*Carpinus* subgen. *Euarpinus*) カバノキ科

散孔材で、道管は単独または2～4個が主として放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状～交互状に配列する。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～40細胞高のもの集合放射組織とがある。

- ・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のもの集合放射組織とがある。

- ・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中層～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のもの集合放射組織とがある。

- ・ムクノキ (*Aphananthe aspera* (Thunb.) Planchon) ニレ科ムクノキ属

表1 樹種同定結果

資料番号	遺構	種類	木取	樹種	図版番号
1	溝054b (最下部)	作業台	柱目	ケヤキ	45-1
2	溝063	棒状木製品	削出丸棒	ヒノキ	44-2
3	貯木施設059	槽	柱目	ヒノキ	44-3
4	貯木施設059	板状	不明	エノキ属	46-1
5	貯木施設059	分割材	ミカン割?	ケヤキ	46-5
6	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	カヤ	46-4
7	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	ツバキ属	46-13
8	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	ヒノキ科	46-6
9	貯木施設059	—	分割?	ヒノキ	46-2
10	溝054b	丸木状	芯持丸木	モミ属	44-1
11	貯木施設059	角棒状	分割材	ヒノキ	46-3
12	貯木施設059	板状	柱目	ケヤキ	47-12
13	貯木施設059	丸棒状	芯持丸木	モミ属	46-7
14	貯木施設059	板状	板目	コウヤマキ	46-8
15	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	エノキ属	46-11
16	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	コナラ属アカガシ亜属	46-9
17	貯木施設059	板状	柱目	ヒノキ	47-11
18	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	エノキ属	46-12
19	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	ツバキ属	46-13
20	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	ムクノキ	47-1
21	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	エノキ属	46-10
22	貯木施設059	板状	分割材	ヒノキ	47-16
23	貯木施設059	角棒状	分割材	ヒノキ	47-3
24	貯木施設059	分割材	分割材	ヒノキ	47-2
25	貯木施設059	板状	板目	ヒノキ	47-15
26	貯木施設059	丸棒状	芯持丸木	モモ	47-6
27	貯木施設059	板状	柱目	ヒノキ	47-10
28	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	ツバキ属	47-8
29	貯木施設059	原木	—	ヤマグワ近似種	47-5
30	貯木施設059	木屑	—	ヤマグワ近似種	—
31	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	クスノキ科	47-7
32	貯木施設059	丸木状?	—	ケヤキ	47-4
33	貯木施設059	—	分割材?	コナラ属アカガシ亜属	47-9
34	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	ヤナギ属	48-1
35	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	サクラ属	48-2
36	貯木施設059	丸木状	—	コナラ属アカガシ亜属	48-4
37	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	ムクノキ	48-5
38	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	クスノキ科	48-3
39	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	クマシゲ属イヌシゲ節	48-6
40	貯木施設059	棒状	—	ヒサカキ近似種	48-11
41	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	バラ属	48-7
42	貯木施設059	丸木状(節部分?)	芯持丸木	ツグ属	48-9
43	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	クスノキ科	48-8
44	貯木施設059	板状	分割材	ヒノキ	47-13
45	貯木施設059	板状	分割材	ヒノキ	47-14
46	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	ミツバウツギ	48-12
47	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	クスノキ科	48-14
48	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	カエデ属	48-10
49	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	サクラ属	48-16
50	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	クニウツギ属近似種	48-13
51	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	ヌルデ	49-4
52	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	フジキ属	48-15

資料番号	遺構	種類	木取	樹種	図版番号
53	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	ヌルデ	
54	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	フジキ属	49-3
55	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	コナラ属コナラ亜属コナラ節	49-2
56	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	エノキ属	49-1
57	貯木施設059	—	分割材	ヒノキ	49-6
58	貯木施設059	—	分割材	センダングサ	49-7
59	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	クスノキ科	49-5
60	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	オニグルミ	49-10
61	貯木施設059	—	—	エノキ属	49-8
62	貯木施設059	—	分割材	モミ属	49-9
63	貯木施設059	板状	分割材	ヒノキ	49-11
64	貯木施設059	丸木状	芯持丸木	ヒノキ	49-13
65	貯木施設059	原木	芯持丸木	コナラ属アカガシ亜属	49-14
66	堤062	築堤素材(敷葉工法)	—	イネ科	
67	堤062	築堤素材(敷葉工法)	—	イネ科	
68	土坑074 (2区)	板材	分割材	クウヤマキ	49-12
69	溝049	底板	柾目	ヒノキ	44-4
70	立木根076	立木	—	エノキ属	45-3

散孔材で、横断面では角張った楕円形、単独または2～3個が複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1～4細胞幅、1～20細胞高。柔組織は周囲状およびターミナル状。

・エノキ属 (*Celtis*) ニレ科

環孔材で、孔圏部は1～3列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～6細胞幅、1～50細胞高で鞘細胞が認められる。

・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～6細胞幅、1～50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

・クスノキ科 (*Lauraceae*)

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または2～3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～20細胞高。柔組織は周囲状および散在状。柔細胞には油細胞が認められる。

・ヒサカキ近似種 (cf. *Eurya japonica* Thunberg) ツバキ科ヒサカキ属

試料は保存状態が悪く、収縮して道管の多くが潰れている。散孔材で、単独または2～3個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有する。壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は異性、1～4細胞幅、1～30細胞高で、単列の組織が多い。

道管配列や放射組織の形状からヒサカキの可能性はあるが、保存状態が悪いため近似種とした。

・サクラ属 (*Prunus*) バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2～6個が複合して散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～40細胞高。

・バラ属 (*Rosa*) バラ科

環孔材で、孔圍部は1～2列、孔圍外でやや急激に径を減じた後、ほぼ単独で散在する。道管は単穿孔を有する。放射組織は異性、単列で1～10細胞高前後のものと、10細胞幅以上、60～100細胞高以上の大型のものがある。

・フジキ属 (*Cladrastis*) マメ科

環孔材で、孔圍部は1～5列、孔圍外への移行は緩やかで、小道管は単独または2～3個が複合して配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1～5細胞幅、1～40細胞高。柔組織は周囲状、帯状およびターミナル状。

・センダン (*Melia azedarach* L. var. *subtripinnata* Miquel) センダン科センダン属

環孔材で、孔圍部は3～5列、孔圍外でやや急激に管径を減じたのち、2～6個が複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～4細胞幅、1～30細胞高。柔組織は周囲状、ターミナル状および帯状。

・ヌルデ (*Rhus javanica* L.) ウルシ科ウルシ属

環孔材で、孔圍部は4～5列、孔圍外への移行は緩やかで、晩材部では2～4個が塊状に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～30細胞高。

・カエデ属 (*Acer*) カエデ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～30細胞高。木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

・ミツバウツギ (*Staphylea bumalda* (Thunb.) DC) ミツバウツギ科ミツバウツギ属

散孔材で、道管は横断面で円形、単独または2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって径をやや減少させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状～対列状に配列する。放射組織は、異性、単列で1～20細胞高前後の組織と、5～10細胞幅、50～80細胞高の組織とがある。

・タニウツギ属近似種 (cf. *Weigela*) スイカズラ科

試料は保存状態が悪い。散孔材で、道管は単独または2～3個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1～2細胞幅、1～20細胞高。

道管配列や放射組織の形態から、タニウツギ属の可能性はあるが、保存状態が悪いため、近似種とした。

・イネ科 (Gramineae)

試料は、肉眼観察では板状を呈する。横断面では、中央に空壁が見られ、本来は中空の円筒形をしていたことが推定される。横断面の組織は潰れているが、比較的厚壁の繊維細胞が楕円状に固まっており、それが柔組織中に散在する様子が見られる。観察した範囲では放射組織は認められない。

以上の組織的な特徴や外観的な特徴からイネ科の稗と考えられる。イネ科の中では、比較的径の大きなタケ亜科やヨシ属などが考えられるが、保存状態が悪く種類の同定は困難である。

4. 考察

昨年度および今年度の樹種同定結果を遺構別・器種別に整理した結果を表2に示す。古墳時代前期の溝054b埋土最下部から出土した作業台(第14図4)は、作業面が榎目になる大型の分割材であり、重硬で強度・耐朽性の高いケヤキが利用されている。大阪府内では、恩智遺跡で弥生時代中期の工作台上にケヤキorエノキとヒノキ(各1例)、瓜破遺跡IIで古墳中期～飛鳥とされる案にクスノキ(1例)が同定されているが、古墳時代前期の事例は確認されていない(嶋倉, 1980; (財)大阪府文化財調査研究センター, 2000; 財団法人大阪市文化財協会, 2002)。

今回の結果から、古墳時代前期にケヤキが利用されていたことが推定されるが、木材利用の傾向については今後の資料蓄積が必要である。

溝063から出土している棒状木製品(第15図20)は、断面が円形を呈するが、細い丸木をそのまま使用するのではなく、大きな木材から棒状材を削り出したものである(削出丸木)。樹種は針葉樹のヒノキに同定された。ヒノキの木材は、木理が通直で割裂性および耐水性が高く、加工が容易であることが特徴である。このような木材の性質を考慮した木材利用が行われていた可能性がある。

溝埋土上部の貯木施設059より出土した木製品および加工痕がある木材など62点は、27分類群に同定された。試料点数に比べ分類群数が多いことが特徴として認識される。形状別にみると、角棒、板状、分割材、木屑など、何らかの形で分割加工が施されている試料20点は、ヒノキ12点、モミ属1点、コウヤマキ1点、アカガシ亜属1点、エノキ属1点、ケヤキ2点、ヤマグワ近似種1点、センダン1点からなり、ヒノキの占める割合が高い。一方、芯持丸木41点(丸棒状・丸木状・原木・棒状)は、モミ属2点、ツガ属1点、ヒノキ1点、ヒノキ科1点、カヤ1点、オニグルミ1点、ヤナギ属1点、イヌシデ節1点、コナラ節1点、アカガシ亜属3点、ムクノキ2点、エノキ属4点、ケヤキ1点、ヤマグワ近似種1点、クスノキ科5点、ツバキ属3点、ヒサカキ近似種1点、モモ1点、サクラ属2点、バラ属1点、フジキ属2点、ヌルデ2点、カエデ属1点、ミツバウツギ1点、タニウツギ属近似種1点からなり、広葉樹の割合が高く、分類群数也多

表2. 遺構別・器種別種類構成

分類群\遺構・種類	貯木施設										合計					
	作業台	槽	原木	丸棒	角棒	棒状	板状	分割材	丸木	木屑		大溝堤	堤跡	5面	10面	板材
針葉樹																
モミ属				1				1	1							3
ツガ属									1							1
コウヤマキ								1						1		2
ヒノキ	1				2		7	3	1		1		1			16
ヒノキ科								1	1							1
カヤ								1	1							1
広葉樹																
オニグルミ									1							1
ヤナギ属									1							1
イヌシダ節									1							1
コナラ節									1							1
アカガシ亜属			1					1	2							4
クノキ									2							2
エノキ属								1	4		1				1	7
ケヤキ			1					1	1							4
ヤマグワ近似種									1							2
クスノキ科									5							5
ツバキ属									3							3
ヒサカキ近似種										1						1
モモ										1						1
サクラ属									2							2
バラ属									1							1
フジキ属									2							2
センダン								1								1
スルデ									2							2
カエデ属									1							1
ミツバハツツギ									1							1
タニウツギ属近似種									1							1
イネ科																
合計	1	1	2	2	2	1	10	7	36	1	1	2	1	1	1	70

い。このように、何らかの形で分割加工が施されている木材と芯持丸木では、樹種構成に多少の差異が生じていることが推定され、当時の木材利用状況を考える上で興味深い結果といえる。

一方、各分類群の現在の生育地をみると、分割材に多い温帯針葉樹のヒノキやコウヤマキは、扇状地や地滑り地など鈮質土壌からなる場所を生育適地とする。一方、芯持丸木の試料を中心に認められたオニグルミ、ヤナギ属、エノキ属、ムクノキ、カヤ、ヤマグワ近似種、ヌルデ等は河畔林の構成要素、アカガシ亜属・ツバキ属は安定した土壌条件に成立する暖温帯常緑広葉樹林の構成要素である。このうち、エノキ属については、第10面から出土した立木根に同定されており、遺跡内に生育していたことが推定されるが、古墳時代前期の遺跡周辺の詳細な植生については不明である。今回確認された各樹種の生育地を考慮すると、遺跡周辺に生育していたとは考えにくい樹種も含まれることから、木材の調達が広範囲に及んでいた可能性がある。また、モモは栽培種であることから、遺跡周辺でモモの栽培が行われていた可能性もある。

溝埋土上部の貯木施設 059 より出土した木製品の槽（第14図5）は、ヒノキに同定された。底面が柾目となる木取りが行われており、上述したヒノキの材質を考慮した利用が推定される。古墳時代前期の槽に関する樹種同定結果は、本遺跡北側の久宝寺北遺跡の舟形木製品や長方形槽がスギに同定されている（山口, 1987）。また、大阪府内では、長原遺跡の木槽2点がいずれもモミ属、尺度遺跡の槽1点がコウヤマキ、下田遺跡の槽1点がヒノキに同定されている（古環境研究所, 1998; 渡辺, 2002; 環境考古研究会, 2003）。このように各遺跡の槽に利用されている樹種は異なるものの、割裂性の高い針葉樹材を利用している点で共通している。

また、加工時の残材と考えられる木屑（試料30）は、溝内より出土した原木とされる木材（試料29）と同一樹種のヤマグワ近似種に同定された。いずれも乾燥により木材が収縮した痕跡があり、元は同一個体の可能性がある。本樹種がヤマグワに由来するとすれば、その木材は比較的重硬で強度・耐朽性が高い材質を有することになる。大阪府内では、古墳時代前期の木製品にヤマグワが利用された例は少なく、久宝寺南遺跡から出土した弥生時代後期～古墳時代初頭のツチノコ形（1例）、矢板状（1例）、杭（3例）の確認例があるだけである（島地, 1987）。本樹種の木材利用についても今後の資料蓄積が課題である。

この他には、2区第10面土坑074の板材、第5面溝049の底板（第15図21）、堤跡の築堤素材（敷葉）がある。板材はコウヤマキ、底板はヒノキであり、樹種は異なるが、分割加工が容易で耐水性の高い木材が利用されている。このうち、底板については、古墳時代の調査事例として平井遺跡の古墳中期～後期とされる容器底と長原遺跡の古墳中期～後期とされる曲物がある（林ほか, 1986; 渡辺, 2000）。いずれもヒノキに同定されており、今回の結果とも調和的である。堤跡の敷葉は、いずれもイネ科の稈であり、稈を並べて敷葉とした可能性がある。

以上、今回の分析調査では、古墳時代前期の木材利用状況の一端を明らかにすることができた。大阪府内では、古墳時代前期の樹種同定事例が少なく、木材利用状況について不明な点が多く、

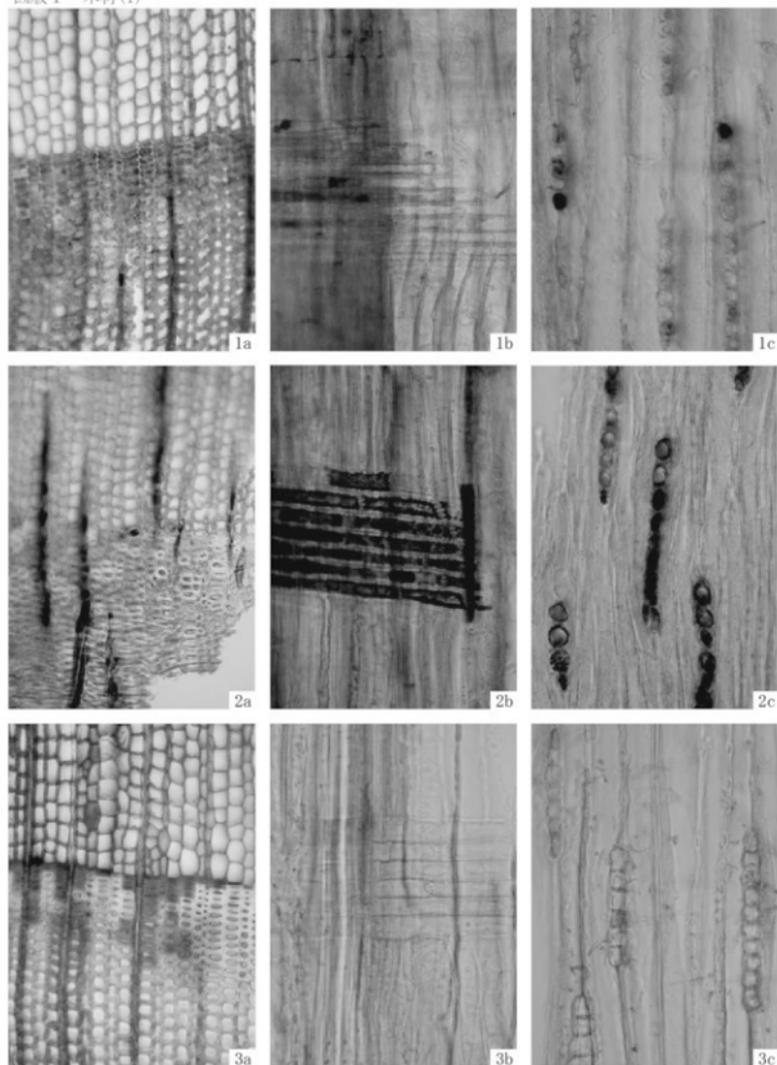
その点からも今回の調査成果は重要である。

(文責 辻本裕也・高橋 教)

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所.
- 林 昭三・島地 謙・福田さよ子, 1986, 平井遺跡出土木質遺物の樹種同定, 堺市文化財調査報告第25集, 堺市教育委員会, 105-108.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- Richter H.G., Gasser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Gasser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].
- 嶋倉 巳三郎, 1980, 思智遺跡から出土した木製品の樹種, 「思智遺跡Ⅰ(本文編)」, 瓜生堂遺跡調査会, 201-206.
- 財団法人大阪市文化財協会, 2002, 大阪市平野区 瓜破遺跡発掘調査報告Ⅱ 一市営瓜破東第2住宅建設工事に伴う発掘調査報告書一, 136p.
- 株式会社古環境研究所, 1998, ND-1出土木製品の樹種同定, 「堺市下田遺跡」, 下田遺跡調査団・六甲山麓遺跡調査会, 150-154.
- 山口誠治, 1987, 久宝寺北遺跡出土木製品の樹種鑑定について, 「久宝寺北(その1〜3) 近畿自動車道天理〜吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」, 大阪府教育委員会, 383-387.
- 渡辺正巳, 2002, 長原遺跡東北地区東調査地出土木製品の樹種同定, 「長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅴ 1999年度大阪市長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書」, 財団法人大阪市文化財協会, 103-104.
- 環境考古研究会, 2003, 尺度遺跡における樹種同定(2000年度実施), 「尺度遺跡Ⅱ 一国道165号(南阪奈道路)の建設に伴う発掘調査報告書一」, 大阪府文化財センター調査報告書第97集, 財団法人大阪府文化財センター, 201-209.
- 島地 謙, 1987, 出土船材並びに杭材の樹種, 「久宝寺南(その2) 一久宝寺・加美遺跡の調査一 近畿自動車道天理〜吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 一本文編一」, 大阪府教育委員会・財団法人大阪府文化財センター, 577-579.
- 渡辺正巳, 2000, 長原遺跡東北地区東調査地出土木質遺物の樹種鑑定, 「大阪市平野区 長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅲ」, 財団法人大阪市文化財協会, 247-249.

図版1 木材(1)



1. モミ属(資料No. 62)

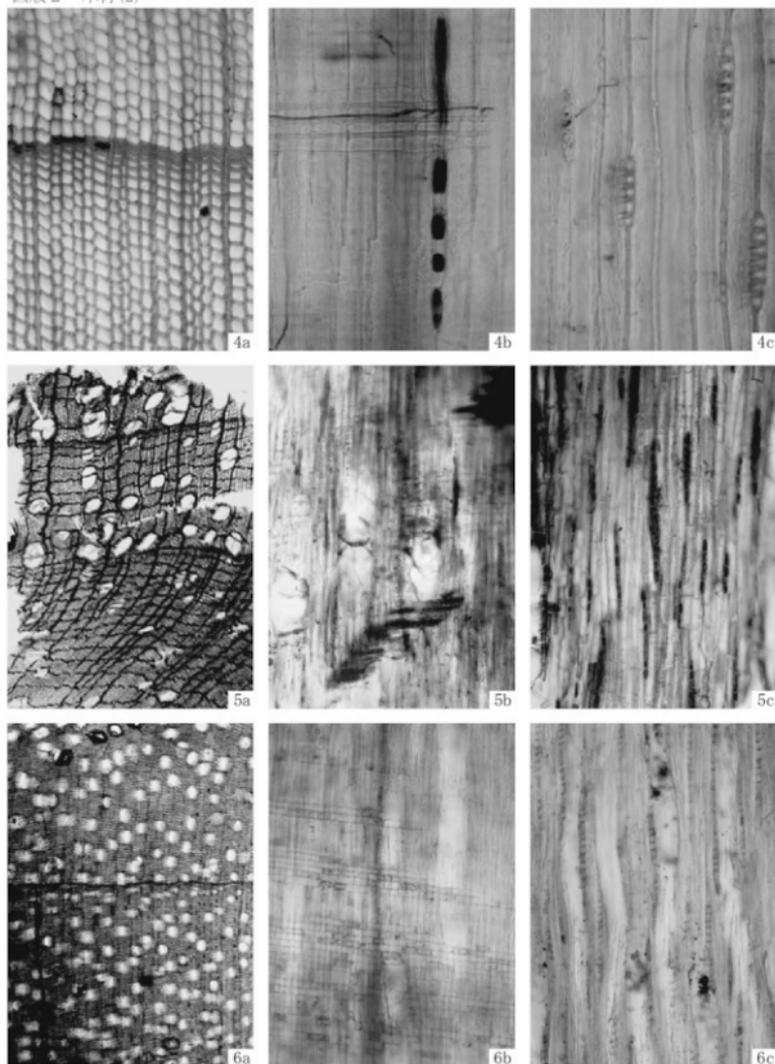
2. ツガ属(資料No. 42)

3. コウヤマキ(資料No. 68)

a: 木口, b: 径目, c: 板目

200 μ m: a
100 μ m: b, c

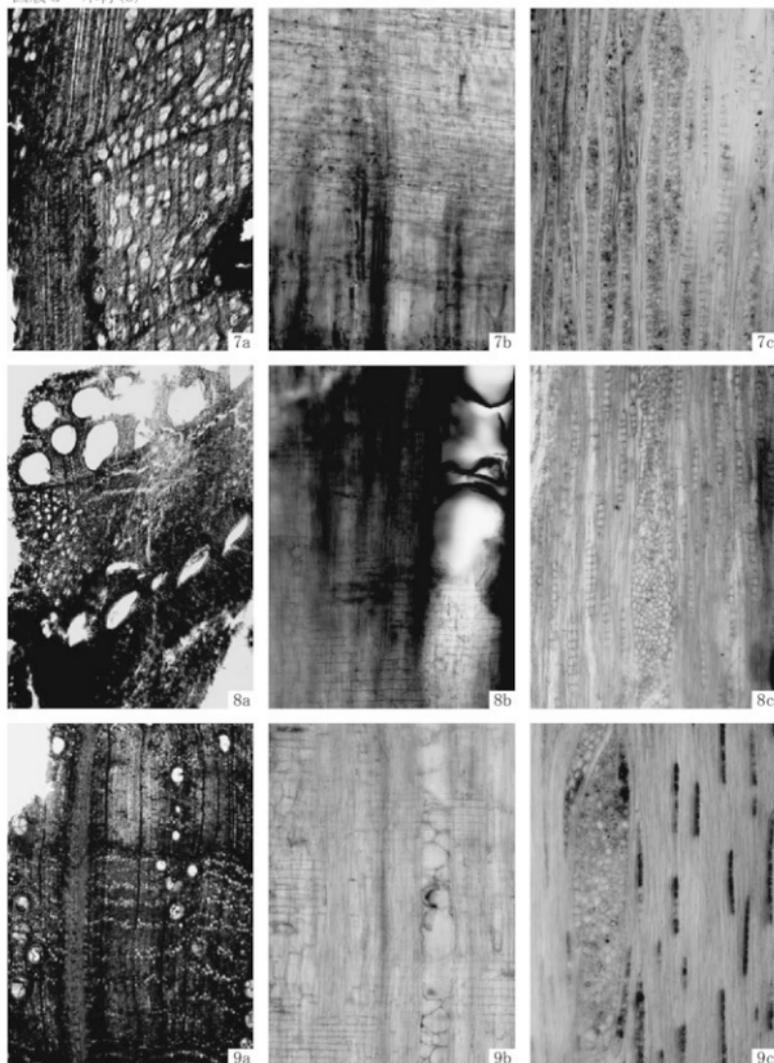
図版2 木材(2)



4. ヒノキ(資料No. 44)
 5. オニグルミ(資料No. 60)
 6. ヤナギ属(資料No. 34)
 a: 木口, b: 柀目, c: 板目

300 μ m: 5-6a
 200 μ m: 4a, 5-6b, c
 100 μ m: 4b, c

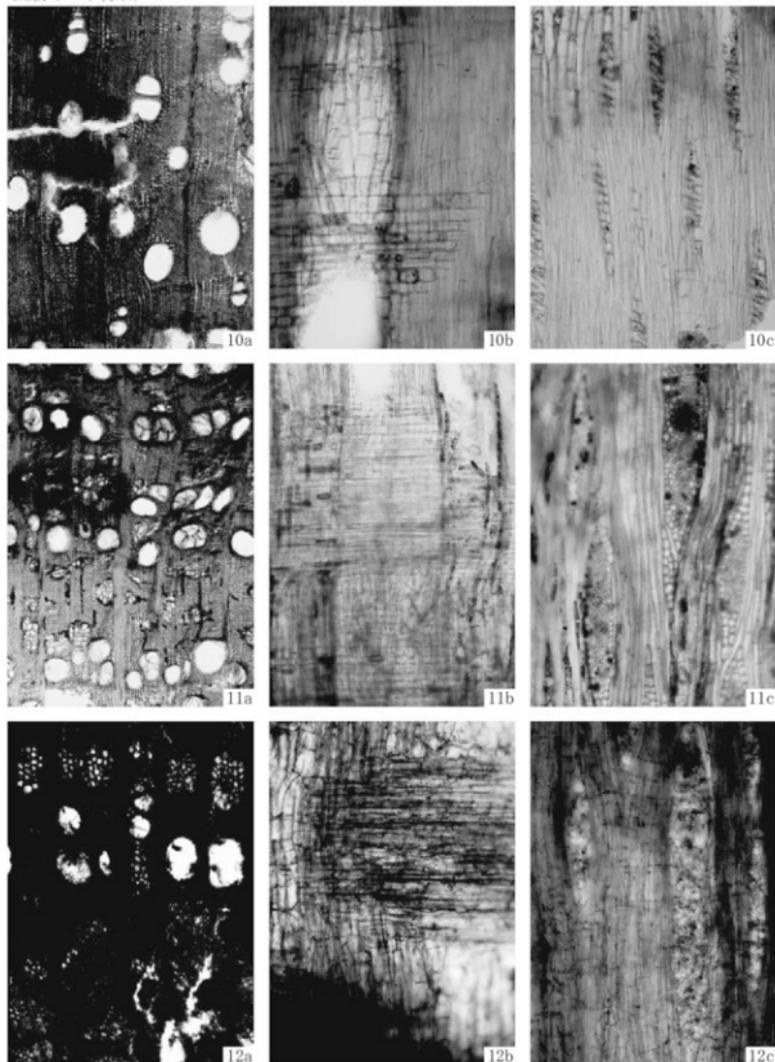
図版3 木材(3)



7. クマシデ属イヌシデ節(資料No. 39)
 8. コナラ属コナラ亜属コナラ節(資料No. 55)
 9. コナラ属アカガシ亜属(資料No. 36)
 a: 木口, b: 柀目, c: 板目

300 μ m: a
 200 μ

図版4 木材(4)



10. ムクノキ(資料No. 37)

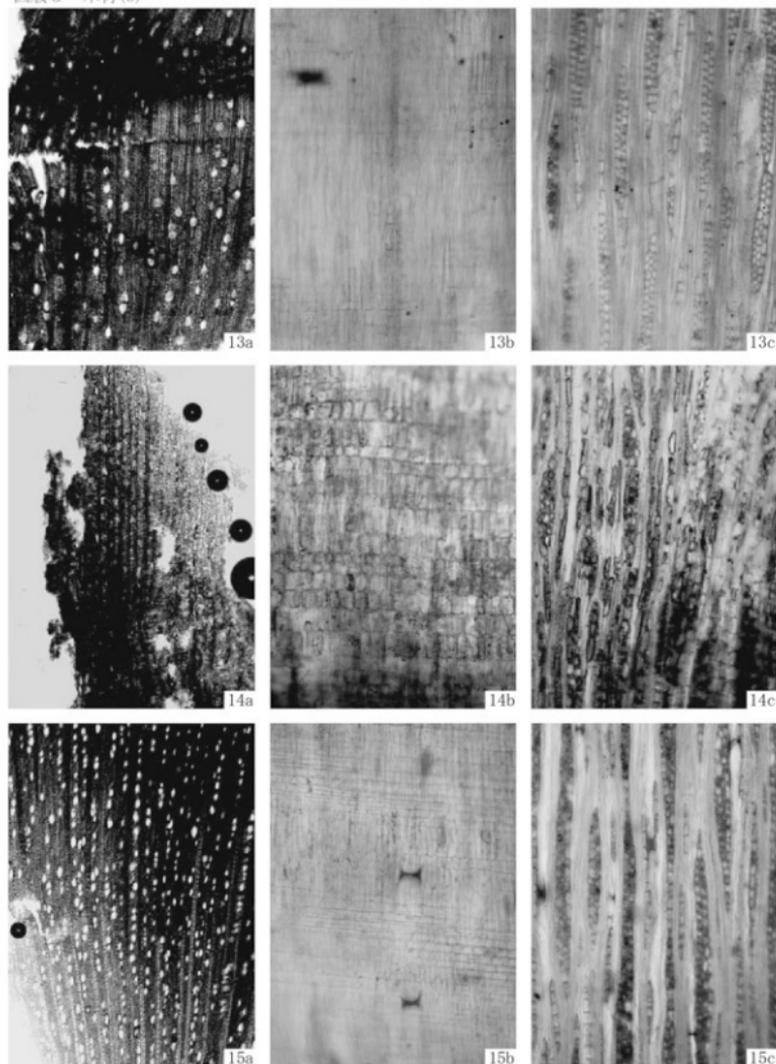
11. エノキ属(資料No. 56)

12. ケヤキ(資料No. 32)

a: 木口, b: 柃目, c: 板目

300 μ m: a
200 μ m: b, c

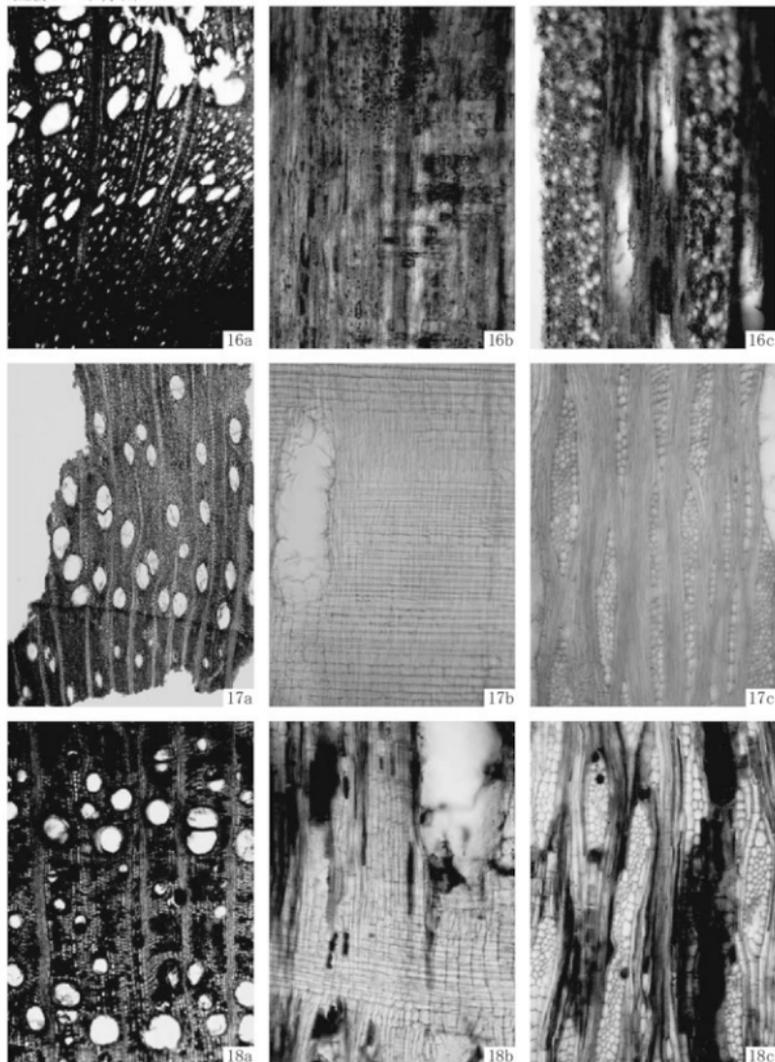
図版5 木材(5)



13. クスノキ科(資料No. 31)
 14. ヒサカキ近似種(資料No. 40)
 15. サクラ属(資料No. 35)
 a: 木口, b: 柃目, c: 板目

300 μ m: a
 200 μ m: b, c

図版6 木材(6)



16. パラ属(資料No. 41)

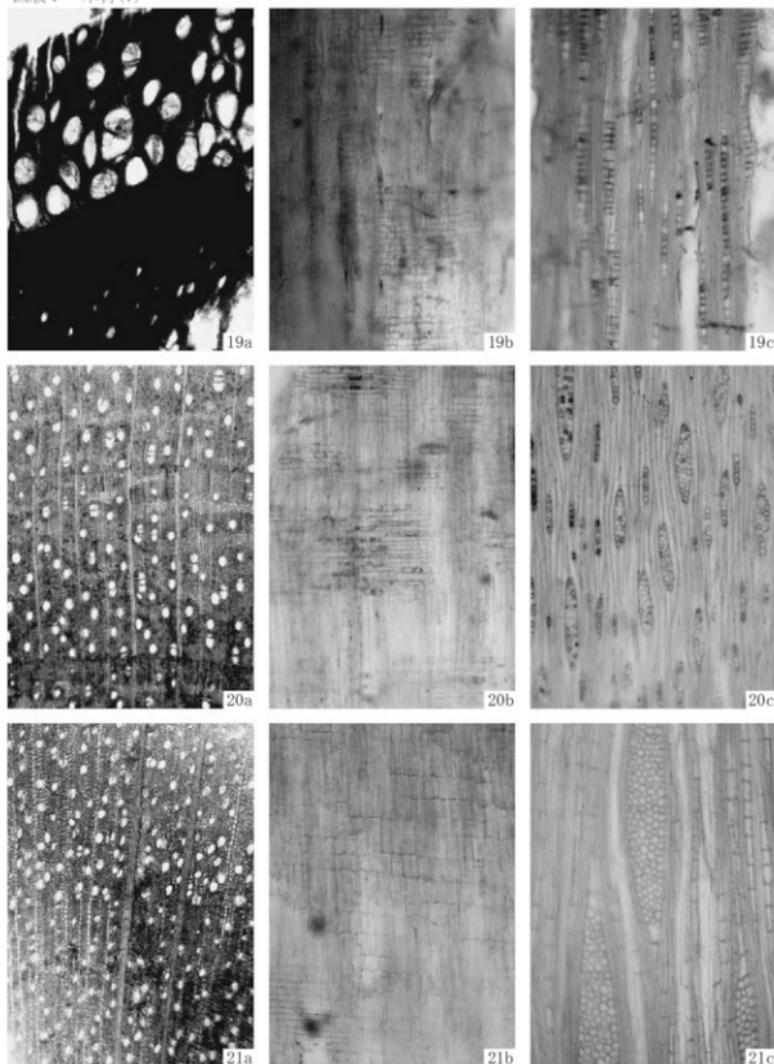
17. フジキ属(資料No. 52)

18. センダン(資料No. 58)

a: 木口, b: 柎目, c: 板目

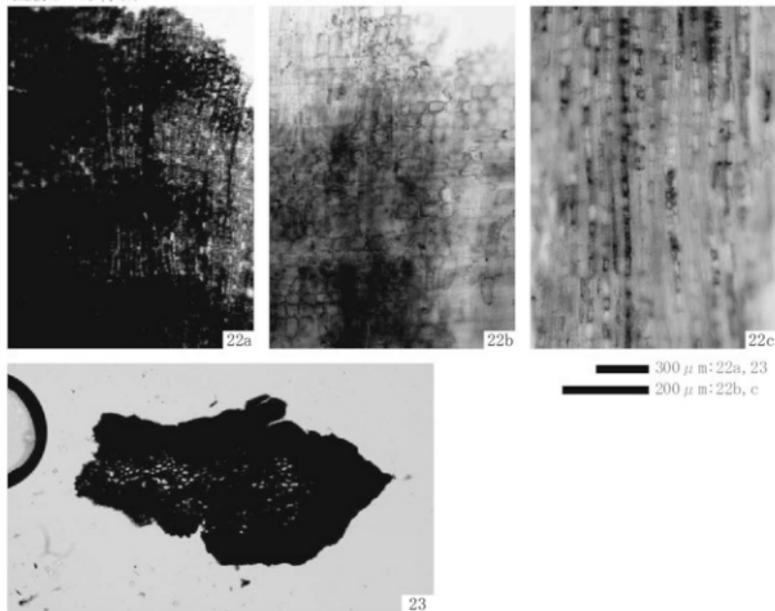
300 μ m: a
200 μ m: b, c

図版7 木材(7)



19. ヌルデ(資料No. 51)
 20. カエデ属(資料No. 48)
 21. ミツバツギ(資料No. 46)
 a: 木口, b: 柎目, c: 板目

図版8 木材(8)



22. タノウツギ属近似種(資料No. 50) a: 木口, b: 柀目, c: 板目
23. イネ科(資料No. 66) 横断面

第3節 久宝寺遺跡 10 区の自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本報告では、調査 10 区で採取された堆積物について実施した、放射性炭素年代測定（AMS 法）、植物珪酸体分析、土壌薄片作成および観察による、堆積・土壌環境と土地利用および古植生に関する検討結果を述べる。

1. 試料

分析試料は、発掘調査担当者により、庄内式期の第 8c 層と、弥生時代前期以前の第 22 層～第 25 層から不攪乱柱状試料として採取された。第 22 層～第 25 層の層相を図 1 に示す。

放射性炭素年代測定は、第 24 層上部の腐植 1 点、土壌薄片は第 22 層上部 1 点、第 24 層上部 1 点の合計 2 点、植物珪酸体分析は、庄内式期の第 8c 層 1 点と第 22 層～第 25 層の 5 層準について実施する。

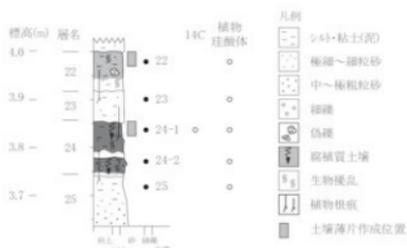


図 1 調査地点の層序・分析層準

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

土壌試料の放射性炭素年代測定では、HC 1 による酸処理の後に NaOH によるアルカリ処理を行い、腐植物質を構成する物質のうち腐植酸およびフルボ酸といったアルカリ可溶成分を除去し、抽出残渣であるヒューミンを測定の対象とすることが多い。しかし、このように抽出されたヒューミンには、現生の根等に由来する有機物も含まれてしまうことも多い。したがって、本分析では、HC 1 による酸処理のみを行い、腐植物質全体を測定対象とする。

木材および種実の試料については、土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HC 1 により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOH により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC 1 によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

土壌および木材・種実試料は、上述した処理の後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。乾燥させた試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じり、500℃（30 分）850℃（2 時間）で加熱する。液体窒素と

液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いて δ 13Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0(Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い(14Cの半減期5,730±40年)を較正することである。暦年較正は、CALIB6.0.0のマニュアルにしたがい、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。また、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表された値を記す。

(2) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュワックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2010)の分類を参考に同定、計数する。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個/g未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸め(100単位にする)、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各分類群の植物珪酸体含量を試料毎に図示する。

(3) 堆積物薄片作成鑑定

土壤薄片作成試料は、80℃で1日間乾燥した後、樹脂（ベトロポキシおよびシアノポンド）で固化し、片面の研磨を実施する。固化および研磨済み試料は、スーパーセメダインにより研磨面をスライドガラスに接着する。その後、反対側の面について厚さ70 μm 程度まで研磨を行い、カナダバルサムによりカバーガラスを接着する。

なお、土壤薄片による層相や構造記載は、久馬・八木久訳監修（1998）の「土壤薄片記載ハンドブック」を参照した。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った放射性炭素年代値は、 $3,060 \pm 30$ yrs BPである（表1）。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動および半減期の違い（ ^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年）を較正することである。暦年較正に関しては本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算や再検討に対応するため、1年単位で表している。暦年較正は、測定誤差 σ と 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また表中の相対比とは、 σ や 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

暦年較正値は、測定誤差が 2σ の場合はcal BC 1,403-1,263である（表1）。

(2) 植物珪酸体分析

結果を表2、図2に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、概して保存状態が悪い。

第8c層では、植物珪酸体含量が約3,500個/gである。栽培植物であるイネ属が産出するものの、機動細胞珪酸体が認められるのみである。その含量は、100個/g未満である。また、メダケ属を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などが認められる。この他に、イネ科起源の植物珪酸体として棒状、長細胞起源、毛細胞起源の珪酸体も見られる。また

表1. 放射性炭素年代測定結果

層位 試料	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	前処理	較正用 年代値	暦年較正年代 (cal)			相対比	Code No.
					σ	2σ			
24層 土壤 腐植	3,060 \pm 30	-13.44 \pm 0.28	HCL	3,055 \pm 25	σ cal BC 1,385 - cal BC 1,330	cal BP 3,334 - 3,279	0.706	IAAA- 123380	
					cal BC 1,326 - cal BC 1,301	cal BP 3,275 - 3,250	0.294		
					2σ cal BC 1,403 - cal BC 1,263	cal BP 3,352 - 3,212	1.000		

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

4) 暦年計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer) を使用

5) 暦年計算には表に示した丸め前の値を使用している。

6) 暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

7) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である

8) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

表2. 植物珪酸体含量

分類群	分析試料					
	層名					
	8c層	22層	23層	24層-1	24層-2	25層
イネ科葉部短細胞珪酸体						
メダケ属	<100	-	-	<100	-	-
タケ亜科	300	100	<100	<100	200	100
コシ属	400	1,600	800	1,000	500	400
ウシクサ族コブナグサ属	<100	-	<100	-	-	-
ウシクサ族ススキ属	200	<100	-	200	800	<100
イチゴフナギ亜科	<100	<100	-	-	-	-
不明	600	1,500	500	1,200	2,600	200
イネ科葉部機動細胞珪酸体						
イネ属イネ属	<100	-	-	-	-	-
メダケ属	<100	<100	-	<100	<100	-
タケ亜科	400	<100	<100	200	100	200
コシ属	400	1,200	1,000	1,200	700	600
ウシクサ族	200	-	-	-	<100	-
不明	800	600	400	1,000	500	400
合計						
イネ科葉部短細胞珪酸体	1,500	2,700	1,300	2,500	4,000	800
イネ科葉部機動細胞珪酸体	2,000	1,800	1,400	2,400	1,400	1,200
植物珪酸体含量	3,500	4,500	2,700	4,900	5,400	2,000
イネ科起源(その他)						
棒状珪酸体	*	*	*	**	*	-
長細胞起源珪酸体	*	*	*	*	*	-
毛細胞起源珪酸体	*	-	*	*	*	-
草本類起源						
カヤツリグサ科	*	-	-	-	-	-
樹木起源						
クスノキ科	*	*	-	*	-	*
その他						
海綿骨針	*	*	-	*	*	*

数値は含量密度(個/g)を示し、10の位で丸めている(100単位にする)。

合計は各分類群の丸めない数字を合計した後で丸めている

<100: 100個/g未満

-: 未検出, *: 検出, **: 多い, ***: 非常に多い

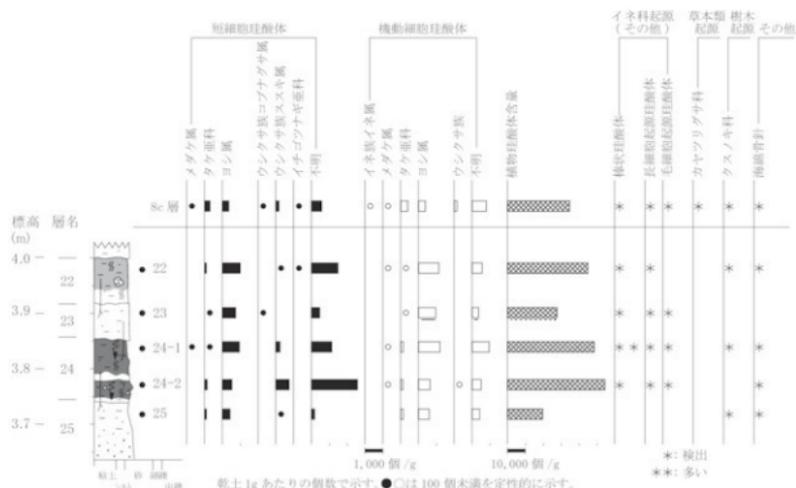


図2 植物珪酸体含量の層位分布

草本類起源としてカツリグサ科、樹木起源としてクスノキ科も認められる。植物珪酸体の他に、海綿骨針も検出される。

弥生時代前期以前の層準である5層準(第22層, 第23層, 第24層-1, 第24層-2, 第25層)では、植物珪酸体含量にばらつきが見られ、2,000～5,400個/gの範囲にある。いずれの試料からも、イネ属は認められない。各試料ではヨシ属の産出が目立ち、メダケ属を含むタケ亜科、ススキ属、イチゴツナギ亜科などが認められる。この他に、イネ科起源の植物珪酸体として棒状、長細胞起源、毛細胞起源の珪酸体、樹木起源としてクスノキ科、また植物珪酸体の他に海綿骨針も検出される。

(3) 堆積物薄片作成鑑定

結果を図3・4に示す。22層の薄片は、上部がチャンネル構造(写真1)、下部が垂角塊構造(写真2)を示す。下部の垂角塊構造は、発達程度が低い。構成層は、砂をほとんど含まない泥からなる細粒質物質が主体である。この細粒質物質中には、微細な炭片が多く含まれる。細粒質物質の複屈折ファブリックは未分化ないし点斑状である。層内に含まれる板状の雲母の微粒子は、帯状の配向する領域が部分的に観察される(写真3,4)。この配向領域は、近接した場所において、互いが交差するようにして形成されるものが認められる。

第24層の薄片は、第22層に比べ砂を非常に多く含む泥からなる細粒質物質で構成される。細

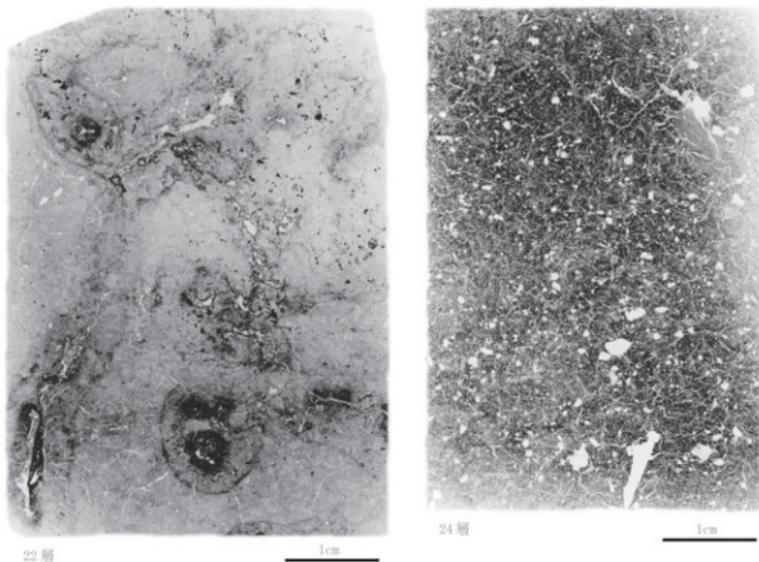


図3 土壌薄片画像

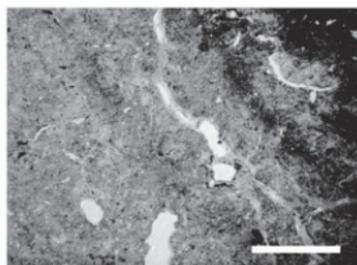


写真1 22層薄片上部(下方)

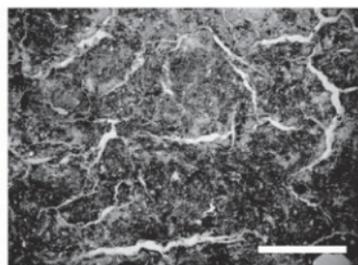


写真2 22層薄片下部(下方)

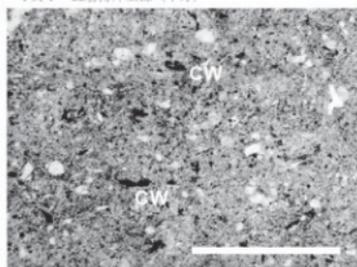


写真3 22層薄片中部(下方)

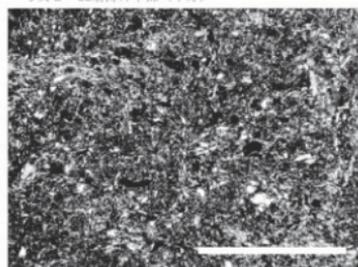


写真4 22層薄片中部(写真3の直交)

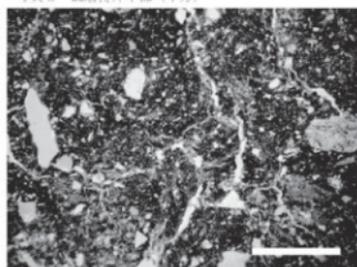


写真5 24層中部(下方)

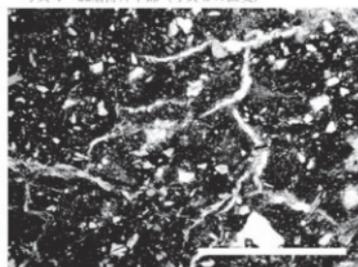


写真6 24層下部(下方)

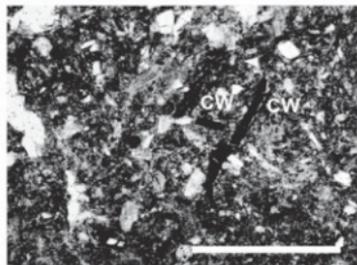


写真7 24層中部(下方)

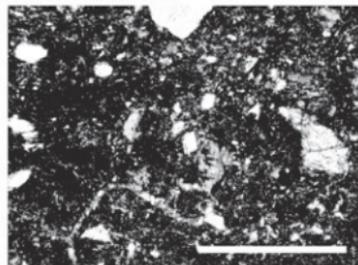


写真8 24層中部(下方)

・括弧内の下方が下方ポーラ、直交が直交ポーラをさす。スケールは写真1, 2, 5, 6が1.0mm, それ以外が0.5mm, CWは微細炭片を示す。

図4 土壌薄片顕微鏡画像

粒質物質は、第22層に比べ腐植を多く含む。微細構造は、チャンネル構造が発達する(写真5,6)。本層は、第22層に比べ土壌構造が発達する。微細な炭片が含まれるが(写真7)、その密度は第22層の方が相対的に多い。さらに、層内では棲管も多く観察される。細粒質物質の複屈折ファブリックは未分化ないし点斑状である(写真8)。層内では、特定の配向を示すようなファブリックは観察されない。

4. 考察

(1) 堆積層の年代と形成過程

今回の分析層準の中心となる第22層と第24層では、堆積層上面において畦畔状の高まりが確認され、肉眼観察において構成層が人為的な攪乱の影響を受けている可能性も示唆された。ここでは、このような発掘結果が得られた第22層と第24層について、放射性炭素年代測定と土壌薄片観察にもとづく、当該期の地表環境についての検討を試みる。

このうち、第24層上部については、構成する腐植の年代値が、3,350～3,210年前を示し、発掘調査結果にもとづく弥生時代前期以前という堆積層の年代観と調和的である。西本編(2006)の土器付着炭化物の放射性炭素年代値の集成にもとづく、この年代値は、縄文時代晩期初頭頃に対比される。

第22層、第24層の土壌薄片観察では、層内に含まれる微粒炭や板状の雲母の微粒子などにおいて、特定方向に揃うような配向や、葉理などの堆積構造が認められない。層内に形成される孔隙では、植物の根や土壌動物の活動によって形成されたチャンネル孔隙を主体とする。第24層で形成される棲管や、第22層で観察される板状の雲母の微粒子の帯状の配向は、チャンネル孔隙と同様に、土壌化に伴う生物活動に由来すると考えられる。第22層、第24層ともに粒団発達が悪であることから、地下水位は高く安定しており、湿潤な地表環境が維持されていたと推測される。

これらのことをふまえると、第22層、第24層は、湿性環境下での土壌生成の影響を大きく受けていると解釈される。このうち、土壌発達は、土壌構造が発達し、腐植を多く含む第24層の方が進行していると考えられる。発掘調査結果から、本調査区は、観察層準を含む2m前後の堆積層において、堆積速度が大きいことが判明している。従って、これらの層準の時期に形成された氾濫原の地表では、上方への堆積層の付加が卓越する。このために、各層の地表で形成された土壌発達状態は、上位の層準での土壌化の影響を大きく受けずに保存されると考えられる。よって、第22層、第24層の土壌微細構造は、観察層準ないしその直上での土壌発達によって形成されたものが多く残存していると判断される。これらの堆積層では、層内に地表攪乱によって生成される偽礫が含まれず、土壌発達に伴う構造が保持されている。このことから、第22層、第24層では、少なくとも観察範囲において、ともに耕作土や地表の掘削、客土や盛土などの人間の地表攪乱の影響がなかったことが指摘される。ただし、層内には、多く微細な炭片が含まれること

から、周辺において活発な燃焼行為を行うような人間活動が存在していた可能性が示唆される。

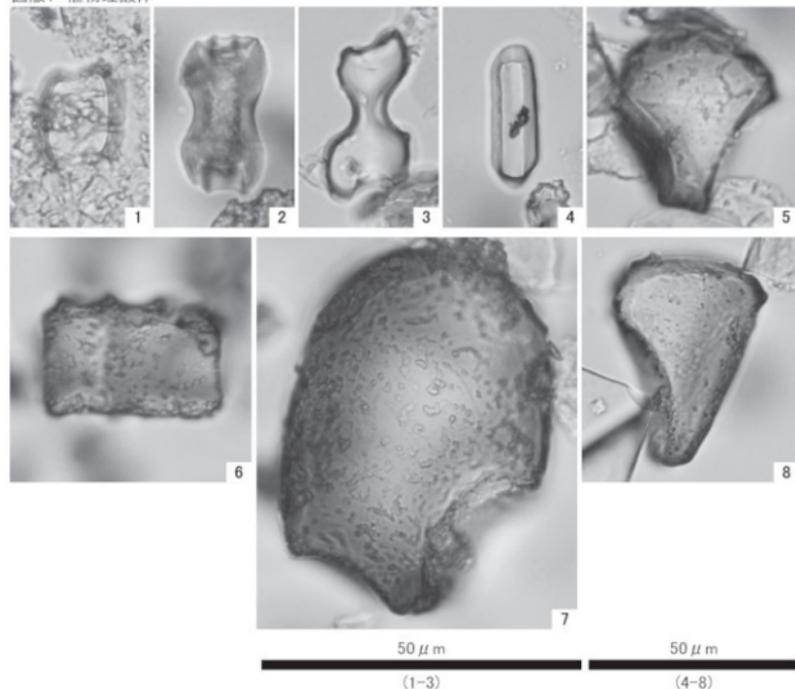
以上のことから、22層と24層上面において確認された畦畔状の遺構は、水田に伴うものでない可能性が高いことが指摘される。これらの堆積層では、植物珪酸体分析においても、その下層から栽培種のイネ属が連続的に産出しておらず、土壌薄片観察結果を支持している。

なお、これらの堆積層では、現場での肉眼観察において全体的にこなれていることから、攪乱土の可能性が示唆されていた。こなれた感じのする層相については、当該層準で認められた土壌発達と関係すると考えられる。土壌発達層準での人間活動痕跡は、肉眼観察だけで判断することが難しい場合があり、今回の分析のように土壌薄片による顕微鏡下での特徴をふまえ、他の分析結果を併せて総合的に検討していくことが有効である。

(2) 植物珪酸体群集からみた古植生

庄内式期の8c層では、イネ属の機動細胞珪酸体が認められるのみであり、その含量も100

図版1 植物珪酸体



1. ヨシ属短細胞珪酸体(22層)
3. ススキ属短細胞珪酸体(8c層)
5. イネ属機動細胞珪酸体(8c層)
7. ヨシ属機動細胞珪酸体(24層-1)

2. コブナグサ属短細胞珪酸体(8c層)
4. イチゴツナギ垂科短細胞珪酸体(8c層)
6. メダケ属機動細胞珪酸体(24層-2)
8. ウシクサ族機動細胞珪酸体(8c層)

個/g未滿と少ない。これまでの久宝寺遺跡の植物珪酸体分析では、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての水田層から、1,000～3,000個/g前後のイネ属の産出が報告されている（金原, 2007）。既往の分析結果をふまえたイネ属の含量密度からの観点では、本調査区の8c層での水田耕作の可能性が低いことが指摘される。ただし、微化石は、堆積および堆積後作用に関連する化石化の過程（タフオノミー）に大きく規定される。このため、本層での土地利用については、他の検証材料と併せて、評価していくことが必要である。

弥生時代前期以前の層準である5層準（第22層、第23層、第24層-1、第24層-2、第25層）では、いずれからもイネ属が認められなかった。これについては、上述した土壌薄片観察を支持する産出状況であり、本分析結果からも当該層準での水田稲作を積極的に支持することは難しい。

なお、第8c層と弥生時代前期以前の5層準では、湿潤な場所に生育するヨシ属の産出が目立った。このうち、第22層、第24層では、土壌薄片観察からも湿性の土壌環境であったことが指摘されており、当該層準の地表環境に関して、双方の分析結果において調和的な見解が得られている。久宝寺遺跡の花粉分析結果では、弥生時代中期以降から古墳時代前期にかけて、草本においてイネ科（イネ属型を含む）やカヤツリグサ科が多産し、ガマ属-ミクリ属、オモダカ属、イボクサ、ミズアオイ属などの水湿地性の草本を伴う（水谷, 2003・金原, 2007）。これらの花粉分析結果は、湿った場所を好むヨシ属が多産する植物珪酸体分析結果とも矛盾のない化石群集を示す。イネ科については、植物珪酸体分析結果から、ヨシ属、コブナグサ属が水田や湿地などに、メダケ属、ススキ属が自然堤防や埋設流路や自然堤防に由来する微高地上に生育していたことが推定される。また、樹木起源の珪酸体の層位的な産出状況から、弥生時代前期以前の5層準では、周辺の微高地上にクスノキ科の樹木が生育していたことも推定される。

（文責 辻本裕也・辻康男・馬場健司）

引用文献

- 金原正子, 2007, 久宝寺遺跡における植物珪酸体および微化石分析, 久宝寺遺跡・電華地区発掘調査報告書VII 分析編・付表編, (財)大阪府文化財センター, 33-80.
- 近藤錬三, 2010, プラント・オパール図譜, 北海道大学出版会, 387p.
- 水谷陸彦, 2003, 久宝寺遺跡第29次調査(K H99-29)に伴う花粉分析, 久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書, (財)八尾市文化財調査研究会, 209-228.
- 西本豊弘編, 2006, 新弥生時代のはじまり 第1巻 弥生時代の新年代, 雄山閣, 143p.

圖 版



a. 第8面 溝群 (北西から)



c. 第7面 全景 (北から)



b. 第7面 溝064、畦畔065 (南から)



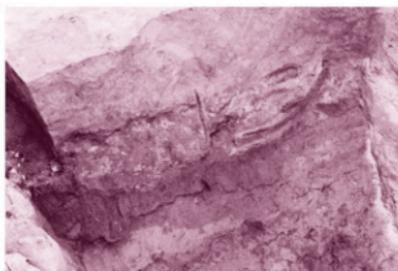
d. 第6面b 溝054 東側断面 (西から)



e. 第6面b 溝054 木製品出土状況 (北から)



f. 第6面b 堤062 敷き粗朶工法 完掘 (南西から)



g. 第6面b 堤062 敷き粗朶工法 検出状況 (南西から)



a. 第6面b 堤062 敷き粗朶工法 断面 (南東から)



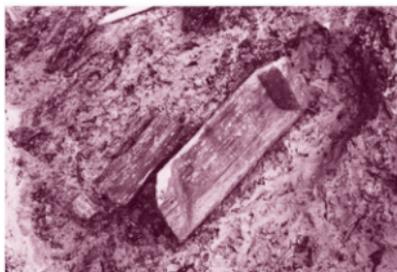
b. 第6面b 堤062 完掘 全景 (西から)



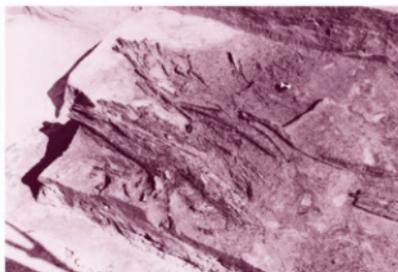
c. 第6面a 溝054、貯木施設059 全景 (西から)



d. 第6面a 貯木施設059 木材出土状況 (南西から)



e. 第6面a 貯木施設059 槽 出土状況 (北から)



f. 第6面a 貯木施設059 丸木材出土状況 (南西から)



g. 第6面a 貯木施設059 断面 (西から)



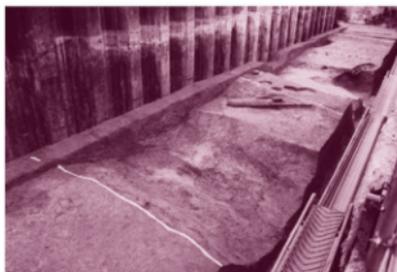
h. 第6面a 溝051、小溝群 (北から)



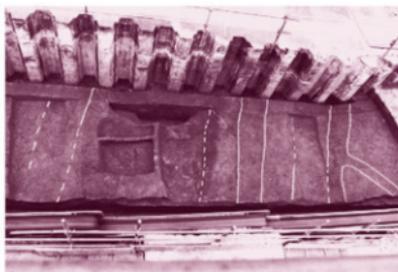
a. 第5面 全景 (北から)



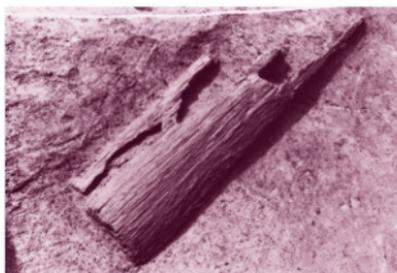
d. 第4面 全景 (北から)



b. 第5面 溝049、堤050 全景 (北西から)



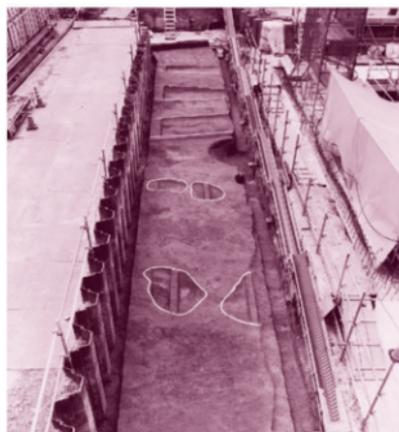
e. 第4面 南半部 水田城 (東から)



c. 第5面 堤050 割竹形木棺
出土状況 (北東から)



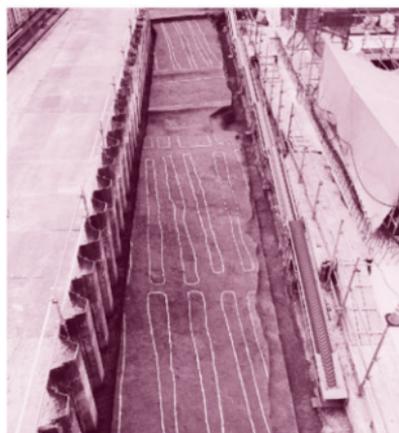
f. 第4面 中央部 水田城 (西から)



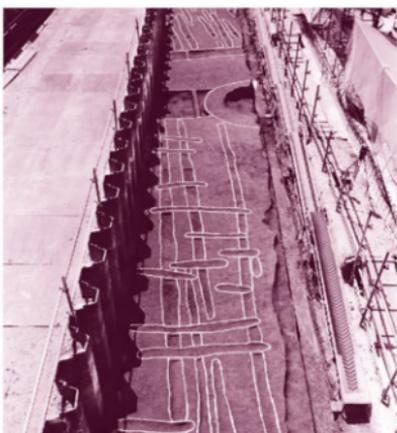
a. 第3面 全景（北から）



b. 第3面 南半部 遺構検出状況（南から）



c. 第2面 全景（北から）



e. 第1面 全景（北から）



d. 第2面 中央部 小溝群 検出状況（西から）



f. 第1面 南半部 小溝群 検出状況（南から）



a. 第13面 全景 (北から)



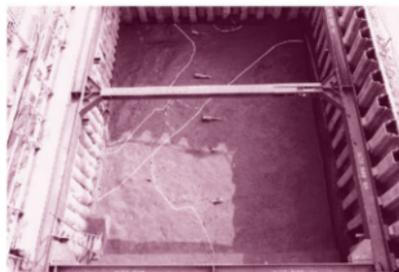
b. 第13面 溝085 (北から)



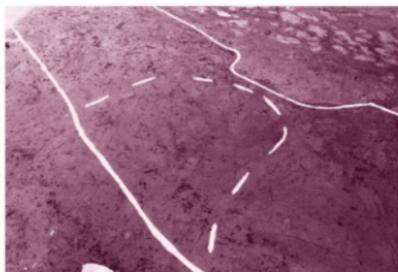
c. 第13面 土坑090、溝089 (北から)



d. 第13面 溝093、土坑090 (東から)



e. 第12面 全景 (西から)



f. 第12面 水口083 (南西から)



g. 第12面 環状施設084 (西から)



h. 第12面 北西部 畦畔 (南東から)



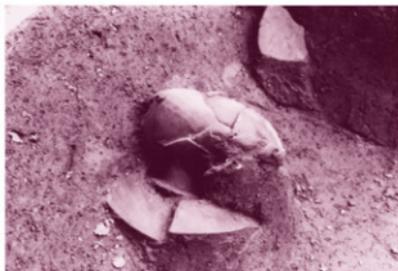
a. 第11面 全景 (東から)



b. 第10面 全景 (北から)



c. 第10面 高まり059 土坑検出前 (南から)



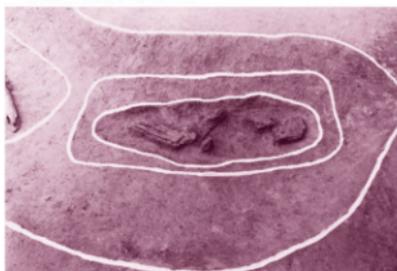
d. 第10面 高まり059 屑部
遺物出土状況 (西から)



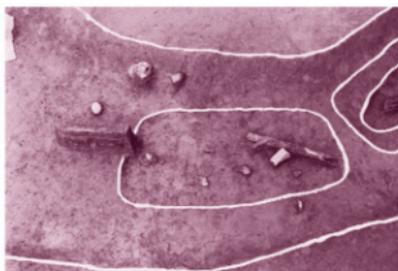
e. 第10面 高まり059 屑部
遺物出土状況 (西から)



f. 第10面 土坑073・074 全景 (南西から)



g. 第10面 土坑073 全景 (南から)



h. 第10面 土坑074 全景 (南から)